泡鳴全集

第五卷

目次

冷たい月

白がねのやうに冷たく冴えた空の月をあたまから外して、三隅が電車に飛び乘りしたのも、ただ向ふへ對する體のいいから景氣を見せたに過ぎなかつた。

『ぢやア、僕は失敬します』と、何げないふりをして渠等に別れたが、心の底から失敗を叫ぶやうな聲が渠自身の耳に聽えて來る。そして車臺のとば口から込み合つてる中をインバネスの羽根で無理に押し分けて中頃まで這入り、ふらつくからだを釣り革にぶらさがらせながらも、われながら悔しい失望が身を切るやうに滲み渡つたのである。『畜生！おれだツてまだあいつらに馬鹿にされるほど老いぼれてやアしないぞ！』

けさ共同法律事務所へかかつた電話では、向ふにも何か話したいことがあると云ふので、それぢアと、午後の五時を期して築地の或鳥料理屋へ行くことにしたのだ。

電車が築地橋を渡つてから間もなく本願寺前の方へ曲がるその角のところで飛び下り、それから少し歩いた。すると、横の暗いかげから突然出て來て、

『三隅さんですか？』かの女は兩手をそとからまはしてかの女自身の長い兩袖を受けてゐる。
『おう・稻子さん！今來ましたか？』
『いいえ――』何だか不平さうな返事であつたのを見ると、大分時間前から來てゐたらしい。
『………』歩きながらだが、『だいぶん前から？』
『ええ。』
『あんな暗いところで立ちん坊をして？』
『さうぢやアないのよ。』からだを横にひねつた勢ひが兩の袖をもそツちへはねた。大分遠慮がとれてゐると見えた。
『ぢやア、どうしてゐました？』
『………』間を置いて、『ちよツとお待ち申してゐましたの。』
『待ち遠しかつたでしよう』と、乙を利かして見た。
『でも、通る人がみんなあなたぢやアないんですもの！』
『………』自分はかの女の哀れツぽい樣子を今少しからかつて見るつもりで、『若しその前に僕が來てゐたらどうです、いつまでも僕を獨りで待ちぼけさせたのでしよう？』
『あたしだツて――そりやア、ちやんと當つて置いた、わ。まだ來ていらツしやいませんと云ふから、

そこでお待ちしたの。』
『さきへ這入つてたら、よかつたのに。』
『恥かしかつたんですもの！』
『恥かしけりやア、ふたりでも同じですよ。』
『ぢやア、あたし――』と云つて、かの女は丁度這入るべき家の四角いがらす燈の中に光る電氣のもとに立ちどまつた。
『…………』自分は來た以上はと云はぬばかりに眞ッ直ぐにさきに這入つたが、ついて來ないのでかの女にふり向き、命令するやうに、『さア――』
『いらつしやい』と云ふ女中どもに、こちらも成るべく顔を見せたくないので、わざと脊中を見せて自分の靴をぬいだが、その時ちよッとかの女の顔を見ると、見ツともないほど赤くなつてゐた。で、こちらだけでもうぶ氣に見られまいと取り澄まして、度々見知つてる女中の案内するままに、二階へ登つて行つた。
『たツた二人――而も男と女と――をこんな廣いところへ案内するとは氣が利かないとは思ひながら一つの廣間へ這入つて行くと、先客が四名ばかりあつて、見ると、こちらが淸算人になつてる營業停止中の銀行に關係のあるもの等であつた。

『君がたも來てゐるのか？』斯う云つて、直ちにそこを逃げるやうに出たが、どうもばつが惡かつた。

『あの御連中ぢやアいらつしやらないのですか？どうも濟みません。』女中もまご付いてるので、座敷が不足してゐるのぢやアないかと思はれた。何げないふりで、

『こちらは二人ツ切りだが、ね、どこでも明いてる部屋があれば――』

『少しまづいところですよ』と云つて案内されたのは、下のすみなる三疊敷であつた。

三尺の入り口と並んで、三尺の床の間が淺く取つてあるが、それに相對する方が庭向きの窓障子で左右は壁だ。お負けに、そのなかへ、入り口が明いた時になかが直ぐ見えない爲めに、二枚折りの屛風が立ててある。却つていい場所だと思つたが、さうは見せないで、女中の持つて來た坐蒲團の上へ先づ洋服の腰をあぐらにおろし、女を見上げながら、

『如何にもまづいところです、ね。』

『………』かの女はただ申しわけらしい微笑を浮べて床の間の前に立つてゐたが、それに氣がついて屛風の前へ來て、それに後を向けて坐わつた。女中は二人の間へ黑びかりに光つた一閑張りのちやぶ臺を据ゑ、そのおもてを拭きながら、

『どうも、ただ今、あいにく、どこも塞がつたところで――すみません。』

『まア、いつも御繁昌で結構です。』

『おかげさまで、ね。』

注文を聽き取つて女中が引きさがつたあとまでも、女はその赤い顏が直らなかつた。そしてきちやうめんに兩手を膝の上に置き、考へ込んでるやうに苦笑ひばかりしてゐた。

『どうしました、稻子さん？』

『え、え』と、力點を第二のえに附けて小くびを傾げたが、それがなほると矢ッ張り考へ込んでる。きやうだい中で一番の美人に育つだらうと思へたこちらの見當が外れなかつただけ、さすがに、いつも見る度に可愛味のある女よりも寧ろ上品な女に見える。細く鼻すぢが通つて、どッちかと云へば長い顏だ。

『「ええ」では』と、首のかしげ方を少し眞似して、『分らないぢやアありませんか？』

『でも、あんなところへつれて行くんですもの。』

『なアに、心配しないでもいいんです。』斯う云つたものの、實は、こちらもそれが心にかかつてゐないでもなかつた。二階の四名のうちでこちらを申し合せたやうにぢッと睨み付けてゐたものが二名あつた。『銀行の方の關係者どもで、僕が、けさ、不都合なかどで首を切つた二名のものに對して、餞別がてらの慰勞會を開かせてあるのです。然しここでやるんだとは思ひませんでしたが――』

『藤井さんもいらつしつた、わ。』

『さうか、ね！僕は氣が付かなかつた。』それでは一つばつの惡かつた上に、また一つ惡いことの加はつたのである。一體、こちらが稻子と二度目に知り合ひになつて、而も段々と兩方から斯う接近し初めたそのもとはと云へば、藤井の紹介である。

銀行で藤井が云ふには、渠の近處におやぢが長い病氣の爲めに困つてる家があつて、娘をどこかの事務所か何かの勤めに出したいと云つてるが、年は二十四で美人だと。

『ぢやア、共同事務所の方で使はせるやうにしてもいいが――』

『然し少し條件つきですぜ。仕事はどんなに忙がしくツてもいいけれど、少くとも十五圓の俸給で、最初三ケ月分を前金で貰ひたいと云ふのです。』

『そりやア、またどうして？』

『家の借金か何かに向ける必要でしよう。』

兎に角、事務所で會見して見ると、向ふでも驚いたが、こちらも亦驚いた。十五年ほど前に家庭敎師として或官吏の家の總領息子を敎へに行つたことがあるが、そこの娘であつた。大した官吏でもなかつたけれども、兎に角、もとは子供の爲めに家庭敎師を招くほどのことはできたものが、病氣とは云へ、どうして前借で娘を事務員に出さねばならぬやうになつたのか分らなかつた。

『お父さんが御病氣なのださうですが――』

『はい。』こちらを見るだけの勇氣もなく、椅子に腰かけて、下目がちであつたかの女は、この時ぱツちりした目を擧げて、『リヨウマチで、この五六年と云ふものは床に就いた切りでゐます。』

『でも』と、こちらはかの女がまた下を向いてひさし髮の上を見せてるその鼈甲のかんざしに目をやりながら、『兄さんがもう相當にお働きでしよう?』

『それが死にまして』と、またぱツちりした目を見せて、『それからでございます、父が病み付きましたのは。』

かかる時に大抵の女なら涙もろくなり、泣き聲にでも落ちるのが習慣だと思はれるのに、かの女のさうでないのが第一に奥ゆかしく見えた。あまり身なりのよくないのは家が困つてるからであらうが、それでも小ざツぱりした衣物を着て、きちんと合はせた胸には紫地の小菊模樣か何かの半襟が目に立つた。

『この事務所はわたしだけのものではなく、辯護士五名の共同事務所ですから、さう氣が置けませんよ。何なら、けふからでも――』

『………』かの女が躊躇の樣子を見せたのが不思議であつた。

『ぢやア、あすからでもようございます、前借の件はわたしが確かに引き受けましたから。』

『なほ一應父とも相談致しまして――』

その翌日を樂しみに珍らしく朝八時から事務所へ行つてゐたが、かの女は來ないのであつた。銀行の方へ電話をかけて藤井に聽いて見ようかと幾度も思つたのだが、こちらの出來心を見すかされるやうに氣が引けて、そのまま晝めし時になつてしまつた。

晝から銀行の方に勤めて、その餘暇に藤井を呼んで聞いて見ると、何のことだ、かの女が『どうも、三隅さんがゐては勤めにくい』と云つてるさうだ。

『下だらない見えを張つたものだ』と、それとなく失望を漏らした。『何もあいつをめかけにしようと云ふぢやアなし。あいつの八九歳の時に少し本を數へてやつただけで――その時の雇はれ人が今あいつを雇ふのだからツて、あいつに取つちやア貧乏がみに取ツ付かれてるよりやアましだらう。』

『前借なんかと云はれると、お女郎にでも賣られるやうでと云つてましたが――では、もう一度勸めて見ましよう。』

『なアに、いやと云ふ者を何も使つてやるにやア及ばないんだ。』

さうは云つたものの、私かに丁寧な手紙を出して、一度宅へいらツしやいと云つてやつたのだ。かの女がこちらの思ひ通りやつて來たので、用意の金三十圓を無條件で出すと、一應は押し戻した。無理に手渡ししたので、やツとそれを受けて少しよぢれた晝夜帶の間に挾み込んだ。そして感謝の意でだ

らう、こちらの想像した氣象に似合はず目をしよぼ〳〵させた。こちらの心では、もうこれを獨占できると思ひながらも、さあらぬ體にして、

『あの事務所がいやなら、わたしがまたどこかいい口を見付けてあげます。』

『どうぞお願ひ申します。今更ら小學教員もできませんし――電話の交換手だッて――』

かの女の妹は一人は教員、今一人は交換手になつてるのだが、その二人の收入では到底重病人ある一家の借金や生活を整理して行くことが六ケしいのだ。それでも、姉が妹どものあとについてそんな仕事をするのは、かの女の威嚴に關するとでも思つてゐるらしい。けれども、そこが却つてこちらの爲めには好都合であるやうに思はれた。

その思ひが日を重ねるに從つて私かに切實になるので、三日目には一度かの女をそのおやぢの見舞ひがてら訪問してやらうと云ふ氣になつた。日曜であつたので、朝からよそ行きの和服を着、妻の管理する財布からまた多少の金まで用意して家を出たが、電車に乘つてから考へて見ると、われとわれを責める氣がして、途中で下りてしまつた。そしてそのままでは何とも納まらないからだを友人と共に珍らしく烏森の待合へ運んでしまつた。

ところが、その翌日の晩、いつもよりは少し遲く歸宅すると、妻が不興さうな顏をして出で迎へ、

『お客さまですよ。』

『誰れだい？』

『こないだの人です、わ。』

『さうか』と、何げなく云つてのけるつもりであつたが、胸がどき付いて顔を赤めたのがこちらの不覺だツた。

下では子どもとその母とに突ツぱなされるようにあしらはれて、二階の書齋へあがつて見ると、果してかの女であつた。あまりの嬉しさに取りまぎれて、坐わる前にふと口へ出た、

『どうしました――何か事件でも起りましたか？』

『別に、何も――』かの女はまた一層きまりが惡さうで――敷いてた座蒲團を外して、先日の禮を云つたり、父のよろしくを傳へたりした。

瀬戸のおほ火鉢を中にして座がきまつてから、まだ御約束の口は見つからないかと聽かれ、こちらが曖昧な返事をしたので、お互ひに物云ふことがしツくり合はなかつた。然し、事務所へも、宅へも、さきには同じ物をつけて來たのが、衣服だけは新らしく、紺地に細い白たて縞の、飛び模樣のある銘仙にかはつてる。こちらの金が用立てられたのかと思ふと、心では、もう、かの女のからだまでがこちらの物のやうだ。小菊模樣の半襟――ところどころの花びらには刺繡が施してある――はもとのと同じだが、それがまたこちらの思ひ出を一しほ深くした。

『………』また金は要らないかと云ひかけて、口をつぐんでる間に、かの女も亦云ひにくさうにだが云ひ出した、

『若しさし當り當てがおありになりませんでしたら、どうでしよう、矢張りあなたの事務所の方では――？』

『さア――』

『もう、駄目でしようか？』

『………』できることならかの女を自分だけの物にしたいので、共同事務所の方のことは寧ろ忘れさせたいのであつた。つい、うそを云つてしまつた、『實は、あなたがいやだと云ふので、別に候補者ができてゐるのです。』

『さうでしよう、ね、わたしはあまり氣ままでしたから。』斯う云つて、かの女は笑ひにまぎらしたが、隨分失望の體であつた。

『矢ッ張り、さう切迫してゐるのですか――あなたのおうちの事情は？』

『はい。』

『ぢやア、ちよッと待つていらッしやい――ほんの、當座だけのことですが。』下へ行つて、妻から、あす米屋が取りに來た時に渡さなければならぬと云ふ分を十圓、無理に奪ふやうにして持つて來た。

それが妻をまた一段と不興にさせた。妻は思ひ違ひから、昨夜もかの女に會つて置きながら、今夜も亦金を取られるのだと、二重に疑ひ出したのであつた。

『お歸りだよ』と云つた時にも、妻はかの女を送りに出てこなかつた。ここの細君は、もう、燒き持ちを燒いてるとかの女に思はれては、こちらまでが安ツぽく見えるので困つた。あとで妻を叱り付けると妻はあべこべに喰つてかかつて云つた、『他人の貧乏は助けても、うちの困るのや子どもの爲めはかまはないのか』と。

妻のぐずねるのは珍らしくなかつたが、向ふが氣を惡くしてはゐないだらうかと、明くる日、直ぐにも手紙を出して置きたかつたが、事務所でその筆を取りかけると、矢ツ張り氣が引けた。文句を書きかけると、何だか戀文にでもなる氣持ちがした。ところで、戀文などはこの年になるまで書いたことがないので、二三日を徒らに思ひつづけた。

『稻子さま！ 稻子さん！ 稻子！』いろんな風にかの女の名を呼んで見るだけでも、私かに樂しかつた。

すると、けさの電話であつた。

『奥さんは氣を惡くしてらツしやりはしないでしようか？』

『別にどうもありませんが――どうです、お差しつかへがなければ、今夜、何所かで何かおごります

が？』
『さうです、ね――あたしもちよツとお話して置きたいことがございますのですが――』
『ぢやア』と云つて、ここに落ち合ふことにきめたのだ。こちらの子どものことなどを最初はお愛相のやうに聽いてたが、こちらは耻かしめを受ける氣がするので取り合はなかつた。兎に角、向ふが一緒に來たのであるからは、大丈夫と思へた。今夜は、半襟も別なのに新たまつてゐた。『藤井がゐちやア少しまづかつたが――然し、まア、心配するにやア及びません。』
『でも、おツ母さんに知れちやア――』
『なアに、おみやげを持つて歸ればいいぢやアないか？』これには金のことを意味してゐたのだが、說明がないので、かの女には分らなかつた。
『そんなことをしたら、あたし、なほ更らおこられます、わ。』
『そりやア、藤井となら、若いもの同士だから疑ふだらうが――』と、からかつて見た。
『…………』別にかの女の顏色は變らないで、『先生とですからあたしはかまひませんけれど。』
かの女は女中が來ると、その度每に、話をぴツたりやめて顏いろをも正した。
『あなたにお酌はして戴けますか？』笑ひながら猪口を出すと、
『…………』少しあわてて、無器用にだが、無言で惡びれもせず最初の酌をした。

『實は、僕の妻があなたをお見送りもしなかつたのも、御想像通り、變であつたのです。』
『では、どう致しましよう、ね？』兩手を袖に引ッ込めてこちらを見たのが正直さうであつた。
『どうも斯うもする必要はないのです。これから御用のある時は、先づ、事務所へけさのやうに電話をかけて下すつたらいいのです。』
『でも、奥さんのお氣を惡くしちやア――』
『なアに、僕さへ承知してゐりやア大丈夫です。しみッたれた女は、親でも女房でも、どうせ分らないのですよ。』
『そりやア、さうです、ね。うちでも妹たちが下手に働いてますので、母はあたしばかり遊んでるツて機嫌が惡くツて――。働いてお金を取るのがいやなら、女郎にでもなるがいいツて、あたし、その時にやア泣きました、わ。』斯う云つて訴へながらも、かの女の涙一滴見せないのが、こちらには頼母しかつた。
『なにもいやなんぢやアない、もッといい仕事を見つけてるんだから。今に何かきまつたら、みんなに威張つておやんなさい。』
『どうぞ、ね、さう云ふところがございましたら。』そしてかの女から進んで酌をしてくれた。然しそれからと云ふもの、もう、何も云ふことがなくなつたかの如く、沈み込んで、こちらから物を云ふの

にただ短く答へるばかりになつた。かの女に猪口をいくら押しつけても、これは初めから手にしなかつた。

『藤井さんを呼んでおあげなさい』と、二三度話のあひだにかの女は云ひ挾んだけれども、それを棄てて置いた。その間に、實は、窓の障子を外からばた〳〵とはたく者があつて、二度にも及んだ。それをかの女は藤井の徒らだと思ひ取つたので、二度目に、『呼んでやりさへすればいいのです、わ。』『さア――』こちらもどうせ見られた以上は、この場を何も怪しくないと見せて置きたくもあつたが――。

そのうち、また音がした。ハンケチか何かではたくやうだ。

『また』と、かの女は小い聲。

『失敬な奴だ』と、立ちあがつて窓に行き、障子を明けて見ると、姿は見えなかつたけれども、隣室で女の笑ふ聲が聞えた。

『呼んでおやりなさいよ。』

『違つてるやうだが――ぢやア、呼んでやらう』と、障子を締めて座に就いてから、呼びりんを鳴らした。

『疑はれないやうにするだけでもとくです、わ。』

取り込んでゐたのか、三度目のりんでやッと女中が來たのに向つて、隣りに誰れがゐると聽くと、藤井などではなく、帝劇の女優が三名來てゐるが、醉ッ拂つて一名は今小間物店を出したところだとの返事だ。そして女中はつけ加へた、

『ここの窓を外から叩いたりして、ね。お客さんに失禮な。』

『そいつかい？ぢやア、面白い、呼んで來い。』

『およしなさいよ、先生！』稻子は迷惑さうな顏をした。

『いいぢやアないか、どんなつらをしてゐるか見てやるのも？』床の間に在つた墨と卷き紙とを取りよせて『いらッしやい、お隣りのお客さま』と書いたところで、

『〇〇さん、行きましよう。』

『××子さん。』また違つた黃いろい聲だ、『起きなさいッてば！』

その呼び名で、第三期生の連中だと分つたので、『お隣りの』をぬり消して、『〇〇さま、××子さま』と書き直し、女中に持たせてやつた。

『そんなにおてんばなものでしようか、女優ッたら？』

『どうせ安ッぽいやつら、さ。』

『呼んだッて、仕かたがないぢやアありませんか？』

『矢ツ張り、藤井さんの方がお氣に召しますか？』こちらも大分醉つて來てゐた。

『そんな氣では――』かの女はちよツと顏を赤くした。そして恨むやうな聲で、こちらを見つめながら、『ぢやア、やめましよう。』

『まア、いいです。まア、いいです。あなたの云ふ通り、疑はれないやうにするだけもとくだから。』

隣りの連中のうちの女優二名は歸つたやうだ。そして女中が這入つて來て、

『駄目です、わ。二人は歸つたし、一人は醉ツ拂つてて。』

『外に誰れもゐないのかい？』

『男がひとりついてます、旦那でしよう。』

『餘ツぽど馬鹿な旦那だ、なア。』

『女もあまりいい顏ではありません、わ、身なりだツて。』

『…………』稻子は電氣に觸れたやうに正しい居ずまひを一層正しくした。さう聽いてかの女自身もかたみを狹く思つたらしい。

　どんと何か物を疊の上へ投げつけた音がすると同時に、隣りでは男が待遇の惡いことを女中に怒鳴り出した。そしてそれに對して、女中がひらあやまりにあやまつてる言葉が手に取るやうだ。

『面白いでしよう、こんなところを見るのも？』

『……』稲子はただ品のいい微笑を見せた。が、隣室の方へばかり氣が取られて、おづおづと、落ち付きがなくなつてゐた。

『ぢやア、ね』と、こちらの女中に向ひ、『二階にゐる藤井さんと云ふ若い人を呼んで來て貰はう――會ひたいと云つてる人があるから。』いやに笑ひながら、わざと稲子の希望でもあるやうにして、こちらがかの女に直接に云ひたいことの數々の萬分の一を諷したのであつた。が、かの女には全く正直に別な意味に取れたと見え、むッとして、

『あたしは、先生、何も會ひたかアありません、わ。』

『いや、實は、僕も呼ぶ方がいいと思つてるのです。』

女中が命を承つて出て行くと、かの女はまた恨めしさうに、

『あたし、いや！歸ります、わ。』

『どうしてです！』

『でも、先生が何かあたしを藤井さんと意味があるやうにおッしやるんですもの。』

『ぢやア、あやまります。』素人の女でなければ直ぐにもちよッかいを出す右の手を、ちやぶ臺の片すみに置いて、馬鹿丁寧にあたまを下げて見せた。そして再びかの女を見た時には、かの女の顔はもと通りに和らいでゐた。色が白くてきちんと整つたのが、如何にも上品な可愛さをしみじみと感じ

させた。
『××子さん、××子さん』と、隣りに殘つた客が醉ツ拂ひとかを呼び起してゐる。
『…………』かの女はまたその方へ耳をそば立てた。
『…………』きまり惡くだが、手早く紙入れから用意の五圓札を出して、『金はどツちにせいお入り用でしよう。藤井が來ると面倒だから、早くしまつてお置きなさい。』
『…………』にツこり笑つてこちらを見たが、手を出してそれを取つた時、かの女は入り口の方を氣にした。急いで帶の間に押し隱してから、『度々すみません。いづれ、先生に仕事を紹介して戴いたら、お返し申します、わ。』
『なアに、ようございます、それツぱかり。』身うちにばかり鬱積してゐる氣ぶんが、この場合、これ以上に適當な言葉を發見し得なかつた。——間を置いたが、——藤井が來てしまへば、もう、どんな機會も逸してしまうと思ふと、こちらの心には待てしばしは無かつた。先づ無器用に手を突き出し、言葉の方われながらこの場のキネトフオンの聲と動作とがしツくり合つてないのを見てゐるうちに、言葉の方が後れて、『さア、握手しましよう。』
『…………』かの女は身ぶるひしたほど驚いて目を見張り、たださへきてうめんに膝の上に重ねてゐた兩手が腕や肩までも一緒に固くなつたのを見せた。が、その赤らんだ顏が必らずしも否定を意味して

はゐなかつた。

『…………』出した以上はあとへ引けないので、こちらはにが笑ひをしながら、『今夜の記念ですから。』

『…………』眞ツ赤になつて、顏を左りへ下向きにそむけながら、そツと突き出した右の手には骨も力もないやうであつた。

『誰れにもこんなことまでしやべつちやアいませんよ。』

『そりやア――』口を曲げてかた笑ひをした。

『どうです、これから活動をでも見に行きましようか？』

『先生が一緒に行けとおツしやいますなら。』

先夜、こちらが活動寫眞へならいつでもお伴しますよと云つたら、あんな物をお好きですかとあざ笑つた。

それが今夜ついても來さうな氣になつてたのを見ると、もう、どこへでもつれて行けたかも知れない。

兎に角、藤井が邪魔をしたし、またかの女と藤井との間がをかしい。

『…………』かの女がきツとなつて、居ずまひを正したかと思ふと、藤井がやつて來た。色が白く、鼻の高い男だが、大分飲んだかして、顏いろが青ざめてゐた。

『さア、先生、あなたがたのいいところを見せ付けられるのだから、僕にも飮ませなさい。』

『僕は――何も――拾數年前の恩義を今、多少でも、報いてるだけで――』

『そりやア、稻子さんから聽いて、知つてますさア、ね。先生が稻子さんの兄さんの家庭敎師であつたのでしよう。』

『あたし、何も』と、かの女はあわてて、うち消すやうに、『それを自慢したのぢやアないのよ。』然し言葉ぶりまでがうつて變つてうち解けて來た。

『自慢したツていい、さ。』斯う云つて、一面に於いてかの女のおしやべりに對するこちらの想像に侮辱を加へ、また一面には藤井の若輩が餘りに無遠慮になつてるのに當つた。が、藤井はそれに氣づかなかつた。

『おい、姐さん、お銚子、お銚子』などと、渠自身で注文した。

『……………』こちらは渠を呼んだものの、渠の爲めに特別に肴を取つてやる氣にはなれなかつた。すると、稻子はかの女自身が手をつけなかつた煮付けの皿を移して、渠に喰へと渡した。渠は直ぐそれをかの女の箸で以つて口に運んだ。かの女がそれに對していやな顏をしなかつただけ、こちらはいやな氣になつた。

『藤井さん、歸つてまたおツ母さんに下だらないことをしやべつちやアいやよ。』

『云はない代り』と、口をもぐもぐさせながら、『素的にコンミツションをお出しなさい。』

『………』こちらはにが笑ひを以つて二人のいろ〳〵な話を觀察しながら、二人の仲は餘ほど親しいのだと疑はないではゐられなかつた。

『先生、一つ』と來たのを、受けたくもないので、

『まア、やり給へ』と、つぎ返してやつた。

『あいつらが二階でなか〳〵頑張つてまツせ、先生。女中に、さツき來た男は何の爲めに來たのだ、ここへ呼んで來いツて。』

『ここでやるとア僕も知らなかつたのだが』と、少しうち解けてから、『おれが勝手に來たのを呼ぶ權利があるかい？』

『これを』と、手で首を切る眞似して、『素的に恨んでまさア、ね。』

『不都合だから、首にしたのだ。』こちらは自分がそれだけの權利ある地位にゐることをかの女にも示して置くのであつた。

そのうち、受け持ち違ひの女中が醉つた勢ひでやつて來て、

『三隅さん、まア、聽いて下さい――どうせ、あたしが責任をしよつてしまへばいいことですが、ね。』それが何を云ひ出すかと見れば、二階廣間のお客さんがみんな金を拂はないで歸つてしまつたの

だ。初めからぐづ〳〵機嫌が惡かつた二人の客の一人が茶を持つて來いと云ふので、女中が持つて行つた。ところが、瑕はその茶碗のふちに少しすすがくツ附いてたツて怒り出し、金を拂つてやるなと說きまわり、みんなに會費を出さしめなかつた。

『ぢやア、おれの分を幹事に渡して來たのはどうした』と、藤井は女中に聽いた。

『知りませんよ、あたしは。』

『さう云ふ奴だから首にしたのだが』と、輕くこちらは受けて、『幹事の坂本から拂ふだらうよ。』

『坂本さんはみんなよりも迅くにお歸りなさいました、わ――おれがゐると却つて事が大きくなるからツて。』

『不都合ぢやアないか、さうどいつもこいつも無責任ぢやア？よし、おれが電話をかけて見よう。』

女中に伴はれて電話室に行き、坂本を呼び出して見ると、茶碗の一件がある前に既に席を外してしまつたのだが、面倒になりさうだから歸つたので、責任は持てぬとのことだ。稻子が來てゐなければこちらもそんなことは突ッ放して歸るのだが、ここでは大きくかまへて、銀行から何か名義を附して出させようと思ひ付いた。

藤井がわざとらしく大きな聲で『こよひ忍ぶなら』を歌ひ初めたところへ立ち戻ると、稻子はこちらを見て笑つた。そこの調子がどうもこちらの留守に何かあつたのを胡麻化してゐるのぢやアないか

と受け取れた。
『………』いやな氣がしたので、『おい、藤井、やめろ』と命じてから、もとの坐に就き、女中に、
『いくらばかりになるのか？』
『十八圓ばかりに。』
『ぢやア、おれが引き受けた。』
『ありがたい、ね』と、ちよッと手を合はせて見せたが、『これであたしは安心だ。なアに、ね、それッばかりで往生する姐さんぢやアございませんが、ね――』
『僕の出した會費はどうなつただらうか？』
『坂本があづかつてるだらう、さ。』
『ぢやア、これから一杯飲み直しましようよ、ねえ、兄さん』と、女中は藤井の肩に手を置いた。
『飲まう、飲まう』と、渠も勢ひづいてまた女中の肩に手をかけた。
こちらは自分の思つたことが半分も通らず、却つて他のいろ／＼の事件ができたので、少しも面白くなくなつた。
『もう、歸らう』と云ひ出したので、稻子はそれがいいと云ふ風に胸をちよッとそらした。あッけない顏つきをしたのは女中だ。そして藤井は不平さうに無言であつたが、暫らくしてから、

『ぢやア、僕は稻子さんと一緒に歸りましようか？』
『ええ、歸りますとも！』
　勘定をすませるまでは、それツ切りお互ひに言葉はなかつた。すませてから、
『君はどツちへ歸る、ね』と、分り切つたことを聽いて見たのは、遠慮してお先きへ歸りますとでも云ふかと思つた爲めだ。が、渠の返事はます／＼氣に喰はなかつた。
『僕は稻子さんと一緒の道です。』
『………』こちらがそれとなく耳をそば立ててゐた隣室の客は、まだ歸つた樣子もないので、どうしてゐるのだらうと、いやらしいことまで想像しながら外へ出た。『稻子にも無理にも酒を飮ませればよかつた。』
『もう、何どきでしようか？』かの女はあとから藤井と共について來ながら。『遲いでしよう、ね？』
『まアだ――もツと散歩しましよう。』活動寫眞には少し時間が過ぎてるやうだが、まだお終ひにはなつてまいから、喰ツ付き物さへ離れれば、それを口實に、今一度、別な方向へかの女を轉じさせるのであつた。が、渠がどうも離れさうでないのは、かの女の爲めにこちらを警戒してゐたやうだ。どうしても渠等の間に何か曰くがありさうに見える。
『おツ母さんが、きのふも、云つてましたぜ、あなたがこないだ夜遲く歸つて、どこへ行つてたかさ

ツぱりわけが分らぬツて。』藤井が斯う云つてたところを見ると、若しこちらの宅へ來た夜のことだとすれば、かの女はあの金を親には渡さないで、かの女自身の身に付けてしまつたらしい。

『あたしだツて、少しやア自由がある、わ――それに、新聞の廣告なども見て、仕事を見つけてるんですもの。』

『………』他にかの女の仕事があすにも見付かつた日にやア、もう、こちらとの聯絡がうまく行くまいかと思ふと、こちらには今夜が一番大切であつた。邪魔ものが飛び込んだのがいよいよ憎くてたまらぬので、どこかで渠だけをまいてしまひたかつた。

『こツちへ行きましようよ――人に見つかると惡いから。』歌舞伎座の通りを銀座の電車線から二つばかり手前の横丁まで來ると、かの女は斯う云つて先きに立ち左り手のうす暗い方へ小走りに曲つた。あとのもの等がついて行つたが、カフエパウリスタの前を通つた時は、こちらがさきに立つてゐた。

それから山下橋を渡り、帝國ホテルの前を日比谷公園に突き當つたところの電車線に出るまでも、かの女と藤井とはよく語つたが、こちらは殆ど獨りぼツちであつた。

『………』つまらないにも程があらう。

『僕は小便して來る。』云ふが早いか、藤井が驅けて行くマント姿の公園内に段々と消えるのが、寒い月のあかりに見えてゐた。

『…………』これが最もいい機會であつたらう。『稻子さん、歩きましよう』と云つて、心は急ぎながら帝劇の方向へ一二歩踏み出したが、直ぐ踏みとまらねばならなかつた。

『藤井さんがおこります、わ。』

『あんな者アうッちやつて置いても。』

『でも――』

『…………』決心して、あと戻りして、『まア、いらツしやいよ。』かの女の手を取つて引ツ張らうとしたら、かの女はその手をふり切つて、

『見てるか知れません。』公園の方に氣をくばつてた。

『まア、默つて、いらツしやい――實は、事務所の方でもよければ、あすからでも這入れるやうにしてあげますから。』

『でも、――もう――遲いのですもの。』

『そんなに藤井がこわいのですか？』つき詰めてゐたので、つい、こんな皮肉まで出た。が、事務所に餘地がまだあるなら、なぜ鳥料理にゐる時に云はなかつたのだらうと思はれるそのすきを見せたのを直ぐ取り返すつもりであつたのだ。

『あの人よりも――おツ母さんが心配致しますから。』

『仕事を持つて歸りやア、如何におッ母さんでも何とも云ひますまい――？』
『そりやア、さうでしようが――』
『ぢやアいいでしよう。』
『でも――』
『…………』私かにこちらがやきもきと胸ばかりとどろかしてゐるうちに、藤井はまた驅けて戻つて來た。
『失敬しました。』
『君ア少しさきへ歸つたらどうだ、ね、こちらは少し相談が殘つてるから、稻子さんの仕事のことで？』
『ぢやア、歸ります！』いきなり、つんけんした樣子で挨拶もせずに行きかけたのを、かの女は二三歩小きざみに追ッかけて行つて、
『藤井さん、お待ちなさいよ。一緒に歸ります、わ。』
『…………』渠は默つて踏みとまつた。
『ぢやア、相談はまたにしましよう――僕は失敬します。』
『あら、お歸りですか？』

『…………』返事をしなかつた。

『では、奥さんによろしく』と云ふ聲を聽いた時は、こちらは、もう、來合はせた電車を追ツかけてゐたが、かの女から皮肉をあびせかけられた氣がした。わざわざかの女を宅へ呼んで、子どもが三人もあるところを見せたのがこちらの非常な弱みだと思はれた。

この一週間ばかりと云ふものは、かの女の姿が目を離れないで、かの女を思ふことが面白くない生活をも面白くしてゐた。が、かの女とこちらとの間にあんな若輩の邪魔ものがあらうとは氣が付かなかつた。それがまた珍らしい美男子であるだけ癪にさわる。

美人はその美を鼻にかけて、相手にもまた美男子をえらぶが、その人物が下だらなかつたりして、あとで非常な悔いに落ちることがあると云ふ眞理は世間にはあり勝ちだ。かの女もその御多分に漏れぬのだらう。素人には相違ないが、割り合ひに蓮葉なところのあるのを見れば、全くのうぶではなからう。たとへまだ深い戀愛關係はないとして見ても、こちらよりも一歩進んで行つてるのかも知れぬ。

こんな考へがつのると、あの二人がまた內幸町のあたりで寒月の光をあびながら、寒いとも思はずに歩いてるところを見るやうだ。それだけまたこちらの熱は冷めて、酒の醉ひもどこへやら行つてしまつた。

釣り革にぶらさがつて洋服の雨あしから寒さが滲みあがつて來る。それを辛抱しながら、萬事失敗の寂しみを齒の喰ひ合はせにまぎらしてゐた。

『四十五圓ばかりうツちやつたと思へばいいのだ。なアに、あの銀行の清算さへしてしまへば、おれにやア何千圓か浮いて來る。その時ア稻子などよりも美人をらくに買ひ取つて見せる。』

氣をまぎらせる爲めに、月はどこに見えるだらうと、度々あたまを下げて窓のそとをのぞいて見たので、うるさいとでも思つたのか、直ぐ前に腰かけてゐた男が俄かに突ツ立つて、席を讓つた。それがまたこちらの癪にさわつたので、默つてそのあとに坐わり込み、顏を橫向きにしてまたそとを見たが、月は高くて見えなかつた。帝劇前のお堀の水がただきらきらと光つて、向ふの石垣の上の松がはツきりした枝ぶりを誇つてる。

たまにはここまで芝居を見にやつて呉れてもいいだらうと云つてる妻の世帶じみたおもかげが思ひ出されると、矢ツ張り、妻同樣にしみツたれた考へが起つて來て、稻子に費やした物が惜しくもあつた。が、そこにまた、ふと、心が一轉した。

『どうだらう、實際的に、稻子との交涉は今夜で終はるべきであつたか？』こちらが藤井を寧ろ取り込むやうにしてやらなかつたので、かの女の落ちつきが逃げて行つたのではなからうか――どんなことをおツ母さんに告げ口するかも知れぬと心配して？藤井の話で見ると、かの女がこちらの金を幾

分か親に隱して貰つてゐるらしい――衣物や半襟を買ふ爲め――そこにまだつけ込みどころがあらう向ふからも話があると云つてたのは、こちらから渡したたツた五圓の金で埋め合せが付いたのであらうか？

『あら、お歸りですか』と云つたその時のあわてかたも、うそごとではできなかつたやうだ。

『では、奥さんによろしく。――では、奥さんによろしく。――お互ひに藤非の手前を胡麻化してゐたのだ』と思ひ返して來ると、棄てたと思つた金もまだ生きてゐるらしい。

熱い血がまたそろそろ湧き出して來た。そしてあすの朝、電話がかかつて來なければ、今度こそ手紙を出して見ようと云ふ考へが胸一杯の樂しみになつた。そして電車が小川町の角をまはる時に見えた月の光にも、何となくあたたか味がおぼえられた。

――（大正六年三月）――

鼻

『………』女にちよツかいを出して見て、うまく行かなかつた時などと同じやうな失望やら、後悔やら、自嘲やらの入り亂れた心持ちを寒い寒い風に吹かせて、渠は多の夜の道を左右へふり向く餘裕もなく、無やみにわけも分らぬ口笛を吹きながら、數寄屋橋の方から日比谷公園の門外まで來た。外套の兩の隱しに押し込んだ兩手で以つてからだの寒けと後悔とを人知れず押さへるやうにしてゐた。が、交叉點を帝劇の方へ進む電車がゐるのに氣が付くと、俄かに元氣が出た。そのあとを追ツかけたのである。そして十間ばかり走つたところでやツと飛び乘ることができたが、それも亦渠に取つては一つの癪の種であつた。

走つた時には一生懸命であつたので、懷中時計がポケトから飛び出してゐたのを知らなかつた。車掌臺の上に立つてから、何かぶらぶらと自分のからだにぶら下がつてるものがあると思つた時には然し、直ぐそのことに氣が付いて、鋭敏になつてる自分のあたまを一層ぴんとさせた。垂れてる重みをくさりに辿つて取り上げ、頭上の電氣に照らして見ると、果してがらすはどこかへ行つてしまつて

る。そしてその針の一つがまた根もとから折れて無くなつてる。

『畜生！』これを心では叫んだが、あたりの人々を憚つて口へは出さなかつた。つまらないことをしたと云ふ念は、自分ながら、顔のしがみに現はれてるやうに思へた。渠は然し、電車を追ッ驅けたことに對してよりも、その前にやつたことを一層いまだに殘念がつてゐるのである。

『あいつらと一緒に酒を飲まなかつたらよかつた――いや、酒の勢ひでおれが禁物の花を引かなかつたらよかつた！』

けさ新聞社の應接室で渠は或る事件の周旋を完了し、十日間ばかりの奔走に對するその口錢をせしめた。同僚間には知らせまいとして、成るべく秘密に事を運んだのだが、それがどうしたわけか午後になつて廣告部長に分つたと見え、

『みなおごつて貰ひ給へ、吉味君は大分儲けて持つてるぞ』と、部長は皆の前で公けにした。にやにやと笑ひながら、それが如何にもいや味ッたらしかつた。

これを聽てたあいつらだ――何か直ぐここそこと向ふの方で相談してゐたやうであつた。

不斷からいやな奴らで――今の部長の引きで入社したのであればこそこちらもいい加減にあしらつてゐてやるのだが、社以外ではさうつき合ひたくもなかつた。それがかたみがはりにこちらを見てくすくす笑ひをしたり、ふところを押さへて見たりしてゐたのは、今から思へば、こちらを落し入れよ

うと云ふ策略を相談してゐたのだらう。

そんなこととは知らなかつたので、向ふがふところを押さへたり、叩いたりしてゐるのがちらと見えた時、こちらも懷中してゐる物を思ひ出して、服のうへから紙入れをちよツとさわつて見たら、不時に俸給でも取つたやうに胸のあたりが嵩張つてゐた。社から電車まで、電車から家まで、無事に運んで歸りさへすれば、もう占めたもので――あとは女房の手に渡つて出入りの商人に對する拂ひ殘りを拂ふなり、このまま貯金するなりするのであつた。

ところが、どうだ？渠等は突然、社の引け時になつてから、そばへやつて來て云つた、

『僕等はおごつて貰ふには及ばぬ――今夜は一緒に飮まう。』

『…………』渠は渠等の突然な申し出に返事をしないでゐたが、何だか部長を笠に着て強壓的に命令されてるやうに思へたので、いやだとも云へなかつた。

こちらの弱みと云へば弱みであつた――これにつけ込まれて、社の連中がよく行く待合ひにつれて行かれた。藝者でも呼んで騷げばまだしもその方が安あがりであつたかも知れぬが、渠はいつも通りそれに反對した。すると、

『ぢやア、花でも引かう』とあいつらが云ひ出した。勿論、大分酒が進んでからのことだが、これにも反對したけれども、無理に誘惑されて、とう〳〵、暫らく身づから禁止してゐたことをやり出した

――碁石をその場のかけがへにして。
　それでも三年目までは大きな手やくや出來やくもあつたに拘はらず、大した勝敗もなく、こちらが僅かに二三貫の勝ち味になつてゐた。この邊で切り上げたらと思つたので、自分から先づ思ひ切つて立ち上りまでしたのだが、あいつ等が承知しなかつた。
『少しでも勝つてるところで、君』と、その一方はあぐらのままこちらを威嚇するやうに見つめて云つた、『逃げようたツて、そりやア卑怯だ。』
『でも、あまりおそくなると――』
『まア、もツとつき合ふ、さ。』他の一方は、また、斯うそらうそ吹いた。悪落ちつきに落付いて、こちらに近い火鉢に兩手をかけながら、そツぽうを向いてゐた。
　思へば、どいつもこいつも悪辣なやつらであつたのだ。その手を早く看破して斷然切り抜けて來たツて、――社長や部長の直接命令ではあるまいし、――何もかまふことではなかつた。渠等がまた腕力に訴へて無理に渠等の負けを取り返さうとしたら、勝つてるだけをそこにほうり出せば濟むことであつた。が、こちらにも少し慾に未練がないでもなかつた。結果のやり取りをする時にちらと見て確かめたところでは、渠等もそのがま口には大分の用意があつた。
『下手な辯に！』斯う考へると、渠等がこちらに勝たうとして荐りに引きとめるのが私かに可笑さう

にもをかしくもなつた。
『早く坐われ。』そッぽうを向いてた方が待ち兼てこちらの顏を見上げた。
『…………』幸ひに向ふから挑んでるのではないか？えい、卷き上げてやれと決心した。『ぢやア、小便をして來てから。』
『逃げちやア、承知しないぞ――帽子を置いてけ。』
『…………』渠は手につまみ上げてた茶色のソフトをそのまま落してから、用を便じに行つた。
瀨戶の口に向つて自分のなまあツたかいにほひをぷんと嗅ぎながら考へたところでは、かの大川夫人などとこれをやり初めてからと云ふもの、さう負けたことがない。而も隨分勝つた時などには人に酒や壽司をおごつて、自分も眞ツさきに腹一杯に喰つた。
『どうかどなたさまも』と、わざと叮嚀なよそ行き言葉を使つて、一番多く負けたその家の夫人を冷かしながら、『御遠慮なく十分召し上つて下さい。どうせお殘しになつたツて、ここの人に掃除して貰ふだけがお手數をかけて濟まぬわけになりますから。』
『いやな吉味さん、ね、人を馬鹿にして！』夫人は橫目にこちらを睨んだッけ。そして愛嬌と苦笑とを見せながら、『どなたも御遠慮なくお殘しになつてもようございますよ。あとであたし達が頂戴致しますから。』

『さうはさせない』と云つて、他の男達もがつがつやつた。
夫人も負けぬ氣になつて隨分たべたが、その時の分量は多かつたのでまだまだ殘つてゐた。
『今度やる時はきツと吉味さんにおごらせて見せます、わ――いつもいつも憎らしいほど負けないのだから！』
『あべこべにまた大きな失敗をしないやう心がける方がいいでしよう。』
『………』夫人は左の手でこちらをぶつ眞似をしたが、右ではその口へ赤身のを持つて行つてた。『あア、きつい』と云つて突然、その目をしよぼしよぼさせたツけ――わさびが餘ほど利いてたと見えて。
兎に角、こんなに面白いと思へば面白いことをぱツたりやめたのは、決して負けが込むとか、物質上に損をするとか云ふやうな理由ではなかつた。ただ連中から夫人が先づぬけた爲めに、皆がまた貴重な時間を空費するのを餘り利口なことでもないと氣づいたのであつた。
『もう、八々はやめることにしてるのだが、なア』と、濡れた手をハンケチで拭き拭き、おもてではいやさうに見せながら、調子ぬけがしたかのやうに再びもとの席へ腰をおろした。
『その癖、君は一厘ばなししか引いたことがなかつたと云ふぢやないか？』
『無論、こんな大きなのは初めて、さ。』
『これが男らしくツて、面白いんだよ。』

『さうか、なア』と、渠はとぼけてゐたけれども、實は、ここでこんな大きな賭けに勝ちさへすれば、けさ得た十日間の奔走料を一と晩で二倍にも三倍にもできるだらうと思へた。
『なアに、勝負はこれから、さ。』下を向いて黒裏の札を一二回切つてた方が、親をしろと云はぬばかりにそれをこちらへ突きつけて置いたが、他の一方を横目にじろりと見た樣子を思ひ出すと、こちらの便所に行つてた留守に渠等がまた何かもツと具體的な奸策の相談か合ひ圖かをして置いたのであつたに相違ない。
四年目の二月に見ずで桐の絶對を出したので、兩方から先づ三貫づつを取つたが、一方には櫻のピカ一の手やくがつき、他の一方には靑ヨロを出かされ、八貫と十四貫とを一時に取られた。
三月には赤ヨロ、四月にはまた靑ヨロ、五月には二十八貫の五光——から向ふのどちらかにばかり出來やくをしてやられ、而もこちらの工夫はすべて途中でぶち毀われるのだ。これではこちらの手やくに丹一があらうが、立て三を持たうが、追ツつくものではなかつた。その上になほ不思議なことには、三年目までは向ふのどちらかがよく落ちたが、四年目からはどんなに惡い手でも出ずには置かなかつた。そしてこちらが六ケ月目に落ちると、張り合ひがなささうにして向ふは二人で落ちを分割して取つた。
七ケ月目に氣がつくと、何でも考へねばならぬ大切なところになる每に、その一方がタタタツタア

などと云ふと、他の一方がトトトツトウなどと應じるのだ。一時期を後れて入社した渠等とはこちらはこれまでに花合戰をやつた經驗がないので、しかとは分らないが、それが皆どうも何かの符牒らしい。考へるふりをして一方が『今頃は半七さん』などと淨瑠璃の文句を語ると、他方は必らずまた『生れもつかぬウー』と引ツ張りながら、別なことを云つてるのだが、どうも何かの答へらしい。また青を拵らへられた。

『僕ア、もう、やめる！』渠は斯う叫んで、自分の札を眞ン中の坐蒲團の上に投げ出した。

『どうしてツて君らア全體人を馬鹿にしてイる！二人で合ひ圖をし合つてるんだ！』

『そんなことアない、さ。』

『…………』それに返事をするには渠は餘りにおこつてゐた。

『ぢやア、おれ達が疑はれるやうな飄輕なことを云ふのをよしたらいいのだらう。』

『…………』これにも返事をしなかつた。そして耳のあたりまで熱してゐるのをおぼえた。人目につかぬやうにそツと札を交換したり、爪のあとをつけて目じるしにしたりなどすることが黑ら人にはよくあると聽いてるが、そ知らぬふりで公けに合ひ圖をし合ふとはまた太いやつらだ！餘りのいまいましさに、どうしても負けを取り返してやらねばと云ふ決心が私かに先きに立つた。

八月目の親が渠の氣色ばんでるのに頓着なく裏赤の札を切つてるのを幸ひ、渠はやめると云つたこ

とを無言のまま取り消しにして、それでもおもて向きはむツつりした顏つきでゐた。

親は初めに場の爲めに分けた札六枚をふせて置いてから、皆に三枚と四枚づつを二度に分けた。そして、

『見ずだぞ』と云つて、伏せてあるのをあけたうちに、松のピカがあつた。『さア、おぼし召しのかたは絕の三貫をお出し下さい。』

『ちやア、やる。』渠は自分のしろ石を三つ親の見ず料に渡した。手やくにカラス五貫の絕倖十貫がついてゐたからである。ところが、ピキが上手に落ちたので、お客さまを逃がした氣がつい『ちよッ』と自分に舌うちをさせた。

『何か附いた、な。』

『おカラス、おカラス！』これがさしの相手よりも抜けて、手やくも十二貫になつた。

九月から十一月までは向ふが一人落ちるか、こちらが落ちるかしながら、渠には多少の取り返しがついて來たのだが、十二ケ月目にまたどツかり負けた。鹿の十一ぐらゐで出なければよかつたのに。向ふは一方に藤の立て三の飛び込みがあり、また一方には五枚までも赤の手が付いたので、こりやア赤ヨロをしてやられた、な、と思へた。果してその通りだツた。

この最後の一戰の爲めにとうとうふところが全滅したばかりでなく、可なりの不足を生じてしまつ

た。

『證書を書き給へ、證書を』と云はれ、渠は止むを得ず不足額を四分して證劵印紙の入らぬ程度のを直筆で四枚調製した。それから、自分は

『今度は取り返すぞ』と姿勢を改めたところ、渠等が應じなかつた。

『もう、これからやつたッて張り合ひがないぢやないか？』

『そんな現金なことは云はないで、――もッとやらう。』

『でも、前に君は勝つた時に逃げようとしたぢやないか？』

『もう、おそくなるよ』と、別なのもからかふやうに云つた。

『兎も角、もッと拵らへて來給へ――もッと。』なさけないほど冷淡なものだ。

『………』そんなことは、僅かの給料で新聞社などに使はれてる身で――而も夜の十時を過ぎてから――できる相談ではなかつた。

『まア、ここらでやめて置いた方がえいぜ。』

『そんな無理なことを――』

『何が無理だい？』斯う云ふ亂暴な口調には、無論、向ふは酒の醉ひも手傳つてゐた。

『無理ぢやアないか』と、こちらも怒らざるを得なかつた。『おれの勝つてる時には達てつき合はせて

置いて、さ、君がたの勝つた時にやアつき合はないなんて？』

『程度が違ふ、さ。』一方は實に憎いことを云つた。

『考へても見給へ』と、また一方も一層ひどかつた、『君にあぶくのやうな飛び込みがあるあひだはまだえいが、それが無くなつてなほさう俸給以外で埋め合せをつける見込みがつくかい、この當分？』

『惡いことは云はぬ――君の爲めぢや。』

『……』默つて聽いてると、如何にも殘念であつた。『今一年しよう』とせがむやうに云つて見たが、渠等は矢張り取り合はなかつた。

『今夜の料理代はその代り僕等の方で負擔して置くから』とあつて、歸りの電車賃として十錢だけを渠等は戻してくれた。

思へば、今ごろはあいつ等二人はなほる殘つて、酒をうまく飲みながら、こちらのことをあざ笑つてるだらう。それが最も癪で癪で溜らないのだ。

『早く引き上げればよかつたのだが』と、渠は今一度こわれ時計を直着のポケトから出して見て、

『畜生！』と心で叱り付けた。

それから、口笛を相變らず――然し低い聲で――吹きながら、電車の入り口の込み合つてるのを無理に肩で押し分けて這入つて行つた。が、矢ッ張り中も込み合つてて、腰のかけられる空席などはな

かなかできさうにも見えなかつた。
婦人連も多いのを見ると、帝劇のはねにかち合はせたのだらうが――さう云ふ連中を見るにつけても一層渠自身の今夜の不覺が、夜さむの氣と共に、ひやりひやりとずぼんの裾から立つてる兩足を襲つて來たかと思ふと、粟つぶのやうな物がからだ全體に行き渡つたやうだ。例の奔走の爲めにゆふべも湯に行けなかつたので、けさはと思ひながらまた行きそこねてゐたのだ。

　これが人間のにほひか知らんと思はれるやうなにほひをしてゐる。が、つり革にぶらさがつてる自分が固くこは張つて、自分の心地がしない。目は引き釣つて顏が眞ツさをになつてはしないかと思ふと、あたりが憚かられて口笛をちよツとよした。が、それをよすと同時に首をさけて、窓からそとに圓い月がかかつてるのを見た――あのやうなまる坊主がひよツこり飛び出しさへしなければ、雨入り四光などをしてやられはしなかつたのに――。

『切符を切ります。』車掌が近づいて來たので、その方へ渠は遊んでる方の手を突き出し、

『おい、巣鴨！』われ知らず荒ツぽい聲で云つて、二三名の客の肩や袖を押しわけ、前以つて用意してゐた銀貨を車掌に渡した。『小川町で乘り換へだ。』

『……』車掌はこちらの荒ツぽかつた言葉に氣が付いてるのかどうだか、默つて往復切符の一端にはさみを入れてから、『へい、巣鴨のかた』と云つてそれをこちらに渡した時、乘り換へ切符を添へて

くれなかつた。
『乘り換への方はどうした？』矢ツ張り、聲を荒らげないではゐられなかつた。
『巣鴨へ行きますよ――この電車は。』
『…………』渠には車掌の返事の惡落ちつきがこちらを馬鹿にしてゐる者と見えたので、一層いら立つて、『然し本郷まわりぢやアないか？』
『ですから、通しでまゐります。』こちらをも見ないで前を通り過ぎようとした。
『いいや、乘り手の勝手だ！』いよ〳〵溜りかねて、『おれは小川町で乘り換へる――切符を出せ！』
『この電車では出せません。』
『何だと、馬鹿！おれは何度も切り換へて貰つたことがあるのだ！』
『それは確かに切つた者の間違ひです、わたくしには出せません。』車掌はこちらをちよツとふり返つて見ただけで行つてしまつた。
で、渠のいまいましい感じの對象はこの方へ變つて來た。
『…………』どう云ふ風に我を通せば最もよく自分の心を滿足させることができるかと、武者振ひを感ずると同時にあたまの心まで異樣なのぼせをおぼえてゐるうちに、電車は堀ばたを離れて大手町の方へ近づいた。そしてそこでとまつた時には、ますます乘り手が前後から這入りこそしたやうだが、生憎

降りるものはなく、渠は右の手を左りに換へて矢ツ張り革につるさがつてゐた。

電車が急激に運轉を初めたので、どんと一つ渠に足ごたへがあつたかと思ふとたん、前の人がよろけた結果、渠の足を靴の上からいやと云ふほど踏み付けた。

『どうも濟みません』と云つた人は、こちらを見て一つあたまを下げたのであつたが、

『………』渠は挨拶を報いもせず、ただ瞰みつけたつもりであつたが、それが寧ろにがい顏をしたのであつたやうだ。

そのひまに同じ車掌が再び通り過ぎてしまつたので、それを捕へることができなかつた。

『今度戻つて來たら』と待ちかまへてると、

『次ぎは神田橋――乘りかへの方はございませんか』と云ふ聲が聽えて來た。これが何だかこちらの面あてに云つてるやうに思へた。

『おい、出せ!』低い聲でだが叫んで、渠は自分の後ろをすり拔けようとした車掌を肱で突き飛ばした。そのとたん、あたりの客二三名はとばツちりを喰つて動搖した。

『相談して見ますから。』車掌が案外におとなしかつたので、却つて渠は俄かにひやりとした。よくこの場で職掌上の權威を以つて威だけ高に向はなかつたものだ。

その代り、立つてる客のうちの一名がそツぽうを向いてるままで、

『お手やわらかに願ひます』と云つた。

『………』それを聽いて渠はまたひやりとしたが、同時におちけづいて考へた、車掌の相談と云つたのが若しさうツて替はつて、二三人の車掌や運轉手どもが申し合はせての、こちらに對する逆襲になつて來たらどうしたものだらうと。渠等が客一人を渠等の溜り場へ引き込んで、皆で亂暴にも死ぬほどぶんのめしたことがあつたとは傳へ聽いてもゐる。

でも、こわごわにだが、この場合向ふの返事を持つて來させなければ男の顔が立たないかの如く思はれた。

　そのうち神田橋も過ぎ、あとは一と停留所を越えれば小川町だのに、なほ車掌の所謂相談の結果が分らなかつた。渠はやきやきして來たので、中央よりも少し前のところから車掌を運轉手臺の方にあとづけて行つて、

『おい、どうしたんだい？これまでにも度々貰つたことがあるのだ。出せないと云ふのは君だけだらう。早く出せ！』

『小川町——小川町』と云ふ注意が最早や聽え出した。美土代町はいつのまにかとまらないで過ぎたのだ。

『どうおツしやつてもわたくしには出せません。』

『どうしてだい？』
『そんな法がありませんから。』
『强情な車掌だ！』
『何と云はれても――わたくしには――』この時電車が交叉點を曲つてとまつた。
『早く出せ！』
『わたくしには――』
この押し問答が出ぐちをふさいでゐたので、後ろの方から不平を叫ぶものもあつた。
『出せばえいぢやないか』と、運轉手はめんどう臭さうに車掌を返り見た。
『ぢやア、こちらへいらツしやい』と云つて、車掌は渠と共に下りて、渠をつれてツて、分岐點にからだを少しすくめてその肩外套をのせた肩を上下に動かしつつ立つてる監督に紹介して告げた、
『このお方が小川町の乘り換へにして吳れとおツしやいますが――』
『で、――』監督はこちらを向いてゐたが、何のことだか分らぬやうすだ。
『………』渠はその樣子が先づ冷淡に見えたのでまた癪にさわつた。聲をもこれにつり合はせて、『僕は早く乘り換へを貰ひさへすればいいのです。』
『君、ほツといて行かう』と、別な車掌が直ぐ呼びに來たので、こちらの車掌は行きかけたが、また

あと戻りをして、
『切符はこちらへ頂戴して置きましよう。』
『どうしてだ――まだ乘換へも渡さないぢやないか？』
『乘り換へのことはこの監督さんと御相談を願ひます。』
『それでいいんだ、な？』
『へい――』
『ぢやア、渡してやる！』渠は斯う云つて、もう勝利を得たものと思ひ込んだ。
あとには通りすがりの人かげもなかつたので、渠と監督とだけが暫らく默つて向ひ合つてゐた。後者の寒さうな風がこちらにも移つて、鼻のさきの感じがつめたく痛い。この痛みも――若し――乎やくで――赤になつてたら、小場で二貫、ぬけて三貫――絶倍の六貫――
『………』監督は、渠には意外にも、乘り換へ切符を出さうともしない。
『おい、どうして呉れるんだ？』
『一體、あなたは』と、不思議さうにして云つた、『どこへ行くのです？』
『今更ら、そりやア何の問ひだ、巣鴨と云つたぢやアないか？』
『いいえ、聽きません。』

『…………』さう云はれて見ると、如何にもそれが事實であつたらう。自分は少しのぼせてゐた。『成程君は聽かなかつたらうが、僕はそのつもりで小川町乘換へを請求したのです。』

『然し今の電車は巣鴨行きではなかつたですか？』

『巣鴨行きは行きだが、本郷まわりだから、乘り換へを切れと云つたのです。』

『そんな必要はないではありませんか？』

『なんだ、必要のあるなしを君がおれに聽く必要がどこにある？』

『では、聽かぬまでのことです。』

『無論、聽くには及ばぬ――早く呉れさへすればいいのだ。』次の電車が來て今度はこちらの思ふ方へ曲つたので渠はいそいで手を出した。

『何をです？』

『とぼけるない！』渠が横ッつらをでもなぐつてやりたいほど監督にはわざとらしい平氣のよそほひがあつた。渠はこれに口ばやに返事を投げつけた。『乘り換へ切符をだ！』

『へい――あなたはなぜ今の車掌から貰はなかつたのです。』

『…………』天下堂の前にとまつた電車を見ると、もう客が二三名おりてゐる。

『ここでは出せません、な。』

『……』渠はちよッとあッけに取られた。少し語氣をやわらけて、『と云ふと、君は——持つてても出さないと云ふのか、それとも持つてゐないと云ふのか？』
『監督は切符を切る役ではありません。』
『ぢやア、不都合ではないか——』大きな聲ではあつたが、半ば獨り言の性質を帶びてゐた。自分は車掌を突き飛ばしたその復讐を受けて、こんな寒い夜なかにうまうまと置いてきぼりを喰つたのであることが分つて來た。出した手はいつのまにか引ッ込んでゐた。
赤ヨロの野心で櫻の丹を惜しみ、まさかと思つて坊主のかすを棄てたのがそもそも自分の破滅のもとであつたのだが、ここでも亦さきの車掌に本切符をかすと見て渡してしまつたのが失敗であつた。乘り込みの車掌ではないものの手から、よく電車の外で切符を切り換へて貰つたことがあるのをおぼえてるので、そんなことも監督と云ふもののする役目のうちであるのだらうと思つてゐた。
十日ばかりの奔走料を棒に振つたあとで、たツた五錢に當る電車切符一枚ぐらゐうまうまと卷き上げられたツて、それは何のことでもない——が、——
自分の別に持つてる殘りの復切符を除いては、心も財布も全く素寒貧になつた身を、今、この監督と共に、直接に夜かぜの寒さにさらして立つてるのである。『この切符一枚しか無くて電車に乘つた場合、若しこれを落して無くしでもすると、市中の乘り換へ場から郊外まで歩きでもしなければならぬ

のか』と云ふやうなことを度々考へさせられた自分の生活狀態も心の中には思ひ出された。――
自分が突き飛ばしたりしたことは如何にもよくなかつたけれども、その車掌の同情なき、惡意ある無責任な仕うちはこれを憎まないではゐられなかつた。

『何が不都合です』と、自分自身を責められたと思つて問ひ返した監督を、渠は今少し相手にして鬱忿を晴らしてやれと云ふ氣になつた。どうせ二度目の電車も出てしまつてゐる。

『考へても見給へ。おれは今一つかけがへの切符を持つてるからいいやうなものの、若しこれが別な人であつて――而も可哀さうな老人か子供かであつて、さ――切符もなく、またちよッと金の持ち合はせがなくツて、こんな目に合はせられたとしたら、どうだ――この時刻も遲くなつて？』

『そりやア場合にもよりましようが、あなたのは無理です。』

『何が無理だ？　これまでにも度々切り換へて貰つたことがあるのに、今の車掌だけがそれをしないのだ。』

『そんなことはありますまい。』監督もまた今の車掌と同じやうな意見を持つてゐるのであるらしい。

『………』渠はふと思ひ返すと、ここでよく切り換へて貰つたのは自分がまだ大塚の車庫近處に住んでた時のことで、ついこの間、巣鴨の終點に轉居してからは、日比谷から本郷まはりに乘つてここの乘り換へを貰つたことがあるかどうか、はツきりとは思ひ出せないのであつた。けれども、なほおも

てにはこの弱みを見せないつもりで、『でも、ここで乘り換へた方が早く行けるんだ。』

『それはあなたの思ひ違ひでしよう。』

『馬鹿を云へ！おれの實驗では、春日町まわりの方が早いんだ。』斯うは云つたものの、これは春日町でまた乘り換へて自分が大塚の方へ向つた時の感じであるらしい。現在でも、時によると、この道を取つて歸宅することもあるのだから。

いつのまにか二三の黑いかげがあつて、おほ聲の方へ引き寄せられてゐた。

『夜は時間運轉ですから、そんなことは斷じてありません。』

『君に不平を云つたツて無論仕かたがない、さ。』集つて來たもの等に直ぐそれと分らせるやうに云つて、監督を冷笑しながら、『乘り換へを出す資格さへ持つてゐないんだから、なア。僕が五錢だけ損をさせられたと思やア、それですむんだ。』こんなことでとても渠の氣は晴れなかつた。が、こんな奴を相手にしてゐたツて、寒いだけが損であつた。

角なる繪ハガキ屋――もう戸が締つてたが――の方へ、渠は交叉したレイルを三つ四つまたぎ越える時、その磨けた線に路傍の瓦斯燈のあかりが映つてるのが、かるたのおもてに書いた二十物の雨の線のやうに見えた。

渠はまた口ぶえを吹いてゐた。

天下堂の高い建築をすぢ向ふに仰ぎ見ながら、また次ぎに來べき電車を待つてると、反對の方へ曲つたのがあるが、それを巣鴨行きであるかどうか調べて見る氣にはなれなかつた。その癖、からだは寒さにふるえてゐる。酒の氣などはどこかへ行つてしまつて、にほひだけでも嗅ぎたくも嗅げなかつた。

全體、自分は時間の上にも二重の損をしたのである。下らぬ八々などに一と晩を費やした上に、この乘り換へ問題の爲めに歸宅が少くとも二電車は後れるのだ。たとへ乘り換へ切符を無事に出して貰つたとしても、現にこんなに待ちすくんでゐるのでは、さきの本郷まわりの方が無論ずツと早く行つてしまうに相違ない——

『馬鹿な奴だ、なア』と、同乘の客のうちにこちらをあざけつた紳士らしいのがあつたのを思ひ出した。そしてその口調をわれ知らず自分の口ぶえに云はせて見た。

二間ばかり離れたところに、これも電車を待ちつつ、買ひ物らしい包みを左りの手に乘せて立つてる女があるのを發見して、それとなくその方へ歩いて行くと、かの女はすうツと横を向いたので、その横がほに映つた光りがどことなく二十七八の大川夫人を渠に思ひ出させた。

『ふき子さんは今どこへ行つてどうしてゐるんだらう？』あの人がまたこれを好きで、何かと云へば直ぐにこにこしながらお花をしましようかと來たので、をとこ連が皆二日にあげず出かけて行つたも

のだが、一つにはかの女の品のある愛嬌に引かれたのであつたから、大川君がしまひにはこれを看破し、八々がよくないと云ふことにかこつけて皆を遠ざけてしまつた。そしてその後またあの家をも引ツ越したと、自分達は傳へ聽いてゐる。

自分達の八々に興味がなくなつて來たのもそれからのことであつて見ると、人の女房を張りがてら遊んだ仲間へ自分も、全體、どんな顏つきをして加はつてゐたのだらう？　今晩だッて、花に負けた鬱忿が電車の中で車掌を肱で突きのけたり――無理に乘り換へを請求して分岐點の監督にぶつかつたり――。考へると、餘りに馬鹿馬鹿しくツて、歸宅の上これを妻にさへ語る氣になれるとは、思へない。

やツと捕へた電車には前のと違つて空席が隨分あつた。乘る時に自分よりもさきへ乘せてやつた女の人が車掌臺に近いところへ腰をおろした。その隣りにもまた空席があつたけれども、渠は自分の顏をかの女に見られたくない爲めに素通りして、中ごろの席へ行つた。すると人々が前の席からも左右からも渠の方を見つめるのであつた。

所帶じみた渠の女房の顏には時によると鍋ずみがついてることがあるけれども、まさか自分のにはインキや鉛筆のあともあるまい。それは大丈夫だとそ知らぬふりで謹直な姿勢にならうとしたが、さうすればするほど渠は自分の顏いろその物が青白くなつて行く氣がする。そして目が据わつて來ると

高くもない自分の鼻がふと自分の目さきにちら付き出した。
『兄弟中で正ちやんの鼻がまだしも一番恰好がようございます、わ、ね』とは、おぼえてもゐるが、渠の母の姉の言葉であつた。子供の時、或晩、渠がふと目をさまして見ると、自分のおばさんと母とが自分の枕もとなる火鉢のそばで何か自分のことを云つてゐた。で、たぬき寢をしてじッと耳を傾むけてゐると、また別に世間ばなしにもなつたが、再び自分の姉や妹のことに立ち戻つて來て、おばさんは斯う語つた——ここの家すぢは皆女も男も鼻が低く、而も少し天向きだが、正吉のだけは低いと云つてもまださう不恰好ではない。まア、顏だちから云つても、可なり美男になれよう。これが若し姉の方か妹の方に變つてれば嫁入り口も早くできて結構なのだが、世の中は何ごとにつけても思ふやうには行かぬもので、などと。その時、渠は蒲團のかげでそッぽうへ自分の舌を出し、私かにねずみ啼きの眞似をしたのであつた。

　大きくなつてからも、好きな女のそばを通る時、料理屋の女中に酌をさせる時、宴會の末席に列なる時などには、あの時の記憶がたまに浮ばないでもなかつた。が、今晩のやうなことは恐らくこれまでにあつたとはおぼえない。

　口ぶえを吹く爲めに口をとがらせると、たださへ血の氣がなささうに思はれる自分の顏を一層青白く見せるだらう。それを努めてさし控へてゐると、自分の寂しさや後悔の持つて行きどころがない。

ただこのやる瀨なさに目の神經までが引き釣つたその眞ツしたで、自分の鼻のさきは電車のゆれる毎に小い輪を描くのである。これが近眼のめがね越しに目の邪魔になつて、邪魔になつて――。

いツそのこと、その鼻さきを人もする合ひ圖のやうに人さし指で公けにちよツと彈じいて見せて、『八々に負けたんだい』と大きな聲で叫んでやりたくもあつた。今や勝負のことなどよりも――また電車での失敗のことなどよりも――一番氣になるのは鼻さきであつた。どうかしてこれを忘れよう、忘れようとしても、意地の惡いことには、自分のばかりでなく、死んだおやぢのまでが自分のにかさなつて來た。おやぢは若い時から大酒家であつた爲めに、四十前後にはもうその鼻がユダヤ人の如く赤くなつてゐた。

『どうしてお父さんのはあんなに赤くなつたのだらう、ね？』

『あれはお酒のせいださうだよ。』母は昔斯う答へた。『あれを見てもお酒と云ふものは毒に相違ないから、お前は大きくなつてもおほ酒を飲んだらいけないよ。家を倒すのもお酒からなら、からだを毀わすのも矢ツ張りお酒だから、ね。』

『あんなからいもんなんか飲みたかアないや。』

『鼻あかのおやぢ』と云はれるのは、渠自身が成人してからもいやなことであつた。然し、この場合また小場で二貫が、拔けて三貫を聯想された。身ぶるひのやうに小刻みにからだをゆすりながら、『畜

生！あいつ等につき合つて飲みに行きさへしなかつたら――』
妻の貯金帳に一圓二圓と少しづつ書き入れがふえたのも、却つてこの勝負をやめてからのことではないか？折角、ぼろい儲けがあつたのに――この埋め合せは今度、また社の仕事以外で、何を周旋してつけてやらうか？

『當分はちよッと返せまい』ツて？人を、あいつらは馬鹿にし切つてゐやアがるのだ。

さツき同じところから乘つた類似の大川夫人はと見ると、自分から五六人向ふのすぢ向ふにゐて、その顏は丸で違つた不美人であつたが、これも矢ツ張りこちらばかりを注意してゐたかして、こちらと直ぐ視線が一致すると、ちよいと横を向いてしまつた。

車中の誰れも彼れもが自分ばかりを見てゐる氣がするので、自分にどこか違つた樣子がありはしないかと、目に立たぬやうに自分の胸もとを見ようとしたのだが、邪魔になるのは自分の鼻であつた。自分の鼻を見まいとすれば、あたりの人と視線が合ふのである。さうしたくないので、渠はまたロぶえをわれ知らず吹きながら後ろの窓わくに左りの肘をかけて、外の方をながめた。

少し外が明るく見えて來たかと思ふと、神保町の停留所であつた。そしてその曲り角を曲る時、角建ちの東京デパトメントストアの飾り窓に何かの植木鉢が出てゐるのが梅の十に見えた。

『大川夫人は實際どこへ行つたのだらうか？』あの連中が盛んにやつてた時は、皆ここで下りて二丁

ばかり歩いてから右へ這入る今川小路であつたが、電車を下りてからよく連中が出くわしたものだ。

『どこへ行くのだ?』

『むむ』と、誰れでも初めは口をどもらせてゐた。が、それが段々おほぴらになつて來ては、皆も憚るところなく、

『夫人のところ、さ』と笑ひ合つてうち明けるやうになつた。その代り、おもて向きの目的は勝負に一致してゐた――賭けごとを好むものは勿論、あまり好まぬものもだ。

かかる思ひ出の光景も消えて暗くなると、電車は三崎町や水道橋のガアド下を通つてゐた。そして渠は自分の口ぶえに氣がついてそれをやめ、からだを眞ツ直ぐに坐わり直し、ふと今一度車上の大川夫人を見てやらうとすると、その姿も影もなく、あとは空席になつてゐた。これも水道橋で下りてしまつたらしい。

春日町の電氣會社事務所の明るさが正面にぱツと渠の目に映つた時には、窓一杯に櫻のピカが見えたが、直ぐ消えてしまつた。

『本鄉、江戶川、大塚行きは乘り換へでございます。』

『おい、乘り換へ切符を出せ』と、今一度怒鳴つてやつたらどうだらうと云ふ反省やら後悔やらの氣ぶんがまたまざ〱と浮んで來た。が、『この人がさツき車掌や監督に突ツかかつてゐました』と云へ

る客が一人でもこの車中にゐないことだけは確かなので、再びあんな眞似は賴まれても今度はできなかつた。

ずッと乘り手が減じて、ボギイ車のあちらこちらに僅かの人が離ればなれにゐた。渠は一番さきの方へ席を移して行つて、そのあたりにゐる車掌にポケトから新しい切符を渡して、これにはさみを入れさせた。そして、

『乘り換へは』と聽かれたのさへいやな氣がして、ただ横にかぶりを振つて見せた。

『君、一體』と、何げないふりで横柄に出て『この電車より一つさきに三田を出た本郷まわりとこの電車とはどッちが早く巣鴨の終點につくか、ね?』これが渠の誰れかに聽いて見たくなつた一つの疑問であつたのだ。これさへ分れば、さきの車掌にこッそり手を合はせてあやまつてもいい。

『そりやアさきのです、な。』ぼんやりした車掌だと思つてゐたら、こちらには案外なほどはッきりした態度がある。そしてにこ／＼した聲で、ねむ氣ざましの話し相手を得たのを喜ぶかのやうだ。『朝、巣鴨を出るのでは、同じに出ても本郷まわりの方がどうしても後れます――あちらには學校へ行く人が多く、朝の乘り降りが激しうございますから。』

『春日町まわりだッて、その代りわれわれ腰辨どもが多いぞ。』うち解けて見せるつもりがまだにが笑ひにしかなれなかつた。

『腰辨さんの降りるのは、然し、大抵神田橋から日比谷までの間です。然し夜間は乘り手も少く、また時間運轉になりますものですから、さきへ出たのは必ずさきに着きます。』

『でも、三田からのは本郷まはりの方が道は遠いだらう？』

『たツた一と停留所ぶんだけで』と答へて、おもい方の肩をゆすつた時、そこから提げてるかばんの中でちやらんと大分光る物の音がした。それがこちらには何かのピカ一の手やくが附いたやうに聽こえたが、若しほかに誰れもゐずに、向ふとこちらとの二人切りであつたら、鳶のあぶらげに於ける如くかツ渫つて行きたくもあつた。向ふはそんな考へに氣がつくわけもないので、無邪氣に言葉をつゞけて、『その位はあとから出る電車の時間では、とても、追ツつけません。』

『と云ふと、――さきの電車とあとからのとその時間の相違はおよそ何貫ほど――』

『えツ？』不審がほは如何にも尤もであつた。

『なアに、その――なん』とあわてて云ひかへようとしてかたちを改め、『何ぶんほどだらうか、ね？』

『まア、一時間を一圓と見れば』と、車掌の通俗的に機敏な察しはまとを外れてはゐたが、おもしろかつた。『十五錢です、な。』

『は、はア――それが矢ツ張り本當か、ね？』渠は斯う取り澄まして、十五錢とは十五分を意味してゐると見たが、この矢ツ張りだけは向ふに對して無駄な語であつたと氣がついて、苦笑しないわけに

は行かなかつた。

『それに、われ〱はどうせ早く行けることができても、さう致しますれば終點に着してから監督に叱られます。』

『監督に？』どうも聯想の感じがよくない。やツとそれから忘れかけてゐるのであつたのに。

『時間運轉はどこからどこまでを何時何十分で運轉するときまつてるのです。ですから、われわれはきまりより早くついてもどうしたわけだと聽かれ、後れれば後れるでまた同じやうにぐづ〱云はれます。』

『は、はア』と、また渠はとぼけて見たけれども、自分が自分でわざととぼけてゐるのは何の爲めだと云ふことが痛いほど胸を嚙んでゐやアがるので、矢ツ張り、苦笑を脱することができなかつた。

——『乘り換へ切符を出せ』——『わたくしには出せません』——さきのあの車掌ばかりでなく、監督までが同じやうなことを云つて、とう〱こちらが馬鹿にされてしまつたではないか？

あの車掌と監督とはうち合はせをして同じやうなことを云つたのでないことは分つてる。まして、あの寒さうにして交叉點に立つてた監督とこの車掌とに突然のうち合はせがあらう筈のものではない。が、それが何となくこちらにはこの事件に就いて聯絡がありさうにも取れて來た。

一時間を一圓と見れは先づ十五錢ばかりの相違です、な、と——この時、こちらの尋常な理智性は

この車掌の洒落ものであることを確かめしめた。が、一方ではまた、いら〳〵した神經が電車の中と待ち合の一室とを聯絡してしまつて、自分等が勝負をしてゐた室の障子のかげにこの車掌がこツそりのぞいてゐたので、こちらばかりが淺ましく負けたのを知つてゐながら、そ知らぬふりをしてこちらの住所を確かめに、車掌の姿をしてついて來るのではないか知らんと思はせた。

かばんを肩にかけたところは、こちらの二人の子供が學校に通ふ姿さながらだが、その一定した服裝は巡査のそれのやうで――それが示めす通り、また一定の服務規則に從つてる以上は、如何に卑しい職だツて、車内では客に對してそれ相當の權威を持つてゐるのである。そのこちらに對する權威がさきの電車からこの電車に移つた時、さきの車掌がまたこの車掌に乘り移つたやうだ。そして斯うこちらの内心までをも窮屈に束縛し、また見透してゐるのではないか知ら？

かばんの中の金をかツ浚ひたいやうな氣を起したのをも、車掌が既に神の如く看破つてとぼけてゐるのではないかと思はれて來た。

『然し何故におれについて來やがるのだ！』若し住所を知りたければ、待ち合のおかみに聽けば分つた筈だ。おかみで分らなければ、社へ電話をかければ分る。さては、若しやおれを終點まで送つて、終點で他の車掌やもツと權威ある監督どもと一緒になつて、おれをふん付けようとしてゐるのではないか知らん！

『この人です、車掌を先刻小川町で無法に突き飛ばしたのは！』
『ヤツ付けろ！ヤツ付けろ！こんな紳士づらをしてる奴は！』左りからもぽかり、右からもぽかり！左右前後から復讐的に突き飛ばされ、蹴飛ばされしたあげく、この車掌が刑事の本性を現はして、こちらに正式の拘引狀を突きつけたら、どうする？
『わアい、江戸のかたきを長崎で打ちやアがつた奴！ざまを見ろ、わアい〱』と云ふ賑やかな聲々があり〱と終點のレイルの上に光つて見えて、場は二絕も三絕も撒かれた時のやうだ。
『どツちが江戸のかたきだい』と心で云つてやりながらも、おぞけ立つてびく付いてる自分を渠は車掌に表面ではさう見られたくなかつた。
こんな時にあのお定さんの兄さんがゐて吳れればいいのだが――かの女は渠が地方の或宣教學校の學生となつて東京から行つた時に、同じ土地の同じ派の女學校に生徒であつた。渠はかの女の兄に頼まれてかの女を訪問したのがもとで、何度もそこへ訪問をつづけた。クリスマスの時などには、女向きの贈り物もした。それが學校と學校との評判になつて、幹部からの忠告を受け、全く交際が絕えてしまつた。
かの女はやがてどこかへ嫁して行つたし、かの女の兄はまた東京で思ふ學校へも貧乏の爲めに這入れなかつたうちに、親と共に流浪して行きがたが分らなくなつてしまつた。鐵道の工夫になつてると

傳へ聽いたこともあるし、馬車鐵道の車掌をしてゐたと云ふものもあつた。そのうちに馬車鐵道が廢止されて、電車の世の中になつた。

『濱松稠治』と云ふのがその姓名であつたが、この――珍らしい姓名を或時渠はボギイ車内の車掌札に發見したのである。まさか同名異人ではあるまいと思ひながら、どれがそれだらうと頻りに注意したけれども、その時で云つても、もう十六七年も會はなかつたものだから、たツた二三名のうちでだが、當てが付かなかつた。さうかと云つて、一々に就いて名乘つて見る熱心もなかつた。

『次ぎは本町です――兩國、淺草へ乘り換へのお方は切符を切ります』と叫んだのが、或はそれだらうかとも思はれたけれども、その聲にもおぼえがなし、その顔は再び友達になるにはあまり感じのいいものではなかつた。

然し今となつて、そんな遠い時代のことが多少でもこちらの加勢になりはせぬかと思ふほど、渠はおぢけまじりに心ぼそかつた。

そしていよ／＼醉ひはさめて心が謹直になつてるのをおぼえたが、死んだおやぢがむかし飲ました酒のにほひが嗅げて來て、矢ツ張り鼻のさきが邪魔になる。そしてからだぢうが寒さに顫えて、奥齒と奥齒とが噛み合はされないでがた／＼、がた／＼してゐる。

『それだから』と、少し向ふの機嫌を取るやうにして、『時々途中でわざと休んだり、徐行をしたりす

るのだ、な。』これは但し暫らく間を置いてから、突然またとぼけた口を開らいたのであつた。
『へい』と、車掌は態度を改めて、『まア、さう云ふことにして時間を合はせて行かなければ、な——
車掌なんてつまらぬ仕事です。』
『つまらないと云やア、何だツてつまらない、さ。』斯う云へた時には、渠も氣ぶんが俄かに少しらくになつた。日常生活の爲めになくてならぬ仕事をもいや／＼やつてるのは獨り自分ばかりでもなかつた。現に自分と同じ考へを持つてるらしい者が自分の目の前に立つてゐる。

して見ると、この者のやつてることも世間一般の通り穴だらけであらうから、よしんばこれが刑事を兼務してゐたとしても、他人の私かに行なつたことや心のうちやを看破できようとも思へなかつた。そして自分のおぞけ立つた幻想などは段々消えて行つた。
『何かいい金儲けを別に見つけなければ——』
『誰れでもさう思ふが、ね』と、渠は、車掌がこちらに親切心でもあらば何か世話でもして呉れいよ云ひたさうな態度と口調とを見せたのを見て取つて、ます／＼安心のていになつた。
『何だツて規則正しくないと行はれないし、規則正しい仕事はお互ひに六ケしいものだよ。』
『そりやさうでしよう、な。』
『いよう、君であつたかい？』ふと氣がつくと、この車掌はちん／＼小路にゐる仲間の一人であつた。

多くの子供には電車は『ちん〳〵、がうがう』と知れてゐる。そして渠の住んでゐる界隈では電車乘りの人々をちん〳〵屋さんと云つてる。そしてまたかかる人々が群を成して長屋住ひをしてゐる一角がちんちん小路と呼ばれてゐる。無論、冷笑を含んだ呼び名ではある。が、その連中だと云つてもこの車掌の如きは獨り者でありながら、常々評判のかせぎ手である。

車掌としても何とか云ふ表彰を受けてゐるが、うちへ歸つて來ると、また、こつ〳〵と活字を拾つたり植ゑたりして、名刺や廣告びらたどを刷つてゐる。丁度渠の借家住まひの裏横丁に當るので、渠も井戸へ行く時の裏口の出這入りには時々顏を見合はせてゐたのであるから、言葉をかはしたことはないにしても、もと〳〵から何か世話をして貰ひたかつたのであつたらう。

『よくお目にはかかりますが――』

『さうだ、ねえ。』これしか返事はできなかつたが、あの實直と勤勉とを以つてもツと大きな金儲けをしようとしてゐる奮發心には、こちらも恥ぢなければならなかつた。人の周旋をして口錢を取るのは商賣の一つであるからまだしもかまはないが、その儲けを以つてかけ事をして、而も負けたのである。そしてあの車掌を突き飛ばし、この車掌のかばんの中に目を吳れたのだ。いまいましいのは他人に對してよりも寧ろ自分に對してであつた。

『…………』車掌はこちらの言葉をもツと何か待ち受けてたらしい。

『………』渠は然し自分をばかり考へてゐた。『その自分とは何だ？』

『矢ッ張り、あなたのお鼻でしよう』と云ふ聲が自分の心のどこからか聽えたやうだ。

『馬鹿』と叱りつけたが、それのさきが電車の動搖につれて目の前に輪を描いてゐる。そしてその鼻のさきに勝負の現場が接近して集中して來る。

目のしんがじんと痛む。これをまぎらす爲めに渠は車掌の方に向いて、お世辭をたッぷりに、

『然し、まア、君は勉强家のやうだから、末には成功するよ。』

『いや、どう致しまして――』

『然し、君、世間にはよくあることだが、あの八々、ね――花かるた――あア云ふ物は一切やつては行けないぜ。時間や金錢を空費する上に、若し負けたりすると、その影響が人を困らせたり、自分をも變なものにするから、ね。』

『さうでしよう、な』と答へたには、こちらのそれとなしの懺悔を受けて呉れたと思つた。が、次ぎの言葉はさうでなかつた、『わたし達はあんな物はやりません。』

『………』ぢやア、おれ達ばかりがやつてると云ふのかと問ひ返してやりたかつた。そして車掌に對する興味も全くさめてしまつた。

白山上で四五名の客が下りて、乘り手がまた二三名あつた。それらがすべて後ろの方に席を占めた

ので車掌はその方へ行つてしまつた。

運轉手臺の方の入り口が締まつてゐて、あたりには人がゐなくなつたので、少しはくつろげる筈だのに、一向さうではない。而も却つて、折角儲け得たところのものを見す見す取られてしまつた上に懷中の時計の皮までが剝げてゐるのが殘念で溜らない爲めに、自分なる物がその事にばかり集中して行つて、しんがづきづきするその目の前に死んだおやぢのやうに大きな鼻が遠慮なく出しや張つて來る。

『あなたはどうしたのです、ね、そんなに鼻を大きくして來て』と、歸宅の上に妻から不審がられさうだ。

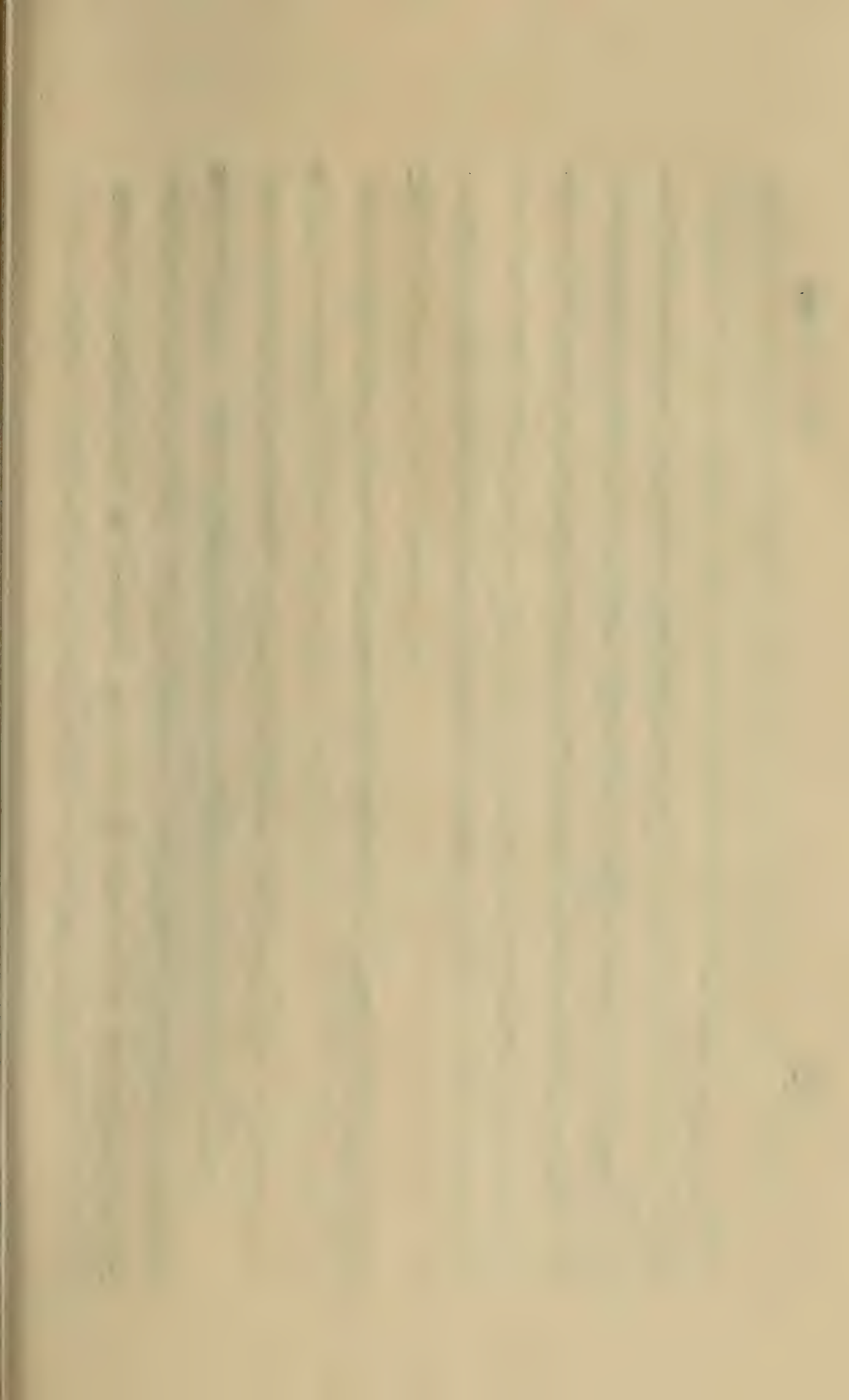
自分の家が段々近づくのだと思へば、――そして必ず今夜は豫ての吉報をかの女が待つてるのだと思へば、――前々から吹聽などして心待ちに待たせて置かない方がよかつたのだ。如何に女房にだツて、この而も慾張り損の失敗では、どんなつらをして向はれようぞ！

殘念も殘念だが、目鼻のしんが痛むのも苦しい。この邪魔過ぎる鼻をたとへもぎ取つてしまつても今夜のいろんな失敗を、一歩だツて、もう、成功の方へ恢復する見込みはないのだ。

電車はずんずん巢鴨の方に近づいて行く。

『もう破れかぶれだ、どうでもいい』と、わる度胸を据ゑて、意地になつて目を見張つて見た。する

と、ひどく度を越えた近眼鏡をかけたやうに自分の目鼻のしんが一層づきづきする。
目をつぶつて見ると、また、鼻のしんから、骨がらみの膿か何ぞのやうに、梅や櫻やもみぢや牡丹の札がどろどろとごツちやになつて流れ出るのが見える。そしてそれが一つにかたまつて自分の鼻の骨を大きく高くし、お前の留守に鼻だけをお前から空中に獨立させてやると云つてるやうだ。うかうか目をつぶつてもゐられない。然しまぶたを明けると、また目と目との間へ視力を集中させる鼻が飛び出してゐる。
そこから荐りにづきづきとしてどこまで進むか知れぬ痛みは、ひどい神經衰弱の時に感ずるやうに、自分のからだをじツとさせては置かなかつた。
もげるほど自分の鼻を人さし指でこじつて見せたつもりになつて、
『これに負けたんだい』と心で大きく叫び、氣がふらふらとなつてゐたたまれず席を立ちあがつた。そして向ふの方にゐる人々にもわざと聽えるやうに獨り言を云つた、『おう寒い！おう寒い！』
そして渠は斯う云つたことのおもて向きの意味をわざとにも實現する爲め、兩の手を兩のポケトにさし込んだまま首をすくめて進行中の電車内を歩き出した。

――(大正六年三月)――

霜子のかたみ

先生、暫らく御無沙汰致してをります。先日〇〇雜誌に——わたくしから申せば案外にも——紹介して戴いた原稿のことに就きまして、一度お伺ひして直接にお話し致したいのでございますが、殘念にもわたくしの病氣がいよ〳〵本物になりまして、この二週間ばかり、床を離れられぬのでございます。少しでも氣ぶんのよい日を見計つて、人車に乘つてでもあがりたいのは山々でございますけれども、いよ〳〵かよわくなつたからだがわたくしの心を自由にさせて吳れません。

わたくしも、あなた樣へわたくしを最初に紹介して吳れた常子さんのあとを追つて、冥途の旅へ出る運命が近づいてゐるのでしよう。けふこの頃は、もう、覺悟をしてをります。常子さんも初めは肺病ではないかと心配して女子大學をやめてたのでしたが、實は心臟が惡かつたのださうでして、靜養の爲め歸國の途中、御存じの通り急性脚氣を引き起し、仙臺の病院でとう〳〵お亡くなりになりました。脚氣しようしんが最近の原因であつたさうですが、わたくしの考へますところでは、その心臟の病ひも最も深い起原はあなた樣にあつたやうでございます。男子として比較的に無邪氣なあなた樣は、

いつもこの事を否定なさいまして、僕ではない、畫家の某の爲めだとおッしやいますが、わたしは常子さんから度々かの女のそれとなくあなた樣を思ひまゐらせてたことを伺つてをりました。
『かけながら思ひまゐらす君なれば』云々の歌の如きは、確かにあなた樣に奥樣のおありになることを悲しみ歎いたものでした。その證據には、かの女が病室の寢臺の上に斷末魔の苦しみで夢中にうわ言を云つた時、あなた樣の名を度々呼んだと云ふではありませんか？かの女の父上や兄さんもこれは暗に承知していらしつたのでしよう、病院から先づ第一に死亡の電報を出したのはあなた樣に對してであつたとかの女の兄さんが申してゐました。
わたくしも最後のもがきに入る時には多分今の人の名よりもあなた樣を呼ぶでありましよう。もうかうなつて來ては、わたくしに常子さんのやうな愼しみや耻かしみもございません。どうせ最後は死ですもの！
わたくしは覺悟してゐます。
あなた樣は常子さんには終りまでおぼし召しがなかつたのでしよう。否、おありになつたかも存じませんが、かの女には立派なお父さんや兄さんが附いてゐられるので、あなた樣が確かに御遠慮なすつていらしつたのでしよう。かの女はあなた樣にお會ひする機會を得んが爲めに、あなた樣のヴイオリンをお借りしに行つたり、大き過ぎると云つてお返ししに行つたりもしましたけれども、あなた樣

は如何なる時にでもなか〳〵御謹直な態度ばかりをお見せになつたさうです、ね。それをかの女から直接に聽いてますわたくしには、あなた樣のわたくしに對する御態度は少し不滿に受け取れました。不滿などとは先生に失禮な云ひぶんになりますが、ここではわたくしの女ごころの氣まぐれとお許しを願ひます。

出しぬけにこんなことを申せばお驚きになるばかりでなく、餘りに蓮葉な女だとおさげすみになるかは存じませんが――わたくしはあなた樣をお尋ねしたそも〳〵からあなたを愛してをりました。ここでは、もう、好きだと云ふやうな生ぬるい言葉は用ゐません。前以つて申し上げます通り、どうせ死ぬものですから、自分の恥ぢも何も愛する人にはさらけ出してしまうつもりですから。

一體、この手紙は――病床に在つて、大體の仕組みを考へ終はつた上で筆を執り出したのでございますが、先生――

わたくしは、もう、再び足のうらで艸を踏むことはできますまい。このままで死んでしまうのでございましよう、このまま―それが運命なら、あきらめるより外はございません。

昨夕、俄かにまた熱が出て、筆を中止致しました。が、けさの空氣は如何にも新鮮で、――下に玄關と病室とたツた二間しかない而もきたない家ではございますが、明けツ廣げて置いて貰ふと、裏の墓所の青々した樹木を通して朝日のかげがなつかしくさし込んで來ます。

自然は健全な者にも病人にも好き嫌ひなく親しんで來ますが、人間の薄情なことはます〳〵情けなく思はれます。きのふまでいい加減なお上手を云つてた二階の下宿人は二人とも申し合はせて、けさ外へ轉宿してしまひました。然しわたしには、もう、殆ど利害關係はありません。病氣で死ぬのも、饑えて死ぬのも結局は同じことでございましようから。

『病氣などになるのは犯罪人になるのも同前だ』と、あなた樣は曾ておツしやいました。これほど樂天的であり、また悲痛である言葉はまたとございますまい。一つには、これを以つてあなた樣はわたくしの常から病人らしいのをお励まし下すつたのだとも思ひ取りましたが、今日ではとう〳〵御意志に反してしまひました。わたくしは犯罪人も同樣です。常子さんの心配したところは却つてわたくしの病氣になりました――肺病！これでわたくしは現世限りの貴重ないのちを見す〳〵取られてしまうのでしよう。けれども、これが運命ならあきらめます。

　但し、あなた樣に對して、わたくしの云ひたいことだけは云はせて戴きます。どんなに長くなりましても、これだけは書き殘して置きたいのです。わたくしは彫刻家にならうとしましたのですが、途中から事情の爲めに小説家を志しました。そしてあなた樣に於いて最もよき師を發見致しました。この手紙が恐らく師によつて目ざめさせられたわたくしの發表すべき最初の、そして最後の創作であると思ひますので、わたくしは書けるだけ書いて行きます。あなたの最もお嫌ひなこの罪人の樣子でわ

たくしは再びお目にかかれようとは思つてをりませんので、たとへこの手紙は書き終つてもわたくしの死んだあとであなた樣へはお屆け致させます。若し今の人がこれを屆けて與れないやうなことがあらば、わたくしのたましひは全く浮ばれませんのでございます。

さて、申すことが隨分前後致しましたが――あなた樣は常子さんにはしよツちろお謹直でお通しなさいまして置きながら、わたくしに對してはさうでもいらツしやらなかつたです、わ、ね。無論女と見ると直ぐいやらしいことを云つたり、誘惑がましいことをしたりする他の男子らとは違つて、さすがに先生は、はたからお見受けしても、憎らしいほどやましいところの無い態度を持つていらツしやいます。でも、わたくしがあなたを愛してをります心もちはお分りになつたと見え、あなた樣もそれとなく（淸書者曰く、この通りの圏點が附いてある）條件をお持ち出しになりました。

『子供なんか人に遣つておしまひなさい』――ね、これがさうでございましたらう？或は丸で見當の違つたわたしばかりに取り込んだ想像があつたかも知れませんが、少くともわたくしにはさう受け取れました。

おぼえておいででもいらツしやいましよう、あの淺草の本願寺近處にわたくしが二階借りをしてをりました時分のこと、俄かおほ水が出まして、一ときの如きはその日の物を買ひに出るにも膝ぶしの上までも水につからねばならないのでした。それがやツと大體納まつた頃、あなた樣は見舞ひにお出

で下さいました。こんなことは過ぎ去つたことで、今更ら繰り返して申すも愚かなやうでございますが、わたくしにはこの世の末が近づいてるのですから、これを思へば思ふほど今殘つてるいのちが懷かしくなります。そしてこのいのちが過ぎ去つた思ひ出をもやわらかい絹蒲團にして――實際はごつごつしたうち返しの綿ぶとんにですが――心持ちよくくるまつてをります。

自分勝手ではございますが、あなた樣を目あてにしてこの手紙を書けるだけ書き殘すつもりですのでどうかお許しを願ひますが――あなた樣は兩方のおみ足をくるぶしの上までおぬらしになつて、おはき物を手にさげていらツしやいました。わたくしは思ひも寄らぬ嬉しさの餘りに、取り敢えずわたくしの手拭ひを持つて來ておみ足をふいておあげ申しました。

あなた樣のお出でを受けましたのは、あとにもさきにもあの時と、それから、この家へ一度いらツして下すつた時との二回でございます。この二回の間にあなたは奧さまをお換へになりました。尤も前の奧さまをお嫌ひになつていらしつたことはわたくしもあなた樣から直接に――初めてお訪ね下さいました時――お伺ひして存じましたのでございました。

『どうせ、若し別に心に合ふ人があつたら、今の妻には別れてしまうつもりです』と、あなた樣は笑ひながら、然しあなたのいつも通り極あツさりと申されました。

『どツかにありさうなものです、ね。』わたくしが斯うお答へした時にはわたくしの顏は恐らく眞ツ赤

になつてゐたでしよう。女と云ふものは、男のかたほど淡白に、綺麗に、而も正直に物を云ふことができないのでございましよう。どうしても弱みを見せます。すると、また、若しきたならしい男なら、直ぐそれに乘じて必らず無遠慮に突ツ込んで來ます。あなた樣がさうしたがつ〳〵したお方であつたら、わたくしはきツとその時に容易に落ちてしまつたかも知れません。けれども、あなた樣はさう云ふ機會をも與へて下さいませんでした。わたくしがあなたを師としてばかりでなく、男子としてもいまだに敬愛してをりますのはそこです。

わたくしは丁度、所在なさに、机に向つてあなた樣のお名を封筒にいろ〳〵に試みながら書き棄てをりました。その書き棄ての封筒が机の上にいくつも重なつたり、竝んだりしてゐますのを、わたくしはわざと取り隱すことをしませんでした。先生もそれを十分御覽になつてゐながら、憎らしいほど淡白に別なことをお語りになつてゐられました。わたくしはわたくしの心を先生にお見せするいい機會が突然できたと思ひましたのに、一向この事には少しも云ひ及んで下さいませんので、失望の餘りそれの取りかたづけを致し初めました。この時初めてあなた樣は特別に微笑しながら、

『それは何ですか』とおツしやいました。

『これですか』と、わたくしの心は再び熱して來ましたが、あなた樣の正しい淡白な御微笑に壓せられて斯うしか云へませんでした。『何かのおまじなひでしよう。』そしてそれを机の引き出しへ突ツ込んで

しまひました。實際、わたくしは自分の筆の念力が思ひも寄らず先生をお引き寄せしたやうに思はれましたのですが、あなた樣はそこまで酌み取つては下さいませんでした。或は行き屆いたあなた樣のことですから、酌み取つては下さいましたが、わたくしの方にあなた樣のお心を引き込むだけの資格がなかつたのかも知れません。わたくしは少しぢれた氣味になつて、どうせあたしなんぞにやア小說は書けないんでしようよ。』

『そりやア、無論、今までの樣子では駄目です、ね。小器用だが、うわツつらで。』

『女と云ふものがさうしたものではないでしようか？どうも――あたしは――先生のおツしやるやうな標準まで進めないやうな氣が致しますので、この頃書いて見ることは中止してゐますわ。』

『努力に堪へないんでしよう――？』

『そりやア――』

『堪へないんなら、斷念して、いッそのこと人の細君にでもなる、さ――ただの、ほんの、あり來たりの細君に。』

『それも、ね――この子がゐるんですから。』わたくしは脊中に、取つて二歲の子を絆纏でおんぶしてをりました。あの子の父には、もう、憎みこそあれ、未練などはございませんでしたが、あの子だけは――あとで死ぬとは思ひませんでしたから――自分のふしだらの結果とは申しながら、自分の現に

期望してゐても成り難いところの女藝術家に仕立ててやらうと考へてゐましたので。然しこんなことには先生から少しも御同情を持つて戴けませんでした。

『そんなけちくさい根性だから』と、おツしやいました、『あぶ蜂取らずになつてしまうのです。僕がその經驗をいやと云ふほどさせられて來たので云ふのだが、藝術を生活するには最も多くの割愛を要します――亭主をだツて、子をだツて。』

『そりやア、さうでもございましようが――子があつて見ると、あたしは――』意地にも斯う云つてしまはねばならぬ氣が致しました。

先生、あの時のわたくしが若し常子さんであつたら、あれほどあなた樣からわたくしの弱點を突ツつかれることはなかつたでしよう。尤も、かの女はまだ處女でした。わたくしには人に棄てられた經驗が、もう、二度までもありました。常子さんにあなた樣がお對しになつただけの尊敬をわたくしもあなた樣から待ち受けるのがこちらの無理でした。わたくしの不滿と申すのはそこでございます。ですから、不滿と申してもそれだけわたくしが自分の心をあなた樣から引き離さうとする爲めのではなく、寧ろ却つてあなた樣の方へ一層あまへて引かれてゐました證據であります。思ひ出としても、わたくしには樂しい懷かしいものでございます。

あの時どうして一人ばかりの子供を人に遣つてしまうと云ふ決心がわたくしに出なかつたのでしよ

ち？今日までもあれが生存してゐるなら、まだしも別な理由を附ければ附かないこともございませんでしようが、貧乏と營養不良との爲めに死んでましひました。そしてわたくしは思ふ人にはづれて、思はぬ人と三度目の結婚をして今日に至りました。

あなた樣も——子持ち女に對する爲めでもございましたらうが——餘りにあッさりしたおかけ合ひでした。わたくしに今一層進んで行くだけの熱心を與へて下さいませんでした。

『ぢやア、それまでのこと、さ。』斯うおッしやいましてから暫らく間を置いて、また別なお話に移りそれから、『どうです、どこかへつき合ひませんか——うまいおそばでも喰べに？』

『…………』わたくしはがらんどうのやうな二階の眞ン中へ立ちあがつて脊中の子をゆすつてをりました。そして心では直ぐにも御一緒にお伴致したかつたのでございますけれども、わたくしが子供をおんぶしてお伴してでも行けば、きッと先生の御品位に關すると考へました。着る物でもあればまだしもようございましたが、あのありさまでしたもの！わたくしの聲は訴へるやうになりました、『召しあがりたいのでしたら、ここへ取つてあげます、わ——わざ〳〵そとへお行きにならないでも。』

『それぢやア、別にたべたくもないが——』かうおッしやつてやがてお歸りになつたあとで、わたくしは俄かに悲しくなりました。先生に見棄てられた氣が致しました。

二『えッ、なぜ自分はこの子を薄情な男の方へ渡して置かなかつたのだらう！』そしてわたくしがたッ

た一人の身であつたら、きツとあなた樣と理解を以て御一緒になるお約束もできたのでしたらうに。

わたくしはあなた樣がわたくしの爲めに殘して下すつた一圓札をおかねとは見ず、あなたのお寫眞と見做してあれから二三日の間しツかり自分のふところに抱いておりました。が、三日目の晩に差し迫つた必要が生じて人手に渡してしまひました。

それからあとでも、なほ三四度はわたくしからお伺ひ致しましたが――

＊　　＊　　＊

先生、わたくしはこれを早く書いてしまはぬと運命に追ひつかれさうな氣が致します。けふは少し氣ぶんがようございますので、これを利用して急いで見ますが――

なほ三四度はその後もわたくしの方から二三ケ月置きにお尋ね致しまして、その都度わたくしの書いた物に對する御意見をお伺ひしましたが、いつも不出來で先生の御贊成を得ることができませんでした。これは少しもお恨みではございません、その都度先生の御親切なそして御遠慮な御批評によりまだわたくしの藝術家たり得ぬところを分らせて下すつたのですから。

そしてわたくしのその四度目の時には、あなた樣に新らしい奥さまができていらつしたのですから、奥さまに初めてお目見えするのだと云ふ好奇心と多少のねたましさとを持つてあがりました。ところが、奥さまにお目もじの最初から奥さまにいやなお顏を見せられ、二時間ばかりあなた樣のお話を伺

つて歸りがけの時には、また、
『そんなところでおしッこをさせては困りますよ。』と、奥さまからお叱りを受けました。わたくしもまことに無調法でした、お座敷の椽さきで子供におしッこをさせたのですもの。

その五六日後に、あなた樣がわたくしの方へ二度目の御訪問を――この家に――給はつた時に伺ひますと、奥さまの最初からの御不機嫌はわたくしの愚かしい不行き届きの爲めでした。わたくしは何の氣もなく致したことですが、持つて行つたおみやげの物を先づ奥さまと御挨拶した時に出さないで、先生のお顔を見てから出したのがいけなかつたのだと、あなた樣から直接に伺つて、初めて分りました。けれども、あなただけはそれにも拘らず少しも惡いお心持ちをわたくしに對して持つていらツしやらないのをわたくしは心で私かに感謝いたしました。

ただわたくしには不思議な御冷淡に見えましたことには、先生はこの時わたくしの子供のコの字もお口へお出しになりませんでした。數日前には奥さまの御不機嫌を增す原因ともなり、またそのずツと以前にはあなた樣とわたくしとの一緒になる約束の妨げともなつた子供が、わたくしと共にゐないのをお氣づきになれば、
『あの子はどうした』位のことはお口に出してもよかりさうなものだとわたくしには思へました。けれども、あなた樣はそんな物が初めからわたくしに無かつたかの如き御樣子でいらツしやいました。

先生は人の子のことなどにはお愛相一つおツしやらないお方です、わ、ね。尤も、御自分のお子ども衆をもおそばに置いてお置きにならぬのですから。

わたくしも自分の子に對するまだなま新らしい思ひ出の悲しみを押し隱して、わざといつまでも他の話でお相手を致してをりました。そしてちよツとでも、もうお尋ねになるか、もう、何とか云はれるかとお待ち受け致しましたが、一向そらとぼけたやうな御態度なのでわたくしは辛抱し切れなくなり、

『先生が人手に渡せとおツしやつた子供は、今回お寺へ渡してしまひました』と申しました。

『あまさんにするのですか？』

『いいえ、――死んでしまひました。』

『え！』先生がお驚きになつたのも御尤もです。最後に御覽になつたその三日後にかぜが近因でジフテリアになつて、息が絶えました。が、遠くからの原因にはわたくし共の貧乏がおもなものでした。

わたくしは俄かに隱し〳〵してゐた淚がはふり出ました。これを御覽になつたあなた樣もお目をしよぼつかせて少しうわ向きに橫を向かれました。そのお橫顔をちらと見まゐらせて、わたくしは私かに滿足いたしました。どうせわたくしには先生に對して以前のやうな野心を持つ資格がありませんでしたもの――その時から旣に生活上止むを得ずにですが、三度目の內緣の男があつて、一緒にこの小

い素人下宿をやつて來ました。

＊　　＊　　＊

わたくしは本當に人の妻になど成れるものではなかつたのです。ただ消極的にからだの置きどころを定める爲めに順々に、實は、餘り思はぬ人に就いて來ましたが――

こんなことを今の人が讀めば氣を惡くするでしようが、それも今一ときのことに過ぎないでしようー

どうせわたくしも近いうちに常子さんと子供とのあとを追ふのですもの。

それにも拘らず、今の人は、わたくしがいよ〳〵病み付いてからは、よく働いて吳れます。矢ツ張り文士志願の者ですが、わたくしと同樣まだお金にはなりませんのですから、毎日午前八時から、午後の四時まで、わたくしの周旋で泥人形などを練りに或おもちや製造所へ勤めてゐます。

その留守は、下宿人が逃げ出してからは、わたくし一人でゐます。こんな折りに――ただ一度でも――先生に遊びに來て戴ければ本望この上なしと申すのでしようが、人間の不健康をお嫌ひなあなた樣には、今のわたくしは例の犯罪人も同樣ですもの！わたくしは常子さんのやうに健康な身であなたを思ひ死するほど純潔な身でないのを遺憾に思ひます。せめてもそれをうち明けてあなた樣に書き殘すのがわたくしのこの手紙の目的でございます。

あまり道ぐさを喰ひ過ぎて書き出しの事件をおほかた忘れようと致しました。事件とはあの小說の原稿のことでございます。今回のも亦二つもあなた様の例のすげない批評が附いて送り返されるかも知れぬと思ひながらも、斯うした次第、少しでもお金にしたいのですから、恐る〳〵ではございましたが、お送り致して見たのでございます。さうすると、あなた様からは御返事があつて、一方の方は多少でも物になつてるから何とか紹介して見るとのことで、他方だけが郵送されて來ました。先生の御採用して下すつたのはわたくし自身にも氣に入つてた方ですから嬉しく思つてどこかへ出るのが待ち遠しかつたのでございます。

けれども、先生、出して戴いて見ると、これが爲めにあなた様をお恨みしなくちやならぬことになりました。どうせ詰らぬ原稿のことに付いてでございますからあなた様の御身分から申されたらどうでもいいではないか、少しでも金が取れたらとおツしやるかも知れません。が、初めてあなた様に公けの御紹介をして戴いた――そしてもう二度とはわたくしの今の狀態では書けぬ――原稿がこんなことになつたのかと思ひますと、わたくしとしては如何にも殘念でもあり、またあなた様にはお氣の毒だとも思はれます。けれども、わたくしはどう考へ直して見ましても、このままに致して置くことはできないのでございます。

匿名か何ぞであつたのなら、わたくしは何とも云ふ必要はございませんが、本名で以つて、表題の

もとに。
『藤井霜子』とある以上は、わたくしとしては自分一個の恥辱を感ずるばかりではなく、紹介者であらせられるあなた樣の恥辱にもなります。から申すには、無論、わたくしがあなた樣を今でも愛してをりますことが考へに入れてあります。わたくしの愛に對してあなた樣がどうお思ひになつてゐようと、それはわたくしにはかまひません。が、わたくしから見れば、自分が恥辱を受けるのは自分の愛する人にも恥辱となるわけでございます。

ああ、苦しい――ちよツと待つて頂戴――

＊　　＊　　＊

病氣と戰ひつつ死んで行くのです。然しこの苦戰、死戰の記念はこの床の上に腹這ひになつたり、横になつたりして書くこの手紙しかないと思ひますと、わたくしは戰場に於ける武士のおもちが致します。

先生は事情をお知りにならないで親切に爲されたことではございますが、これが爲めにわたくしは自分の一生の失敗、自分の唯一の遺恨を思ひ出させられて、再びその場にあるやうな憤激をおぼえました。わたくしの一度目の人がわたくしの妹に見換へたと云ふことだけには斯うした遺恨は無かつたでしよう。從つて、斯うした憤激も生じませんでしたらう。けれども、殆ど忘れかけてをりました

この憤激はあなた樣のお思ひ違ひの御紹介の爲めに再びわたくしの狹い胸によみ返つてまゐりました。これを自分自身で和らげる爲めにこそ愛するあなた樣への手紙を書いて見ようと思ひましたのですが、今、肝腎のことを書き出さうとした時に、またその激情がさし込みのやうになりましたので、暫らく筆を置いてゐましたのです。

少し落ちつきましたから——

どうかこの心をお汲み取り下さいまして、あなた樣の御親切に對するわたくしの無禮は前以つて幾重にもお許しを願つて置きます。

あなた樣が御知人の選者にわたくしの小說原稿を御紹介下さいまして、その月の一等賞に當てて下すつたのは、御親切の爲めでしたのは幾重にも存じてをります。けれども、あの原稿をお送り致しました時に添へて、手紙で申し上げたことをあなた樣はお忘れになつたか、御無頓着でいらしつたかなさいましたのでしよう。

『あの雜誌だけはわたくしに禁物ですから、お含みを』と、斯う特に申し上げて置きました。且、それには『ちよツとわけがございまして』とまで附け加へました筈です。

どうせ今そのわけを申し上げる程なら、あの時に寧ろ詳しく白狀した方がこんなことにもならず、これが爲めに(ほんの、わたくしの想像ではありますが)あなた樣の御機嫌を損ずるやうなこともなか

つたのでしよう。そこは重ね〴〵わたくしの手落ちだとは存じてをります。どうかその一部始終をお聽き取り下すつて、成る程お前の云ふことも尤もだと一言、わたくしの墓へ這入つたあとでお聽かせ下さいまし。

わたくしが〇〇美術學校に騷動を起して、校長や職員どもの進退問題にまで成り、その結果、連中と共に退校を命じられましたことは、いつかあなた樣にもお話し申し上げました。が、諸新聞にまで出たあの騷動の主動者はわたくし達と申しても、實はそのかげにわたくしの情夫（と、あからさまに申します、これがわたくし最初の内緣者でした）が働いてをりました。ところで、この人はその後わたくし達姉妹と共に同じ家を借りて住んでをりました間に、いつのまにかわたくしの妹にも關係が付きまして、段々とわたくしの前をも憚らず、殆ど公然のやうに、ふざけた眞似をして見せるのでした。

それのみか、妹が男を笠に着て、臺どころ仕事にまで姉をこき使はうとするやうになりました。わたくしの妹はわたくしよりもずツとづう〴〵しいのです。

で、わたくしはそれが爲めに、殆ど默つてではございますが、斷然と身を引くつもりになりました。姉の妹を取るやうな男はどうせ賴みにするには足りぬ。そして姉が妹と一人の男を競爭するでもないと思つたからでした。

でも、わたくしは初めての愛を奪はれたが爲めに隨分悲觀致しました。このあはれな敗北者――こ

の意久地なし！否、この不甲斐ない女！わたくしはまだ今ほどにはすれてをりませんでした。火の做かに消えたあとのやうに、わたくしの心の闇は一しほその寂しさを添へました。

わたくしだけが――自分から好んで――別室に休みながら、隣りの室の樣子が私かに聽える時などには、自分が所謂姦夫姦婦の枕を竝べてゐるところを一刀に切り殺す場面をまざ〳〵と心に浮べもして見ました。または、渠等の枕もとに嚴然と坐わつて、母の如く父の如く、じゆん〳〵と物の道理を說いて自分も手を切つた代りに渠等をもきツぱり別れさせてしまはうかとも考へました。そのあとではいつも聲を呑んで泣き入るばかりでしたが、たま〳〵嚙み占めた聲が思はず外へ漏れましても、渠等はただひツそり寢たふりをしてゐるだけで――わたくしの爲めには少しも光明を投げて來ませんでした。

『いツそ思ひ切つてあくたれ死をして、渠等に不吉な後悔をさせてやらうか！』別室に於ける最初の二三夜はかうした感じにうち勝たれてをりましたが、それにしてもその決心をするにはわたくしの心もからだも餘りにだらけ切つてをりました。あんな時には、恐らく、どんないやな男が這入つて來ても押し退ける力はわたくしになかつたでしようが、――然し、まア、こんなことに立ち入つて申すのは失禮でもあり、また女として遠慮すべきことでもありましよう。

わたくしは隣室を威嚇する爲めに自分の室だけに夜通し電氣をつけて置くことを發明致しました。

そして第三夜からは、どうせ寢ても眠られませんので、じツと光を見つめながら、夜更けにも机の前に坐わつたままで夜を明しました。

『そんなに意地を張らないで休んだらどうだい?』男は斯う聲をかけたこともありました。

『姉さんは強情だから、こちらもゆツくり眠られやせん――あかりが漏れて來て。』

無論、すべてふすま一つ向ふからの聲ばかりです。わたくしはちツとも返事はせず、時には、目に見えぬと云ふ神は斯うした風に寛大に、また奇麗に、あらゆる家の夫婦を夜每に見守つてゐるものだらうと思ふこともございました。かかる氣ぶんの時には、わたくしの考へはありがたい藝術にばかり向いてをりました。

『全く藝術に生きようか?』斯うは考へましても、わたくしにはまだそんな確信を與へてくれる人もございませんでした。若しあの時から先生を直接に知つてをりましたら、直ちにわたくしはその氣になつたでしようが――。

わたくしがかかる狀態に於いてやツと思ひ付けたのは、B氏の氣の毒な身の上でした。自分のあはれを忘れて、他人のそれを思ふのはうそ事のやうでもあり、不自然のやうでもありますが、弱い者の人情は他に同情して、自分をも慰め返して貰はうとするのが無意識に於ける手段なのでございましょう。

兼てその優しく哀れな詩を讀んでわたくしの心があこがれてをりましたB氏は、あなた樣の批評によりますと、わが國のクウパアに過ぎなかつたでしよう。然し渠がクウパアのやうに淺薄な感情詩人であつたことは、わたくしとしてはあとで分つたことでございました。わたくしは先生のあの御批評を何かの雜誌で拜見いたしました時は、もう渠に對する一生の遺恨を得てをりましたので、實に痛快に思ひました。わたくしが初めてあなた樣に接近しようと望んだのも、それを拜見してからのことでございます。

渠の眞價を餘りに高く見積つてをりましたわたくしは、渠がそれにも拘らず適當な配遇を得ず、青年血氣の時期を過ぎてもなほ獨身で寂しく暮し、その境遇にふさはしいあんな哀れな而も高尙な詩を作つてゐられるのは、全くその人のからだが不具な爲め、ひどい脊蟲で世間から殆ど相手にされない爲めだと思ひますと、――こんな場合とて、――わたくしは溜らなく兼ての懷かしさが緊張してまゐりました。どうせ斯う一たびすたり者になつた自分の身などは全く犧牲に供しても、あんな氣の毒な人の爲めには伴侶となつて一生を棒に振つてもいいと決心いたしました。

今から見ると、わたくしはまことにけち臭くも同情を以つて同情の報いを得ようとしたのです。安ツぽい同情を以つて安ツぽい同情を買はうとしたのです。尤もその裏には、『自分はどうなつてもかまやしない』と云ふ燒けツ鉢もございましたが――

わたくしの人がいつになく早く歸つて來たやうですから、中止します。この書き物は人のをります間は、數き蒲團の下に隱してあるのです。

＊　＊　＊

わたくしは自分では世にも高尚な考へだと思はれたところの物を胸に押し抱くが早いか、机の引き出しへはどこかへ行つて自殺したと渠等に思はせる簡單な書き置きを入れまして、その他に何の考へもなく私かに家をとび出し、兩國から汽車に乘つてしまひました。誰れ一人わたくしを引きとめに來るものがないのを、途中でも、隨分心もとなく思ひは致しましたが、それはやつて來よう筈がなかつたのです。わたくしは渠等に何とも云はないで出て來ましたのでございますから、ね。

『こちらばかりがいくら突き詰めた心持ちで行つたところで――？』さて、向ふの人がこちらを理解して吳れぬか、それとも多少の理解があつてもこちらほどに熱心もなく、潔白な心も無かつたら、どうだらうと云ふやうな考へがわたくしに起つてまゐりまして、自分はふと自分から世間の所謂押しつけ女房にでも來たと思はれるやうなことがありはしないかと云ふ氣がした時には、わたくしは、もう汽車の中にゐたのでございます。

三等客車の中には隨分人が多く乘つてをりました。わたくしは自分がやがて行くゝ搜索願ひのまとになる女であるやうには見せたくない爲めに、できるだけ努めてあたりを憚り、しほらしくして、きち

んと腰をかけ、兩の袖さきを兩の手で膝の上にのせて、下を向いてをりました。然し下をばかり向いてるのが息苦しくもなり、また却つて何か思案に餘ることでも持つてるやうに思はれさうでもあり致しますので、時々顏を上げて前の方を見たり、左右へ向いたりしました。が、それが自分にはどうしてもわざとらしくやつてるやうに思へますので、矢ツ張り、結局はその時の自然にまかせてもとの通りにして、息苦しいのを辛抱しました。若しあなた樣の如き深い觀察者がいらツしやつたら、きツとわたくしがどんなことを考へてた位のことは直ちにほぼ御推察ができたでございましよう。

　自分のいのちがどうなつてもかまはないと云ふやうな突き詰めた場合でしたが、わたくしは自分ながら不思議なほど衣物のことを氣に致しました。勿論、わたくしはその數日前から每日のやうに家を出ることを考へてたのでございますので、いつにでも出られるやうに朝起きた時から——どうせ食事の仕事などは手傳はなくなつてゐましたから——よそ行きに着かへてをりました。それがまたもツといい衣物にして來たらよかつたのにと云ふやうな後悔の念として浮んでまゐりました。

　先生、わたくしはこんなこまかいことから申し上げませんと、自分が滿足できないのでございます。まだ、わたくしの心持ちをよくあなた樣に分つて戴けないのです。若しこれが分つて戴けないでは、このわたくしの亂暴な抗議もただほんの亂暴に終つてしまふ恐れがあります。それではわたくしに取つてまことに遺憾の至りでございますから——

あの田園詩人の家は、先生も御存じでございましようが、市川にございます。わたくしが汽車をそこに降りてからは、汽車に乘つた時とは全く別な心持ちで、而も何となくおづ／＼して、田舍の道を歩きました。自分はどうなつてもかまやしないと云ふ燒けまじりの熱心などは、どこか、斯う、自分の心のずツと奥の方に引ッ込んでしまひまして、ただ目の前に近づいて來る目當ての百姓家と、そこの幾人ゐるかも知れぬ見ず知らずの家人と、その家人どもが實際には持て餘してゐるに相違ないところの一名の不具者とのことを思ひ浮べて、そぞろにわたくし自身の無謀で大膽な來訪を自分であざけりたくなつてをりました。

あなた樣を初めてお訪ね致しました時には常子さんの紹介がございまして、ずツと容易な心持ちで行けましたが、この時には紹介もなく、また一度もこれまでに會つたことも手紙を交換したこともなかつたのでした。

向ふが若し冷淡に出るならば、こちらもその時にはと云ふ用意に相應するだけの冷淡な樣子を見せて――然し內心ではまたどんな運命が自分に迫るかと、その顫えを聲にまで出して、――わたくしは不具者なる田園詩人の家に案內を乞ひました。ところが、生憎、渠は不在でした。そして、今に歸つて來るから待つてゐて呉れと家の人が申しますので、わたくしはそのまま主人のゐない書齋へ案內されました。相當な生活はしてゐる人だと兼て聞いてをりましたが、黒檀の机と云ひ、がらす張りの洋

風書棚と云ひ、座蒲團や敷き物と云ひ、われ〳〵の貧乏生活に見て來たやうなものではございませんでした。田舍風の古い大きな家屋敷には不釣り合ひな道具ばかりでした。

『これなら、あたし一人ぐらゐはどうしてでも置いて呉れよう。』こんなことを考へて私かにほほゑんで見るほど、わたくしは主人の歸りを待ちながら心が落ち付いて來ました。この落ち付きも渠よりさきに渠の書齋へ這入つたからのことでしよう。若し渠を玄關で直ぐ見たら、或はその思つたよりも見にくい姿にあきれて、わたくしはそこ〳〵に逃げて來たかも知れません。

家人が時々お茶を入れかへに來て呉れるのにわたくしはその度毎に挨拶しながら、手もち不沙汰に銘仙の衣物の膝にふき出た綿や袖のさきをつまんで見たりしてゐました。

待つ間は隨分長うございましたので、冬の初めの日は早く暮れて、東京在住者には一と昔以前ほど珍らしい空氣ランプがつきました。渠が歸宅したのはそれからでした。

この會見の順序は少し前後致しますが、わたくしが今でも滑稽な爲めによくおぼえてなりますところによると、渠はその不具な姿に似合はず如何にも鹿爪らしい樣子で而も鹿爪らしい質問を發しました。

『お若い婦人でわたくしのやうな者のところへ尋ねて來て下さつたのは、定めし、わたくしの詩に就いて何かお考へがあつて――？』

『はい――』と、つい、わたくしは口に出してしまひましたが、實は、――

先生、心ばかりは緊張して來ても、わたくしの病氣が許しません――この手！このからだ！

ああ（淸書者曰く、半ぴらの原稿三行まで來て、かの女がその餘白へペンを燒けにがり〳〵と書き投ぐつたあとがついてゐる。）

＊　　＊　　＊

（淸書者曰く、ページが改まつて）

實は、わたくし自身にも分らなかつたほどの混亂と失望とが自分の心に溢れてをりました。

先生、あなた樣はいつぞやわたくしのことを――何のそツけもなく、然しお正直に――斯う申されたのをわたくしは忘れも致しません。

『あなたは美人は美人だが、顏いろが餘りに眞ツ靑で見ツともない』と。

『そりやア、苦勞が絕えませんのですもの』と、わたくしはあまへるやうにお答へ致しました。

『苦勞ツて、好きで勝手にしてゐるんぢやアないか？第一の男にだツて、第二のにだツて？』

『でも、苦勞は苦勞ですから。』

『然し、貧乏づかれの苦勞は不注意から生ずるのだ。生活もまだ碌にできる見込みもない癖に、男でも女でも直ぐくツつき合つてしまふから。』

『………』なんて露骨なおツしやりかただらうと思ひました。この時、然し、よく考へて見ますと、わたくしがあなた樣に初めてお會ひした時は身持ちでございました。七ケ月の大きなおなかをかかへて、あなた樣のところへ何か仕事を與へて戴きにまゐりました。あなた樣は御友達の經營してゐられる〇〇社へ御紹介狀をつけて下すつたのですが、別にわたくしの得るところはございませんでした。そしてわたくしはおなかの子供の父――第二の男です――とは、實は、既に別れてをりましたのでございます。このことはこの時あなた樣へうち明けませんでした。けれども、わたくしの弱點を十分に突かれたやうにわたくしの身にこたへました。ただ先生が決して道學者的な敎訓をわたくしに與へたのではないことだけが分つてをりましたのを賴みにして、『あたしは弱いのです、わ、ね』とお返事申し上げました。

『うん、さう、さ』と先生はおツしやいました。『たとへできて行くことは仕かたがないとしたところで、あたら持つて生れたからだを自分から見ツともなくするのは以後注意するがいい、ね――自分の損だ、自分の甲斐性なしだ。』

『さうです、ね。』それからと云ふもの、わたくしは鏡に向ふ度毎に先生の所謂直ツ青ばかりが氣になりました。そしてこれさへ直せば、いつかわたくしを値段高く買つてくれる人がありさうに思へました。わたくしにはその人とはあなた樣であるやうな氣も致しまして、自分の生れた子と自分との貧乏

生活に、と云ふよりも貧乏辛抱に、希望の光を與へられてゐたこともございます。
その間にはいろんなことがございまして——いつぞやもお話致したとおぼえてますが、この人ならきたならしい野心を持たずにわたくし達を少しは補助して呉れるだらうと思はれた叔父やいとこでも、
『ぢやア、いつ〳〵來て呉れ』と云ふので行つて見ると、その相談とは相變らず、露骨に申せば、『めかけになれ』でしよう。そんなことなら、いツそのこと少しでも自分が好きな男と一緒となつた方がましだと云ふ憤慨になつてしまうぢやアございませんか？
如何に貧乏しても、十圓や二十圓の爲めに人のおもちやになるほどなら、自分で自分をおもちやにした方がどれだけましだか知れませんでした。その代り、わたくしの眞ツ青は——とう〳〵如何に注意してゐても——直らないで、この病みつきの原因となつてしまひました。わたくしはこれで死ぬのです。
女の顔の青いのは淫亂の相だとも申します。わたくしの經歷を思ひめぐらして見ますと、或はさうであつたかも知れません。然しこの不具詩人と相對して坐わつてをりました時に限つては、少しもみだらな考へがなかつたのです。その時のわたくしの顔いろは、きツと——きツと矢張り、不斷の青さめを一層濃く反映してゐただらうと思はれます。わたくしはあなたがたに比べては斯くも無學な癖に

ちよツとしたことにでも直ぐ顔いろがかわるほど神經が過敏なんでございますが、そのおもなる起原は自分の男を妹に取られたことにあります。して見ると、よそへ出て最も青い顔をしたのはこれが初めてだらうと思はれますが、決して淫亂の心などは動きませんでした。否、そんな心持ちを抱くには餘りに失望の狀態でございました。

わたくしが渠に對して第一にいや氣がさしたのは、渠の豫想外に見にくい姿の爲めでしたけれども、また渠がさう大して六ケしくもない詩ばかりを作つてゐながら、――そこがあなた樣の適切な御批評にもなつたのでございましようが、――さも深刻で難解な作をでもしてゐるかのやうに身づから氣取つて、わたくしから崇拜的ないろんな質問をでも待ち受けてるやうなありさまのをかしさが、わたくしの心を全く渠から引き離してしまひました。

わたくしが渠に同情したのは、意味の深い作をする詩人だからでもありませんでした。また、いい詩を自分も作らうとしてお弟子になるつもりでもありませんでした。不幸な星なる運命のもとに生れ身を詩の世界に――淺薄と深刻とを問はず――ゆだねて、物の哀れを歌つてゐるそのこころ根を高尚でもあり氣の毒でもあるとして、わたくしも一緒にわたくしの不幸を泣いて見たいと思つたのでございます。

けれども、渠はからだも心も餘りに見にくうございました。脊中が圓く曲つてますので、脊が低く

なつてるのは止むを得ないのでしよう。圓く曲つてる爲めに歩きにくいのもまだしもでしよう。が、坐わつてからの鹿爪らしさに似合はず、渠が初めて出て來た時には、主客があべこべになつたやうに、こちらよりも向ふの方が待ちかまへてゐた人を得たかの如く、如何にもあわただしく殆ど四足獸が急いで這ふありさまで、おのれの席に進みました。兩手を幾度も疊の上に突いて、――これは挨拶の爲めではありません、歩行の代りですよ――やツとその机の前の坐蒲團のあるところへ達しました。そして初對面の挨拶の時から、渠の野生的な眼は獸のそれのやうに卑しいまた險しい光を發してをりました。

如何にわたくしだツて、堪へ切れませんでした。もう、何も云ふまい、そして直ぐ引き取らうと思ひました。先生、わたくしがこの時例の眞ツ青になつたとしても、決して無理ではないでございましよう。わたくしがわたくし共の家――と申しても、わたくしだけがのけ者になつた家――を出た時に、簡單な書き置きをして來たと申して置きましたでしよう。で、わたくしがこのまま直ぐ詩人の宅から引き取りましたら、無論、渠の方には事がなかつたのです。そしてわたくしもその歸り途で、どこかの池なり溝なりかに、ただ不埒な男と妹とに對する恨みだけを抱いて寧ろ素直におぼれてゐたかも分りません。

そんな心持ちをもすべて渠にうち明けて、お互ひに奇麗な同情的な同居を乞ひ、若し氣が合へば一

緒になつてもいいと云ふのが、わたくしの最初の目的でしたが、たわいのない夢がさめたやうにわたくしの心は固くなつてをりました。

『お顏の色が大變惡いやうですが、御氣ぶんでもよくないのではございませんか』と、渠は親切さうに申しました。

『別に――どうも――』わたくしは下をばかり向いてをりました。

ここを出てどうしようと云ふことにばかりわたくしの考へが向きがちで、いい加減に、またうツかりと――向ふの野生を押さへたやうな言葉を受け流してゐるうちに、食事が出たのでした。渠はよそで既に濟ませて來たのを、わざとそれとなく、わたくしにつき合つてるやうでした。わたくしも箸をつけるのが自分をけがすやうで、可なり長く控へてゐましたのですが、あまりに勸められるので、申しわけに箸をちよツと手に取つたり、置いたりして、いとまを告げる折を窺つてをりました。

渠は然し、もう占めたと云ふやうな安易な心持ちになつたのでしよう、わたくしが『はい』と答へたその質問とかを一つだツて渠に向けもしないのを少しもあやしまない樣子で、渠自身のことばかり滔々としやべりました。自身の詩に對する態度――自身の詩の辯明――それに關する、他の詩人並に批評家等（これに先生のお名も眞ツ向に出ました）の評の惡口――何しろ、その話が正しいにせよ、間違つてゐるにせよ、熱心なのは感服でした。そしてそのあひま、あひまに例の獸のやうな眼を隱忍

に光らせて、その癖、その聲は何等の確信もないかの如く顫えて、わたくしの身の上のことを尋ねるのです、

『あなたは御獨身でしよう――?』

『………』

『さうでなければ、お獨りでこんなところまでは出て來られますまい?』

『………』わたくしは返事をする氣もなかつたのですが、――

先生、一段落が附いてしまうと、どうしたものか、わたくしはその度毎に一たび書く氣力がなくなるのがこの頃の習慣のやうでございます。隨分がツかり致しました。けれども、けふは割りに書けた方ですよ。若しこれを早く書き上げてしまへましたら、またいつものやうに郵便で送ります。ただわたくし自身ではいつものやうに御意見を伺ひに上ることができません。これをお讀みになつて、若しお氣が向いたら、一度いらしつて下さいませんか――わたくしに最後の水を戴かせて下さるおつもりで?

あア、生きたい!生きたい!

『………』わたくしは返事をする氣もなかつたのですが、事實上では、この數日前から全くの獨身だと云ふ手頼りない心持ちが、わたくしのどこかに現はれたのでしよう。渠はそれを見て取つて、

『わたくしも御覽の通りのあはれな獨り者です』と申しました。若しこれがあなた樣なら、冗談にも男らしく、どうです、一つ僕と一緒になりませんか位のことは、はツきりとおツしやつたでしよう。然し渠が初めて見た女の心を取り込まうとして、自分にあはれなどと形容詞を附け加へたのが、如何にも卑怯であり、如何にも野鄙であると受け取れました。

それに比べると、姉を妹に乘り換へた男の方がどれだけ男らしいか知れない。姉を出し拔いた妹も憎いけれども、妹を取つた男が一層憎かつたのです。わたくしの實驗で申しますと、女に憎まれる程の男は一方の勝利者でございます。全體、戀とか愛とか云ふものを人に捧げるのは自分の敗北を承知した上のことです。男子から申せば、恐らく、女子をうち破り、うち碎くことでありましよう。男のそれをほんとうに素直に受けてる間こそ眞の女です。

先生、わたくしを理屈屋とおぼし召してはいけませんよ。わたくしの度々敗れた經驗が斯うした理屈をよそほはせるに過ぎないのでございますから。女の憎しみには一層深い愛と尊敬とが伴ひます。けれども、この詩人に對するわたくしの憎みは全く愛や尊敬ではございません。憎みの爲めの憎みです。否、輕蔑の爲めの憎み――

『手紙を以つていろ〳〵に慰めて吳れる婦人の投書家は多いが、あなたのやうに實際に尋ねて下さつたのは初めてです。』

『………』これはうそでした。わたくしの前にも一人、わたくしよりも見にくい女が尋ねて行つてひどい目に會つたのがあると、わたくしはあとで或人から聽きました。わたくしはそんなことを夢にも存じませんでしたので、無論、向ふをも慰めてやるつもりでした。ところが、向ふから何だか斯う先きに立つてあはれを訴へたり、慰藉を要求したりされて見ると、こちらの方が寧ろ強者であるかのやうに感じられて來ました。この點はわたくしにも不思議でございますが、向ふがあはれを訴へたり、慰藉を要求したりする權利でもあるかの如き態度に見えてまゐりますと、わたくしの方が寧ろ自分こそ慰藉を求めに來たのだと云つてやりたくなつて、――斯う消極的にですが、心で反抗する意地が出ただけわたくしが強者のやうな氣持ちを得ました。

　そしていい加減にいとまを告げようとその折を窺つてましたけれども、渠はなか〳〵そのすきを與へて吳れず、面白くもない自慢ばなしをつづけたり、またはぐずり〳〵と箸を運ばせて見たりして――それが徒らに時間を延ばす手であつたことは、わたくしにやツとあとで分つたのでございます。思へば渠がわたくしを日が暮れるまで待たせたのもそれが爲めで、或はもツと早く歸宅してゐながら、わざと出てこなかつたのかも分りません。（淸書者曰く、こ〳〵皮肉な推測は、さきの『あわただしく』出て來たと云ふ情景と矛盾してゐるやうである。）

　東京にゐるのと同じつもりで。まだ時間が早からうと思つてましたところを、

『もう、汽車も——どうせ——ございませんから』と云はれた時には、

『しまつた！』と云ふ悔いばかりがわたくしの胸に溢れました。汽車を下りる時直ぐ、今度の列車の若しくは最終列車の上り時間を見て置いたらよかつたのにと、渠を待つてる間にも思ひ惱んでたのでございますが、話のあひまにこれを渠に聽かうとしても、

『まア、よろしいでしよう』とばかり、直ぐ話をつゞけました。

時計の鳴る音をどこからか聽かうとして幾度も耳を澄ましてゐたのですけれども、なぜそれを聽きそくなつてゐたのでしよう——否、なぜわたくしは時間が分らなかつたのでしよう——否、否、時間や渠の話に頓着なく、なぜ直ぐにそこを押し切つて出て來なかつたのでしよう——？

わたくしの持つてゐます世の惱みがすべてこの一點に集中したほど、わたくしはこころ苦しい當惑と不愉快とを感じました。

家族の人々とはかけ隔つたただだツ廣い、親しみの出ぬ、田舍じみた十疊かの座敷にわたくしの休むべき床を取られて、わたくしはその上に獨りで手を胸に當てて、着て來た衣物のまま坐わつてをりました。

すると、

『今ごろは、また——』

先生、わたくしを妹に乗り換へた男とわたくしの妹とに對するわたくしの堪へがたかつた實際的妄念などは、もう、ここで云ふことをやめましよう。けれども、この時起つた種々な妄念のなかに、わたくしがその男と初めて關係がついた時のことがあつたのだけは、わたくしの弱い性格若しくは不心得の事實として、申し上げて置きます。わたくしは渠を好いてましたが爲めに、つい、無理じいに關係させられる餘地を渠に與へてしまつたのです。これは、實に今思つても殘念でもあり、またあまい夢でもあります。

それとこれとは、然し、同じく人を待ち受けるにしても、丸で嬉しさと恐ろしさとの違ひがございました。書齋に於ける時の渠のいやな樣子を思ひ返して見ますと、どうもこの夜、心を許して眠ることができないやうに思はれました。

先生、一たび經驗を持つた女には帶と云ふものがすべての秘密の鍵であります。この鍵をわたくしはこの場合思ひ出したくなかつたのです。

床を取つて呉れた女中らしい人が枕もとへ置き殘した行燈と云ふ物が、如何にもうす暗い光を紙越しに照らしてをりました。今どきでは場ずゑの安遊廓へでも行かなければ見ることができぬと、よく殿がたがおツしやるところの物のそばに置かれたわたくしです。

『若しあたしをこれにふさはしい女と見くびつてるのなら――』わたくしはこのおそろしさに對する

覺悟を定めてをりました。『人を――馬鹿に！』

きちんと端坐した膝の上にしツかりと兩手を置いて、わたくしは自分のからだに血の氣がなくなつたほどの寒けをおぼえました。

少し遠くへすさつたやうに見える行燈の、うすい火かげをじツと見詰めてをりますと、われ知らず男の笑つてる顏が現はれてまゐりました――妹に取られた男のです。わたくしはちよツと自分の顏をそむけましたが、物好きにまたその方を向いて見ると、もう、ゐませんでした。そして泣きたいやうな寂しさと恨みとが一緒になつて胸の中に湧いてまゐりました。

『美貌の點に於いてよく釣り合つてます、わ、ね』と、冷かし半分に或友達から云はれた仲が妹の爲めにうち毀わされたのであります。いツそのこと、その反對に極端に出て、最も不釣り合ひの結婚をしてやらうか？さうすれば、あの不埒な男も少しはわたくしを臺なしにしてしまつて惜しかつたと殘念がつて吳れるだらう。それが迫めてもの復讐――

『あの獸の眼！』いつのまにか脊蟲の人の顏に入れ換つてをりました。『かまはないからいらツしやいよ』と云ふやうな氣持ちをわれながらぎよツとしました。矢ツ張り、ここをさして東京を出た時の目的がまた心の奧に物を云つてたのでしよう。そしてそれが渠を飛んでもなく買ひかぶつてたのだと分つたこの場合にも、わたくしの燒けの結果は自殺の代りに惜しいこの身を獸の餌ばになつてやらうか

とも一度は考へ及びましたのを、先生、ここに白状致します。
『これではならぬ』と思つた時には、わたくしは兩方の手を兩方の袖の下から兩方の二の腕に組みかはして、自分のかき亂れた胸を押し抱いてをりました。ところが、その手が電氣に觸れたやうに突然ほどけました。

人の氣はひがしたのです。果して、わたくしの前から直覺し、豫期してをりました通り、渠がやつてまゐりました。

『あなたはまだ』と、こと更らに低い、喉だけから出た聲で、『お休みになりませんか？』

『はい――』わたくしは、またつい斯う云つてしまつて、その方を見張つてた目を下に向けました。わたくしの兩手はきちんと膝の上に乘つてました。そして渠に對する輕蔑と恐怖とがこも〲わたくしの心を急がしく往復しました。

『それでは――』

『…………』

『どうです――』

『…………』

『一緒に詩を語つて夜明しをしましようか？』この長い句は、さきの短いのを口ごもつて云つたのと

は反對に、餘りに早口で云はれました。なほ投げ出すやうに、『どうせわたしも眠れませんから。』

『どうぞお引き取り下さい』と、わたくしはあわててゐたままに最初から結論を云つてしまひました。而もそれが如何にも強く、きツぱりと自分の耳にも響きましたので、そのあとを取りつくろふつもりで、『では、わたくしも休ませて戴きます。』

『さう云はないで――僕はあなたの爲めに眠られないのですから。』

『………』目をちよツと休める間に、わたくしは渠を氣の毒だとも可愛いとも思はれました。けれども、眼を見張ると、矢ツ張り渠は毒々しい男でした。わたくしの燒けか物好きかの心は自分で自分を切破つまつたさかひ目に置いて、はツきりと二つに分れました。いツそのこと――？いや、なか〱――。そして俄かに決心が付かぬだけ、わたくしは渠から遠ざかつてをりました。

渠の動悸が渠の寢卷きのおもてへも出て、肩までが息をしてゐるやうに見えたのに氣が付くと、わたくし自身の呼吸もます〱苦しくなつたのをおぼえました。暫らくはどちらも無言でしたが、『さう云はないで、あなた、僕の心を推察して下さい』と云つて、渠がすり寄つて來た時には、わたくしの耳は全く取りのぼせてをりました。

＊　＊　＊

先生、わたくしは幸ひにけもの（清書者曰く、この通り圏點を打つてある）の難を免れて、そこを逃げ出

したのでございますが、逃げ出すまでには隨分おそろしい心配を致しました。いやなこと葉を耳にしました。

『あなたは人並みすぐれた美人です。僕のやうな者が野心を持つのは僭越でしよう』なんて、ね、先生、まア、お聽き下さい。『然し――然し、あなた、――察して下さい、尋ねて來て呉れるだけの婦人さへ一人もない僕の寂しさを！』

『………』わたくしは突然取られた手を力強くふり拂ひました。それから五六分の間の出來事は遠慮して申しますまい。兎に角、わたくしに『無禮なことを！』と叱り付ける餘地ができました。そしてその聲が餘りに女ながらに大きかつたので、渠は家人どもの方を憚つてか僅かに亂暴をやめました。

『わたくしの間違ひでした。お許し下さい。つい、あなたの御親切にあまへ込みました。惡く思はないで下さい。わたしはあやまります』などと、立てつゞけに云つてゐましたツけ。

『………』わたくしはわざとにも端然として返事一つ申しませんでした。

『では、明日――いづれ、改めて――尋常な手段であなたのお心を伺つて見たいのですから、どうか今のことは惡く思はないで、許して下さい。――では、お休みなさい』と云つて、渠がまた這ひつゝ丸で毛だ物のやうにして室を出て行くのが、わたくしの、横を見すゑた眼のひとみに映りました。そして渠がふすまを外から靜かに締める時に、わたくしがちらとその方を見やりましたら、わたくしの

不愉快を一層增さしめたことには、渠のいやな眼とぱッたり出ッくわしました。

氣が付くと、わたくしのちやんと坐わつてる膝のあたりの裾が少し裏返しになつて、下に卷いてる物の端が不思議さうに顏を出してゐました。今から考へればこそ、

『この子は、まア』とでも云つてその膝がしらを叩いてやつたらなどと冗談を云つて見たいのですが、それを『あんな奴に見られたのか』と思ふと、耻かしいよりも寧ろ損をしたと云ふ感じになりました。立ち上つて、めくれた裾を直し、また坐わつてから、心も亂れてゐたのを暫らく押し靜め、押し靜め致しました。

四時を打つのが聽えました。まさか、ここへ渠が二度とは出て來られなかつたでしようが、わたくしは夜の明け離れるのを待つてはゐられませんでした。そツと椽がはに出て雨戶を一枚さぐり明けて見ますと、自分が前日に通つたおぼえのある前庭の中央に大きな柳の木が寒さうに枝を四方に垂れて立つてゐました。百姓家にありがちな藁家根の廣い玄關からずツとこちらまで雨戶が竝んで締つてゐて、自分が今姿を現はしたところは鍵なりに曲つた建て物のはづれでありました。

まだあり明けには早い空のうすら光を受けて、椽さきに女の不斷ばきらしい下駄がぬき棄ててございました。まさか、はだしでは行けないのでしたから、それを天の與へと下り穿いて、成るべく音を立てないやうに逃げ出しました。

若し幽靈と云ふ物があらば、このやうにからだの輕いものかと思はれるほど、田圃道をわたくしの身は夜明け前のすツとする空氣の上に乘つてをりました。が、二三夜のつゞけざまの睡眠不足の爲めでございましよう、わたくしのあたまは歩きながら氣が遠くなるばかりにふら〳〵致しました。

それにも拘らず、わたくしが一心に尋ねてゐたのは大きな池か狹い深い井戸かをでございました。先生は恐らく何の爲めだとおッしやいましようが、わたくしには、もう死ぬより外に道はないと思へたのでございます。取りも直さず、實際には、もう、わたくしに東京と云ふ大きな都會もなくなつてゐたのでございます。そしてわたくしが精神的に若しくは藝術的に、もう、こればかりと定めたことは幻滅と失望とに終りました。わたくしに痩せ我慢の意地より外に何が殘つてゐたとおぼし召します？その意地がわたくしに

『死ね』と命令してゐたのです。否、『死んでやれ』と、わたくしをふて腐れさせてゐたのですが、生憎、池も井戸もわたくしの急ぐ道に見つかりませんでした。そのうちに、わたくしは――きのふ、おぼえあるその道路ばかりを通つてをりましたので――もとの停車場へ着きました。

その待合室で溜らなくねむたいのをうと〳〵してゐますと、おほ仕かけの音をたてて追ツ手がわたくしを取り巻きに來たのに驚いて目をさましました。それは丁度最初ののぼり列車が來たのでした。急いで切符を買ひ、わたくしはこれに飛び乘りました。そして何の爲めにまた東京の方へ運ばれるの

か殆ど自分でも分りませんでしたが、或友達のところへまゐりまして何も云はず午前から床に這入らせて貰ひました。

先生。わたくしは藥のところで藥の爲めに押し倒されたのです。それをわたくしが自分のかよわい力一杯を出してはねのけたりした爲めでございましよう、わたくしのからだは、最初の男と初めて家を持つた日の翌日よりもずツと／＼がツかり疲れてをりました。その癖、わたくしの手や足はこぶができたやうに至るところに凝りを持つてました。わたくしはこの友達の家で四五日間はこのくた／＼になつた心とからだとを靜養させて貰ひました。そしてこの間に、わたくしの想像で頻りに最も痛快に思はれましたのは、市川に殘して來たわたくしの駒下駄を今ごろは藥がその書齋にこツそり喰はへ込んでぺろ／＼嘗めてゐるだらうと云ふことをでした。

そしてわたくしのひどい厭世心は段々と薄らいで行つて、また別な戀を生じました。死んだ子供の父がそれで、わたくしが暫らく世話になつたこの友達の家の兄でした。然し、先生、このまた薄情な人のことを語るのはこの手紙の目的ではございません。わたくしの經驗に於ける最も詩的な、そして最もひどい幻滅に終つた事件を斯う申し上げた以上は、もう、第二、第三の男のことなどは驅け拔けて、わたくしは寧ろ先生に對する今のわたくしの清い戀だけを語つてゐたいのでございます。

けれども、先生、今一つこの手紙に肝腎なことをお聽き下さい。

『僕は詩と小品文との選者ですから、その方で度々一等賞を與へて早くあなたの名を文壇に出すやうにしてあげます』と云ふくどき言葉が、あの獸詩人、僞善詩人、野鄙な情實選者の口から出たのでした。何たる卑劣な言葉でしよう！わたくしは、その瞬間から、あんな雜誌などに投書や寄稿をするものかと云ふ決心を致しましたのです。そして別方面から出發して、いつかは女流小說家として名を擧げ、あいつ等のうそつき高慢ちきの鼻を明かしてやらう、と。

先生、わたくしがあなた樣に心を傾けるやうになつたそも〳〵は、實は、それが爲めでした。そしてあなたの實際に高い御標準に失望したり、奮發したりして、わたしは今日までも筆一つの爲めに苦しんで來ました。けれども、今のあり樣では、もう、萬事終はるになつてしまひましよう。

*　　*　　*

わたくしは先生の精神的お弟子になつて、また精神的な同居者となつて、短い一生を藝術の爲めに生きたい。わたくしが今生きたいのはただそれが爲めでございます。けれども、わたくしの急性を帶びたこの病氣は恐らくけふあすが計りかねます。今のありさまではこの手紙を書き終はるだけのいのちがあれば結構なのでございます。

それにしても最も殘念なことには、わたくしがほんの眼前の生活の爲めに――但し、まだこの病氣が分らなかつた以前に――下手な原稿を無理にあなた樣に御依賴して、少しでもよろしいからお金に

して下さいと申しました。それであなた樣はわたくしの文壇的紹介よりもただお金になることを努めて下さいました。そして、

『〇〇雜誌だけはわたくしに禁物ですから』と云ふ、わたくしの意地に取つては最も大切な斷はり書きまでを無視しておしまひになりました。渠を選者の一人に揭げるあんな雜誌でわたくしの作が一等賞になるよりも、寧ろ沒書された方がよかつたのでございます。

あなた樣の御親切には反くやうでございますが、どうか一刻も早くあれを取り消して戴きたいのです。三圓や四圓の金にはわたくしのこの意地は――

（淸書者曰く、この後は續けられなかつた。そしてこの形見が所謂『先生』の手もとに着したのは、かの女の死後だ）

――（大正六年六月）――

指の傷

藤枝は官吏の子であつたけれども、子供の時から土いぢりが好きで、とう〳〵農科大學へ入れて貰つて、そこを卒業すると間もなくこの農園の培養主任になつた。

『あんなハイカラさんが來て』と云ふやうなかけ口を初めの程は皆に云はれたが、目したのもの等と同じやうになつて鍬でも何でも持つて働くので、ここの部長には勿論、同僚どもにも評判が惡い方ではなかつた。ただ渠の惡い癖と見えたのは、寒い時でも朝起きるとシヤボンで顏を洗ひ、水にしめした頭髪を綺麗に分けてチツクの光でてか〳〵させることだ。

『どうせ、君、おれ達の仕事はいちんち手足をよごすのぢやアないか？』部長がからかひ半分に云つても、渠は眞面目くさつて、

『然し、せめてよごれないところをでも清潔にして置かんと氣がすまん。』

『藤枝は神經家だから、なア。』部長は皆のものを代表してあざ笑ふかのやうに云ひ添へた。『おい、うちのハイカラ』とか、『こら、色をとこ』とか呼ばれても、まだ若い渠には私かに嬉しく感じこそすれ、

いやな氣はしなかつた。が『神經家』と云はれるのは——自分でも知つてる弱點だけに——いつもいやで、いやでたまらないのである。われとわれからそれが爲めに氣が塞いで、一日仕事を休んで、寢床にもぐり込んでることも二度や三度ではなかつた。

『どうも氣ぶんが惡うてけふは働けません。』

と、おもて向きはその度毎に同じことを部長まで申し出るのだが、惡い氣ぶんの原因は人に云はれぬほど馬鹿々々しい性質のものであるのだ。

『またハイカラさんのなまけ病か』と、部長はこちらへも聽えよがしに他のもの等へ告げたこともある。

『決してなまけるのではありません——實際、僕は——僕は——』こんな時は自分でも泣きたくなるほど眞面目であつた。そして『何と云ふ詰らない自分だらう』とあせるばかりで、ます〳〵手も足も出せなくなるのである。

土がこはいのである。十何年來いぢくつて來た土がおそろしいのだ。土の中から刃物が出て、自分の足を切り、自分のいのちを取るのが、心配で心配でたまらない。

かうした感じは中學にゐた時にも、また大學にゐた時にも起らないではなかつた。が、自分がまだ無責任の身であつたので、かかる感じに伴ふ議論をただ多くの哲學じみた青年どもの所謂人生觀とし

てばかり取り扱つてゐた。そして土いぢり專門の同學生どもからは『いやにハイカつたことを云ふ男』と云はれてゐた。ところで、初めてこの農園に勤めることになり、多少の責任ある身となつてからは、この感じが自分自身としてどうしてもうッちやつて置けないほど密接になつて來たと云はうか、身を切られるやうに痛々しくて、地上に鍬を以つて立つてゐるのさへたまらなくなつたことも度々である。そこへ持つて來て、また、最近に、ダリヤの床をこしらへてやる爲め園内の一部を掘りやはらげてゐる時、一人の美しい女の子の顏を掘り起してから、一層甚だしくなつた。

渠は自分にはそれが氣まぐれの戀を得たのであつたけれども、仲間へさうとは報告しなかつた。で、仲間の一人が云つた、

『しやりかうべか何ぞなら知らんこと――一體、人間の顏が土から出て來る筈があるもんかい？』

『そりや、ない、さ』と、自分ばかりが話せる者の如く少し向ふを侮蔑して、『物質的には、な。』

『然し、云ひかたが既に物質的ぢやないか？』

『どうしてよ？』渠は自分が仲間どもよりも多少深い考へや記憶を持つてると思つてゐる。寒中に園内の一隅へ鍬を入れたら、小い蛇がとぐろを卷いて冬眠してゐるのを掘り出した。また、或時は、誰れかの植ゑ忘れたヒヤシンスの球根を發見したところ、自分の刄さきがその球を兩斷して、折角綺麗

たみとりの芽が少し出てゐるのを臺なしにした。斯う云ふことは他のもの等にはその折々の當り前のことであらうけれども、渠自身には物のいのちの發見や妨害であつた。そして自分のいのちもその場で初めて發見されたり、兩斷されたりするかの如く思へた。つまり、刄物が逆に自分の足のしたから出て、自分の全身に行き渡つてるいのちを兩斷するやうに思へた。

それには、自分の子供の時の一失敗が自分の意識と共に段々發達して來たのであることは、よく分つてゐた。何でも八つか九つかの時であつた――國で、友達の家のをぢさんが大きな斧を以つてまきを割つてゐるのを見てゐた。そのうち、何かの用事でをぢさんはをばさんに呼ばれて、向ふへ行つた。その留守をいいしほに、自分も眞似をして見たところ、斧を振り上げたまではよかつたが、その重みが自分の力に釣り合はなかつたので、目あてに立てた丸木に行かないで、自分の突き出してた左りの足の指さきに落ちた。

『はツ』と、われながら度を失つた時、斧の刄は既にかちりと云ふ音を立てた。自分は足の指が碎けたものと思つた。そして氣が遠くなりかけたので、――曾て自分のいとこに背中をなぐられて目をまはしたことがある時のおぼえから、――これではならぬと、斧の柄に取りすがりながら、渠は自分で自分を踏みこたへた。

『阿呆！猿眞似！』音を聽きつけて飛び出して來たをぢさんは渠から斧を奪ひ取るが早いか、その刄

を調べた。『こないに刄が缺けたぢやないか？』

『………』痛さと申しわけ無さとに物が云へなかつた。

『石があつたからこそようとまつたものの』と、をぢさんは血によごれたその場を腰をかがめて見てから、『若しなかつたら、骨が割れたのぢやぞ！』

『………』

『まア、おいで！』半ば怒りの口調を以つてこちらの手をぐツと引ツ張られたので、こちらは向ふの家の緣ばなまで一緒に歩いて行つて、應急手當てにうすべに色のがまのあぶらを塗つて貰つた。若し抱かれでもして行つたら、却つてそのままに氣絶をしたかも知れなかつた。

歸宅しても母にはこれを秘して語るまいと思つた心持ちが、死のやみの壓迫をやツと排斥してゐたのだ。が、半ば夢中で自家の裏門を這入り、こツそりと子供部屋の緣ばなをあがつた時に、母に見つけられた。

『芳、あんたは、まア、どうしたのや、眞ツさをな顏をして？』

『………』渠は母のこの言葉を聽くが早いか、おそろしさと安心とがごツちやになつて、そこに顚倒してしまつた。

そして氣絶のやみから目がさめた時には、友達の家のをばさんも來てゐて、

『まア、よかつた──息を吹き返して』と云つた。心配なので直ぐあとを追ツかけて來たのらしかつた。

渠は氣がつくと、自分の顏ぢうが冷たい、そして母は紫のやくわんを片手にさげて──疊の上までも水が流れて──なほ口のうちに吹き殘した一くくみか半くくみかを、立つて行つて庭へ吐き出した。それから、なほ心配さうにをばさんに向つて、

『全體、どうしたと云ふのでせう？』

『實は、な』と云つて、をばさんは一部始終を語つた。現場を見てゐなかつたので、少し話は違つてたが、渠は自分でそれを訂正する氣にもなれなかつた。

『兎に角、手當てをして下さつたのですから、もう、大丈夫と思ひますが──』

『がまのあぶらはよう利きますので、な──それにしても、芳さんは氣丈ですよ、大概の子ならその場で目をまはしてしまふのを、お宅へ歸るまでしツかりしてをつて。』

『馬鹿です、わ、な、手にもをへん物などを振りあげて見て！』母は渠をにらむやうに見て云つた。

渠には重い斧が丁度また折よく堅い石にとまつたのが不思議であつた。左りの足の四番目の指の爪が割れて、その上の方までも身が切れたが、幸ひにも骨を挫くには至らなかつた。そしてそのしるしがあと／＼までも殘つたと同時に、この不思議が渠の所謂人生觀を段々と離れなくなつたのである。

土の中に石があつたからこそ自分のいのちも助かつたのだが、若しそれがなかつたら、重い刄物のさきが土をくゞつて來て自分をその場に殺すのであつた。

或時、土のかたまりを手でほごしてゐると、古くぎが出て、そのさきで手の裏を傷つけた。この時にもこの小いくぎがかの大きな斧よりも重く、また鋭い感じがした。斯うして段々と土その物が渠におそろしくなつたのである。

農學校流の鍬は柄と刄との角度がさう迫つてゐないからまだしも安心だが、舊式のはなか〳〵鋭角になつてゐて、これを振り上げると直ぐ自分の足の上へ落ち來たる氣がする。それをおづ〳〵使つてゐても、一たび地中に喰ひ入つた刄が手ごたへのない地中から飛び出して、自分の足のうらへ達しさうだ。その度毎に自分の全身の神經がずんと天邊まで響き渡る。そんな時には、無論、もうとツくの昔し直つた足の指の傷までが新らしく痛むやうだ。

『どうも僕には面白くない經驗と記憶とがあるんだから、困る』と、寢ながら訴へて見ても、頑固一天張りの仲間どもからは少しの同情も得られないのである。

『君は神經家だから』と云ふ部長の言葉が仲間どもの渠に對する合ひ言葉のやうになつてしまつた。

渠は、自分が仲間どもとは少し違ふと云ふことを示めす爲めにも、自分の顏や髮の毛をいつも清潔にしてゐたのだ。

そのうちに、ダリヤの澤山の荷が地方の本園から屆くと云ふので、これを植ゑつける床を皆で急いで拵らへねばならなかつた。

渠も止むを得ず朝から皆のあとから起きて、カーキイ色の仕事着を纏ひ、仲間の持つてる新式の鍬を、明いてる舊式のを持つて行つて取りかへて貰つた。そして一心に用心深く土を掘つてたところ、大きなかはらのかけらにぶち當てたので、鍬のさきで掘り起し、それを手に取つて生け垣のふちへ投げた。ところが、丁度その方角に當る檜葉の枝葉の間から、どこの女だかが伺いてゐて、『おう、こは』と云つたやうに無言でそこを飛びのいた。

『失敬しました』と、こちらも云ふつもりであつたが、言葉が出なかつた。渠は言葉を出さぬうちに、既に、かの女をも自分の世界に入れてゐた。乃ち、渠には投げたかはらが綺麗な女の顔に變じたものと見えた。そしてすんでのことにかの女の首を切るところであつたと。

赤ぐろい土がぼろ〳〵出て來たのが、かの女の頸のかすり傷から流れた血のやうだ。そしてこれがまた自分の子供の時の失敗の痛々しさを思ひ起させて、全身をふら〳〵させたその神經のうすくらがりに、ふと、かの女を戀しくなつた。そしてまたその日から寢どこに就いてしまつたのだが、このたびは土のおそろしさ、人生のいた〳〵しさが却つてなつかしいものであつた。

『どうしてこれが物質的ばかりで解釋できようぞ』と云ふ確信の證據が、渠には一層確かに認められ

た。

『あの子なら土から出た山出しどころか、こないだ、向ふの家へ引ッ越して來たいきな姐さんの妹だ』

と云ふ仲間のうはさを聽きながら、この藤枝芳之助は今一度あんな痛々しい心持ちで土を掘り起して見たいと思ふやうになつた。

――(大正六年七月)――

獨探と二人の女

一

『……』外國人の名義を以つて熟練ある支配人一名入用の特別廣告が時事新報に掲載されたのを見て、定一郎は初めて內幸町なる世界館と云ふ建て物の第三號室を尋ねて行つたのであつた。

疊かずにして見れば十二疊敷ばかりの一室を幕で以つて二つに仕切つて、ドアを這入つた直ぐの小面積が應接室に、そしてその奥の廣い部分が事務室になつてゐる。

出勤の役員と云つては、主任と稱する外國人でワーレンハイトと名のつたのと、圖案掛りの畫家だと云ふ村木なる日本人と、たツた二人しかゐなかつた。仕事は活動寫眞應用の廣告取扱ひと廣告目的のフイルム撮影引き受けとであるが、主任が日本の事情に全く暗いのだから、その代理若しくは支配人となつて腕を揮つて呉れる人を求めてゐるのであつた。

定一郎には親ゆづり五十萬圓の藥屋を或商敵と廣告の競爭をして數年前にぶツ倒した經驗があつて、廣告と云ふことに關する內情や面白味はこれを依賴者がはとしてよく知つてゐるので、今回は廣

告屋として一と肌をぬいで見ようかとも思つた――殊に、それが活動寫眞應用と云ふ新らしい企てであるので。その上、渠自身にも丁度一つの新案ができて、淺草公園並びに各區の活動小屋の外題が變はる毎にこれを一般に知らせる爲めの、無代價の機關新聞を起し、小屋小屋からとその附近の飲食店などからとの廣告料を擧げることを、或印刷屋と一緒に相談してゐるところであつたので、今回の仕事から活動の興行人や小屋持ちと知り合ひになつて行くことができれば決して惡いことではなかつた。

アメリカで勞働してゐた時代におぼえて、その後長らくうツちやつて置いた英語のおぼつかなさをまじへながら、相手の二名と暫らく應答をした。相手の一人なる畫家の語學力が自分よりも一層劣つてるらしいのを見たので、渠はまた一層の勇氣を得たのである。

『どうでしよう、一つ奮發して見て呉れませんか』と、畫家は賴むやうに云つた。

『さうです、な、やつて見てもよろしいが――』

『この紳士がイエースと云つた』と、畫家は早速主任に報告した。主任はその場にゐながら一言も日本語を分らないのだが、この報告に嬉しさうな微笑をその鷲鼻の下にほころばせて、無論、英語で、

『傭はれて呉れますか？』

『左樣――約束次第では。』

『それは愉快、愉快！』椅子からはねたやうに立ち上り、兩手を切れの引き延びた腰のポケトにさし

入れて、寒さうに狹い部屋を二三度あちらこちらへ步いた。が、それから思ひ付いたのか、『こちらには火があるから』と云つて、定一郞を奧の方へ案內した。

『……』渠にはこの、まだ三十になるかならぬかの、而も子供々々した男が、こちらを傭ふだけの資格を持つてるかどうかも疑問であつた。

この寒中に、ストーヴの用意もなく、西洋室を炭火で以つてすましてゐる。一方の隅に主任のデスクがあり、また他方の隅に畫家のデスクがあつて、いづれも同じ安ツぽいのだ。ワーレンハイトは自分のデスクのよこへ椅子を一つ置いて、

『まア、おかけなさい』と云ひ、自分のをもその場所から引き出して、二人の間へ火鉢を自分で運んで來た。

『寒いからこれも一緖にしましよう。』畫家も自分の火鉢を持つて來て、自分の椅子をもそのそばへすえた。

貧弱な部屋に似合はず、火鉢は二つとも小いがあかがね落しの付いた四角形ので、ほん栗の黑ぶちをまわしてある。然し、それにむやみと炭をくべた爲めに、主任の方のはふちが大變こげてゐる。

『亂暴ですから、ね』と云つて、畫家は定一郞のまだ口に出さぬ言葉に答へてから、『君が來てくれることになると、實にこの社は萬歲だと思ひますよ。』

『お役に立つかどうか一向わたしにはまだ分りませんが――』

『いや、そんなことはありますまい。これまでにも隨分來た人はあつたのですが、ね、ちよツと見て直ぐ駄目と分りました。然し、君はなか〳〵御經驗もおありのやうだし、御年輩の爲めか落ち付いてもゐられるし、それにその偉大な御體格は西洋人でも大抵はそこどけですぜ。』

『………』無論、この體格は自分もアメリカにゐた時ヤンキイどもにまじつて決して引けを取らなかつた。が、この場合、讃められてるのかあざ笑はれてるのか分らないので、挨拶に困つたのである。ただ何けなく笑ひながら『うどの大木であつたら、然し何とも申しわけがございませんでしようから。』

『なアに、西洋人にだツて、ね――』かう云ひかけて畫家は口をつぐんだ。あとは目つきで多分うのろが澤山あるとでも云ふのであつたらう。ここの主任をも馬鹿にしてかかつてる人であることが讀めないでもなかつた。云はずと知れたその江戸ツ子を以つて任じてゐるらしい輕い素振り、口振りが、かみがた生れの定一郎には如何にもきざに見えた。

『………』渠は英語に不自由でありながらも主任と直接にもツと立ち入つた話をして見たいのであつたが、仲に一名がはさまるので肝腎な問題に觸れて行くことができないでゐた。

そのうちに、ワーレンハイトは時計を見て、

『晝めし時刻だから、一緒にそこまで出てくれ』と云つて、その用意にかかつた。すると、畫家は俄

『それは、まア、聞いて貰ひたくないとして――ジャヷにはなか〳〵儲け口があります。また行くつもりだから、君も今度一緒に行つたらどうだらう？』
『そりやア、お互ひに儲け口のことなら――』
『金、金』と、卓上を握りこぶしで叩いてから、『金がなければ日本も軍備擴張はできますまい。僕等も何もできないです。』
『その金が實際に社にありますか？』定一郎は疑問の一つを念押して見た。
『無論――成績が少しあがつて行けば、本社はそれにつれて擴張資金を出します。』前後の關係から云へば、この返事に最もしツかりした力點が置かれなければならぬのだが、どうもさうでなかつたのがこちらで曖昧に取れないでもなかつた。
本社と云ふのは横濱に在る英字新聞×××社のことで、そこからきのふも社長の代理人が相談に來たさうだ。苟くも×××社ともあらうものが――如何にそのかた手間の仕事だとは云へ――あんな貧弱な事務所に同じ社名を使はせて、こんな貧弱な人物を使つてるとは、ちよツと常識では分らないことであつた。
新時代に相當な新らしい仕事であるから、勸誘の外交員にも多少物の分つた人物を使はねばならぬ。が、今使つてるもの等は皆成績を擧げて來ない。たまに一ケ年契約前金百八十圓分を持つて來て、

その二割の口錢を持つて行く者があつても、その依頼者の望む活動小屋の使用手續きがまだこちらの方ですんでゐない。と云ふやうなありさまでは、無論、仕事のはか取るわけがなからう。さう云ふことの處理しかたに就いては、定一郎の確信がないでもないが、先づ第一にいくつかの必要な小屋使用を契約する資金があるかと問ひ糺すと、若し本社が出さないとすれば、別に資本家を入れるつもりで談判してゐる口があるとばかりの返事だ。變なところで話に熱心を見せるけれども、肝腎な點が本人の人物と同樣にあやふやの樣子だ。その上に、こちらのからだを僅か四十圓か五十圓の月給で縛つて置かうとする意味らしいので、寧ろ口錢取りをしつつ浪人してゐる方がまだましのやうであつた。

『どうです、あすからでも出てくれませんか』と云ふのに對して、

『もツとよく考へて見まして』を以てその時は別れた。

二

それから二三日して、渠はもとの同業者の一人を訪問する用事のついでに、實はかう〳〵云ふことがあるのだがと勸誘して見ると、活動小屋の廣告は如何に淺草でもさう大した効能がないと思ふが、店の廣告目的の活動フイルムは一つ取つて貰つてもいいとの事であつた。これを受け負はせれば、二千呎を二割の口錢と見て二百圓ばかり――この暮れをこれだけででも通過できる。で、早速ワーレン

ハイトに持つて行つたが、まだ仕組みを書く人の當てもなければ、これを使ふ役者の當てもないのであつた。

『それではまだ丸で創業そも〳〵のありさまではないか？』

『無論、さうだ――それだから、君に一つ奮發して貰ひたいのだが』と、ワーレンハイトはます〳〵うち解けて、葉卷きなどを出してすゝめるかと思ふと、直ぐまた横目で片隅の今一つふえたデスクの方を見て、小聲に『かの女はどうだ？』

『………』こちらもさツきから通辯か事務員だらうと私かに注意してゐたのだが、さう云はれて半ばにが笑ひをして見せた。年が若くて、而もまだ細君がないと云つてる外國人では、たださへ日本の婦人が珍らしいものだらうから、かの女にして少しでも油斷してゐるとあぶないことだと、こちらにはかげながら思へた。

『志田孃、ちよツとこツちへいらツしやい』と、ワーレンハイトはかの女に聲をかけた。

『………』かの女はおぢける樣子もなく、早速椅子を立つて來た。

『紹介しますが、この紳士は三角君――この婦人は志田さんです。』

『志田じゆん子』と名のつて、かの女は初對面のはき〳〵した挨拶であつた。ちよツと度ぎもを拔かれたかたちでこちらが坐を白けさせたので、直ぐまたもとの席へ着いてしまつた。廿七八で、別に美

人とは見えないが、外國人の好きさうな丸ぽちやの、澄ましてゐてもひさし髮のしたに愛嬌あるかほは隠せぬはうで——衣物はむらさき地矢がすりの銘仙が博多の帶と共に小がらなからだにぴツたり合つてるやうだが、さう金のかかつたものではなかつた。

畫家もゐたが、ただその席から最初に、

『やア』と云ふ言葉をかけた切りで、前の場合のやうになじんでは來なかつた。婦人事務員は他方の隅のデスクに向つて、これに後ろを向けてゐた。その様子が、丁度、もはや軋轢を生じてゐるかのやうであつた。

この時も定一郎はまた有樂軒の晝めしに伴はれた。ワーレンハイトは相變らずヰスキをこちらにもおしようばんさせ、女中に對しては接吻を自分の指のさきで以つて投げてやる眞似などした。そして、また、

『お千代さん——火鉢』と云つてひら手を出した。再び渡せと云ふかのやうに。

『もう、あなたには借さないのよ——あんなにこがしたりして！』かう女中が云つてるので思ひ出すと、あの事務室にあつた火鉢は二つとも安ッぽい瀬戸のに變つてゐたのであつた。さきのはここからの借り物で、取り返されたのらしい。

『…………』いらツしやい、いらツしやいの手眞似をすると、また別な女中がその方へ寄つて來て、

『ワーレンハイトさん、あの美人はどうしたのよ――きのふも、おととひもつれて來たくせに？』

『……』言葉の意味が分らないのでただにた〳〵と笑つてるのが答へであつた。

けれども、定一郎はあの婦人事務員が既に二度も、乃ち、その度數に於いては自身よりさきに二度も、この主任と一緒にここへ食事に伴はれて來たことだと察して見ると、俄かにかの女に對する淡いねたみをおぼえた。そして自分があの畫家の方に對して多少の勝利者じみた感じを持つてゐた自負の念を今度はかの女に奪はれてしまうやうであつた。

無論、自分はまだ社の傭はれ人でない。いや、自分から一言承諾の意を通ずれば直ぐにも歡迎されるに相違ないほど、ワーレンハイトからは親切にし向けられてゐる。その上にも、自分が若しいよいよ入社すれば、仕事は有望でないこともないのだから、十分の手腕を揮ひ、資金が足りなければ自分でそれも奔走してやる。が、今のやうな社の狀態に於いて自分のからだの自由を縛られたくないだけのことだ。主任が外國人であると云つても、その服裝はこないだもけふも同じものを着て、而もこちらがけふ質屋から出して着かへて來た洋服よりもまづいのではないか？主任の見すぼらしいのは、その社の内狀をそれとなく暴露してゐるとも見える。

その代り、そんな會社を創業時代から守り立てて、外國人を初め、あの畫家や婦人に自分の確信ある手腕を見せてやりたくもあつた。即かず離れずに今暫らく樣子を見てからにしても遲くはないと腹

をきめてゐるのであるから、自分は先づ、できれば直ぐにも口錢になるところの、廣告フイルム撮影の爲めの俳優團體を組織するか、若しそこまで行けずばかかる組織のあるところと聯絡するだけの信用を早くつくるか、この二つのどちらかのことをすすめた。依頼の脚本などを書いてやるには自分の友人中に心當りもあるからと云つた。すると、ワーレンハイトはまた葉卷きを出してこちらへも呉れてから、

『さう云ふことをすべて君にやつて貰ひたいのだが』と云つた。

『考へて置きましようが、――それには相當の資金を持つてかからなければ。』これは、然し、目下工面中だとの答へをここでも得たに過ぎなかつた。そして廣告演劇のフイルムも儲かるが、どうせ依頼者がさう多くつづくわけのものではないから、おもには小屋利用の活動廣告をうまい外交員を澤山使つて取つて來させなければと云ふやうなことが主任の口から繰り返された。

定一郎は兎に角この人の機嫌を取つて置くつもりで、自分にもこんな計畫があると云つて、例の活動興行の廣告を目的の無代新聞の件をうち明けると、都合によれば資本を融通してもいいと云ふ申し出があつた。

『時に、いい通辯を一名欲しいが、周旋して貰へまいか？』

『ゐるではないか』と、定一郎は不審がつて相手にあの志田と云ふのを思ひ出させた。

『かの女は書類の飜譯掛りで――それに婦人のことだから、毎日一緒につれては出られない。』

『それもさうだが――』こツそり料理店へなどはつれて行きたいのだらうと皮肉を云つて見たかつたのだが、遠慮してさし控へてゐると、向ふから正直さうに相好をくづして斯う問ひかけた、

『かの女は、どうだ、日本婦人としてどんな程度のものだらう？』

『さア――英語は上手かも知れないが』とまで答へたが、御面相はとてもと云ひたいのを押さへてゐた。

『顏は？』

『さア、中以下だらう。』最も直接には、定一郎自身の今の妻を上のはうに數へて見てのことだ。

『僕は』と、ワーレンハイトは眞面目になつて言葉を改めた、『教育ある日本婦人と結婚したいのだが――』

『君にその資格があるか？』つい、斯う口に出てしまつた。こんな外國をとこでも日本で立派な結婚ができるなら、自分などはわざ〳〵多くの金を使つて藝者などを受け出しはしなかつた。今でこそこれを成るべく人に隱してゐるが――。

三

人のことを自分の疝氣に病んだツて仕かたがないと思ひながらも、定一郎は×××社に於ける婦人事務員の如何にその主任との關係が發展して行くかを氣になつて溜らなかつた。をんな遊びにかけては人並み以上に卒業資格を持つてると思ふ自分に取つては、あんな女一人ぐらゐを別に自分がどうして見たいと云ふのではなかつたけれども、何だか好奇心も手傳つて、何かにつけてかの女を思ひ出すのである。そして思ひ出せば、同時にワーレンヘイトふぜいにかの女がだまされて落ちるやうなことを世に引き起させたくなかつた。

初めから本人を知らずにとほしてゐたら、何でもなかつたのだ。が、一度紹介されて見ると、――そしてまた、儲け話を社へ持つて行つた折に、二度目は多少直接に話をして見ると、――かの女にかみがた辯が出るのが自分になつかしかつた。

『志田さんは多分同志社か神戸女學院の出やぜ、わしはどうも――昔からいろ〳〵そんな人を知つてる經驗から――そんな見當に思へるが、な』と、うちではまだ本人を知りもしないでゐる妻に頻りに語つて、冗談にだが冷かされた。そして三度目に會つた時には、果してかの女が神戸女學院にゐたことや、その後ロンドンに行つたことまでが分つた。道理で主任との會話も自由なもので、こちらの分らないことは、皆、下手に自分で話すよりもかの女を通じて云つて貰ふはうが便利であり、また確實であると思はれるやうになつた。そして殆ど毎日のやうに何かの用事を持つて行きはじめた自分は、

殆どかの女を見る爲めに行くかの如く、たま〳〵かの女の姿が見えないと寂しい感じをおぼえた。そしてワーレンハイトがもはやかの女に手をつけてやしないか知らんと云ふ自分の不安は滿開の花に對してあたら風雨を恐れ厭ふ如くで、時には儲け話しのはうを忘れてこれにばかり沒念することもあつた。

『その爲めに探偵に』と云はれては少し語弊があるが、自分は一名の通譯をワーレンハイトの依賴通り社に周旋してやつたのである。知り合ひの牧師から丁度都合いい時に何か口がないかと賴まれた廣岡と云ふ男だ。廣島生れで、最近六年間を商買上米國に送つてたが、少し病氣の爲めその商店を妻と番頭とにまかせて歸朝し、遊びがてら何かの仕事をしたいのだと云つた。それでは餘り蟲がよすぎる人物だと思はれたが、定一郎の考へでは、自分の手で入れて置けば、何かにつけて自分の爲めにもなり、また社中の消息も一々よく聽けるのであつた。

ところが、さうは行かなかつた。渠が條件の如何によつては入社してもいいと思つてる社の爲めに少しでも利益になるだらうと思つて先づ入れてやつた廣岡は、ほんの上ツつらの策士に過ぎないで實際の役に立たず、ただ若いワーレンハイトをおだてて諸方を飲み歩くことをばかり能の如くした。そして酒にかけては一晩でも二日でもつづけるのを誇りとするところから、碌に飲めぬ定一郎によりも寧ろ畫家の村木の方に接近した。その爲めでもあらうか、村木はまた社で機嫌がよくしやべるやうに

なつた。それもおもに廣岡とで、話は飮みばなしや女ばなしにきまつてたが、或時その相手の留守に定一郎に向つて村木は斯う云つた、

『あいつにも、然し、困りますよ。ゆふべもやつて來て飮み散らしたのはいいが、また曖昧なところへ僕までをつれてツて、とう／＼沈沒ときまりました、ね。ところが、先生、自分ぢやア一文も持つてゐやアがらねいと來た。』

『……』定一郎自身も廣岡に僅かの金ではあるが既に二度まで借りられてたのだ。

『渠はアメリカに店を持つてると云ひながら、さう貧乏なのか？もう、今月分として僕が渠に拂ふべき分を超過したほど貸しになつたが』と、ワーレンハイトもこぼしてゐた。そのうへに、外交員どもの成績があがらず、定一郎がかた手間に取つて來た一二件に見込みがあるばかりなので、定一郎がもツと本氣になつて働く運動費をワーレンハイトからせしめようとする考へも、一時、云ひ出しにくいはめになつてゐた。

　主任の所謂本社からの補助も、その他にもあると云ふ出資者のことも、そのままに立ち消えのやうすであつた。

『何とか發展の道を講じなければなりませんです、な』と、志田さんも主任の外誰れもゐなかつた時、實際に心配さうな口調で定一郎に語つた。が、その椅子から離れて主任のところへづか／＼と進んで

何かの書類の說明を求めた時、主任の目には見えぬ方の手に持つた紙切れへの走り書きをそツと定一郞に渡した。渠は今兩人のそばなる椅子に腰かけてゐるのだが、兩人が話し合つてる間にこれを讀んで見た、『時間になつたら、新橋の停車場でちよツと御相談致したいことがござりますのですが――』

『………』社に關することだらうとは思つたが、渠は密かにぽツと自分の顏がほてつたのをおぼえた。半ば突然の夢に襲はれたあとのやうな氣持ちでその紙を急いでもみくちやにして、一方のポケトにほうり込んだ。そしてかの女がそ知らぬふりでもとの坐に返るのを待つて、こちらの目を以つて向ふの目に承諾の意味を答へた。主任の手まへをわざと眞面目くさつて見せたらしいかの女の顏にも、これまでに見えなかつた赤らみをその圓い頰に帶びさせてゐた。

『早く入社して吳れないか、な、必らず君自身の爲めにもなるから』と、この時にもワーレンハイトは勸めた。

『………』

『さうですよ』と、志田さんもそれに何げなく相槌を打つて、かの女が英語でこちらへ物を云つたのはこれが初めてだ。『三角さんが這入つて下さると、私どもはよツぽど心丈夫になります、わ。』

『おツつけ這入りますよ。』主任に對しては兼て提出してある條件の承諾を得ないではと云ふ意を固守し、またかの女にはいづれあとで自分のまだ決心せぬ理由を申しますと云ふことを含めたつもりであ

つた。

『………』便所かどこかへ行つてた廣岡が戻つて來て、いきなり、『ワーレンハイト、もう時間だから出ようか？』

『さうだ』と、ワーレンハイトは答へて、にこ〳〵しながら定一郎に向ひ、『三角君も一緒にどうです、一杯飲みに？』

『僕はちよツと先約がある。』斯う云つて時計を出して見た時、渠は胸の底からふとい又熱した動悸が二つ三つ打つたのを感じた。但し、その爲めばかりに自分の言葉がふとすげなく角立つたのではなく、別にまた、酒ばかり飲んでゐたツて仕事のはか取るわけがないではないかと云ふ、既に自分も社中の人であるかの如き責任的な不平があつた。

四

一あし先きへ社を出てから、定一郎は歩いて行かうかと考へたが、心が急がれるところから、ふと土橋から電車に乘る氣になり、たツた一と停留所を芝口で乘りかへ、また一と停留所で下りた。來て見れば、何も乘るほどのことはなかつたのだ。

一體、かの女はまだ同僚にもならぬ男に出しぬけに何を『相談』するつもりだらう？若し主任の意

を含んで云ふことがあるのなら、主任がゐても社で語ればいいではないか？――して見ると、社との關係で何か面白くないことがあるのか知らん？それにしたら、また、何であらう――ワーレンハイトの締りなささうな人物をこちらへ訴へたツて仕かたはないし？若しか畫家との衝突でもあるので、それをこちらに融和して吳れろとでも云ふのぢやアないか知らん、まさか、社外のことでは――たとへば、こちらに愛情を訴へるとか云ふやうなことでは――あるまいから？何にせよ、ひとりの女から多少でも相談相手にされることは惡い感じのしないものであつた。

停車場の一二等待合室を暫らく出たり這入つたりしてゐたが、待ちくたびれた腰をベンチのはじにおろした。そしてまた、ポケトからもみくちやになつたかの女の走り書きを出して、そツといろいろに讀んで見ると、自分はあひ引きの相手をでも待つてるやうに落ち付きのない心が自分に發見された。それがまた自分の出して見る時計のセコンドと共に動悸を打つてゐる。そして時間の進むにつれて熱を加へて來たやうだ。

あたまがぼうツとなつてるうちに、下り列車の來る合ひ圖があつて、室内の人々は皆出て行つた。誰れもゐないのを見ると、若し密會ならこんな時であつた。ひとりでうすら笑ひをしたが、『早う來ればえいのに』と云ふじれ氣味が再び渠を立ちあがらしめた。室の入り口を一あし、がらんとした堂内に出て見ると、丁度一番向ふはづれの入り口の方から、小がらな志田さんのやつて來るの

が可愛らしく目にとまつた。然し、洋服を着た經驗がある爲めでもあらうが、その裾さばきが少し大き過ぎて、和服の愼むべき切れはしが見ッともないほど出る。

けれども、こちらを認めると、かの女はにツこりして、そのゴム草履を小刻みに急がせてちよこちよこと近づいて、

『どうもお待たせ致しました』と云つてお辭儀をした。聲は若し密會などにしてはおほびら過ぎたが、息を切らしてゐるやうすでこちらを見あげた目にはこちらを滿足させるだけの本氣なところが見える。

『………』渠もにツこりして、『歩いていらッしやつたのですか？』

『ええ。』

『僕は電車に乘つて見ました――その方が早いかと思ひまして』と云ひながら、立ばなしを憚る爲めに渠は室内の方へ二三歩引ッ込んで行つた。そしてそれについて來たかの女に向き直ると、かの女は渠の眞正面に立ちどまつて、渠の洋服の胸のあたりから微笑の目を見あげて、

『却つて遠まわりでござりましよう――』そのからだをいつもの博多帶のあたりからちよツとくねらせて、少しも男を恐れてゐるやうすもなく、まことに素直な感じが受け取れる。これを見ると、渠にはかの女が一度嫁して別れたと云ふもとの所天に對しても、一緒に旅行に出る時などこれ以上の優し

い感じは與へなかつたらうと思はれた。

『新橋から乘り下りしたことがなかつたさかい』と答へたが、なんで再び獨りになつたのかと云ふ疑問を思ひ出しながら、渠は相手を上から見おろした時、先づわれ知らず赤い顏をした。これをまぎらす爲めにだが、『まア、かけましよか』とかの女を促して、火のもえてる暖爐のわきのベンチへ行つた。

『めツきり冷えます、な。』かの女は渠と少し離れたところへ坐を占めて、直角に折つた膝から下に垂れる衣物のやわらかい線には女らしいところを見せた。が、あたまではさう男女の區別を考へてるでもないやうだ。全くすれてゐるのか、それとも西洋流の交際に慣れて來たのか？若し後者なら、時々裾の裏返りを見せるやうな優しい服裝はそれに釣り合はないと云ふのが、渠の米國社會を見て來てからの意見であつた。

『今日は少々あんたはんに御相談致したいことがござりますのですけれど――』

『なんですか、僕がうかがつてもえいことでしたら――？』

こんなことを互ひに云ひかはして、まだ要領を聽かぬうちに、生憎、二三人づれのをとこ客が這入つて來た。それだけなら、かの女はまださう特別な變化をその態度に見せなかつたのだらうが、またつづいて一組の客の來たのが、人がらしい夫婦づれであつたので、俄かにかの女の言葉の調子までも改まつて、

『雪でも降らせんでしようか、ちと冷えすぎます、な?』

『大丈夫です。』渠の答へにも、つい、わざとらしい他人行儀を聽かせた。渠には、然し、これは自分からかの女の心を汲んで他の人々へ夫婦でも密會でもないことを示したつもりであつた。が、かの女のさうした態度や變化を思ふと、矢ツ張り、公けの交際に慣れぬ日本婦人そツくりであつた。かかる不慣れや弱みを返り見ない爲めに、渠等に男の誘惑が多いのだ。かの女はこんなことにどれだけ訓練と覺悟とがあるか知れないが、かの女自身の云つてることに今のことを思ひ合はせると、叔父を賴つてロンドンへ行つたと云ふのも日英博覽會で叔父の賣店の番人をする爲めに過ぎなかつたらしい。これでは、如何にかの女の兄が外交官として巴里に行つてるのが事實だとしても、かの女自身の素養は知れたものだらう。

『社のことですが、な』と聲をひそめ、かの女が片手をベンチに突いてこちらへじろりと横目を投げた時は、然し、その口調はもちろん、やうすまでが全くのかみがた女であつた。これが渠に最も親しみを感じさせたので、

『僕もさうだろおもてましてん』と答へて、渠は故鄕の大阪をまる出しにした。けれども、自分の待ち受けてる相談とは社のことだと云ふよりも、寧ろかの女自身の身の上に就いてだと云つて貰ひたかつた。

かの女はなにかと人なかでは云ひ出しにくさうにしてゐるので、渠はかの女と共にどこか落ちつけるところへ行くことにしてそこを出た。奮發すれば、ちよツとした待合へでもと云ひたいところだが、かの女が若し豫想外にうぶであつたら驚くだらうし、こちらもまた初めほどの熱は九分通りさめてゐたので、自腹を切つてまでの野心はなかつた。

さて、どこと云ふ當てもないので、二人は暫らく人通りや車の多い而も寒い路上でまごついたところが、かの女は思ひ出したやうに云ひ出した、

『いツそのこと、わたしのうちへ來ていただいたらどうです？』

『さア』と、おもてには少し進まぬふりを見せたが、その實、物好きが手傳つてどんな生活をかの女がしてゐるかを突きとめるに好都合だと思ひながら、『おさしつかへが無かつたら。』

渠等二名は再び新橋停車場へ立ち戻つたのである。そして電車に乘つて品川へ下りるまでに、乘り合はせた客の一人がところ構はず度々つばきをしてゐるのをかの女は不快さうに見てゐたが、こちらを向いて、英語で、

『どうも日本人は公德心が無うて、な。』

『………』渠はこれには無論と云はぬばかりに目で同意して見せたけれども、かの女が再び日本語になつて、隣席の人々にも聽えるやうに、英國での見聞を外國本位で語つたには、些か宣教學校出の殆

どあらゆる婦人に對して持ち得られるのと同じ反感を渠は感じた。偏見の多い外國婦人教師どもに就いて見たり聞いたりしたことばかりが標準ではないぞ、と云ふやうな――。

かの女の家は高輪の山手に在つた。ちよッと挨拶に出た母親の外に、七つばかりの女の兒がゐるのをかの女は自分の巴里へ行つてる姉の子をあづかつてるのだと云つた。して見ると、外交官の兒と云ふのは――實際、外交官をしてゐるにしたところが、――姉の亭主であつて、實の兒ではない筈だらう。

『實は、この子が』と、笑ひながら子供のおけしにしたあたまを撫でながら、『うちの資本の一つだッさ、向ふの生活標準で仕送りをして呉れまッさかい。』

『それは結構です、な。ほたら、あんたには仕事が三種類あります――この子と×××社の事務と築地のと。』

『まア、そんなもんです。』

互ひに輕く聲を擧げて笑つた。築地のとは、何でも月二十圓ばかりの約束で日本語を○國大使館員なる一書記官に敎へに行つてるのである。

『けれど、男ッて皆當てにならんもんだん、な』と、かの女は出しぬけに云ひ出した。

『どうしてです』と、渠は今度はかの女の外國標準の偏見をやわらかにうち破つてやる覺悟をした。

が、同胞のことを云ふのではなかつた。

『ワーレンハイトさんはわたしを築地から紹介してもろといて』と、かの女は○國大使館の書記官を、その住所で名づけた。『築地のことをえらうわるのやうに云ひますし、築地はまたわたしをワーレンハイトさんに紹介して置きながら、ワーレンハイトさんを獨探でもあるやうに云うて、自分が一と言證明を與へたらあんな者は日本にも米國にもをられん云うてまツさ。』

『………』初耳として面白いことを聽くが、これで築地の度々×××社に來る時の心持ちが定一郎に解釋できたやうに思へた。自分は一度しきや渠に會つたことがないが、その時紹介を受けながらも言葉が不自由な爲めにただ皆の冗談を傍聽してゐると、渠は專ら志田さんを相手にし、歸る時にも志田さんに未練を殘して行くやうであつた。『そら、お互ひに獨身やさかい――』と、少しからかふつもりで意味ありげに微笑した。

『どうしてです』と、こちらをじツと見ながら、かの女は問ひ返したが、既に分つてるかのやうに顏を赤くしてゐた。

『………』渠もさう云ふことを想像すると、あまりいい氣はしないが、さりげなく說明してやつた、『ワーレンハイトは敎育ある日本婦人と結婚したいがと云ふことを僕に云うてました。僕に云ふほどやさかい、築地へいたらなほ云うてるやろ。その時にはきツとあんたのことも出ましよう。して見る。

と築地かであんたを紹介せなんだらよかつたのにと云ふ氣持ちが起ります。』
『そんなもんか、なア、男は誰れでも――?』かの女は斯う云つて、こちらをも皮肉な目で見た。
『僕かて、そら、分りません。』渠は子どもが好きなのでいつのまにかこのおけしをそばに引き寄せてゐたが、止むを得ずこちらも笑つてその皮肉に向つた。
『あんたは、然し、奥さんがおありですさかい――』
かの女の云ふところでは、廣岡も無妻であるとかの女に云つてたが、あとでうそなことがかの女に分つた。それから、廣岡はかの女を排斥してゐると同時に、畫家と一緒になつて定一郎の入社を防がうとしてゐるが、ワーレンハイトがかの女の言葉を採用して畫家等に耳を傾けないのであつた。ところで、畫家自身は古參の故を以つて最も新參の廣岡を酒で抱き込み、自分が支配人になりたいのださうだ。
『そんなことは初めて知りましたが、まさか、廣岡までがとは思ひませんでしたよ。』
『どうして日本人は皆あんなに隱險なのやろ?』
『なアに、かまひません』と、こちらも私かに熱ある覺悟をした、『僕の提出した條件はワーレンハイトが入れなければならぬやうになつてまツさかい。』
この條件のうちには社で雇用する日本人は、形式上、すべて定一郎の自由にまかせることにしてあ

るが、志田さんまでを自由に解任若しくは酷使するつもりでないからと云ふことを、渠はかの女を安心させる爲めにうち明けた。

かの女の相談の要點は、渠に早く入社して社を整理づけてくれないか、それでないと、この歳末に皆の俸給さへ取れるかどうか分らないからと云ふのであつた。その歳末が、もう、三四日に迫つてる。が、渠にはこの歳末の苦しみが社にあるのに乘じて、ワーレンハイトの決心を促してゐるのである。自分としては、×××社へ二三の廣告依賴者を紹介した仕事でだけでもどうやら急場をやツと切りぬけて行く方針は附いてるので、ここを少し自重してワーレンハイトに條件承諾の調印を横濱の本社の名でさせようとしてるのだ。主任が調印をする〳〵と云つてながら、何でずる〳〵と一日〳〵を後れさせてゐるのか分らない。

『△△興行部と關係をつけて吳れませんか』と云ふので、その通りにもしてやつたが、どうもワーレンハイトと横濱本社との間が曖昧なので、話の都合によれば、自分で本社に出かけて行つてワーレンハイトの位置を十分明らかに突きとめ、ついでに、今聽いた獨探の件もよく糺して見たいと思つてる。

が、渠はこんなことまでかの女に語るつもりはなかつた、たとへ晩食の代りとして壽司と酒とを馳走になつてゐながらも。そしてかの女の話が再び獨探のことに及ぶと、

『まさか、そんなこともないでしようが、——疑つて見れば、和蘭陀人と云ふのはうそで、あの英語のぎくしやくしてるところから、容貌から、或はほんとの獨逸人かも知れへん』の前置きをして、つい斯う云つてしまつた、『若し獨探なら、追ひ出してもわれ〳〵があとをつづけても——』

『………』かの女はこの刹那にいやな顔をしたのを、無言のにが笑ひにまぎらした。渠にはこれが職業に鋭敏な女と見えた。外國人の主任がゐなくなれば、かの女の仕事もなくなるのであるから。

『然し、まア、そんなことはありますまい』と、渠はその場をつくろつて、『僕がいよ〳〵入社するとすれば、ひとりの味かたを失つてまた別な味かたをあんたに得るわけで——主任と僕との意志はあんたによつて十分疏通して貰へると思ひます。』

『そら、お手のものだツさかい、な』と、最初からの御自慢らしい語學力のことになつて、かの女の機嫌は再び直つた。

五

『志田さんと取りかへようか、なア?』

どんな性質の女かまだ根抵まで分らないにせよ、兎に角、こちらを信じて頻りに味かたをして呉れるのを定一郎は嬉しく思つて、家では妻に向つて空想的なのろけを多少は云はないでもなかつた。

すると、暮れの三十日、今一日で年が盡きると云ふ日になつて、夜七時頃、こちらの歸宅を見計つてだらう、志田さんが突然尋ねて來た。が、定一郎は×××社のことばかりを當てにしてゐるのではないので、他の用事の爲めに生憎いつ歸るか分らなかつた。
　かの女が書き置きをして行つたのを讀んで見ると、是非會つて話したいことがあるから、明朝、社へ出勤する前に八時頃を期して向ふの自宅へ來てくれるか？若したよりがなかつたら――おほつごもりでさぞ急がしからうが――再び午後六時頃こちらへ出るから待つてゐてくれろ、と云ふのであつた。
『どツちにしよか？』渠は妻に遠慮して相談して見ると、
『そら、いてあげた方が禮儀でしよう、な』との答へを得た。
『それでは、あすまた早う起きなければならぬ、な――向ふも隨分こツちやに肩を持つてくれてるのやさかい。』
『然し』と、妻は暫らくして、隣室で臺どころの用をしながら、『志田さん、志田さんと云はれるさかいどんなに美人やおもてたら、愛嬌はあるかも知れへんけれど、ちんちくりんで、顏がくしやツとして――』
『阿呆！』渠は一言のもとに妻の云はうとしたことを半ばにしてはね付けた。自分もそんなことを知

つてないことはないが、知つたうへでなほ向ふの取りえを發見して好意を持つてるのであつた。
　三十一日の朝になつて行つて見ると、話とは意外にもこちらがワーレンハイトに提出してある入社條件のことであつた。成るべく秘密に運んでるつもりであつたのを、ワーレンハイトは既にかの女に見せてゐたものと思はれる。
『ほかのことは容易にまとまりさうですが、な、俸給のかはりの利益配當の件が毎月進んでいて、割り合ひに僅かのまに二百圓までに達するのがちとつらいやうだツさ。』
『では、考へ直して見ましよう』とは答へたが、ワーレンハイトがこれまでこちらを引ツ張つて置いて、今更ら間接にかの女から云はせたのが定一郎には少からぬ不平であつた。
　けれども、廣岡や、既に私かにあと釜をこちらで探してゐる畫家の村木やを出すことには、かの女も熱心に一致して、頻りにこの兩人の惡いことを訴へた——おほ酒飲みだとか、下劣だとか。そして、『廣岡さんは、それに、まだ奧さんがないなんてうそを云ふて』と、前にも語つたことがあることを繰り返した。ところで、かの女が廣岡に細君があつてアメリカに殘つてることを知つたのに就いて、定一郎にはこないだから一つの不審があるのだ。廣岡の紹介者で定一郎の友人なる牧師のもとへ、——この牧師から直接に聽いたことであるが、——かの女は一回の面識もないのにこないだ尋ねて行つた。そして頻りに廣岡の人物のことを聽き糺した。社の主任が聽いて來いと命令したからと云つたの

だが、廣岡に細君があるかないかを頻りに念を押したのから察すると、或は結婚でもしたいのではないかと牧師は笑つてゐた。かの女に牧師の名を告げたのは廣岡の紹介を取り次いだ定一郎で、ワーレンハイトなどは何も知らないのだ。それだのに、定一郎をさし置いてかの女は、耶蘇教信徒に知り合ひが多いところから、名によつて牧師の屬する教會を調べ、その教會に行つて住所を突きとめて、わざわざあつかましく尋ねて行つたとは、かの女の出しや張り過ぎでなければ、牧師の推察通り、別に何か秘密な目的があつたのだとも云へないことはない。

ゆふべの置き手紙の文句に徴しても、かの女は男にあまいとも不謹愼だとも渠には見える。あまり行き屆いてゐるので、入らざらん疑ひを避ける爲めに自分の妻には本文を見せなかつたが、用件を云ひ盡したあとに、かの女が隣りへ轉居してゐることが書いてあつた。今、思ひ出して見ると、なんでも斯う云ふ風だ、

『お出で下さるとすれば、一つ申し上げて置きますが、母と衝突致しましたので私のゐどころは前とは違うてをります。前の家の隣りで、前のを通り過ぎますと、直ぐ狹い露路がありまして、その次ぎの生け垣につづいた格子戸が今の家です。私の名は出してございませんが、若菜と申してこれも獨身の友達ですから、母よりも却つて心置きがござりません。お出で下さつても決してどんな秘密ばなしも御遠慮には及びませんから、前以つて御承知を願ひます。』

知らない人が見れば、これでは丸でいろ文のやうではありませんかとからかつて見るつもりであつたが、そこまでの親しみを發表する機會は渠になかつた。

都會生活には僅かの檜葉の生け垣でも天然その物を代表してゐる。その小さな家にだが、かの女はその所謂『一種の資本』なる女の子をもつれて來てゐるのだ。そして聽いて見ると、隣りに殘してある母と衝突したのは、かの女のいとこなる一高の學生とあまり親しくするのが原因だざうだ。

『なんぼお母はんかて、さう舊い思想で一人前の人間を束縛することはでけまへん』と云つた。

『では、あんたも新らしい女ですか？』定一郎にはこの流行の言葉がよく分つてゐないのだが、さう云ふ女どもは外國婦人で云へば當り前になつてることを要求してゐるのであるらしく、また外國のと違つてるところは、酒や煙草を飲んで年したの男を可愛がるに在るらしかつた。不斷は自分等が多少輕蔑の意味で用ゐる言葉が、ふと、かの女の告白につれて出たのであつた。

『そら、さうでしよう、な』と、然し、かの女は得意さうに答へた。

『…………』無論、いい意味に取れば取れることとは定一郎にも分つてゐた。

二人が座敷で話してる間、ここの主人なる婦人は勝手の方に避けてるやうであつた。女の兒と何か話をしてゐるのが時々聽えた。その兒は前に定一郎が貰つて行くと冗談を云つたのを本氣にして、渠の顏を見ると直ぐ引ツ込んだ切り、今回は出て來なかつた。丁度そこへ格子戸を明けて這入つて來た

者があつたが、その前からその下駄の音に耳を傾けてゐた志田さんは、
『今、お客さんよ』と云つた。
『さう』と、ふすま越しに優しい男の聲がして、『ぢやア、また來る。』
『あれだツさ。』かの女はほほゑみながら、向ふを馬鹿にしてるやうな調子で定一郎にささやいたが、目と耳とはその方へ向いて、おとなしく歸つて行く男をじツと追つてやるやうすであつた。
兎に角、渠はワーレンハイトの本意を今一度聽いた上で、契約書を書き改めることにして、かの女と一緒に社へ行つた、――わが國の習慣として、最も急がしい日の一つだのに、午前の十時を期してかの女と定一郎との來たるのを待つてる筈だと云ふので。
行つて見ると、ワーレンハイトは來てゐたが、どうも矢ツ張り言葉を左右に託してただいい加減に好きなやうに契約書をかいて來いと云つてるやうだ。定一郎は自分の語學が不充分の爲めにさう取れるのかとも反省したので、志田さんから改めて聽き糺して貰ふと、無論、今度は違ひなく調印するとの返事であつた。けれども、社の死活問題としてどうしても定一郎の入社を必要とすることばかり兩人して說くのが、こちらの立ち場などはそツちのけにしてゐるらしくも疑はれた。
自分が入社すれば直ぐにも多少の金の融通がつくやうになることは兩人もよく信じてくれてるのだが、それだけに、こちらでは、でかした金をワーレンハイトの無駄づかひの借金や、志田さんの急場

の足しにされてしまうのでは、まことに詰らない。有樂軒からも主任の喰つた料理代を毎日のやうにやいへ云つて催促しに來るのだが、主任がうそばかり云つて延ばしてゐるとは、志田さんからけふも聽いたことだ。そんなありさまだから、使用人どもに對するけふの月給も滿足に拂ふ見込みがあるかどうか定一郎には人ごとながら分らないのだ。

調印の當の責任者をワーレンハイトにするにしたところが、渠を×××社の本社の代理とし、こちらに對する相手の代名詞を複數にして『われへ』とさせるつもりでゐたのだが、新年の二日には本社から人が來ると云ふので、その人にも立ち合はせることにした。

六

いい着物は質にやつてあるので、定一郎は年始の禮をすべてハガキで御免被つたが、ワーレンハイトにだけはその大森の家まで敬意を表しに行つた――一度は訪問してどんな生活をしてゐるかを探偵してやらうと思つてたのだが、急がしい爲めに延びへになつてたから。不斷から成るべく來て貰ひたくないやうな風だから、まだ尋ねたことがないと志田さんは云つてるが、その實どうだか？

八景園の裏に當るところで、それが不思議にも定一郎の英語教師なる外國人が昔、女中を女房同樣にして住んでた家で、古ぼけてしまつた外に今でも變つたところがない。見おぼえの門と云つても、

葉の落ちたつたの纒つてる木戸同樣のが明いてる玄關みちを這入つて行くと、英語の大きな聲で元日早々、朝ツぱらから男と女との喧嘩をしてゐるのが聽えた。男は確かにワーレンハイトで、女も日本人とは思へなかつた。
『あひの子が來てる、な』と、直ぐ感づかれた。若し果してさうなら横濱からで、日本人とホルトガル人との間にできた小笠原島の產だ。ワーレンハイトが横濱でぶらついてた時外人のバーで仲よくなつたのだとは、畫家が一度主任と一緒にそこへつれて行かれて知つてるさうだ。至つて燒き餅やきで、男がちよツと他の女にからかつてもその場でつかみ合ひの喧嘩をするとも聽いた。今もどんと投げつけられたやうな音がして、女の方が泣き出したやうだが、そ知らぬふりで定一郎は呼びりんを鳴らした。

ワーレンハイトが自分で出て來たが、突然のことに、
『やア、三角』と、どうも斯う云ふところがいつも獨逸語くさいと思はれる口調を出してから、にこにこしながらかたことの日本語で、『おめで——たう、あめで——たう！』
『必要にならぬと日本語はおぼえません、な』と云ひながら、定一郎は招ぜられるまゝに奥へ通つた。疊の上にまるテーブルや長椅子や、椅子やストーヴを備へつけて、一と隅にはデスク、また一とつの三角棚には西洋料理屋の如くいろ〳〵な洋酒を並べてある。主人は、もう、大分に飲んだかして酒

くさい。音で聽いた時の想像とはうツて變つて、上機嫌にこちらを持て爲したが、
『女中が二三日前に逃げてしまつたので、横濱から一時人を賴んで來た』と云つて、そのあひの子を紹介した。エリスワシントン何とか孃であると三つの名をつづけて聽かせたが、外國の婦人としても脊の圖ぬけて高い女で、まだその顏に締りができてないほど若い。アメリカの娘の標準なら二十歲前後とでも云ふべきところだらう。が、ぷんとよごれの臭ひがしさうな綿ネルのスカートで定一郎の横につツ立ち、自慢さうにせい比べをした。そして、
『わたし、ワーレンハイトさんより高い。あなたと同じほど』と云つた。
定一郎がヰスキの小いコップを口に持つて行つてる間に、かの女はワーレンハイトと手を引ツ張りツこなどしてふざけてゐた。が、魚屋が來たと云つて勝手の方へ引ツ込んだ。そしてかの女がくどくどと長い間値段をねぎつてるのがこちらへ手に取るやうに聽えた。
『…………』ワーレンハイトはその方へ何か心配さうにからだを延ばして耳をかたむけてゐたが、少し目の色を變へて、『かの女は何を云つてるのか？』
『…………』あんなことにさへこの男も燒くのかと思ふと、その似た者夫婦が馬鹿々々しくなつて、遠慮なく定一郎は吹き出してしまつて、『なアに、さかなのかけ合ひをしてるのだ。』
『さうか』と云つて、ワーレンハイトはやツと安心したのだらう、それまでわれ知らず乘り出してゐ

た上半身を引いて、椅子の奥にもたれた。

定一郎には、渠等のこんな單純で而も立ち入つたことを見ると、渠等が子供のやうに無邪氣だと云へば云へるが、無教育で野卑なことは免れないと思へた。女のはうばかりにしても、品は何だか見ないから分らないけれども、その僅か十六錢の云ひ價を十二錢にまけさせようとして、いつまでも執念深く魚屋を引ツ張つてるのであつた。言葉が分らないでそれをかげから聽いてると、或はこんな無學な手合ひには變な意味にも取れるか知れない。

あんまり馬鹿々々しいことを見せつけられて詰らなくなつたので、定一郎は渠等の引きとめるにも拘らず、どうせ、あす社で會ふからと云つていとまを告げた。

その元日のゆふかた、まだ暗くならぬうちから、畫家の村木と廣岡とがつれ立つて定一郎の家にやつて來た。年始のことだから餘り惡い顏もせずに持て爲し、けさのワーレンハイトの家に於ける見聞をも語り、

『村木君もいつか云うてた通り、あいつ等ふたりの喧嘩は恐らく燒き持ち喧嘩ばかりだぜ』と附け加へた。

『無論、さうですが、ね』と、村木は氣取つたやうに答へた、『それは渠等一個のうちわのことでさア。われ〳〵の社に關しちやア、主任が三角君を信ずることが非常だから、君は一つわれ〳〵の爲め

に――一と肌と云ひていが、實は今一層――おほ肌をぬいで貰はねいと。』

『………』然しお前は排斥派の隊長ではないかと云つてやりたかつたのを押さへて『お互ひにこれから奮發して見ましようか、な？』

『大いに奮發して呉れ給へ』と、廣岡もそらぞらしく莊重な含み聲を以つて、『僕を入れて君が這入らぬのは、一體、龍をゑがいて眼を入れぬやうなものだから、な。』

『うめいことを云やアがる！』村木は酒にうるほつて來た口びるを長く一文字に引いて、ひらべッたい聲を出した。

酒が進むと共に、向ふ二人の話はいよ〳〵無遠慮になつて、ワーレンハイトの惡口や志田さんのくしやみしさうなことが出た。その上、畫家は目前にゐる廣岡のことまでさらけ出して來た。

『よせよ』と、廣岡がとめるのを意ともせず、面白半分になつて、

『この男は隱險だが、すばしつこくツて、ね――』丁度こちらも云ひたいことを云つた。『ワーレンハイトを出しぬいて――』

『おい〳〵！』

『あの後家さんに當つて見たりしやアがツて。』志田はもとの亭主に死別れをしたのではないやうだが、――そして定一郎に對しては確かに意見が合はないで別れたと云つたが、――皆の間には後家の

名でとほつてるのだ。
『あ！それで分つた』と、定一郎は自分の膝を打つて、今まで渠等に話す折がなかつたところの、かの女の牧師訪問の一件を語つた。
『して見ると、畜生！』畫家は自分も燒けると云ふやうな口ぶりで段一段と念を押しながら、『あいつ――都合によれば――廣岡と結婚してもいい――なんて考へたんだ、な。』俄かにわざと溜らなさうに早口で、『廣岡のちよツかいに乘つて、さ』と、さもどツとしないと云ふ風を横に反らせた顏に見せた。
『なんとも――すみません。』廣岡は片手で一つ自分のあたまを丸めて、實際にきまり惡さうに苦笑した。
『おい、いろ男！どうして呉れるんでい？』
『いや、どうも――から、ここで素ツ破ぬかれて見りやア白狀するが――こりやア僕の最初の失敗で、また最後の失敗だらうと思つてをります。』
『失敗もする筈、さ、手めへにやアかかアがあるぢやアねいか？』
『だから、それを突きとめられたと三角君は云ふのだが、――僕の失敗とかの女の牧師訪問とに原因結果の關係があつたかどうかは、僕に保證はできない。僕はただ失敗したことだけを事實だと云つて

置くが――』

『然し、まア、さう心配するにやア及ばねい、さ。』畫家は今度は全くけろりと落ち付いて、『かの女はワーレンハイトに、僕の見たところぢやア、てツきり急所を握られてるよ、少くともそのウ』と、言葉にも云ひぶりにも面白味をつけて露骨に出で、男女間で最後の親しみとまでは行かないでも、なほあり得べきいたづら位は『やられてるよ。それだのに、なほ平氣で毎日出社するとア喰へねい女ぢやアねいか？』

『まさかとは思ふけれど』と、定一郎が口をさし挾んで、今やかの女に對する敬意が全く消えてしまつたと同時に、ここ二三日來の不平が出た、『實際、志田さんは社中のことを知り過ぎてる。ワーレンハイトが一々氣を許してしやべるからだらう。』

『ところで、あいつはワーレンハイトばかりぢやアねい。築地の何とか云ふ〇國人のところへも行つて、日本語教授と淫賣とを同意語に解釋してゐやアがるんだ！』

『そりやアひどい』と、廣岡はかの女に對する辯解の意味で叫んだ。『あまり、君のは臆測だよ。』

『おめへは一度惚れた因果でそんなあめいことを云ふが、な――』

『何も惚れたんぢやアない、冗談を云つて見たのだ。』

『へん、今更らそんなことを！まア、今に見てイな、きツとあのあひの子と衝突するから。』

『…………』定一郎は苦笑しながら傍聽してゐて、さてはよりも選つて品性の下劣な人間どもが社へ集つたものだと思へた。志田に就いて云つても、こちらが向ふのいい點にばかり同情して行つたので惡い方面に對する臆測を一時忘れかけてゐた。そして現になほ、畫家が時の調子に乘つて面白半分にあア臆測したり斯う斷定したりする曖昧な言葉を、そツくり事實とは信用しない。が、たツた僅かの日にちを同じ社で勤めたと云ふばかりで――或はその間に私かにどんなところへつれ立つて行つたことがあるか分らないけれども、――こんな劣等な廣岡と結婚しようかと一時でも考へたのが果して實際なら、もう、餘ほど長らく生活に勞れた女で、少しでも手頼れる男でありさへすればそれにくツつかうとしてゐると見なければならぬ。それには先づワーレンハイトを當座の『資本』として捕へて置いてと云ふやうな考へが、かかるすれからしの女には、而も外國崇拜の女には、出ないとも限らない。今では知らぬが、昔の宣教女學校に收容される女學生などには、早く西洋人と結婚したいとさへ希望する田舍ものが多かつた。こんな、若い時の自分の周圍のことまでも思ひ出されて、渠は自分に對するかの女の慣れ〳〵しい〈特別な仕うちや口ぶりにもすべて一々かかる意味があつたのか知らんと考へると、また自分をのぼせさせるやうな一種秘密の反感が生ぜざるを得なかつた。そしてこの場の人々が皆かの女に反對してゐるのを幸ひに自分の心を許して自分の本意をほのめかした――もちろん、自分が入社する以上、首を切るのはお前等ばかりでない、かの女をもだと云ふことも他日渠等に思ひ出さ

せて、自分に對する怒り若しくは恨みを少しでもやわらげることができるつもりでだ、』通辯を置く以上は、君、社にかの女の必要はないやないか？』

『そりやア、さうだ』と、畫家はその意を得た如くうなづいた。廣岡も亦贊成した。

かう云ふ話の經過に依り互ひに一つの一致點に到着したからでもあらう、それに醉つて來てもゐたから、畫家は

『一つ目出たいところを、短く』と云つて、謠ひの『猩々』を謠つた。それから、端唄や都々逸もやつた。

あつて欲しさうに思はれてる三味線も、こちらは貧乏の爲めに數年來おほ行李の底にしまひ込んであるのを出せば出せないこともないが、——そして妻の絲で一つ久し振りに意氣なところを聽かせて渠等を驚かしてやらうかとも思はないでなかつたが、——あすにも首にするもの等に對しては、それも馬鹿々々しかつた。

七

書き改めて或友人にちよッと見て貰つた契約書には、俸給を毎月漸進法で行くことの代りに五拾圓と定め、社の取り引きする銀行を東京に於いて有し、主任の俸給をも一定して私經濟を分離させ、純

利益の四分を定一郎は俸給の外に受けることにした。自分が支配人になることは以前から動かない條件にして。

これを持つて二日の朝、社へ行つて見ると、ワーレンハイトは不斷とうツて變はつて不興がほであつた。約束通り横濱から人が來る筈なのを、ただ行けないとばかり通知があつたからであらう、そしてじれ氣味で斯う云つた、

『一體、君はどうすればよいのだ――本社でいよ〳〵金を出さぬとすれば、別に資本家を見付けなければならぬが？』

『君は兩天秤をかけて別に資本家を發見してあるやうに云うてをつたが』と、定一郎はざツくばらんに出た、『さうでないのか？』

『實は、まだで――君が一つ周旋して見ないか？』

『………』自分で周旋する位なら、こんな信用のない外國人のしたなどに就かないで、この事業を獨立經營して見せるのだ。

『僕にこころ當りがないことはないが』と、ワーレンハイトが云ふのを輕く聽き過ごして、こちらはこちらの都合いい方へ持つて行つた、

『では、僕があらたに支配人になるからと云うて、直接に横濱へ行つて、挨拶がてら本社の人に會う

てやろか――君のやうに無方針では駄目だから、組織立つた計劃を示めして？』

『さうして呉れると結構だ。君によつて既に松竹や小林興行部へも關係が附いたことは、本社へ知らせてあるのだから。』

『では、これから直ぐ行つて見よう』と、定一郎は主張したのだが、どうした理由か、主任は考へ込んでたあとで明日にして呉れろと賴んだ。

三日になつて、渠は家から直ぐ横濱へ出向いたところ、ワーレンハイトは渠を出しぬいて前日に來て渠のことをいろ〳〵中傷してあつた。渠は一たびは本社の人に向つて怒つたけれども、なぜワーレンハイトが主任の資格甲斐もなくそんなことをするのかを考へて見ると、つまり、こちらがワーレンハイトよりも信用を得て本社と直接に都合のいいことを取りきめられては困ると思つたのらしい。ここをよく云ひ開らいてお互ひに利益ある策を發議して見たのだが、さきは矢ツ張り西洋人のことで、先入が主となつてか、本社は殆どこちらを相手にしなかつた。

あまりに業が煮えるところから、渠は最後にワーレンハイトの獨探事件を指摘すると、本社でもまんざらそんなうわさを知つてないでもなかつたので、結局ワーレンハイトに今までは本社の名を貸したものの、今後は手を切つて、横濱と東京とは全く無關係になつたことが渠に分つた。

『まんざら無駄足でもなかつた、な』と云つて、渠は妻の忠告をも容れ、直ぐ翌日から別方面の開拓

をすることにした。さきの無代新聞の計劃は相談相手の印刷屋が突然相場で失敗をした爲めにおじやんになつたその代りに、今回のことに奔走したところから認められ初めて、都合によれば來ないかと云はれてる〇〇興行部の支配人（アメリカにゐた時に知り合ひであつた）に近づいて行つた。矢ツ張り、活動寫眞應用の廣告を興行部でもいいと云ふ意志をこちらに見せてるからだが、いよ〳〵それで身がきまりさへすれば、そこでもツと大きなことをする見込みがあつた。

けれども、渠はその興行部の主人が關西へ旅行してゐるのでまだ直接に會へないでゐるうちに、かの橫濱行きから五日目の一月七日の晚に、突然また志田さんが尋ねて來た。そして恨むやうに、

『どうして社へいらツしやらないのです』と云ふから、實は、斯う〳〵云ふわけで不愉快でもあり、又どうせ見込みもないからと說明した。

『男の世界は×××社ばかりでありませんから。』

『そら、さうでしようけれど』と、かの女もこちらのいや味を解したらしく苦笑して、ちよツと寂しい顏をしたが、――そしてそこに生活にやつれた影を隱し切れなかつたが、――『村木さんも廣岡さんもあんたの御意見通り出されました、わ。』

『いつ？』

『けふ』と云ふかの女の返事にかの女自身はまた勢ひづいて渠の注意を引きつけた。『それでワーレン

ヘイトさんの依頼でまたお宅へよせて戴いたのですが、な——』これからはお互ひに水入らずに勉強するから入社して呉れろ、契約書の調印も來次第にすると云ふことづてであつた。

『けれど、横濱本社の背景が無くて、ワーレンハイトだけで舞臺が持てましようか？』

『まア、さうおツしやらないで——どうぞわたしを助けるとおもて。』

『そら、仕事としては見込みのないことはないさかい』と、いや〳〵さうに承諾の意を示めした。それから前月の俸給は皆に渡つたかどうかと立ち入つて聽いて見ると、半額しか出なかつたさうだ。それを廣岡と村木とが團結して無理に請求した爲めに衝突し、追ひ出されてしまつたのだ。して見ると、あながち定一郎の意見を用ゐて解職したわけでもない。

『まア、承諾していただいて、わたしも安心致しました』と、かの女は自分ばかりの社であるかの如く云つてから、自分の身の上ばなしに移つた。母がひどいヒステリアの爲めに娘をいつも虐待しようとすること。神戸にゐる兄は因業で妹の相談に乘つてくれたことがないこと。ブラジルに行つてる兄は時々小使ひを送つてくれるが、その代りこちらからも相當の物をそれに對して返禮してゐること。一緒に住む婦人は自分の友人であるけれども、なか〳〵我利々々亡者であること。女と云ふものはどうも淺墓で、友人同志でも云ふべきことも云はないで、かげでばかり惡口を云つてるが、自分はそんなことをしないと云ふこと。すべてかの女の云ふことは自分のいいことばかりで、誰れにでもある失

敗や缺點などはこれを反省して見たことがあるかどうかも分らないほどなので、これを聽かせられた定一郎は私かに意地惡く出て、

『もう出してしもたんやさかい云ふてもかまはんでしよう、村木君はあんたとワーレンハイトとの仲を疑つてましたが――。』

『そんなこと！』かの女は顏を眞ッ赤にして少しからだをあとへ引いた。その樣子は案外に無邪氣であつたので、渠のかの女に對する讒侮的な疑問や斷定がその場に全く消え去つたやうでもあつた。下劣な人間などと共に人を臆斷したりしたのが渠に悔いられた。そこへかの女は言葉をついで、『若しわたしが西洋人と結婚したかつたら、ロンドンで何にんも申し込みがござりました、わ。』

『さうでしようとも！』但し、博覽會の番人や小使ひなら、ワーレンハイトよりも一層ひどい男どもであつたらうから、それを拒絕したのは餘り手がらにもならぬと、渠には思へた。そして多少は自分のうぬぼれから判斷して、自分に若し野心があらば、今夜のやうな時がどこかへつれ込んで見るに最も便利な氣ぶんをかの女は持つてるだらうに、と。

渠は矢ッ張りかの女を見るのを一つの樂しみにして社へ初めて社員の一人として出たのだが、ドアを叩いて直ぐうちへ這入つたところ、直ちにわれから顏を赤らめないではゐられなかつた。びッくりしたかの如くワーレンハイトが志田のそばから立ち離れ、志田がまた急いでそれに脊を向けて椅子に

着いたその刹那の光景を目撃したのである。

『ヤア、三角』と叫ぶが早いか、ワーレンハイトは自分の椅子へ行つたが、きまりの悪かつた餘波の爲めか、それ切り言葉を出さない。

『………』定一郎も暫らく默つてゐて、今見たことを目の感覺からぬぐひ去らうと努めた。

志田さんはせツせと小さい紫の風呂敷包みを包むと、それを以つて椅子から立つて來て、恨めしさうなその目つきを少しも當の相手には運ばないで却つて定一郎に向け、つんけんした日本語で、

『手を引ツ張つたりするのですもの、わたしは歸ります』と云つた。

『………』定一郎はなほどう言葉を出していいか分らなかつた。多少氣を兼ねてワーレンハイトの方を見ると、これもなほきまり惡さうに苦笑をばかりしてゐる。この間は極僅かであつたが、そのまにかの女の袖のさきがひらりと定一郎の椅子に當つたかと思ふと、かの女は勢ひよく出て行つてしまつた。渠は、若し自分が無理に引きとめてやれば、そして主任に以後そんなことはせぬと云はせるやうにすれば、かの女も必らずその場に面目が立つと見てとどまつただらうにと考へた――ばたりと輕い音を自分の椅子に立てた袖のかげになほかの女の未練か訴へかが殘つてるやうだ。けれども、自分にはかの女を引きとめるだけの落ち付きがまだ出てゐなかつた。そして直ぐあとから自分の落ち付きが出た時には、こんな西洋人に多少でもいたづらの餘地を與へるやうでは日本婦人の耻辱だと云ふ心が

自分の女房にでも對して云ふかの如く動いてゐたので、ええツ、自業自得だ、うツちやつて置けと云ふ氣になつた。蓋しかの女がこれツ切り出社しなければ、かの女としては却つて頼母しく見上げた女であらうし、こちらにしてはまた、これからの仕事の經營上、それだけの費用が省けるのであつた。

斯う考へながらも、一方にはまた失敬なことを見せた主任を叱るつもりで、

『もう、來やせんぞ――あんなことして！』

『なアに』と、ワーレンハイトは今度は無遠慮になつてにや〳〵して、『君に見られたから體裁を作つて行つたが、二三日ほうつて置けばまたやつて來る。』

『………』定一郎にはワーレンハイトがどう云ふ根據があつてさう云ふのかいろ〳〵に考へられた――果してかの女はワーレンハイトに背められてるからだらうかとも。が、さう信じたくないので、わざとにも反對に、『來るものか？』

『では、賭けようか？』と、からだを乘り出した。

『まさか、競馬ではあるまいし』と、定一郎は笑つてのけた。そして、今の妻がまだ藝者であつた時丸髷にゆはせてこれを一緒につれて、店の用事の爲めに大阪から九州へ行つた途中で、ちよツと博多にとまつて競馬の賭けをやつて見たところ、直ぐ二百圓ばかり儲けてかの女の指輪にしたことを思ひ出した。そしてこの男も生意氣に紳士らしく賭けることを知つてるかと云ふことが定一郎の話を馬

ことに移らせた。

すると、ワーレンハイトも得意になつて、ジヤヴでも競馬が盛んであつたことを語つた。そして契約書の調印はわけなくすんだが、さて、すんで見ると、餘り効能のあるものとも思へなかつた。定一郎が本氣になつて働かうとするには、重大で且最後の條件としてワーレンハイトの方から勝手に解職する時は違約金としてその月から向ふ二ケ年の俸給を一時に支給すべきことが書いてあるが、こんな問題が萬一裁判事件として持ち出された場合にも、ワーレンハイトは相手とするに足るべき人格ではないのだ。

八

〇〇興行部へ雇はれる問題をも全くはうち切らないで、定一郎は兎も角×××社へ毎日出勤することにきまり、自分で東京各區の活動小屋をまわつてわたりをつけて見ることにした。が、小屋借用の爲めに要する前金が社にないので、その第一日から失望した。自分がさきに外交員として取つて來てやつた廣告も、豫約前金を取つて置きながら、まだ一つも社は映寫させてゐなかつた。それに、また、豫約前金を使ひ込んだ外交員もあるので、

『こんな不始末な商買があるか』と、渠は一方に主任をなじつた、電話一つないのだ。いや、あつた

のだけれども、使用料が拂へないので取り上げられてしまつたのだ。

先づ、新らしい外交員の募集廣告を出すと、その朝、志田さんが出て來た。ワーレンハイトが云つた通り、例の事件があつた日から丁度なか二日を置いてだ。

『廣告が新聞に出ました、なア』と、しやア〳〵してゐる。

『二度目の應募ですか』と云つてやりたかつた。

新たに募集に應じて來たものが十五名ほどあつて、そのうちで人物もよく役にも立ちさうなのを五名採用した、そのうちにお茶の水出の女で、もう、三十五だと云ふ後家さんもあつた。別にまた履書には女子大學出と書き出してある二十三四の若い女があつたが、定一郎はこれをはねようとしたら、ワーレンハイトは渠をわきへ招いて、

『僕の小使ひから手當てを出すから、あれは採用して置いて吳れ』と云つた。そしていつのまにかそれと直接に妥協して、翌日には私かに食事を共にして社へ歸つて來たのが分つた。で、名を出してある保證人に就いて聽き糺して見ると、そんな女は知らぬと云ふのだ。それで定一郎は二日目に追ひ出したが、それも背の低い丸ぽちやの女であつた。

その翌日であつた、あいの子エリスが顏いろを變へて事務所へ飛び込んで來た。惡く取れば、主任は志田さんを家に來たらしめず、そしてエリスを社へよこさず、この兩人に對して弱みがある爲めに、

この兩人の出くわすのを恐れてゐたのか？エリスがここへ來たのは初めての筈だが、室へ這入るが早いか、ワーレンハイトに飛んで行つてその胸ぐらにしがみ付き、
『あなた、惡魔！あんな事務員に結婚して！』
『………』ワーレンハイトは腰をかけたまま押さへられてゐたが、兩手でかの女の手の握りをもがうとし、靴ではかの女を蹴ると同時に『何を云ふのだ』とわめいた。
『いいえ、うそついても駄目――これを御らん！』エリスは泣きながら兩手を放して、ポケトから一枚のハガキを出して渠に突きつけた。
　渠にはそれが珍文漢であつたので、定一郎に渡して譯させた。殆ど全部かた假名で書いてあつて、左の通りだ。
『オマヘノ　テイシュ　ハ　社ノ　ヲンナジムヰン　ト　クツツイテル　ノ　ヲ　知ラネイ　カ？
マヌケ　女郎！』
『一體、誰れが書いた』と怒りながら、ワーレンハイトは渠に尋ねた。
『さア――』きッと村木のいたづらに違ひないとは思つたけれども、渠はさう云はないで、『芝の消し印だが、差し出し人の名はない。』
『多分畫家だらう』と云つて、主任はその方をばかり憤つてゐるのか、手を組んだまま物を云はなか

つた。その間にエリスは渠の膝に取り付き、自分はお前の爲めにこんな身持ちになつてるのにと云ふやうな恨みごとを重ねた。

『………』定一郎はかの女を初めて大森で見た時、へんに腹の不格好な女だと思つたが、その理由を今聽いたことで合點した。

『わたしは何もワーレンハイトさんと關係などありません』と日本語で云つて、志田さんが溜りかねたやうに椅子を離れて行つたので、定一郎はふとその場をはづす氣になつて、ドアの外へ出た。そして廊下を運動しながら耳を傾けてゐると、二人の女の激して云ひかはす聲はしてゐたが、何を云つてるかはツきりしなかつた。

『………』渠は何よりもその場での志田さんの樣子を見て置くべきであつたと思ひ返して、再び這入つて行つた時には、もう、かの女は自分の椅子に戻つて何を云はれても知らぬ風であつた。そしてエリスは定一郎の椅子をワーレンハイトのそばへ持つて行つてそれに腰かけてゐた。そして志田さんの方を見て、日本語で、

『わたし、利口よ。日本人、馬鹿。日本人、いつまでも狹い國に暮してる。わたしいつからでも外國へ行つて暮します』などとしやべつてると、ワーレンハイトはまたそれが何を云つてるのであるか分らないので、ただエリスの顏をばかり可愛らしさうに見てゐた。

定一郎は應接用の椅子を持つて來て席に着してゐたが、やがて主任とエリスとが出て行つたので、志田さんと二人で中食の時間にした。箸を運びながら、
『あんたも丁度惡いとこへ來ました、な――今一日後れたら、こんなことはなかつたのです。』
『さうです、な。けれど、わたしも社の爲めにさう休んでをられん思ひましたので――。』
『さう、さうでしよう』とは答へたが、定一郎にはかの女が來てくれない方が社の爲めであつた。その上、先日のことに就いては恰も初めから何もなかつたかのやうにかの女は一言も云はず、却つてワーレンハイトに早くいい奥さんを持たせてやりたいなど云つて、
『そしたら、エリスなどはいつでも手を切ると云ふてます』と語つた。
『では、あんた、ワーレンハイトにあのをんながあることを前から知つてましたか?』
『そら、知つてました。』
『………』どうしてそれをこれまでにかの女は口に出さなかつたのだらう?さきにワーレンハイトとの疑ひを定一郎の前で解くなどには最もいい反證であつたのにと、渠には不審がまた一つふえた。が、アメリカの公園などへ行くと、結婚約束をした男女が幾組もベンチに腰かけて抱擁や接吻をしてゐるのをよく發見する。それでもいよ〱結婚するまでは女が男にからだを自由にさせることは一般にないやうだ。わが國でも、この頃は、或人の記事によると、二十日も一緒に鎌倉へかけ落ちしてゐなが

ら、まだ女が男に身を許さぬ爲め喧嘩になつて別れたと云ふやうな事實がある。この女もそれだけの自覺とそれに對する覺悟とは少くとも持つてゐるのではあるまいか？

『「わたし利口よ、日本人馬鹿」ツて』と、志田さんは口まねをして、『あんな無教育で下等な女ですもの。』

『小笠原の產なら、矢ツ張りあいつも日本人やないか？』

『そやから、わたし、日本人はきらい！』

『そらいきまへん。』定一郎は斯うさえ切つた。別に愛國者の如き熱を以つて憤慨するまでもないがかの女の斯くもあまりに崇外的に自國を忘れたやうな云ひ振りを指摘するつもりで、『あんたも日本人僕も日本人ですよ。』

『そらそやけど、な――』かの女はちよツときまりの惡いやうすをした。

が、渠はそれに少しも同情がなかつた。英語を知つてるのを人間の受けるべき敎養の全部ででもあるかのやうに考へてる女には、とても、渠の友人の一人などが唱へてるやうな新らしい日本主義などは分るまいと思つて、渠自身は然しよく分つてるつもりで、これを反語にしてとう／＼斯う口へ出した、

『いツそあんたが思ひ切つて細君になつてやつたら、どうです？』

『わたし』と、かの女はこちらを圓い目で見張つて、憤りもできず白狀もできずと云つた風で行き詰つた。間を置いて『ワーレンハイトと云ふ人は、初め會うた時はさう人格が惡いとは思はなんだけれど――』

『………』は、はア、矢ツ張り、お思し召しがあつたのだ、な！

『わたし、若し西洋人にかたづくとしたら』と、冗談に持つて行つて、『もツと高尙な人で、而もお金のたんとある人に行きまツさ。』

『御尤も。』渠はこれには寧ろ冗談と見ないで同感した――商人の立ち場はどうしても金に歸するが、今の女どもも段々結婚に金のことを考へるほど利口になつてるのだから、畫家の今回のハガキなどは、ワーレンハイトがほんの、ただ、かの女にお思し召しがないでもなかつた位の態度を、既に關係までもあつた如く臆測して、確かにおのれの解職に對する意趣返しをしたに過ぎなからう、と。

九

それでも、註文があると、その廣告の意匠は相變らず村木を呼び寄せて書かせた。可なり骨が分つてるので上手だし、別に他の適當な畫家も――二名ばかり候補者はあつたが――いいのが見つからなかつた爲めだ。廣岡の方は、その紹介人なる牧師の新調外套をも借りツ放しにして、その下宿をどこ

かへ轉じてしまつた。

女の外交員はたツた二三日切りで續かなかつたけれども、男の方は――一名をのぞいて外は――皆辛抱して多少の成績を擧げ出した。なかには肺病豫防の目的に供する脚本フイルムや、生命保險勸誘のフイルムの註文をも持つて來たものもあるが、まだ社で引き受けるまで手が廣まつてゐないので、これは定一郎自身の仕事にして別箇の儲けをする爲めにも、渠は早く〇〇興行部へ入ることを望んだ。そして同部の主人にも會見したが、一方に兎に角職ができてるので安くは動く氣がなかつた爲め、急には話が運ばなかつた。

渠は晝間は社に在つて外交員どもの應接に努め、夜になると、諸方の活動小屋をまわつて、約束ずみのところでは社からの廣告プレイトが映寫されてゐるかどうかを確め、まだ約束ができてないところではその小屋ぬしに會つて今後の相談をした。そしてその爲めに時には横濱のおもな小屋へまでも出かけた。必要な場合には、ワーレンハイトをもつれて行つた。

或小屋として、その小屋ぬしは約束の前金を取つて置きながら、興行者若しくは映寫技手の故意やづぼらから、一つもこちらの渡したプレイトを映寫してゐないところもある。すべて芝居者同樣の人間を扱ふのであるから、手にもをへないし、まかり間違へば腕力沙汰にもならうが、定一郎には自分の體格に於いて、また曾て桑港からアラスカの鮭取り人夫をつれて行つた經驗に於いて、それ位の覺

悟は朝めし前のことに思へた。

　それでも自分としては無事に一月、二月も過ぎ、三月も半ば頃になつた時、突然淺草六區に於いては活動の幕合ひに廣告映寫をすることが不法でもあり、不衛生でもあると云ふ警察の干渉が來た。直接に打撃を受けたのは定一郎の社ばかりではなく、他にできた競爭者も打撃を受けたのであつた。

『困つたな、困つたな』と云ひつづけてゐたワーレンハイトは、或時心配と憤激とのあまり、斯う云つた、『どうして日本人は干渉好きだらう? 飮む藥に毒を入れ、張る膏藥に瘍のばい菌でも入れて、官僚どもを無い物にせよ。』

『………』意外のことを聽いたので、定一郎は少しぎよツとした。が、志田さんや少々英語も分る外交員のゐる手前、外國人の無責任を押さへる爲めに、『西洋の社會主義かて、あれを國家政策として應用した時はすべて干渉になる。』

『然し、官僚的はよくない。』

『でも、そんなことを誰れがやる?』藥りや膏藥に毒を入れることをだ。

『獨逸人なら、日本でもやる、さ。』

『獨逸人!』定一郎は仕事の急がしさとをんな事務員に對する興味との爲めに暫らく忘れてゐた獨探の件を、ここに、思ひ出した。そして言葉の行きがかり上、『では、君も獨逸人か』と追窮した。

『いいや、いいや、僕は和蘭陀人だ！』その打ち消す態度があわててをかしかつたので、はたのもの等は吹き出した。

『矢ッ張り獨探でしようか』とは、志田さんがあとからこれに云ひ及んでの質問であつた。

『それにしては別にあぶく錢をもらつてるやうすもないし、社がこの貧乏では』と、定一郎は答へた。

『けれど、何か成功のあげく貰ふと云ふ約束で、わざと見すぼらしい身なりをして嫌疑を避けると云ふこともありましよう——？』

『そら、ないこともなからうけれど——獨逸人たることは或は確かかも知れん。』

社員がこんな心持ちになつた頃、或外交員が子供を淺草へつれて行つたところ、矢張り廣告の映寫をして見せたと云ふ報告があつた。これが爲め、ワーレンハイトの命令で、定一郎はそれを突きとめて來ることになつたが、ただ一人では公けの證明をする場合に力が足りぬからと云ふわけで、志田さんをも附き添へられた。

かの女は最初の『相談』の時とは違ひ、おほびらに一緒に出られるのでか、いそ〳〵として從つて來た。そして先づ△△館に這入るとアラスカの雪景を映寫してゐたので、渠はかの女に自分の昔の實見をも加へて、ほんとにあアしたところだと說明した。すると、そのあとの幕合ひに果して廣告が出た。それからまた□□□館に行つて見ても、廣告の映寫があつた。ここでは、別にまた雨がはに針葉

樹か何かの立ち樹がつゞいてる道路を自動車が往復してゐるフイルムがあつたところ、今度はかの女が英國のことを思ひ出すと云つた。

『どうも敵の方のプレイトに相違ないけれど、どうしてやれるか知らん』と、渠はかの女に相談的に不審がつた。そこを見ての歸りにかの女がどこかで出し合ひに何か喰べようと云ひ出したので『達摩』へ立ち寄つてからの話であつた。

『多分出張の警察官へ賄賂でもつかうた、な。』かの女は斯う答へたが、勝手にさしみなどをも註文した。渠は然し、ふところの寂しさを感じてゐたので、さう喰べたくないからと云ふ口實で、飲みたければ遠慮に及ばぬと云はれた酒も飲まず、壽司だけですました。

かの女はこんなところへ男と共に來たのを珍らしがつてか、不斷よりもはしやいでしやべつた。そして築地の方をやめたと云ふので、

『また、口說かれたのではありませんか』と、渠はからかつて見た。それがまた圖星に當つた。

『ワーレンハイトさんが何か法螺を吹いて聽かせたんや、あんなやつに約束する位ならマイワイフ(わが妻)になつて呉れと云ふて、しまひにはわたしを脅迫するのですもの。』

『八方美人や、な――あツちからも、こツちからも?』

『わたし、矢ツ張り、西洋人はきらひ。』

『では、早う日本紳士にかたづいたらどうです？』

『どうぞお世話を』と、こちらを見ながら冗談に首をさけたが、『でも、なか〳〵ありまへん、わたしは氣ままですさかい。』

いツそのこと、新らしい女になつて——』ずツと渠は思ひ切つたつもりで云つた、『その、あんたのいとこはどうです？』

『あれはただ姉さん、姉さん云ふて遊びに來ますので、うツちやつてあるばかりですが』と、かの女は今晩に限り顏も赤らめなかつた、『お母はんはそんなことまで心配して早う結婚せい云ふてます。』

『そら、尤もです。』

『…………』かの女は暫らく無言で微笑してゐたが、突然、『あんたが奥さんがなければ一緒に南米へ行きますのに——ブラジルの兄を手頼つて。』

『…………』渠は考へて見たのである。新らしい女と云ふのは昔も今も皆こんなことを平氣で云ふのか知らん？自分の初めの妻の一友人は、かの女の最初の戀が失敗したそのあとへ行つて女房に納まり、夫婦で耶蘇教的な女學校を經營してゐた。そしてその基本金を集める爲めに亭主を殘して、定一郎が桑港にゐる時に、アメリカへやつて來た。そして一時は獨身の商人の家へ女中に住み込んだところ、その西洋人に口說かれて、這ふ這ふのていで逃げ出して來た。この時暫らく同室に置いてやつたが、

それもこの女と同樣、若しあんたに靜子さん（自分の初めの妻だ）がなかつたら、あんたと一緒になつて米國で暮すのにと云つた。本國には亭主があることを忘れたやうに。いづれもをかしなことだと思ひながら、『別々にでもえいから、行きたい、な。』

『あんたがほかに何もたべはらんのでおもしろうなかつた』と、かの女はその翌日社で不平らしいことを云つた。

『實は、マルに缺乏してをつたので。』

『そんならそれと云やはればよかつた。』

こんなことでかの女に對する渠の親しみがまた恢復した。かの女も築地を逃げ出す時、『そんならお前の男をいよ／＼獨探にしてしまふぞ』と、浴びせかけられたことを白狀した。無論、『わたしの男でも何でもないのに』と云ふ辯解を加へてだ。

『なアに、ワーレンハイトが追放でもされると、この仕事はあとに殘る僕とあんたの物です――わざわざブラジルへ行くまでもなく』と、渠は冗談まじりに語つた。そして自分で淺草警察署を何度も訪問し實際の經營困難をも訴へ、廣告映寫の禁止を解かせる運動をして見たが、無効であつた。

一〇

そのうち、渠の自宅へ思ひも寄らぬ刑事が二名もやつて來た。そして志田と云ふ女はワーレンハイトのめかけではないかと云ふことを渠に聽き糺した。で、渠はそんなことはまさか無いだらうと信ずるが、別に實際の關係があつて既に子まで孕んでるあひの子がゐると注意してやると、刑事はそれも知つてるがとのことだ。

『では、一體、あんたは何の爲めに僕のとこへ來たのです？』斯う出たには、小石川とは管理が違ふだらうが、あの淺草警察の處置に對する鬱忿もまじつてたのだ。

『…………』刑事は微笑してゐるばかりで、答へなかつた。

『多分ワーレンハイトの獨探事件でしよう――が』と、面倒臭いから、こちらから包み隱しなく云つてのけた。『それなら、或は、他人の證言を信じたことになるかも知れませんよ。あんたのお尋ねの女に結婚を申し込んではねつけられた〇國大使館員が築地にをりまして、それが志田とワーレンハイトとを關係あるやうに燒いてるさうですから。』

志田さんは志田さんで、また同じ變な者に來られ、自分よりも自分の母がふるえあがつたと、社へ來て主任や定一郎にこぼした。

ワーレンハイトも警察の手がまわつた爲めに往生したのか、分割りを高く與れるなら、社の仕事全部を定一郎にまかせてもいいがと云ふやうなことを云ひ出した。もとより望むところであるので、そ

して自分なら淺草六區を考へに入れないでもやつて行けると思ふので、定一郎はその氣になり、さうなればをんな事務員が不用になること。若し私用の通辯として置くとしても、今の俸給四十圓は高過ぎること、などを說いて聽かせた。そして自分は私かに考へて、事務所はどこかの小奇麗な日本造りへ移し、そこへ電話も持ち、自分もそこに住めば、お互ひの經濟でもあり、便利でもあるとした。が、この世界館の一室は三年契約で前金を渡してあるので、若し移轉するとしてもそれは家主が返して吳れぬことが分つた。その上、それだけ無駄になる分（殆どまだ二ケ年半もある）をワーレンハイトは自分に返して吳れろと云ふのだ。とても、手のつけやうがない。

そしてまかり間違へば、今月の俸給も取れないですむかとも思はれたし、また時節がら綿入れを袷せに質物の入れ替へをもするに小百圓かかるので、定一郎は主任に相談して、少し金を前借りさせることができないなら、得意さきから取れる金を月末まで融通してもいいかと念を押した。こちらは寧ろ正直に相談をかけたのだが、これをワーレンハイトはまた例の如く日本人の使ひ込みかと警戒したのだらう、その日定一郎から自分の手に會計簿や得意さき表を取り上げてしまつた。そして、不都合にも、

『もう、君に用はない』と宣告した。

『よし！それでは』と、定一郎も一度にむツとして、『先づ、こないだから取つて來た廣告の分割りを

よこせ――僕を外交員も同樣に見るなら、この場で直ぐ遠慮なく請求できる。』

『今、現金はない』と答へて、主任は取り合はなかつた。

『いづれ契約が物を云ふから』と云ひ置いて、定一郎はぷり〳〵歸宅した。そして妻を相談相手にして考へて見ると、

『こんな契約書は反古も同樣だ』と云つたワーレンハイトの冗談まじりの言葉が今更らの如く思ひ當つた。たとへ裁判事件には成るとしても、横濱の本社を引き入れることができぬ以上、あんな貧乏で無耻な獨り者相手は、書き棄てられた下畫の人物も同前である。それに、金の融通はとまるし、刑事はつき纒ふし、獨探嫌疑者がただわけなくいら〳〵して、ちよツと前後を忘却したのかも知れなかつた。

今一度よくわけを說いて見て、それでも分らぬなら喧嘩を辭せぬつもりで、その翌日も出社した――簿記の棒を――短劍か尺八がはりに――いざと云ふ場合の用意に腰に差し込んで。

すると、先づ云ひがかりを初めたのは意外にも志田さんであつた。

『三角さん』と、かの女は出しぬけからその聲をつんけんさせて、恨めしさうにこちらを見ながら、

『あんたはわたしの俸給が高過ぎるとおつしやいました、な――？』

『…………』渠もかの女の顏をわざとじツと見つめて、暫らく返事をしなかつた。そしてこの女がさき

に『あんたに奥さんがなかつたら』とか、『あんたは着物の着こなしが一體に上手やけれど、殊に外國へいて來た人だけに洋服が誰れのよりも似合ひまッさ』など云つたかと考へると、異樣な感じがした。それが、畜生！苟くも支配人の任に當つてたものに反抗がましいことを云ふならもう、何も遠慮するには及ばなかつた。それから立てつづけに、『僕が社員を左右でける間は、社員の俸給も僕の意志に在ります。あんたを前々通りに使はせてるのは寧ろ僕の恩惠です。社の經濟がいよ〳〵許さなくなると、無論、僕自身よりさきにあんたを解職します！』

『それだけ伺へば、もう結構です』と、かの女はつんとそッぽうを向いてしまつた。

この權幕を見て取つたからでもあらう、ワーレンハイトは却つて下手に出て、

『今少し待つてくれ、君の俸給も分割りも出すから』と云つた。

以前通りには相談も受けず、用を命じられもしなかつたけれども、定一郎は解職を認めず、この月の俸給全部をも取つてやるつもりで、その翌日も晝から出勤した。

すると、例のあいの子エリスが來てゐて、靴屋を自分の前に引きつけ、自分の註文する靴の型をきめてるところであつた。かの女は足が大き過ぎてどの型も合はないのにじれてしまつた。

『どうして日本人、できそこなひの物ばかり穿きます？ええ、日本人は？』斯う云つて、床に兩膝を突いてる靴屋のおやぢの肩に片手をかけ、思ふさまおやぢをゆすぶつた。おやぢは困つてあたまをか

いたが、
『それでは別にもツと大きなのがあるかどうか、同業者をまわつて見つけて來ます』と約して、出て行つた。
『…………』ワーレンハイトはそれをおもしろをかしくながめてゐる樣子であつたが、初めて定一郎に挨拶でもするやうに、半ば微笑しながら、『足もからだもでかい女だから、なア。』
『…………』定一郎はただにが笑ひを以つて答へた。
やがて一時間ばかりして、渠はけふはこれで歸らうと用意しかけた時、靴屋のおやぢが立ち戻つて來て、どうも濟まないが、奧さんに向きさうなのがないから御免を被りたいと云ふのであつた。
『馬鹿、このおやぢー』エリスは眞ツ赤に成つて渠を打つ眞似をした。それでも渠が別に怒りもしないのにつけ上つて、かの女は最上權で命令するやうに、『これ位の物ができないなら、靴屋をおよし！わたしはお前を呼びよせたからは、四十圓でも五十圓でも、どうしても製造させます！』
おやぢは止むを得ず引き受けて、今月中にこしらへることにさせられた。が、靴ばかり立派になつても、あの相變らずの不潔な衣服ではどうすることもできないではないか？然し、それよりももツと大事なことには、今月中と云つても、もう、三月の末日は二三日に迫つてるのだから、定一郎にはそんな金がどこから出るだらうと思へた。社としては僅かしかないと思はれる月末の集金が當てにされ

てるのではこちらがあぶなくなるので、いツそ先きまはりをしてやれと決心した。
もう再び來ないつもりで、渠はその翌日皆の出社前に事務室に來たり、自分の正當に取り扱つてた必要書類と二枚の請求書とを懷中して、その歸りに自分のこころ當りを二ケ所集金した。そして歸宅してから直ぐワーレンハイトに手紙を書き、某々店の集金は自分ですませたが、これは自分の三月分俸給とお前が違約の爲めに契約上こちらへ拂ふべき分のうち金にして受け取つて置くとした。
その翌日、ワーレンハイトはエリスを道案內として飛んで來た。そして俸給の分は取られても仕かたないが、それ以外は取るなら裁判に出せ、その代りこちらは先づ新聞に廣告して、三角定一郎なる者は不都合のかどあるを以つて解職したと公けにするからと、半ばはうち解けて、また半ばは威すやうに說いた。
『どうせ平氣で破約するやうな君等を相手にしたくないから』と云つて、定一郎はおとなしく俸給以外の金と書類とを返してやると、渠等二人は乞食のやうに喜んで受け取り、
『實際、金がありさへすれば、さう君にも迷惑をかけなかつたのだが』と、ワーレンハイトは白狀した。そしてなほ附け加へたによると、エリスが案外やくに立つから、あのをんな事務員を解職するにきまつてるのであつた。
『然し、どうせ君等だけでやれせんぞ』と、最後に簡單にだが、定一郎は渠等の運命を呪ふやうに云

つて聽かせた。そしてあの大きな靴がエリスにできる日を最後として、金などはすべて借り倒したまま、逃亡するのではなからうかと考へた。

一一

それから四月に這入つて、兼て黑表に載せられてたワーレンハイトなる者が獨探として國外に放逐されたと、新聞に出た。

けれども、まる四ケ月あまり渠に接近してゐた定一郞には、渠が實際に獨探らしいところがあつたとは、どう考へて見ても云へなかつた。疑つて問題にすれは、獨逸人なら藥に毒をまぜて置くと云つたことだけがそれで、現にアメリカでそんな獨探的所業が發見されたことを新聞電報で讀んだ。が、この嫌疑者に限りそんなことをする餘地があつたとは思へないので、多分、氣の毒にも、あの〇國大使館員の見當違ひの嫉妬に犧牲となつたものだらうと、定一郞は斷定した。

兎に角、渠はかかる嫌疑者に使はれたのであり、またワーレンハイトが各關係者へこちらの惡口を云つてまわつたに相違ないそのあとのことであるので、自分としては仕事の方面を變へて、近頃盛んな船のブローカーにでもならうかと考へながら、まだ聯絡のついてた〇〇興行部へも出入りすることを自分からさし控へた。

そしてちよツとこゝ暫らくひまになつた或朝を、家のまわりの掃除をすませてから、何かいい職業の廣告がないかと時事新報をあけて見ると、先づ目に着いたのは左の求職廣告だ、

『高女卒業、外國歸り婦人、家庭教師又はピアノ出教授を望む。』

『きツとこれは志田さんやぜ』と、渠は自分の妻が飯をたいてるのに說明して聽かせた。

『人を呪へば穴二つだツさ。』

『無論自業自得やけれど、あの人も斯うなると可哀さうや――困つてるやろ。』男は男並みに、女は女並みに、それ〳〵獨立して金を儲けることのなか〳〵六ケしいことが渠に思ひやられた。

二間ばかりの生け垣を僅かに天然の縮寫と見て喜んでるやうな生活からは、かの女が英國の立派な並み樹街道を活動寫眞でうらやましさうに思ひ出したのも尤もだ。渠自身もまた米國の粗大な天地に獨りで放浪してゐた時のことを考へると、久かたぶりでまた所謂人生の寂しみを親しく感ずるけれども、米國にゐた時にはまだ今日の如き責任ある苦勞はなかつた。

――(大正六年九月)――

華族の家僕

『ちよツとした華族さんで家僕を一人入用だと云ふのですが――』

『そりやア面白い』と、木山は答へた。どういふ華族か知らないが、その殿樣に一つ忠勤を抽んでて見ると云ふことが、渠自身の持つて生れた侍かたぎを喜ばせたのであつた。舊藩に離れて出京してから、市中に私立の小學校を開らいたり、その地所を賣つてから藥り屋を開業したり、また郡部の小學校に奉職したり、さてはまた恩給を貰ひながら、世に超然として納豆屋になつて見たり、出來損ひの息子が今戶燒き配附の仕事を初めたので、その燒き物の荷車を息子と共に引いたりして來た。が、もう、からだが力わざには續かなくなつてゐたのだ。

牛込だと云ふので、慶庵の主人に伴はれ、電車に乘つて行つて見た。すると、お屋敷の御門に奥平と云ふ表札が出てゐた。

『待て、おい』と、渠が慶庵が先に立つて這入つて行くのを呼びとめ、『これは――〇洲の奥平さんぢやないのか？』

『さうでしよう。』

『いけねい、いけねい――おいらの主人筋だ！』と、その儘少しあと戻りをして、黒板塀のあたりで慶庵を待つ事にした。

やがて慶庵がよぼ〳〵した老人を連れて出て來たかと思ふと、その老人はむかしの同僚であつた桑木平左衛門氏だ。

『やア、誰れかと思つたら、木山氏か？』

『………』きまりが惡かつたので、少し顔が赤らんだやうであつた。『實は、ね、以前の御主人だから却つていけないツて云つてたところだ。』

『なアに、構やアしない。却つてむかしに立ち戻つて面白からうツて。僕は家扶をしてゐるのだが、ね、家扶だツて家僕だツて少しも違やアしないよ。』こちらの上位に立つのを威張つたと云ふよりも、むかしの呢懇をその儘に日頃の不平でも云ふやうに受け取れた。

『それもさうだが、――餘り落ちぶれたと思はれちやア――』

『まア、いいから、來給へ』と促されたので、澁々ながらついて行つた。慶庵はどちらかと云ふと、呆氣に取られてゐた。

今、殿様は御留守だが、奥様がゐられるから、早速お目に懸つたらと云ふ事で、年にも似合はず恥

かしい氣がしながら、そのお居間へ案内された。大小を差してゐた頃の四角張りを俄かに恢復して、兩手を開らき突いて、張つた肱を折り曲げて方式通りのお辭儀をした。再びあたまを擧げた時は、久久で御無事を拜する嬉しさもまじつて、眼には涙がしよぼつくのを覺えた。
『お前が木山太郎左衛門であつたか、ね？』
『はい。』またあたまを下げたが、涙がぽろ〳〵とお疊に落ちた。
昔と變つて、まるでお言葉までが直になつてをられるのがお痛はしかつた。あたまを擧げないで、
『その名乘りの』と、むせばうとする聲をやツと呑み込んで、『正純を今もわたくしの名に致してをります。』
『木山正純と云ふのだ、ね？』
『はい。』
『顏をあげて御覽――わたしも變つただらうが、お前は隨分變はつた、ね。――もう幾つだえ？』
『……………』兩のこぶしの脊中で手早く兩眼の涙を拂ひ、こぶしの根のところでちよツと鼻さきを撫でた時には、多少笑ひの餘地が出來て、『もう、七十五歲でございます。』
『それにしちやア達者さうだ、ね。』
『はい、齒もまだこの通り』と、指先きで下口びるを開らいて見せて、『揃つてをりまして、一枚も缺

けたのはございません。腕もこの通り確かで――まだ〳〵若い者にも負けないつもりですから――』
『まア、まア、長生きをしてゐたから、二度の目見えも出來たのだらう。これも緣だから、今後しツかり働らいて貰はうよ。』
『はい、かたじけなく存じます。』なかなか物が分つて、その上にも打ち解けてゐられるのに、またありがた淚がこぼれて顏を上げることが出來なかつた。
『だアれ？』ぱた〳〵と小さな足音がしたかと思ふと、奧樣のそばに子供の聲だ。
『……………』ふと氣が變つたので直ぐ顏を上げて見た。
『坊やの好きなぢイやの代りだよ。』
『ぼつちやまでいらツしやいますか？わたくしは、はい、木山正純と申して、ぼつちやまのお家の家來――だから、またぼつちやまの家來！――さア、ちよツとこちらへいらつしやい。ぢイやがだツこをしておあげ申しましよう。』
『きたないから、いや！』
『左樣でございますか』と云つて延ばしてゐた兩手の袖を見ながら引ツ込めるより仕方がなかつた。母にしツかりつかまつて、こちらをじツと見詰めてゐる兒をなか〳〵意地が惡いやうに見た。が、その日から月五圓の手當てでここに勤めることに取りきめた。

もとから小さい大名であつたので、子爵とは言ひながら、さう富有な暮しでもないやうに見えた。玄關に向つて右手に當る四疊半を渠は自分の部屋に與へられたが、押し入れも戸棚もないので、自分の持つて來た身のまわりの物は凡てこれを一と包みにして狹いむき出しの棚に揚げて置いた。貸し與へられた夜具も亦片隅へ積み重ねて置くより外に仕方がなかつた。

その室は一方に障子もなく、直ぐだだツ廣い臺所へ隣つてるので、飯炊きのお政と云ふのがこツそりぼつちやまに何か喰はせて、その機嫌を取つたり、別な年下の女中をいぢめたりするのが、用事もなく引ツ込んでゐる時には能く見付けられた。

このお政は、もう暖いからと云つて、臺所の入り口の障子を明け放さうとする。こちらはまた、まだ寒いからと反對して、それを締めて置かせようとする。これが原因で二日目から二人の間に衝突が初まつた。それでも、どうせ無學な女の事だらうと成るべくこちらで蟲を押さへて、水ツ鼻の出勝ちなのを啜り込みながら、庭のごみツぽくなつてゐたのをただ一日で片付けた。

庭の掃除と湯を立てることがおもな仕事に定つたのである。殿樣が今日も亦どこかの夜會に出られるので湯は四時頃に立つた。殿樣のお次ぎには、奥樣とぼつちやまとが這入つたが、

『ぢイや、斯う熱くしちやア坊やが這入れないぢやアないか、ね』と小言を云はれた。もツとうめろ、もツとうめろで、バケツに三杯も水を入れた。すると、今度は小間使のお清にぼつちやまのおもちや

を何を持つて來い、かを持つて來いで、ひとごとながらそとで聽いてるのもうるさかつた。氣儘な子がやツと出たあとでは、果してもツと焚けと云はれた。釜の口が外に附いてるので、それからの樣子は少しも分らなかつた。隨分長い間かかつてから、漸く明きになつたので、そのあとへ大きな方のバケツに一杯水を持つて行つて置いて、外の用をしてゐた。

直ぐ日は暮れて、奥の御食事が濟んだらしい。お下がり物をお政の指し圖で女中ども三人に分け、こちらの膳には奈良漬けが四五片置いてあるに過ぎなかつた。

『この飯焚きめ！餘程喰へない女だ、な』と思つたが、まア、辛抱する事にした。ところが、食事半ばに湯殿の方へ呼ばれて行つた。そこには三姫の鶴子樣が突ツ立つてて、からだを洗へと云はれるのだ。もう、十八の方にしては、餘り氣儘過ぎるやうだが、

『はい、はい』と云つて、その後ろへまはり、家中で最も美しくもあり、皮膚の色の綺麗でもあるその背中を流した。上つかたの娘は考へが違ふかして、平氣でその他の箇所をも洗へと云つた。

『學校はどこでございますか？』

『學習院女子部。』

『何が一番お好きですか？』

『なにツて――まア、獨りで考へること。』

『それは結構ですよ。人間は考へがないと、この世智辛い世には馬鹿を見ますから、ね。』
『そんなんぢやアない――小說なんかを。』
『では、わたくしの娘の婿にも小說家がありますから、いつか御一緒に連れて行つてあげますよ。』
『だアれ?』
『〇〇〇と申しまして――』
『知つてる、知つてる!』
こんな話をしてから、戾つて見ると、こちらの食事はまだ終つてないのに、もう膳は片付けられてゐた。むツとしたが、それでもそれなりにして、いつかは、きツと復讐してやることにした。
鶴子樣の番が濟めば、もう奧は皆湯を濟ませた筈だから、今度はきツとお政が先づ貰ふに相違ない。それを出し拔いてやれと思つて、こツそり水口から這入つて、衣物を橫の方に圓めて置いて、ずぶりとからだを漬けた。湯は丁度好い加減であつたので、その中で顏を一と拭ひしてから、じツと首まで暖まつてゐた。そしてお政のやうな意地惡い人物がもとになつて、昔のお家騷動なんかは起つたのだから、若しそんな場合になると、この老い先きの短い自分の一身などは殿樣の爲めに少しも惜む事ではないと考へた。
内側から入り口が明いたので、てツきりお政だと見て、したり顏に湯の中で橫を向いてそらとぼけ

てゐた。

『おや、ぢイやが這入つてるのか、え？』

『……』びツくりして起ち上つた。御嫡子の奥様の雪子様が手拭ひを當てて半ばからだを出してゐられるのであつた。

『政隆様もまだ濟んでゐられないのですよ。』少しむツとしてゐられるやうだ。

『どうも、濟まん事を致しました。』湯ぶねを飛び出して、からだを拭きもしないで衣物を引ツつかみ、急いで外い出ながら云つた、『もう、皆様がお濟みの上かと存じましたものですから。』

『どう遊ばしたの、雪子様？』出戻りの一姫隆子さまのお聲が聞えた。

『何、ね、木山が先きへ這入つてたんですの。』

『男の這入つてるところへあなたがお這入りになるのがお惡いでしよう。』

こちらは外で手拭ひを絞つてからだを拭きながら、どうも不思議で溜らなかつた。殿様のお次ぎに奥様がぼツちやまと一緒にお這入りになるのはいいとしても、既に隆子様、鶴子様が濟んでゐながら、離れの御夫婦がまだであつたのだ。禮義上の順序が違ふ。それに、隆子様は今御自分が禮儀を失つてるのに氣が付かないものか、男——と云つても、この老人だ——の這入つてるところへ出て來たのが惡いと、雪子様を責めてゐられる。これから考へると、どうも離れの一族が少し虐待されてゐるに相

違なかつた。

いつだツたか、雪子樣はお孃樣のお世話をしながら斯う云はれた、

『ぢイやが今度代りに來たのか、え――何と云ふの？』

『はい、木山正純と申します。』

『よろしく賴むよ、ね、ぢいや。』

『はい〳〵』と、こちらは叮嚀にあたまを下げた。

『木山』と、御嫡男も人なつツこいお言葉をかけながら、緣さきに出て來られた。『お前はもう此の家來だらうだが――この離れは少し別になつてるから、以後、その積りでよろしく賴む。』

『はい〳〵。』その時は斯う答へただけであつたが、今になつてみると、その意味が少し分つたやうだ。

もう、二十七八のお方だが、殿樣がまだちやんとしてゐられる間は、部屋住みであるのは免れがたいとしても、おも屋とお離れと食事を別にされたり、湯に這入る順序をあとにされたりしてゐるには當らないのだ。さう考へて見ると、道理であの御夫婦の影も少し薄いやうに見えた。雪子樣がその不斷の憤慨を他に漏らすところもなかつたのに、丁度こちらがお湯を失禮したのをいいしほに、ひどくもなかつたやうだが、お叱りになつたのかと推察すると、お氣の毒なやうな心持ちもした。

二

その翌日の晩は、殿樣も家で食事をなされた。けふはひまだから木山も來いと呼ばれて、その御酒の御相ひ手をした。ぼつちやまからお姬樣までは皆一緒だが、お離れの人々だけは見えなかつた。全體、奥平家のあと取りは別にあつたのだが、藝者を落籍させて妻にしたので、それは廢嫡になつた。そしてその御本人は一萬石や二萬石よりも好きな女と世を送る方がいいと云つて國に退隱してから、今でもその國の小學教員をやつてゐる。その爲めに、一旦百姓へかたづいてたこの奥樣を引き戻してあと取りにしたので、殿樣は入り婿である。家の事はもとから奥さまの云ひなり放題で、殿さまとしては餘り權威もなく、威儀もないが、その代り、昔は橫濱で巡査か何かをしてゐただけに、下情には通じてゐられる。話をしてもなか〳〵直だ。面白い事を云はれるのでこちらも調子に乘つて、物を構はぬ老人の、つい、ぶしつけな事もしやべつた。

そのうちに、お姬樣がたの食事は濟んで、お膳は引けたが、そのかたがたはまだそこに坐わつて、珍しさうにこちらの話を聽いてゐた。奥樣もぼつちやまを抱いて少し前へ進んで來られて、お酌までして下さつたので、もう十分なところをまた一杯重ねた。

『教員の恩給ぐらゐではなか〳〵喰へませんから、ね——それに娘や息子に厄介になつてるのも業腹

ですから――納豆賣りや鹽から賣りもやつて見ましたよ』などとしやべつたのであつた。

『あの商賣は成るべく身なりをきたなくしなければなりません。綿入れを着込んでをりましても、その上をぼろだらけの單へ物にして、少し位は水ツ涕を垂らしても、ね、斯う天秤棒をかついで』と、その構へをして、『ぼつちやま、見ていらッしやいよ――納豆、納豆！糸引き納豆！辛子附き納豆！』

『ほ、ほ、ほ』と、お姫樣がたが先づころげてお笑ひになつた。

『まさか、そんな說明は附けませんが、ね、納豆賣りに限つて、妙にほかの事は申しません。唯一つの言葉に調子を附けるだけでございましてー――「なツとう、なツとう！なツとう、なツとう！なツと、なツと、なツとう！」』

『ほ、ほ』と、また笑ひが起つた。

『ところが、酒の粕になると少し違ひます。「粕や、酒の粕！粕や、酒の粕！酒の粕はいりませんか、ね」と來ます。』

『なか〳〵巧い、な』と、殿樣も仰せられた。

『ぼつちやま、今度は鹽辛賣りですよ。』また棒を擔ぐ構へをして、ゆツくりした調子で、『「烏賊の鹽辛、かつをの鹽辛！」』

『成る程、ね』と、奥さまもほほゑんで口を出された、『木山はさすがに本物だよ。』

『ヤア、恐れ入りました』と、あたまを掻いたが、いい氣持ちに醉ひが出て來たところで、得意の『鞭聲粛々』と『孤鞍衝雨』とを吟じてその場を引き下がつた。

その場の醉ひにまかせて餘りに下だらない事をしやべり立て過ぎたか知らぬと、實はその首尾を心配したとは打つて違つて、その翌日から一層自分の評判が善くなつた事を發見した。そして第一に嬉しい事にはぼつちやまが、

『面白いぢイや、また納豆々々云つて御覧』などと云つて、よく自分になついで來た。横ぶとりのお政がこれを妨げようとして、色々な嘘を云つたり、悪智慧を附けたりするのだが、それは無効であつた。けれども、坊ッちやまが負んぶしろと云ふので、慣れないながらにさうすると、勝手口から裏へ行けと云つた。またその通りに行くと、離れのお孃様が雪子様に抱かれてお縁側にゐたのでそこへ行つて一緒に遊ばせてゐた。お政がそれを奥様に云ひ付けたのだらう、直ぐ呼び戻されてお小言を喰つた。

『木山、坊やは、ね、殿様のお子で、向ふの孃とは位が違ふのだよ。町人のお腹に出來た子と一緒に遊ばせてはいけないよ。』

『左様でございますか?』それで分つたのだが、坊ッちやまがお孃ちやまの手を引いて、離れへ渡した橋の上を二人でおも屋の方へ來た時、奥様はこれを見付けて、小間使のお淸を氣が利かぬと云つて叱つてゐられた。それ程上つ方では區別を立てなければならぬものだらうか?殿様が御健全の間はそ

れでもよからうが、やがて萬歲の後は、如何に奥樣でも、坊ツちやまでも、御嫡子の政隆樣の御家族になつてしまはれるのではないか？——離れのお三かたがお可哀さうになつた。

或時は、また、坊ツちやまがいたづらをして、便所の側に吊してあつた唐かねの小さい燈籠を竹の棒で叩き落し、その家根の反りを曲げてしまつた。それをお政は坊ツちやまではなく、お孃ちやまのせいにしたので、奥樣はお離れに向つて大變小言を云はれた。たツた四つの女の兒にそんな事が出來るかどうか、ちよツと考へて見れば分るのだが、奥樣にはそれが分らなかつた。お離れも亦叱られた儘に少しも言ひ返しはしなかつた。餘ツぽど素ツ破拔いてやりたかつた。

木山が自分でお政の遣り口を横合ひから瞰んでると、まだ物が分らない坊ツちやまを臺所の喰べ物で手なづけて置き、成るべくお政〳〵と云はせて奥樣に取り入つてゐる。そして奥樣のお聲がかりがいいのを笠に着て、年下のお園と云ふ小さい仲働らきやお淸を蔭では意地惡くこづき舞はしてゐる。

奥樣も奥樣で——お多福と相僕取りを一緒にしたやうな、あんな女のどこにいいところがあると思つてか、その口先きばかりを信じ切つて、お政でなければならないやうにしてゐられる。お召し物の出し入れにもかの女を呼び、三越などへ買ひ物に行かれるにもかの女をつれてくので、太ツちよの女と痩せぎすですらりと高い奥樣とは丸でソマトーゼを飲む人飮まぬ人だ。尤も、大きな買ひ物には、この二人にまた必ず次男の隆友樣が附き物になつて行く。これがまた喰へない奴で、奥樣の勘定が分

らないのに乘じて、いつも五十圓の物なら六十圓に、百圓の物なら百二十圓にして、それだけの餘分をこッそり着服しておのれの小使ひにしてゐるのだ。それを知らない奥樣は、誠にお目出たいもので、餘り御機嫌を伺はぬ御嫡子よりもこの次男を重寶がつてござる。そして『木山、隆友に相談して御覧よ』などと、少し六かしい事があると次男を思ひ出しになられるけれども、決して政隆樣の方を立てたことがない。

隆友――だけは『樣』をつける氣になれないのだが――などを殿樣は全くお近附けにならない方がいいのだ。神樂坂の安藝者か何かを女房にしたので、屋敷以外に借家させて、別居にはしてあるが、どうせ何の仕事にも就いてゐないので、毎日のやうにやつて來て、お家の事に入らざらん口を出す。そして法律學校を出たとか云つて自慢さうに理窟を揑ねる。

『ぢやア、お兄樣にも伺つて見ましよう。』わざとこちらが話の腰を折つてやると、『兄などに分るもんか』と、直ぐこれだ。どうもお家に惡人が二人あるやうに思はれて來た。それも、考へて見たところ、家扶の桑木氏がよぼ／＼ぢぢイで、うまく取り締りが出來ない爲めだ。それにこちらが來て以來、多少安心したのか、喘息を口實にしてよく缺勤をする。それ程なら、いツその事、家扶をこちらへ讓つてしまへばいいのに！

一體、家ぢうの女で、雪子樣を除いては、全くだらしのない者ばかりだ。湯に這入つても、始末よ

く出て行くのは雪子樣ばかりで、他の者達から馬鹿にされてる町家の生れだけに、寧ろその身をよく愼んでゐられるのだらう。あとの者と來ては全くお話にならぬ。奥樣を初めとして、湯の時間が締りなく長いし、石鹼や化粧道具をおッぽり出して上つてしまひ、今度の時それが見えないと、雪子樣やその他の誰れかのせいにしてしまつてけろりとしてゐる。ところがその實、お政がお姫樣がたの石鹼やお白粉を盜んでる事はこちらが見つけて能く承知してゐるのだ。

『あなたのお持ち物はあなた御自身で善く始末をしてお置きなさいましよ。お政はいけない奴で、時時ちよろまかしてをりますから、ね』とそれでも鶴子樣にはからだを洗つてあげてる時に言つて聽かせたところ、年は下だが、なか〳〵分りがよかつた。

『お母樣はねえ樣や坊ツちやまのひい氣ばかりして！』

このお言葉には、女中共の蔭で云つてる事を聽くと、理由が無いではない。毎日の學校への往き復りに、どこかの學生と知り合ひになつて、誘惑されたとか、されかけたとか云ふ事が親に知れて、鶴子樣は暫らく監禁も同樣にされてゐた事がある。それが爲めに兄弟にまで卑しめられてゐて、今でも毎日、多くはお部屋に引ッ込んでゐられる。そして頻りに何か書いたり讀んだりしてゐられる。一姫と次男とは親に對しておべつかが上手だが、御嫡子とこの鶴子樣とは自分の思はぬ事は決して口に出さぬ。殊に、鶴子樣は美人でもあり悧巧でもゐるが、――そしてそれが一姫の隆子樣に最も憎まれてる

のだから、——餘りにひがみが強い。母や姉に對して不斷は成るべくこらへてゐる感情が、時によるとただ五歳の坊ッちやまに向つて勃發し、氣ちがひのやうになつて弱い兒と掴み合ひを爲ることがある。『罪もない兒を！』奥樣は怒つて仰せられるが、坊ッちやまにまで鶴子樣を馬鹿にさせて置くのは、奥樣が餘り片手落ちであらう。男の子が上に二人もあるのに、どうせあと取りにはなれぬ坊ッちやまを殿樣の次ぎにして、皆に崇めさせようとする奥樣の氣が知れなかつた。

三

お政がこちらの知らない間に、初めのうち、紙屑を賣つてた時にも、こちらの反對意見が奥樣には通じなかつた。五圓の月給は安いか知れないが、邸では紙屑が澤山出るから、それはお前の取り分にしてやらうと言はれたのに、お政が横取りしてゐたのだ。で、その事で、
『お政と云ふ女は實に不埒な女です』と、奥樣に訴へ出ると同時に、お姫樣がたのお白いを泥棒する事、出入の商人から割り前を貪る事、奥樣に隱して坊ッちやまに奈良漬けやその他の不消化物を與へて惡機嫌を取る事などを申し上げた。が、
『まさか、そんな事は——』
丸で無神經の人も同樣であつた。だから、お政は圖に乘つて、こちらの云ふ事を丸で嘘にしてしま

つた。

『よし、覺えてろよ、お政』とかの女を奧樣のお目の前で睨み付けてやつた、『今度おいらがその場で證據を押さへて、殿樣のお前へ持ち出してやるから！』

『……』お政よりも奧樣が却つて不興なお顏をおしになつたけれども、斯うなると、女子供に對する不正直な遠慮よりも、殿樣に向つての正直な忠義が必要だと云ふ覺悟であつた。

忠義の爲めには所謂小瑾を返りみずだと云ふ氣になつて、苟くも殿樣から直接に食物を――昔ならお扶持を――與へられてるこちらに對して、お政が不都合にもこちらの膳に出すべきお菜を得手勝手に添へなかつたりした時、どうせ口で言つても分らないのだから、むかし覺えた柔術の手を出して、板の間へばたりと投げ飛ばしてやつた。その時はかの女から奧樣に訴へ出たのを幸ひ、こちらはまたお政が絕えず水をこちらに汲んで貰ひながら、有難いと思はず、少しも朋輩としての思ひ遣りのない事をあばいてやつた。

『人が寒い朝を親切に早く起きてやつてますのに。』

『もう、寒い事はありませんよ、ぢぢィぢやあるまいし。』

『何だと、このおたんちん！』餘りの事に、また片足を立てて握りこぶしをふり上げて見せたが――。

『まア、木山！』奧樣は僅かにこちらをお制しになつた。『お前は少し亂暴で困るが――さう云ふ事は、

これからお前達の間で相談なり、取り極めなりして置いたらよからうに。』
『はい。然しこれはなか〳〵分らない女ですから――年下の朋輩なんかをいい氣になつていぢめてまして。』
『嘘ですよ！』
『まア、お政も――女は女のやうに。』時には斯う、奥様も分つたやうな事を云はれた。
お政はそれからこちらを『ぢイや、ぢイや』ッて馬鹿にする事をやめて、それでも他の女中からのやうに『木山さん、木山さん』と云ふやうになつた。
お庭の櫻も咲き初めた。何となく浮かぬ様子が見えるのは、お離れの人々ばかりで、奥様を中心としての人々は皆世間並みに浮き〳〵して來た。家扶の話によると、一家の主婦たるべき奥様の無方針の爲めに、幾ら豫算を立ててもさッぱりその効がない。今回もまた國人會のおもな人々五六名を集めて相談會を開らき、その人々から寄附を募り、やッと埋め合はせをつけることになつたが、その殘りの金は、また奥様や隆子様の衣物、坊ッちやまの贅澤なおもちや、並びに次男のちよろまかし金になつてしまうだらうとの事であつた。
その金が揃つたが、今ちよッと持つて行き兼るから、急ぐなら取りによこして貰ひたいと云ふ電話が殿様にかかつたので、その役目にこちらが當つた。さきはこちらの實弟だが、銀行家としてずんず

ん出世してゐるので、長らく遠慮して音信不通にしてゐたのだ。
『今お屋敷に勤めてるのですか』と、大層意外がられた。
『なアに、つい不圖した事で——まだ何程にもならないのだが——』
『先日おも立つた者の相談會があつた時に、殿樣からそんな話もなかつたが——』
『さうだらう、こツちもいつやめるか、やめられるか分らなかつたのでまだ通知もしなかつたが——何しろだらしのないには驚いた、ね。』
『困るんだよ。相談會と云つても、別に相談を受けるのでもないし。』
『さうだツて、ね』と、口を尖らせて相ひ槌を打つた。
『云はば、まア、みんながお二人を上座に据ゑて獻金を命じられるやうなもので、ね——それに、あの奧さまはただ金に締りがないばかりならいいが、いつかも、ほかに何——が出來たり。それは然しお諫めしてやまつたやうだが。』
『へい、さうか、ね。三姫の鶴子さまも一度男に引ツ懸つたさうで。』
弟はこれを知らなかつたが、矢ツ張りこちらと見解は同じであつた。
『然し、あの方だけはどうやら一人前になれさうだ。』
『然し、みんなにいぢめられて可哀さうだよ。』

こんな話をして、お家に對する日頃の鬱忿を少しは漏らし得たが、金を受け取ると、愈々お家大事な氣がして成るべく急いで歸つて來た。

果して奥様は、まだ殿樣のお歸宅もないのに、次男の隆友を呼びにやり、三越行きの支度を初められた。又かと餘り馬鹿々々しいので、用事をうツちやつて置いて自分の居間に退き、こないだ中から娘に出して置かうと思つてゐた通知を、かねて用意のハガキに書いてゐた。すると突然、

『わツ』と泣いて、氣ちがひのやうに眞ツ青な顔をして、鶴子樣が珍しくもこちらのきたない部屋へ飛び込んで來られた。

『どうしました？どうしました？』

『……………』鶴子樣は、ぱつたり倒れて、こちらが驚いて振り向けた膝に兩手でかぢり着かれた。そしてよそ行きの衣物の袂を嚙んでおい〳〵と泣いてゐられる。ただもう泣くばかりで何もお言葉がないので、こちらは弱つてしまつた。

『やアい、大きな癖に泣いてる、泣いてる』と言つて、坊ツちやまが追ツ掛けて來た。

『ちよツと待つていらつしやいませよ、わたくしが伺つて參りますから』と云つて立ちあがり樣、『坊ツちやまはいい兒ですから、まア、こちらへいらツしやい。』小さい手を引ツ張つて奥樣のお部屋へ伺つて見ると、皆樣が着飾つて外出の用意が出來てゐた。

『あれは氣ちがひだから、勝手にして置きな』と、奥樣は仰せられた。
『勝手に泣いてるのだよ。』これは隆子樣のすげない仰せであつた。
お二人ともいそ〳〵してゐる上に少し昂奮の御樣子が見えたので、なんとも言葉の出しやうがなかつた。女中部屋の方からお政が——これもみツともない顏にお白いまでつけて——廊下をやつて來たのを捕へて、こツそり聽いて見ると、鶴子樣は奥樣が連れて行かうとも言はないのに、勝手に連れ立つて行く氣でお作りをしてしまつたのであつた。
『奥樣がお叱りになるのも尤もです、わ、あんまり氣儘過ぎますもの。』お政もいい氣になつてこんな事を云つた。
『苟くも殿樣のお姫樣を——お前風情が！』低い聲でだが叱り付けて置いて、鶴子樣のところへ戻つて來た。『折角、お召し物をお着更へになつたのに、ねえ。——まア〳〵、御辛抱なさい。おかア樣の事ですから、何かあなたにもお土產の無い事はないでしようから。』
玄關の方が一時賑つて來ると、鶴子樣は泣くのをやめて、その方へじツと耳を澄ましてゐられた。何だか可愛い娘と一緒にゐるやうな氣がして、こちらも皆を見送りには出て行かなかつた。
皆と入れ違ひに殿樣がお歸りになつたので、一部始終のことを申し上げると、
『あれを費ひ過ぎると困るから』と言はれて、直ぐ三越へ電話を掛ける事を仰せつかつたところ、皆

はまだ向ふへ到着してゐなかつた。

『それもさうでございますが、殿様』と、恐る〳〵口を出して見た、『奥様はあまり鶴子様をむごくもてなされ過ぎますやうでございますが――』

『あれにも困るて――』

『鶴子様がでございますか?』

『いや――』殿様はあとを濁されたが、矢張り奥様を指してゐられたのだ。

夕方皆は歸つて來た。そして一緒に行つた隆子様にはまた美しいお召が一つ出來たが、殘つてゐた鶴子様の分としては僅かに半襟一つであつた。それを鶴子様はその場でびり〳〵と引き裂いてしまはれた。愈々氣概のあるお方ではあるとお見上げ申したが、さうは現はに讃める事も出來ないので、日が暮れてから、そッとお部屋へ行き、

『おかア様へはもッとおとなしくして、ね、餘り憎まれないやうにする方が御自身のお爲めですよ』

と云ふ事を懇々と說いて聽かせた。さう云へば決して分らない事はなかつたが、その後も矢張り鶴子様のちよツとした事でよく衝突があつた。

木山が自分で私かに考へたところでは、假りにこれをお家騷動の手初めとしては、善人側は忠僕の自分から數へ上げて、鶴子様、――離れの御夫婦とお孃さま、――殿様。それから、惡人側はお政、――

隆子、――次男の隆友、――奥樣と坊ツちやま。で、差し當り自分はお政と、そして御嫡子の政隆樣は御次男と對抗する役目だ。が、御嫡子は餘り弱く、惡く云へば意久地がないので、自分がその重い役をも兼ねなければならぬやうに思はれた。ところが、こちらのこの氣持ちと覺悟とを奥樣は日頃から幾らかお感づきになつて、隆友にお話になつた事があるらしい。渠はこちらを敵視するのが近頃甚だしくなつた。

殿樣にしても極和らかにお呼びになるところを、隆友は失敬にも『木山、木山』と怒鳴り立てて、こちらが、渠自身の家來ででもあるかのやうに、慳貪にこき使はうとする！何かの折に一本參らせてやらうと思つてゐたところ、折よく又しても玄關の式臺に立つて頻りにわめいてゐた。

『御用ですか？』わざとゆツくり構へて出て行くと、渠も神經にさはつたかして、聲を荒くして、

『履き物を出せ』と叫んだ。

『殿樣がお出かけですか？』

『馬鹿、おれのを出せ！』

『あなたのなら、あなたがお出しになつたらいいでしよう。』

『なにイ！貴樣は召し使ひぢやないか？』

『はい、召し使ひです。然しあなたの召し使ひぢやございません。』

『よし！』斷念して、渠は自分の手で下駄箱の蓋を明け、その履き物を出して土間へ下したやうに見えたが、懐ろ手をして再び奥へ引き返した後ろ姿がこちらの部屋からちらと見えた。こちらの推察通り、直ぐ奥樣を焚き付けたのだ。

呼びつけられて行つて見ると、奥樣は非常に不機嫌な顏をして、

『お前は正直だが、どうも亂髮で困るから、暇を取つて貰ひたいが、ね——』

『分りました、はい——では、早速』と、少しせき込んで尻を持ち上げかけた。この思ひ切りのよさに却つてまた奥樣に未練が出たかして、斯う云はれた。

『いや、けふ直ぐと云ふのではないよ。殿樣は今からお出かけにお成りだから、今夜ゆツくりお前のお別れの言葉を申し上げて——あすにも、ね。』

『はい』と、聲が顫へた。こちらもさう云はれると、また涙を押し隱さなければならなかつたのだ。

四

殿さまのお歸宅前にちよツとと思つて、日が暮れると直ぐ、家扶の桑木氏をその私宅に訪問した。相變らず喘息がひどいので、この日もその爲めに休んでゐた。

『君がいよ〱隱居でもする時にやア、そのあと釜に僕が坐わつてもいいと思つてたのだが、ねー―まア、この始末だ。孔子樣も云つてらア、ね、說いて容れられずんば去るだ。』

『實際、華族なんか、おほやうといやァおほやうなのだらうが、まア、殆ど何も分らないのだ、ねえ。』

斯う答へて、桑木氏も色々不平を漏らしたうちに、耳新らしかつたのは隆子樣の事であつた。かの女と鶴子樣との間に今一人松子と云ふお姫樣があるのだが、それはお國の大百姓のところへかたづいてゐられる。その亭主が隆子樣を自分の妻の姉だから叮嚀に取り扱ひ、松子樣に對してよりも優しい言葉をかけるのだが、これを隆子樣は妹よりも自分に氣があるものと思ひ込んでゐる。度々お國歸りをしたがるのはその爲めだが、これを向うの夫婦は非常に迷惑がつて、終ひには松子樣から奧樣へお手紙があり、以後お姉樣を國へよこして吳れるなと云つて來たさうだ。それにも拘らず、奧樣は姉が妹のところへ行くに何の差し支へがあると云つた風だ。この頃、松子樣は姙娠してやがて七八箇月になるからと云つて、子供を產み落しにわざ〱里歸りをすると云ふ通知が來てゐる。また入費が嵩むのはお家の御勝手としても、隆子樣が今度はまた鬼の留守を狙つて出かけて行きたがつてるので、ついこないだ、桑木から事情を說明して殿樣に隆子樣を叱つて貰つたところであつた。

『あの不器量な出戾りが、ね!』

『呆れたものだ』と、こちらも明いた口がふさがらなかつた。

その夜、殿様は残念さうに仰せられた、

『お前をやがて桑木の代りに引き上げようと思つてゐたのだが、――どうも一家と云ふものは、女共の勢力範圍で、奥に氣に入られないと、な――』

『さやう――はい！わたくしが行き屆きませんのでございますから、止むを得ません。』

『兎に角一杯やれ』と、それでも奥樣のお心盡しを殿樣から頂戴して、半ばお言葉にあまへ半ばはまた燒け氣味で、いつもよりも多く飮み過ごした。そして例の詩吟を皆に聽かせてから獨りになつた。

お庭の周圍に咲いてる櫻も、もう見納めかと、床の中で思ひ浮べながら、あすからどこへ行からうかと考へた。下らぬ事を氣ちがひのやうに怒る息子と嫁のところへは無論行きたくなし。身投げまでした程思つてたその男と手を切つて、今回小說家にかた付いて、やツと落ち付いた娘のところを煩はしたくもないし。久しぶりで再び納豆賣りの合宿所へ歸るのも業腹だし――『厭世家のぢぢイなら、こんな時にふんどしで頸とござるのだ、な？』ふと西行の歌を思ひ出した――『願はくば花の下にて春死なん』――か？――かのきさらぎの頃――犬死――忠義――尾の上、岩藤――惡人――善玉――お政――お家横領もし兼ねまじい華族の次男――奥樣――憎いやうでまた氣の毒な――孔夫子――！自分は、もう、この世から追ひ出されたのであつた。

いつの間にか三途の川のやうな黑い水の流れを渡らうとしてゐる。坊ツちやまが連れてツて呉れい

と追ひ掛けて來たが、あなたの來るところではないと申し上げて、氣の毒だが叱り付けた。ぢイやの背中が重いと思つたら、鶴子樣がお孃ちやまになつておぶさつてゐる。政隆樣と雪子樣とがあとからはだしで裾を端折つてついて來る。

『ようございます。これからはお米の一升買ひをなさいましよ。その方がずツとお得ですから――』

あたりはただ、だだツ廣い野原であつた。

『木山！木山！』どこからか荒ツぽく自分を呼ぶ聲がする。

『また、あの次男めが生意氣な！』

『木山！』どうやら、それが殿樣のお部屋かららしい。

『はい！』跳ね起きて、その方に行きかける時、

『泥棒だ』と云ふお聲が聞えた。

『さうですか』とあわてて、その足で廊下を二三度行きつ戻りつしたが、雨戸が一枚外れてゐるのを發見した。そこから飛び下りて、直ぐ怪しさうな裏庭の諸方面を探偵したけれども、もう遲かつた。

自分が暢氣な夢など見てゐたのが後悔された――せめてこんな時にでも一つ自分の手がらを殘して置くべきであつたのに！斯う思ひながら、庭内を殘らず見廻つたが、木の根が黑く、花が夜目に白く浮んで見えてたばかりだ。

もとの雨戸のところへ立ち戻つて來た時には、お離れの戸も一つ明いてるのが見えて、そこの御夫婦のお姿がその後ろなる電氣の光りで黑い影を長くお庭の上に投げられてゐた。

『泥棒ですよ、若樣、泥棒で！』こちらの聲はまだせき込んでゐた。

『ふ、ふん』と、おほ殿樣のお吹き出しになつた聲がしたと見ると、もとのところにお顏を出してゐられた。『ゐないか？』

『どうも見つかりません。』

『僅かのまでしかなかつたが――』

『でも、木山は割りに目敏いよ。』奧樣も殿樣の後ろにゐられた。足の裏を手で拂ひながら緣側に上ると、お政がそのまたそばにゐて、締まりのない寢卷き姿でがた〳〵顫えてゐた。こんな時に泥棒でも、大態でも取り押さへて、お政に威勢を見せてやりたかつた。

その翌朝、殿樣のお目通りへ呼び出されたので、愈々お暇かと思つたら、案外にも、續けて使つて下さるとのお達しであつた。そして、

『多少の亂暴は見のがす代りに、正直に勤めて貰ひたい。』

『はい。はい、はい！』感涙にむせ返るやうになつて、あたまを上げる事が暫らく出來なかつた。『以後は一層愼みまして、殿樣のお爲めには一命をも惜しみません。』

『賴むーーまた、のぶべのやうな事があつては困るから、な。』
『はい、はい。』
『木山は存外しツかり者だ、ね』と、奧樣もこちらに向つて優しいお聲を掛けられた。『眠つてしまへば、まるでぐうたらかと思つてたら。』
『へ、へ、へ』と、笑つてあたまを搔いた。
その日から、木山自身は殿樣にも奧樣にも十分信用を得たと云ふ確信が出來て、また一ときわお家の爲めを思ふやうになつた。
『木山さんのやうな人がゐると、わたし達も安心だ、わ』と、女中共も云ひ初めた。
『おいらはいよ〳〵腹をきめて、奧平家の忠臣を以つて任ずるのだから、お前達も覺悟してゐろ』と、お政へは特に威すやうに宣言した。
『わたしを惡人か何ぞのやうに！』お政は斯う云つて笑つた。

五

松子樣がお國から付き添ひを二名つれて、大きなお腹で里歸りをして來られた。そしてそれ何がいる、かがいると云つて、家扶の桑木氏の心配した通り、またお物入りが嵩んだ。そればかりならまだ

しもだが、松子樣に何か一つ買ひ物があると、隆子樣と鶴子樣とがまた競爭して、それ相當の物をねだらないでは置かないので、奥樣もほと〳〵當惑されてるやうであつた。
その爲めにまた一家中が妙に昂奮の狀態に落ちてしまつた。木山自身までがそれに釣り込まれて、鶴子樣と松子樣との間に起る競爭、――隆子樣と雪子樣との無言のすれ合ひ、――坊ツちやまとお孃ちやまとの互ひのしくじりをおとな達がどちらかになすり合ひの蔭口、――お政一派と松子樣の附き添ひとの睨み合ひ――。こんな事に唯さへ少し遠い耳が一層遠いやうに、唯さへのぼせ氣味になり勝ちなあたまが一層ぼうツとしてしまつた。そして自分の兄が取りのぼせて人を斬つた爲めに廢嫡になつた時の事までが思ひ出された。
『木山の目が引き釣つてる』と、鶴子樣はをかしさうに笑はれた。
『斯う八方に氣をくばつてゐちや――自分ではこのじれつたくなつた心を取り納めようとしてゐるのだが、底意地の惡い次男樣がさうさせなかつた。履き物の件からはツきりとこちらに恨みを持つた渠は、こちらを憚つてか少しも言葉をかけない。それは少しも構はないとしても、相變らず奥樣に惡智慧を附けたりしてゐる。そして松子樣の爲めの買ひ物を胡麻化して、少くとも三十五六圓の金をちよろまかした事が明らかに指摘出來るので、その實物を引き合はせて、その點を殿樣のお目通りでよく說明した。

『成る程、な――隆友がよくない』と、殿樣も怒つて御合點されたので、これに力を得てこちらは渠を責め立てた。

『隆友樣は殿樣から十分のお小使ひを貰つてゐられるのに、どうしていつもこんなことをなさるんです？』

『いつもぢやないし』

『いや、わたくし共にやアちやんと分つてますよ――お出しなさい！』

『……』隆友は着服しただけを默つて平氣で投げ出した。奥樣や松子樣はこれをそばで見て驚いてゐられた。增長させて置けば、この次男は終ひには御嫡子夫婦を毒害するに至るかも知れないと思はれた。

　その翌朝、渠が晝近くになつて、今起きたのか、ぼんやりした顏をしてその自宅からやつて來たのにお廊下で出くわしたので、こちらは何氣ない振りをして、

『お早う』と聲をかけた。

『……』返事もしないで、渠はこちらをじツと睨んだので、こちらも睨み返しながら行き過ぎかけると、踏み止つて、『待て――貴樣は主人を馬鹿にしやがつた、な！』

『なんだと！』

『…………』渠は無言で、いきなりその握りこぶしを以つていやと云ふ程こちらの横ツ面を擲つた。

『畜生！』お家の爲めにこの大惡人を滅ぼしさへすれば、自分のこんな老體などはどうなつてもいいと覺悟した。

『どうしたのだよ』と云ふ奥樣の笑ひまじりのお聲が聽えた時には、こちらはわれ知らず次男樣を羽がひ締めにして、息の根をとめようとしてゐた。氣が付くと直ぐ、その手を緩めた。

『はい、はい、はい』と、二三歩奥樣のお目通りをすさつて、平伏したが、また立ちあがつて、白首のつもりでづか〳〵と殿樣のお部屋へ出た。『殿さま、いよ〳〵わたくしは、けふ限り、おひまを戴きます！』

『突然どうした事だ？』殿樣は不思議さうにこちらをふり向かれた。

『…………』こちらの昂奮し切つた心は、暫らく何も云へなかつた。

こちらが四角張つて平伏してゐるところへ、奥樣が出て來られて、如何にもをかしかつたと笑ひながら今の有り樣を殿樣にお聽かせした。

『また隆友が木山の氣にさわる事をしたのだらう――呼べ！』

『はい。――御用ですか？』といふのも、うや〳〵しく手を突いた。

『でも、隆友を木山と御一緒にお並べになるのは位が違ひましよう？』

『まア、靜かに』と、殿樣は奧樣のさし出口をお制しになつて、御次男の方をお見詰めになつた。きついお聲で、『どうしたと云ふ！』

『………』次男もさすがお目通りでは何も云へなかつた。

暫らくあつてから、殿樣は、

『喧嘩兩成敗だが、今回は兩方を許すから、これからもツと仲善くせい』との仰せであつた。

木山自身では泥棒の件でお政を威服し、今回の事で隆友を壓服したと思へた。そしてそれからお互ひに衝突が少くなつたのをお家の爲めに結構な事だと見た。そして殿樣はこれまで御次男にばかり命じてゐられた用件をもまたこちらにお命じになるやうになつた。

或時、こちらが御離れへ行つて、政隆樣にじツとしてゐられるよりも、何か御體面を損じない商賣をやつたらどうか、それには養蜂とか、養狐事業とか云ふものは、近頃上品でまた儲けがあるさうですなどと語つてゐると、

『木山、木山』と云ふ、一番懷かしい鶴子樣のお聲が聞えた。殿樣が御用とあつたので、伺つて見ると、御親類の〇〇伯爵へ御代理のお使ひに行くのであつた。こんな用事は初めてだし、第一に羽織袴がなかつた。殿樣のお言葉で御次男のを拜借することにした。

隆友樣の自宅からそれが屆くと、直ぐこちらは自分でちやんと袴を穿いて見せ、羽織りも自分で着

て白の紐の結びをどツしり垂らした。で、少し自分ながら人間らしい心持ちに返つた。
『それでも凛々しい立派な男に見えるよ。』奥様はをかしさうに云はれた。
『結構、結構！』殿様も喜ばれた。
『かう見ると、木山もなか〳〵話せる、わい』と云ふ、隆友様の冷かしにも惡い氣はしなかつた。
『なアに』と少しあまへるやうに口をとがらせて、『これでも昔やアやつたもの、さ、ね。』
皆はお互ひに顏を見合せて、どツと笑つた。こちらはたださきに隆友様に擲られた時一つぽろりと抜けた奥齒の明きから、むかしやアのじやアの響きが變に漏れたのが氣になつた。

――(大正六年十月)――

一日の勞働

まだ冬の初めとしては、あまりに鬱陶しい、薄ら寒い、じめ〳〵した日の續いた或日の早朝のことである。渠はしよぼ降る雨の中をまだねむいやうな心持ちで牛込の方から來て、音羽の通りを歩いてゐた。否、歩くと云ふよりも空氣に浮いて、ふわりと送られてゐたと云ふ方が適當であつたらう。

雨が降つてゐるのでいやであつたが、かみさんに叩き起されて止むを得ず顏を洗つて、茶づけをかッ込んで直ぐ出て來た時刻である。それが渠自身のあたまには如何にも薄らぐらい。そして自分の足は確かに大地を踏んでゐるのであるが、目の前にちらつく記臆が足もとからして煙のやうに消えて行つて地獄までも穴があいてるやうだ。からだ全體が半ば氣持ちよくうと〳〵と闇の底へ引きずり込まれて行くのが、たび〳〵ある通り、ずんと神經の天邊までも感じると、俄かにまた不安が目を覺まして、これではならぬと自分を持ち直させた。けれども、さきの瞬間とあとの瞬間との聯絡が、よく分らなかつた。

世界がのべつ幕なしのやうに薄ら暗く……下宿屋のおかみが段々同情して呉れなくなつた……不斷

の太陽もねむり不足だが……『なぜあんたはもッと奮發心を起さないの？』……極度の神經衰弱ださうで……『下宿屋は病院ぢやない』……『でも、めしを出さぬところがあるか？』……『お金を呉れぬお客も、な――？』……

こんな云ひ合ひも今はずッと昔のことであつたかのやうに思はれる中に、ただ一つ、容易にはッきりと渠の心に浮ぶ物があつた。自分のゐた、日當りの惡い下座敷の小庭の隅に、ひよろ〳〵と枝も少く延びて、その一番うへの方に桃色の花を一つぽッちり咲いたコスモスだ。獨りで夢を見てゐるやうな花だと誰れかが云つたのは尤もで、渠自身にはその花ばかりでなく、またその幹までが自分にそッくりであつた。それが、自分の追ひ出されて來る時、門の横手から小い首を低い生垣の上に出して名殘りを惜しんでゐたッけ……

それから氣が付くと、自分は握り飯を新聞がみに包んで持つてゐる。

『それでも、わたしの好意で、これはお晝のお辨當代りですよ』と、おかみさんは云つた。

『………』自分には寧ろ手切れ金のやうであつた――これでも男だもの、衰弱にかからぬ前には多少野心がないでもなかつたのだ。

どんな勞働でもして見ようといよ〳〵決心したのは、この、ほんの、咄嗟の間にできた考へであつた。うと〳〵と進んでいつのまにか護國寺の前に突き當つたところ、たださへ薄暗い心を、上からか

ぶさる森の蔭が一しほ暗くした。渠には矢ツ張り夜と晝との區別が殆どなかつた。
『おい、こら！』ひどい權幕で呼びとめられたので、ふら〳〵とその方に引き寄せられて行くと、交番のそばに立つてる巡査が渠を誰何した。渠は自分の見すぼらしい身なりを怪しまれたのは止むを得ないとしても、人を人とも思はぬ取り扱ひにはむツとしないではゐられなかつた。
『…………』畜生！これでも一個の人間だぞと云ふ憤りを内心におぼえて、顏が赤くほてつたやうに思つた時には、渠は珍らしくはツきりした世界に目がさめて自分のはいてゐる高い足駄がしッかりと地上を踏んでゐた。が、巡査の一々の問ひには口がどもつて十分に答へ切れなかつた。
『もツと明瞭に物を云へ！』
『云ふ必要がない』と、渠は思はず反抗した。『そんなに怪しむならおれの勞働しに行くところまでついて來い！』
『どこだ？』
『大塚の火藥庫だ！』實は、きのふ道ばたの張り札を見てちよツとかみさんに相談したのがもとになつてけふ初めて行くのだが、ここでは、もう毎日行つてるやうな意張りかたをして見せた。
『…………』巡査はやり込められたやうにちよツと默つてしまつた。恐らく、今休戰狀態からまさに軍を解きつつあると云ふわが征露兵どもの上に考へを轉じさせたのであらう。こちらはどんと一發、大

砲を打つて聽かせたほど氣持ちがよくなつた。

『ぢやア、行くぞ。』

『うん――』まだ問ひ足りぬらしさうだと思つたら、意外なことをも尋ねた、『朝めしは濟んだのかい？』

『無論ですとも』と、こちらも今は言葉を和らげてゐた。喰ふや喰はずに見えるこちらの姿に對する向ふの手ツ取り早い理解と同情とを感謝するつもりで、少し笑ひながら片手の新聞包みを突き出して、

『これが晝めしの代りです。』

氣が付くと、然し、まだしよぼ〱降つてる雨の中を呼びとめられた時、不見識にもかさをすぼめて交番に近づいたのであつた。そのかさは、乃ち、すぼめられてまた一方の手に在つた。そして渠の長く延びてもぢや〱した頭髮から雨の肩にかけて、びツしより雨のしづくが滲み込んでゐた。『ざまア見ろ！』渠は自分で自分を罵つて、燒けくそにかさを開らいた。蛇の目とは名ばかりでぼろぼろに紙は破れ、二ケ所もその破れが天邊までとほつてゐる。恐らくこれが爲めばかりでも巡査には誰何の價うちはあつたのだらう。

けれども、渠は火藥庫に行くと云つたのが、結局、巡査をも默らし、自分も氣持ちをよくしたことを思ふと、戰爭もなか〱馬鹿にはならぬ。その盛んに行はれてゐて、勝利の號外が飛びまはつた時

にはさう注意をしなかつたのに、いよ〳〵日露の媾和がアメリカに於いて成立したと云ふけふ此頃になつて、却つてもツと戰爭すればよかつたにと云ふやうな名殘り惜しさが自分にも感じられてゐた。
どんと今一發、實彈の込められた大砲を――さうだ、そしてその場に臨めば、この自分の苦しいほどねむい神經の衰弱もいつのまにか直つてるかも知れない！こんな想像に勇氣を增しつつ坂をのぼり詰め、大塚の通りを右へ曲つて行つた。
すると、赤い煉瓦造りの高い塀が右手につづいてゐる。やがて門があつた。
『これだ、な』と思ふと、ちよツと躊躇せずにはゐられなかつた。第一、どうしたらいいのか分らなかつたので、先づ度胸をするゑて這入つて行きかけた。
『こら！』また呼びとめた者がある。矢ツ張り交番のやうな箱だが、もツと小いのにゐるところの番兵で、これは巡査とは違ひ劍付き銃を持つてゐた。こちらはそれには初めてぎよツとしたのである。
すくむだけからだがすくんで、
『人夫の募集に應じて來たのですが――』
『そんなら、向ふで待つてをれ。』案外簡單でおとなしい返事だツた。『然し、そんなざまでは鑑札は貰へん。』
『鑑―鑑札が要りますか？』

『要るとも。』

『そーそれは』と當惑して、渠はどもらないではゐられなかつた。そんな物が自分にあらう筈がないので、『ど、どうして貰へますか？』

『待つてをつたら、分る。』

『さうですか？』

少し氣が輕くなつた。が、この番兵に向つた時は、まるで無一物者が何か一物を與へられるやうなづもりになつてゐたのだ。乞食でもないのにと、きまりの惡さを押し忍んで、門の向ふがはへ來ると、お休み所とした家には同じ連中だと思へるものが既に澤山集つて、がや／＼してゐた。

『ひよろ長いやつが來たぜ。』

『眞ン中からおツぺしよれさうな男だ。』

『あれでも勞働者か？』

『なアに、喰ひそこねの氣まぐれだらう。』

『骸骨に衣物を着せたやうだ。』

渠は自分のことをこちらに聽えよがしに渠等が冷かしてゐるのであると分つてはゐたが、そ知らぬふりをして他方の隅に明いてる長床几に歩き勞れた腰を据ゑた。すると、直ぐさま自分の爲めに女が茶

を運んで來たので、自分はばね仕掛けのやうにちよツとつツ立ちあがつた。金を取られるのだと云ふことに氣が付いたからである。けれども、直ぐまた腰をおろした時には、おかみさんが何かの用意にと云つて渡して吳れた十錢銀貨が懷中にあるのを思ひ出してゐた。どうも自分はひよいと一つのことに目がさめる瞬間には、その前後のことを忘れてる癖ができた。

『病氣の爲めかは知らんけれど、あんたは一ン日うと〱し過ぎてる』と云はれてるのだ。これでは、ならぬと思つたからこそ、どんな勞働をも厭はずやつて見る氣になつた。決して喰ひそこねの氣まぐれからではない。自分は――成るほど――文學を職業にしたいので原稿書きをやつてゐたが、それが神經衰弱の爲めにできなくなつたのは事實だ。おかみさんの所謂うと〱し過ぎてた爲めに下宿代が四五ケ月も溜つたことも事實だ。が、苟くも自分が手足だけの勞働をでもする以上は、たとへ頭腦を使はないにしても、その相手に對する一つの提供であることを知つてゐたのに、今番兵に向つた時には、自分ながら愛相が盡きることには、乞食が物を貰ふ氣になつてゐた。

『矢ツ張り、これではならぬのだ』と思つた時には、渠は自分の右の肩を怒らせてゐた。そして少し心を廣くしてがや〱してゐる連中を見渡すと、いづれも無敎育さうな姿のものばかりだけれども、なほぼつ〱後れてやつて來るものまでが、その社會に特有らしい言葉や專門語を使つて、皆、勞働にかけては自分のやうな新參者よりは一と見識あるらしく見えた。それが何だかおそろしい蔭をこち

らに投げたのである。

そのおそろしい蔭が渠の取りとめもない默想につれて重なり重なつて來て、渠をますます獨りぼツちにしてしまつた。雨はやんでたが、そとの通りを向ふがはの赤煉瓦に見詰めてる渠は、段々とまた、暗いところへ沈んで行く。そしてがやがやした聲を氣遠く氣持ちよく聽いてると、一方では相變らず戰爭の話がつづいて、樺太さへ取れぬのかと不平がつてるのもあるし、小村が歸つたら殺されるさうだと云つてるのもある。また一方では、女に關するきたない話がはづんで、あんまり女に接しないと夢にそのことを演ずるとか、出征の兵士どもは皆美人の繪ハガキを見てどうするとか語り合つてる。それがすべて渠自身の考へや實驗とそツくりだ。殊に、自分はあのおかみさんに云ひ寄るだけの勇氣もなく夢にばかり見てゐたのが原因で、こんな病氣になつたのかも知れないほど、いまだにその夢を見つづけてるのだ。

『失敬ですが、君は』と云はれたので、渠は氣がついて横を向いて見ると、自分のそばに來て立つてる者があつた。じツとそれを見上げて見たら、さツきから、他方でこれも寂しさうにしてゐた青年であつた、『なかの樣子を御存じですか？』

『いいえ。』自分の外にも新參者があるのかと思つて、少し氣をゆるめて、にが笑ひをしながら、『僕も初めてです。』

『さうですか？』青年は俄かに嬉しさうな顏をして、『僕は一つ勞働でからだをきたへて見ようと思ひまして――』

『………』苦笑をつゞけるしかできなかつた。この巖丈なからだでそんな氣になつたのは、恐らく、放蕩で身を持ちくづした結果だらう。こちらは、その反對に、放蕩さへできない爲めにこんなざまに落ちて來た。だから、僕もですとは繰り返したくなかつたので、何か別な返事をと暫らく考へてゐるうちにその機會を失つたやうだ。それが如何にも心苦しくなつた。と云ふのは、たとへ五つか六つも年したらしい者でも、同類相憐んで近づいて來たのをすげなくすると思へたからである。どうしたならばこちらも親しみを表し得られるかと默想してゐるうちに、

『もう一つ貰ふぞ』と云ふ聲が聽こえた。それで渠もふところへ右手をさし込んで、がま口を探るが早いか立ちあがつて、その方へつか〳〵と進んで行つた。皆の視線がこちらへ向いたのをそ知らぬふりで、女に、

『おい、これはいくらだ？』大きな平ぺッたい大福餅の並んだのをさし示めしてゐた。

『一つ一錢です』と云ふ返事を得ると直ぐ、がま口から銅貨を二つほうり投げて、餅を二つ摑んで來た。そしてその一つを靑年に突きつけて、

『君、一つやり給へ。』

『ありがたう』と躊躇したうへで受け取つたのが、こちらと共に並んで腰をかけてから、『どうか仲間になつて下さい。』

『………』直ぐには矢ツ張り答へを與へなかつたが、何だかここだけが明るいやうな氣がして、渠はやがて『まア、働けるだけ働きます、さ』と、半ば獨り言のやうに云つてゐた。

また五六名の一團がぞろ〳〵と這入つて來た。すると、一方で

『やア、やア、けふも亦あぶれるものが多いぞ』と云つたものがある。

『あぶれるツて何でしよう?』

『さア――』と、渠は青年に煮え切らない返事をして、自分だけで考へて見ると、溢れると云ふことと濁つたものらしい。して見ると、人數が或程度まで滿ちれば、その餘は鑑札を貰へないのであつた。こりやア、うか〳〵してはゐられなかつた。

やがて火藥庫の門前に横木が置かれると、こちらのすべては總立ちになつてわれさきにとその方へ突進した。渠は自分の目の前に俄かにぴかりと光るものがあつたかと思ふまもなく、自分も渠等のあひだに這入つてゐた。そして近頃にないほどの緊張をおぼえながら、寒い爲めやおそろしさの爲めではなく、何だかからだぢうがが〳〵と顫へてゐた。

横木のうちがはへ出て來た職人の親かたとでも云つた風の、腹がけ絆纏着の男が、小わきにかかへ

た籠の中から木の札を皆に配り初めたのだが、その標準は一見して巖丈さうなものに在るらしい。けれども、横木の外なるものどもから云へば、まるで奪ひ取り合ひのありさまだ。そしてさきに札を得たものからどし〳〵門内へ這入つて行く。

『畜生！素ばしこく貰やがつた、な。』

『おい、大將――』

『こツちへも、親かた！』

『おれにも呉れ。』

『おらにも――』

『おらもだい！』

『畜生！まご〳〵しねいで、早く渡せよ。』

『押すな、押すな』と、男はゆツたりした態度で札を一つづつさし上げて、『こら、そこの猿面――おい、その唐茄子あたま』などと、勝手な名をつけて渡すのだ。『さア、鬼子母神――そら、閻魔の眼玉――手を引ツ込めろ、貴さまぢやアねい、さア、そこの豆だぬき！』

『あは、は、は』と云ふ笑ひが自分の後ろから起つたのは、自分の少し前の方にゐた脊の低い、まめまめしい男の樣子がうまく云ひ當てられたと見えた爲めらしいが、自分は横を向くすきさへもなかつ

た。何と云はれても皆が皆一方にのみ集中してゐるのである。
　所謂鑑札とはこの木札のことで、あの籠に這入つてるだけの數なら、もう、やがて盡きるだらうと思ふと、自分も氣が氣でなかつた。夢で時間に迫られて、もう間に合はぬかのところを自分の精魂がじいんと空しく追ひかける時のやうな、もう、溜らぬほど消極的にせつぱ詰つた心持ちをやッと押さへとめた。そして自分の眼を飛び出すほど光らせて、自分の兩肱で左右の人を二三名押し分けて出た時、丁度、うちがはの男は札を高くさし上げて自分の隣りにゐる者に渡さうとした。自分の隣りがまだ札にその手を屆かせぬうちにそれを案外らくに横取りすることができた。
『やい、貴さまぢやアなかつたんだ、目高の脊高め！』
　こちらの仇名も附いた、な、と聽いて取つた時には、もう、渠は自分の身をその奪ひ合ひの間から拔けてゐた。そしてやッとのことで門を入ることもできた。
　這入つて直ぐ左りのところに皆の控へてるところがあつた。この控へ所の外には、渠が見渡したところ、建て物と云ふべきものもなく、ただ半ば枯れた草葉が雨にしめつたまま一面に廣がつて、多少の高低を有してゐる寂しいそして陰氣な廣ツぱであつた。渠には自分の內面生活をここにそツくり見せつけられたやうだ——陰氣で、寂しい、そしてどこまで行つても薄ら暗い。
『何をするんでしよう、な？』そばの一人がこちらに尋ねた。

『さア――』渠自身もそれを考へて、私かにおそろしがつてたところだ。若し生きながら冥途へ行けたとすれば、そこも矢ツ張りこんなものではなからうか――何をさせられるか分らない――そして、やることはすべて不慣れな――?兎も角も望み通りになつたと云ふ安心へつけ込んで、暗い冥途の感じのやうな朝寒が全身にみなぎり渡つて、門前で感じた武者振ひとはまた全く違つた壓迫と顫へとをおぼえて、物を云ふのも臆劫であつた。

『さア、皆一列に並べ』と、またさきの腹がけが來て命じた。そして並んだものを手近のから『一匹二匹、三匹』と云ふ風に數へて、都合十二匹をどこかへつれて行つてしまつた。すると、また別なのが來て、同じやうな數へかたをして、また十二匹つれて行つた。第三回、第四回のは各々九匹であつた。また、五回目のは六匹であつた。から云ふ風にそれぞれあたま數が違つて行くのは、それぞれに違つた仕事の向きがある爲めだらうと想像できたが、人を畜生扱ひにする腹がけどもを地獄の獄卒のやうだと思ふと、引かれて行くもの等が――そのまた影も形も見えなくなるので――どこへぶち込まれるのか、投げ飛ばされるのか分らなかつた。

渠がいよ〳〵第六回のに數へ入れられる順番になつた時、せめて自分の不安や苦しみの豫想やの相棒にとかの青年を思ひ出してゐたのだが、どこにも姿が見えなかつた。多分、氣の毒にも、所謂あぶれてしまつたのだらう。して見ると、脊の低い者に向けられた鑑札を自分が横取りした時、それがあ

の男のではなかつたか知らん?世に初めて悪いことをしたと云ふ氣になつて、德義上特別な不愉快を感じ添へた。そしてまだ耳に殘つてる親かたのすて言葉を心で繰り返して自分を責めて見た。

『日高の、脊高め!日高の脊高め!』外へあと戻りをして、入り代つてやるのが本統ではなからうかとまでも考へたのだ。が、今の場合、とても、そんな道義や不愉快に贅澤を云ふ餘裕のあるべき筈がなかつた。監獄なら、人は早く赤煉瓦の外へ出るのが望みだらうが、ここでは外から內へ這入つたのがけふ一日の生命ではないか?日高の恰好に見えたほど一生懸命になつてゐなかつたら、このひよろ高い骨と皮とはそれだけ血のめぐりを缺くことになるのであつた。その上、これは恐らく自分ばかりの無法ではなかつたらう。

それに、自分が鑑札を橫取りした時にそばにゐた者が果してあの靑年であつたか、どうか、これは――うツかりしてゐたので――はツきり肯定することもできないのである。また、一緒にここへ生還することを得たもの等でも、別々につれ去られると、どこへ行つたのか分らない。自分の六人組でも三つに別れて、二人づつになり、長方形の或天幕張りの中へつれ込まれてしまうと、その二人以外の消息などは少しも傳はつてさへ來ないのである。

火藥庫と云へば、仰山なところ、危險なところで、兵隊も多くゐて、戰爭の氣ぶんもおそまきながら大分に味はへるのだらうと、半ばは恐れ半ばは樂しんでゐた。が、さう云ふ大きなことはありもし

なかつた。そしてさぞ苦しからうと期待した勞働だッて、與へられて見ると、力わざでも何でもなかつたので、張りつめてた渠の心は少からずゆるんで、再びうと〱した狀態が渠に立ち戾つて來た。

渠はただ机がたの小い腰かけにかけて一つの臺に向つてると、靴屋のしてゐるやうな白の前掛けをかけた役人——だらう——が大砲の彈丸を持つて來て臺の上に置く。大砲と云へば大きな物とばかり想像してゐたのに、こんな小い彈丸の這入るのもあるのかと思ふと、滑稽なやうでもあつた。かなざし一尺にも足りぬ圓錐形の、その底なる眞鍮巻きのあたりを渠が命令通り兩手で押さへると、相手の役人は手さき上手に上部のかぶせ蓋を三四度ねぢてこれをはづし、中なる彈藥罐を拔き取つてから、再び蓋をかぶせてねぢる。そして中味の方をどこかへ持つて行つて、また新らしいのを持つて來る。その間に、こちらはから彈丸を天幕外のトロクへ積み込む。かうして拔いては積み、拔いては積みしてトロクが一杯になると、これをレイルの上に押したり乘つたりしてたま倉のあるところへ運び行き、そこにまたゐる人に受け取らしてから、トロクと共にもとへ歸つて來るのも渠の仕事である。

たま倉はこの方面には三つ四つあつて、すべてその一々が三方を土手でかこはれてゐる。若し爆發しても、恐らく、被害を少くする爲めだらう。天幕は同じやうなのが三つ並んでゐて、渠の働いてるのは眞ン中の一つであつた。ここには今一人の仲間が別な役人を相手としてゐるのだが、あまり話せさうな者でもなかつたのでこちらからは聲をかけなかつた。

『もう、いよ〳〵戰爭をやめますか、な』と、然し、向ふから、兩方の相手が丁度一緒に留守であつた時に、話しかけた、『砲彈の中味を拔いてゐるやうでは？』
『さうでしよう、な。』止むを得ず答へたついでに、ふと斯う云つて見たくなつた『然し、案外らくな仕事です、な。』
『さア、な、危險と云へば危險なだけで。』
こちらの相手が出て來たので、またきちんとそれに向つた。無論、渠自身もこの幕屋へ這入る前にあつた腹がけの簡單な注意演說や、這入つてから最初に相手から受けた說明やを忘れてゐるのではない。彈丸の蓋と底とのあはひにちよツと革の舌が出てゐる。この舌をひどく引けば直ぐ爆發するのはもちろんだが、これが何とか工合の違つたことになつてゐても注意をしなければあぶないのだと。そしていよ〳〵それに當つて見ると、かの砲兵工廠の爆發事件も思ひ出されて、自分はいのちを儲ける爲めにいのち掛けで來たわけなので、新らしい實彈が運ばれて來る度每に、實戰に臨んでるかのやう心の日までが、ちやんと勇ましく覺めないでもなかつた。
が、その瞬間を過ぎると、直ぐまた自分自身のことではなくなつて、戰爭の代りに今度は革命でも起つて、ここのに限らず、火藥庫と云ふ火藥庫を爆發させたら、どんなに面白い結果を來たすだらうなどと夢見てゐた。これが勞働なら、渠は勞働の間にも一の瞬間と他の瞬間との聯絡がついてゐない

ことに氣が付いた。

やがてドンが鳴つた。そして自分の開らいた握りめしは晝食としていつになくうまかつた。が、最後の一つまでよく味はつてるひまがなかつた。食後も同じことをつづけるのかと思つてたら、さうではなかつたので、自分等六人組の親かたにせき立てられた、

『さア、おれについて來い！』

何だか名殘り惜しいことには、渠も他の五名と共に火藥庫を出て、市中の方へつれて行かれるのであつた。天幕を出る時、おほ急ぎで最後の握りめしを頰張つたりしたので、自分の破れがさをその入り口に立てかけて置いたまま忘れて來たが、これが却つてきたないおも荷を一つまぬがれたことになつて、自分には都合がよかつた。けれども、齒のでこぼこした高い足駄をはいて、天氣になつた市中の道路をずん／＼急いで歩かせられてるのが面倒だ。そして辨當ばらがまだ落ち付いてゐない。それに、火藥庫内ではさう骨も折れなかつたと思ふのに、可なり腰かけ詰めであつた足がふくらッ脛のあたりで少し引き釣る氣味になり、兩の肩が張つてゐる。渠は自分の右の肩を左りの握りこぶしで、また左りの肩を右のそれで叩いて見たりした。その脊なかにはうッすりと太陽の光を感じてゐたが、自分にはそれが却つておも苦しかつた。そして息を詰らせるやうであつた。

足はさきを急ぎながらも、成るべく暗い方へと自分の心はあと戻りしてゐる。そこへ、ふと、思ひ

出したのだが、自分はかの青年をお休み所に置き忘れた時、餅の代はその前に拂つたにしても、多少の茶代を置くべきをも忘れたのであつた――ふところの殘金八錢のうちから、多少でも！さうだ、多少をでも！

『さうだ、さうだ！多少でも――多少をでも！』渠は青年のことを殆ど全く見ず知らずのもともとへ押し返してゐたのに、今度はまた茶代を置かなかつたことが氣になり初めた。獨り言を自分の聲にまでも出すやうにして、『さうだ――多少――を――でも！』

『さうです、な。』これも後れて歩いてたのがささやくやうな聲でこちらへ突然話しかけた。賃金に關することだと聽き取つたらしい。『早く多少をでも呉れて別れたらよささうなものだのに。』

『…………』現金なことをのみ考へてる者だと思ふと、返事をしてやる氣にならなかつた。

『あの男は金を持つてないのでしようか？』

『…………』矢ツ張り、答へてやらなかつた。

『…………』これも獨り言のやうになつて、『どこまで取りに行くのだらうか、な？』

『…………』おや！自分と同じ幕屋で働いてたかすりの羽織りだと思つたが、それ切りにした。が、羽織のない自分ばかりが人に物を云はないのではない。後ろの方から他の仲間を見てゐると、皆自分と同樣に押し默つて、古ぼけた絆纏や筒袖のふところ手をしながら、くびや肩をすくめてついて行く。

渠等にだツて多少の友達がないことはあるまい。自分ながら見られたざまではない。けれども、そんな世間體を考へるよりも、皆も恐らく自分と同じやうに、かの眞ツさきに立つて時々あとをふり返り、

『しツかり歩け』と命令する腹がけの考へが分らなかつたのだらう。

『全體、どこまで行くのです？』――『僕等をどうして呉れるのです？』――『人を畜生扱ひにまでして置きながら、その癖、金がその場で拂へないのか？』こんな疑問は口に出せばいくらでもあるのだが、これを云ひ出すのが何だか薄氣味惡いやうで、自分はじツとさし控へて默想にばかりしてゐた。すると、その親かたを初め、それに從つてさきへ行くもの等の脊な脊なに當つてるうすい光線が、こちらへ明るみを投げ返さないで、暗い蔭を返してゐる。このままこツそり落伍してしまつても、墨を吐いたいかの如く、又、煙筒を拔いて黑煙を出した戰艦のやうなもので、あとを暗ますのは容易だと思へた。けふ半日の賃金ぐらゐ、うツちやつても何でもなかつた。

ただ一直線の方向を外れさへすればいいのだと、渠は私かに幾度踏みとまつてそれを實行しようと思つたか知れない。けれども、その度每に、なほ賃金に關する自分の未練と腹がけの男に對する自分の好奇心とが立ちもどつて來て、段々おもくなる足をも進めて呉れた。

火藥庫の仕事はあれで丁度終はつたので、それと關係ある筈の砲兵工廠へでも行くのかとも想像し

てゐたのだが、そこの裏通りをも通り越して本鄕に出て、湯島の切り通しを下だつたから、もう、下町だ。
『しツかり步け、もう、直きだぞ』と、男は云つた。皆も自分等のしほ〳〵した步きぶりを取り直して、馬が立て髮をぴんとさせたやうな活氣付いた。
『やツと來たか、な』と素直に云ふのがあつた。
『步くのも勞働のうちになつてりやア構はねいが』と皮肉つたのもある。
渠自身は、もう直きと聽いてから喜んだのは一時で、直ぐまた却つて一層辛抱し切れないほどの疲勞に襲はれるやうになつた。若しその場に倒れたが最後、恐らく、馬や自轉車に踏まれても、分らないほどぐツすり寢込んだだらう。いツそのこと、實際にそこまでに至れば、この數ケ月を寢ては眠れず、覺めて却つてうと〳〵する、中ぶらりんの、不安で苦しい自分の夢うつつを一掃して、新らしい現實が出現するかも知れないので、僅かの賃金や何かには十倍も百倍もする儲け物であつたらうに！
さうもできないので、もう、殆ど夢中で、渠は苦しいのか、苦しくないのか、意識がただぼうツとしてしまつた。なほのべつにどこをどう道引かれて行つたものか、は、はア、本所の太平町までも來た、な、と分つた時には、また劍附き銃をさゝげてゐる者が立つてる門前に近づいてゐた。
『とまれ！』腹がけは斯う命令して、自分等の方に向き直つた。皆はそこに集つて行つたので、自分

もさうしなければ再び鑑札が貰へない氣がした。そして人の後ろから急いで手を突き出したとたん、前の方へよろけて前のもの等にのしかかつた。

『よせ』と、そのひとりは肩をゆすつた。それで氣が付くと、手を出す必要もなかつたのだ。自分はつま先き立つて歩いて來たやうな氣もする。が、矢ツ張り、高い足駄をはいてゐる。

『都合六四、六名です』と腹がけが番兵に挨拶して、皆は門內に案內された。また午後一時半だからこれから四時間は働けるのだぞと云はれたやうだが、渠自身には、もう、たそがれ時の世界であつた。

自分の目の前の物よりも寧ろ火藥庫の思ひ出が見えて、一面に枯れ葉まじりの草地だが、……建て物らしいものもなく……トロク道が幕屋の前を通つて、ぐるりとどこか裏手の方へまはつて行つて……三方を芝草の土手で圍んだ地下の倉……どこか少し高いところから、角の生えた優しい動物が半身を現はした……羊か知らんと思ふと、人間で……而も自分だ。

『こんなに人を畜生扱ひにして！』……ずん〳〵と自分のからだが延びて行つて……お休み所の店さきが現はれた……靑年がゐるのかと思つたら、これも意張つた腹がけで……それと自分とは大きな大福餠を爭つてるのだが、……手をどう延ばしても、なか〳〵そこへ屆かない……『おかみさん、おかみさん』と叫んで、自分は下宿屋の子持ち未亡人に助けを乞うてゐた。

『こら』と、ひどい聲が聽こえたと同時に、自分の尻のあたりが蹴られた。驚いて目をさますと、渠

は今自分の見おぼえもない地上に兩足を曲げて横ざまにつツ伏してゐたのであつた。そしてまた『おい、しツかりしろ』と云ふ、これには然し聽きおぼえのある聲が後ろにしてゐる。自分は光線のもとにほツこりした半身を急に起してふり返ると、果して腹がけがひら地にその影を投げてつツ立つてゐた。

『すみません、つい、勞れてましたので。』自分は、もう、何と叱られても止むを得ないことをしたと思つた。苟くも一たび勞働を賃金の爲めに提供してある以上はだ。ところが、腹がけは案外優しい調子で、聲を低めて、あたりを見まはしながら、

『なアに、さう働かねいでもいいんだが、監督が來た時にやア働いてるふりをするんだ。』

『はい』と答へた自分は、奈落から救はれた氣がした。同時に、多少眠る事ができたあとの爲めか、ぱツちりと目があいてゐた。落ちてるかな槌を直ぐ手に拾ひ上げて見ると、打ちじりと反對の方が釘拔きになつてゐる。それでやツと記憶を辿つて行くと、何でもこれを手に渡された時に、ここいらに在るものの釘を拔けと云はれたのであつた。

何かの建て物をつぶしたのか、或はそれが風か何かにつぶされたのか、兎に角、そのあとらしい。圓い柱や幅びろの板がまだ部分的に組み合つたままで倒れてゐるのもある。それが而もけふやきのふの仕わざではない、長い間あめ風に打たれたままのやうだ。戰爭の爲めに人手がなかつたのだらうが、

その間自分などはぼんやりと何をしてゐたのか？叶はぬ戀に、神經衰弱！

これを思ふと、今まで卑しんでた勞働がいよ〳〵意味のあることになつて、これまで無頓着であつた戰爭の爲め、國家の爲め、若しくは社會の爲めが、乃ち、自分の生活内のことであつた。

ぎゆう、ぎゆうと、他のもの等もさび釘を拔き取つてる音がしてゐる。渠自身もさうしたあとの古材木は、これを段々と一方へ方づけて行つた。そしてここに初めて勞働に對して賃金を貰ふのは天下晴れて當然の要求であると云ふ確信を得た。

監督らしい兵士が見まはつて來て、時々、下らぬ小言を云はねば損のやうに云つたけれども、渠はそんなことに耳を貸さなかつた。そして平氣でやるべきことをやつてゐた。が、監督が行つてしまうと、暫らくして必らずまた自分の腹がけがやつて來て、

『さうしツかり働かねいでもいいんだぞ』と、同じことを繰り返した。『お互ひにあすの樂しみがなくなるから、なア。』

『ふとい奴だ』と、渠は自分の心に云はせた。一日分の仕事を二日に、二日分のを三日なり四日なりに引き延ばして、それだけ多くの割り前をはねようとしてゐるのだと知れたからである。戰爭でいのちを棄てたものが多く、國家としての物入りがおびただしい間に在つて、こんなのを獅子身中の蟲と云ふのだらう。媾和談判全權大使の小村が米國から歸朝してよしんば殺されるほどの虐待を國民から

受けても、力一杯の盡力はして來たのだらうから、その人としての面目は立たう。が、國民のうちには、小村のやうな難局を外れて、而もこッそりとわが國の體面を蝕喰ませつつあるものが――この下層社會までを見れば――幾百萬人あるか知れない。自分はこの事實を素ッ破拔く爲め青年會館か新富座かで獨り演説して、今の日露戰爭が終結するその僞はらざる記念にしてもいいのだが――。

　うん――ぎゆう、うん――ぎゆう、うん――ぎゆうッと、三度の全身的努力で一つの長い釘が氣持ちよく拔けた。そしてそれが丁度自分の獨り演説を實際にやつてしまつたかの如きこころよさであつた。大分にかた向いた日かげを吹いて來る風は寒いけれども、自分の袷せと單への寢まきとを重ねたその下の紀州ネルのシヤツがその前からあせばんで、肌の熱になまあツたかい。

『おめへはなか／＼精出す、なア』と云つたのは、自分に一番近くゐて、働く眞似をしてゐた仲間だ。こちらを冷かしたのだと思へたので、自分は相手にしないで、聽こえぬふりをした。すると、このふりが自分の口を一方にばかり不自然な据わりかたにしたので、目あての釘に向つてへたな寫眞を取つて貰つてるやうに待ち遠しくなつて、先づ自分のからだや顏からまたたきをし初めた。そこへ時を得がほに立ち戻つて來たのは、自分の努力のい吹きで今までやツと吹き拂つて置いた自分の疲勞のうす霧で――これが、重なり籠めて來るに從つて、自分の持つてるかな槌のさきも段々と自分の目の前から遠のいて行つて、自分の釘の拔けるぎゆう／＼が、隣りの、その隣りの、またその隣りのと云つた

風な人のなまけた手に渡つてる音の如く、自分の耳には聽こえる。

自分ながらこれではならぬと思つて、しやがんだ腰をのばし、槌を持つた方の手を振りまはしたり、左りの手で胸を叩いたりして見た。が、その時限りのことで、あとは直ぐまたあたまがぼうツとなる。そして、その上に慣れぬ辨當ばらの減つたのを訴へて、腹の蟲が釘のかはりにぎゆうッと云ひ出した時には、下宿屋の部屋に於ける空氣の如く、自分のシヤツがじめ〳〵して冷たかつた。そして働きの手もとが最もたど〳〵しくなつたのは、必らずしも本統のゆふかたの來た爲めばかりではない。

『もう、置け――おれについて來い。』斯う云はれて渠が腹がけと共にそこを出たあとで、みち〳〵思ひ返して見て、そこが、何と云ふところであつて、何をする場所か分らなかつた。ただ部分的な物が散らばつてゐて、少しも取りとめられなかつたありさまは、まるで自分の平生の生活を見たやうだ。して見ると、自分はけふ一日の二ケ所に於けるぼんやりした勞働は、結局、もとの杢阿彌であつたか？こんなに腹を減らして、儲け得るのは僅かの賃金の外にないのか？

『それも全體いくら呉れるのだ？いや、どこで呉れるのだ？』私かに斯う叫んで、心がいら〳〵して來た時には、亂ぐひ齒のやうに街燈の光があつたり無かつたりする市中を引かれてゐた。目さきがちら〳〵するので、腹がけの男を見失つてしまはないやうにと、成るべく接近して歩いた。

男は――これも絆纏着のふところ手をして――物も云はずふり返りもしないで、度々暗い横丁へと

還入つて行く。折角明るい通りへ出たかと思ふと、直ぐまた反れてしまう。その様子が疑へば如何にもをかしいので、渠はこりやア、自分を途中で撒いてしまう算段ではないかと感づいた。で、足は疲れ腹にも力がなくなつてるに拘らず、男が足を早めれば、自分も亦急いだ。もう、この時には取るべき賃金だけが目のさきにぶらついてゐた。理窟を附けたり、おほやうに見たり、卑しんだりしてゐた賃金だけがだ――折角ここまで働いた一日の結果をこんな男に横取りされてはたまるものかと！

やがて厩橋へ出たので、先刻もここを渡つたのであることを思ひ出せた。して見ると、また大塚まで戻つて行くのか知らん？人を馬鹿に！若しさうなら、然しこの本通りを何でもまた眞ツ直ぐに進みさへすればいいのであつて、腹がけ先生もさう疑つたほどの悪人でもなかつたのだらう、そして全く物を云はないのは、矢ッ張り、これも同じやうに腹が減つてるからなのであらう。

ところが、暫らくすると、また左りへ曲つた。

『困ります、なア』と、後ろから云つた者があるので氣が付くと、自分の外にまだ仲間があるのを忘れてゐたのだ。そしてその言葉にはまたかすり羽織の聲があつた。みんなで相談して、どこまで行くのか聽き糺して見たらと云ふ氣が同時に出て、先づ、

『さうです、なア』とふり返つた。自分には、どちらの聲も貧弱に思へた。それが爲めにか、高が腹がけの先生に單獨で突ツかかれないのは？兎に角、この先生が物を云はぬのが相變らず何だかうす氣

味惡かつた。

『もう、三筋町に來てい』と、力のない不平も聽こえた。

『もう、直きだ――早く歩け！』これは大平町の門を出てからの先生初めての聲だが、ここにもこれだけが力強く暗やみに響いた。

果して直きならと少し心配がゆるんだので、渠は思ひ返して、また他の仲間に頓着しなかつた。それからまた無言で五軒町のおほ通りまで來た。すると、先生はこれも勞働者らしいもの等の影が集つてる向ふがはへちよこ〳〵と刻み足で走つた。

渠はそれを見て初めて安心してあとをついて行くと、向ふは立ちどまつてこちらを向き、

『ちよツと待つてろよ。』斯う云つて、奧の方にも多人數の、火藥庫前休憩所に於ける如くがや〳〵した聲が聽える狹い路地へ這入つて行つた。多分、ここが本統の親かたで、ここから總人數のあたまをはねた賃金が出るのらしい。して見ると　渠自身を命令した腹がけの如きはそのまた手したのぺいぺいであつて、そんなに畏れ敬ふには及ばなかつたのだ。

渠は腹や手足の力がなくなつてるので、金を取れば、先づそば屋へでも這入らうと待ちかまへてると、腹の虫がとめどなくぎゆう〳〵、ぎゆう〳〵云ふ。今更らの如く、大平町に於いて骨の折れた自分の釘拔きの場がはツきりと聯想された。この聯想から聯想して大塚の火藥庫前に集つてた人々の專

門に用ゐてゐた言葉をいろ〳〵思ひ出さうとして見たが、あぶれるの外は思ひ出せなかつた。
　渠の腹がけは腹のあたりに重く垂れたどんぶりの中をわざとちやら〳〵云はせて、出て來たことは來たが、直ぐまた無言で歩き出した。そしてまた成るべく暗い横丁を縫つて行く。渠は、もう、溜らなくいら〳〵して來て、どこを通つてるのかを問ふひまもなく、ただぴか〳〵する銀貨の音を額のあたりに見てゐた。そしていくらになるのかまだ知らないが、五錢か十錢でうどんを喰つて歸り、あとはすべておかみさんに預けよう。あすもあさつても亦さうして、段々とかの女に失つた信用を恢復しようと考へた。
　けれども、腹がけは何度いろんな横丁を出たり這入つたりしても、持つてるものを渡さうとしないのである。それがどうも不思議であつた。五軒町へ來るまでは現金のなかつたことがこちらにも分つたにしても、今度は持つてるのだから、途中で逃げればこちらはあぶ蜂取らずだ。ぎゆうッと自分の腹が云ふと同時に、
『どこまで無駄あしさせるのだい』と、喉もとまで出た。が、これをじッと云ひ抑さへたのは、今度こそ向ふをおぢ恐れたのではなく、徒らに怒らせて逃がしたくなかつた爲めだ。
　けれども、神田宮本町の或狹い路地へ這入るところで、向ふは立ちどまつて、
『さア、皆、手を出せ――渡してやる』と云つた。すると、申し合はせたやうに皆が揃つて腹がけの

周圍に手を出した。その手の一つの上へ、

『さア十錢だぞ――いいか？二十錢だぞ――いいか？三十錢だぞ。四十錢だぞ、いいか？それだけだ。』

第二、第三の手にも同じやうにたッた四十錢の念が押された。そして一番さきの手のぬしから默つて順番にそこを去つてしまう。碌々互ひに挨拶もかはさなかつた仲ではあるが、渠自身には何だか永久に生き別れをするやうに名殘りが惜しまれた。たとへ每朝大塚の赤練瓦の門前へ立つても、あぶれを喰ひつづければ、二度と再び一緒に働くことがあるかないか分らない。そして自分は若しここに最後まで引きとめられて、而もお前だけには四十錢は愚かなこと、二十錢も十錢もやらぬと云はれても、もう、相談あひ手のゐないと云ふ場合が心ぼそくも切に想像されて、じいんと早や氣が漏れさうになつた。神經の衰弱は一日ぐらゐの勞働ではまだ直つてなかつたが、幸ひにして四番目に去ることができた。

近所のそば屋へ這入つてから考へると、あの腹がけは不都合千萬にも腹がけ自身の住まひ路地の入り口まで自分等をお伴させたものらしい。それも金を渡し惜しんでだらう。暗い橫丁へ度々這入つたのは或はすべて近みちをしたのに過ぎぬとして見ても、自分に金を渡した時などは、お前は眠つたりしたから少しさし引いてやると云ひかけたやうに暫らくこちらの顏を見てゐた。

『あすも亦お行きですか？』出しぬけに斯う聽かれたので、驚いて見上げると、かすりの羽織が立つ

てゐた。馬鹿にしてゐたのだけれども、この男だけはいつもこちらのあとになり、さきになつてこちらを手賴りにしてたやうであつたのだ。

『行くつもりですが――』と、俄かに懷かしくなつてちよツと微笑を向けたが、腰かけたまま動かないで、うどんの一杯目に殘つたそのしるをすすり終つた。晝めしの時と云ひ、今と云ひ、こんなにうまい味をおぼえることはあすも亦繰り返したかつたし、その上に、けふの勞働中に二三度緊張したその時々の氣ぶんも、思ひ出せば、繰り返すべき愉快であつた。で、一緒に行けと勸めるやうに、『君もどうです?』

『僕も行きます。』

× × × ×

× × × ×

渠はその翌日また、朝早く支度して大塚の方へ出かけたが、今回は空しくあぶれを喰つた。

――(大正六年十一月)――

大將の疑惑

渠はその初め十七歲までは武人を志願でなかつた。『學者になつて身を立てようとして、或時實父の許しを請ふたところ、武士の家に生れたものがかかる懦弱なことでは宜しくないと斷然はね付けられた。止むを得ず無斷で家を飛び出したのぢやが、萩の城下に近い玉木翁の感化と吉田松陰の遺訓とによつて、矢ッ張り、軍人と成つてしもた』と、よく渠は人に語つてゐた。

西南の役に陸軍少佐として小倉から出陣し、上官の戰死によつて當然聯隊長の指揮權を振へたが、敗戰の爲めに聯隊旗を奪はれたのが千秋の恨事であつた。陸軍では、この旗を野津大佐が川尻の戰鬪で取り戻したことにして、その假定の實景を錦繪にしてまで各地に賣り廣め、大佐は猛將としてこの戰功に報いられた。が、渠の方は本人として實相を知つてるだけに、一層耻辱を感じて、その時から旣に自分の死を少しも厭はなかつた。

征淸の役には、山路師團長のもとに少將として第一旅團長を承はり、金州半島でむろん戰死を覺悟

であつたが、案外無事に山路將軍と共に凱旋することができた。その後第三次の臺灣總督となり、やがて日露戰爭には、大將として旅順の背面攻擊に當つた。この時、最後には敵の開城を止むなくさせたけれども、渠自身の愛兒二名を初めとして、餘りに多くの將卒(じやうそつ)を失つた。そして自分年來の所謂『死の目的』は達せられなかつた。

止むを得ぬ凱旋と同時に闕下(けつか)に參拜して

『不肖――この上はただ割腹(かつぷく)して――罪を！』これは、無論、本氣にそのつもりであつた。が、御前を拜辭して下がらうとすると、今一度お呼びとめになつて、今は死すべき時に非ず、强いて死せんとならば朕が世を去りたる後に於いてせよと云はれた。そして男爵より伯爵に進み、功一級金鵄勳章を賜はつて、やがて〇〇院長(ゐんちやう)となり、特に貴族教育の一大責任を承はることになつた。

渠はこれを斯う二樣に解釋(かいしやく)した、陛下御在世中は死すべきでない。それから、死すべきでないのは、改めてかかる教育主任をおあづかりする爲めだ、と。

『わしはその任でないと思つたけれども、御製(ぎよせい)まで賜はつて、特に陛下の御思し召しであつたから』

と云ふのが、この時の渠の心持ちであつた。そして渠のあらゆる友人や新聞記者どもの述べる祝辭(しゆくじ)に對しても、たださう云ふより外言葉はなかつた。そして渠自身は私(ひそ)かに『いさをある人を教への親としておふしたてなむやまと撫でし子』を何邊となく念佛のやうに唱へて見た。

正直に考へると、自分は十八歳以來武骨な武人、軍人として育つて來た。だから、軍人としての體面に關することは不斷にもどう守つてればいいかと云ふこと、また、いざ戰爭となれば、どう覺悟して行けばと云ふやうなことなら、年中考へても來たし、また二三度はこれを實戰に於いて、實驗もしたことである。そして軍隊教育のことなら、隊に於いて身づからその局に當つて見たこともあるし、はたから何度も口出ししたこともある。けれども、軍人教育以外の教育となると考へがずッとあと戻りして、先づ第一に萩藩に於ける明倫館時代のことが思ひ出されるのである。

玉木翁の嚴格な仕つけのもとに授けられた松陰の『士氣七則』によつて、體軀の練磨と精神の修養との必要なることを初めて知つた。が、十七歳の秋、再び萩へ出て入學することを得た明倫館では、一萬四五千坪の地積に、南面正門を入りて北すれば、中央に聖廟なる宣聖殿があり、その西に講堂があり。更らに西すれば、炮厨舍寮が竝び立つてゐた。轉じて聖廟の東に向へば、演武場なり、馬場なり、練兵場なりが備はり、廟の後ろなる池が水泳の習練場であつた。その西、謂ふところの學校御殿乃ち、濟美堂が藩主の學に臨み養老の禮を行ふところであつた。

この館には山縣周南の書き遺した『學宮功令』と云ふ有名な教育綱條があつて、『卯の時、板を聞いて起き盥嗽結束して堂に升る』とか、『巳の時……厨に入つて會食』とか云ふ、時々刻々に爲すべきことを規定した。『夜學を廢する者は先づ事由を具して館長に請へ。』――常業の外、各自別に私業一部を

受く』——勉強の爲めと思へば、誰れも皆これを窮屈とは考へなかつた。學生として皆がじツと忍び押さへてゐたのは若い意氣込みの伴ふ血氣をであつた。在學中に長州勢と佛蘭西軍艦との戰ひが起つたが、佛艦に糧食を供給したと云ふ小倉藩を自分も攻め懲らしに行つた一人だ。

　こんなことを特に思ひ出して行くと、その時の若い血が再びこの老後の自分にも湧き返つて來る氣がする。そして今で云へば校歌なる、かの『烏々の歌』が自分の心の奥に青年の聲を擧げてゐる。『書を讀む莫れ、書を讀む莫れ、惠施五車いまいかん……斗酒を飲み、聽け我れ天を仰いで烏々と呼ぶを……君見ずや前年賊兵巴渝を破り……浣花草堂妖狐の巢たり……好く賊奴を殺し金印を取るに、何ぞ區々たる章句を用ゐんや……』これは、實に、誰れも知つてる通り、宋の樂雷發の作だ！これにつれてまた忘れられないのは、その時から尊敬のまとにした山鹿素行の文武兼修、知行合一、實踐躬行の學問と武士道とで——『學、聖教に志して異端に志さず、行ひ、日用を專らにして奢樂を志さず』——『功名より入りて功名もなく、唯、人たるの道を盡すのみなり』——『學、何すれぞ興る。學は人と爲る道なり……敎へは人と爲す道なり』——

　この學、この敎への外に、『やまと撫でし子』を敎育する道も別にないと思ふのだけれども、本院の職員敎授どもを集めて見ると、ちよツと當つて見たのではまだよく分らないが、どうも渠等と自分との間には何となく考へに隔たりがあるやうだ。

『わしをただ上長官とおもて、軍人がその上官に對するやうにして吳れては困る。わしは今の教育に實際暗いのぢやから、成るべく虛心平氣であなたがたの御意見を聽いて行きたい。で、おもうたことは遠慮なく云ふて貰ひたい。』斯う云ふ考へでおもな教授の人々を一々別々に語つても見たけれど、矢ツ張り、要領を得なかつた。一つには、渠等が自分に遠慮して思ふ存分を云へないのかとも思はれるけれども、一方にはまた自分自身の考へてることには、とても、渠等とは埋め合せの着かぬ大きな穴があるやうだ。

『時勢後れの老人』と云ふ記事をたツた一つ或新聞で自分のことに關して書いてあつたが、果して時勢後れの爲めにこの大きな穴ができるとすれば、もう、自分には全く今の教育に見當が付かなかつた。そしてこれを思ふと、任をお受けしたのが私かにそら恐ろしくなつたと同時に、自分に十分の成績を擧げる確信がない。そして自分の周圍をおとなしい子供が二名とも戰死して永久にゐなくなつたよりも以上の、うすら暗い寂しみをおぼえないではゐられなかつた。

大抵の新聞では、然し、軍人の典型とも云ふべき人物が惰弱な華冑の子女を――さうだ！男子部ばかりではない、女子部をも――教育する任に當るのだから、これまでに先例もなく、最も適任だと讚賞して吳れた。そして知人や友人どもも亦同じやうなことを繰り返した。が、自分はお受け後、今になつて見るほどますます、私かに氣耻かしくなるばかりだ。

『時勢に後れると云ふこともあるが、どうぢやらう、な、今の時勢のやうに一般が文弱に流れてをつては、いツそのこと、昔の教育法に立ち返つて見たら？』一番親しい友人の一人に斯う、相談がてらちよツとだが、云つて見たことがある。すると、これも軍人であつた人が答へた、

『そりやア至極賛成ぢや――どうも、人間は軍人的教育を受けて來たものがえいやうに思はれる。』

けれども、第一、自分は軍人として典型たるだけの資格がない。最初の、最も若い時の出陣らしい出陣には負けてばかりゐたし、第二回の戰爭には勝つたけれど自分ばかりの力ではないし、第三回のには、また自分の子供と共に味かたを多く殺し過ぎた。この戰爭では、恐らく第一等の難局に當つたと云ふことが多少の申しわけにはならうが、そして自分の家名をつぐべきものを二名とも無くしたことが多少の同情を引いたが、この申し分けと同情とをかち得れば、もう、自分はそれで十分滿足だ。然るに、その上には最高の勳章を戴いたり、皇室の藩屛たる華族の子女教育を引き受けたりしては、すまぬ。自分にはただ軍人たる體面を成るべく恥かしめないやうにする以外に、實は、何等の方針もないのである。

今更らの如く最も畏れ多いやうな、最も心苦しいやうな氣がする。これを無理に押し隱しながら、毎日さりげなく學校に出勤し、成るべく當らずさわらずに事務を執つてゐた。これが、然し、どうも自分で自分を欺いてるやうで――かの、昔、奪はれた聯隊旗の行くゑが分らないのを、他の人が奪ひ

返した如くにしき繪で書き立てられたその當時の、不愉快な心持ちを再び呼び起したのであつた。こんな時に、あの戰死した子供のうち、一名だけでもそばにゐて呉れたら、年が若いだけに、今の時勢を自分よりもよく知つてたらうから、何かとうち明けた相談もして見るのに――。年寄つた女一人などでは、こんな大切な事の相談相手には少しもならぬと思つて、家にゐても自分獨りで寂しい物思ひに沈むことがつづいた。そしてよく〱思案にあまつた時、或日、晩酌の席で、相手をして呉れてる自分の妻に、

『どうも困つた、なア』と歎息して白狀したのは、よく〱のことであつた。ところが、かの女は――さすが、鹿兒島で女子に文字不必要と云はれた時代から多少の學問を受けてただけあつてか？――こんなことにもまんざら馬鹿ではなかつた。別によく考へた上でもないやうにだが、これも改まつて寂しさうな微笑を浮べながら、

『別にお困りになることはございますまい、天子さまから俄かに澤山の子供を授かつたとおもや――』

斯う云つて、かの女はぴツたり口をつぐんだ。渠が見ぬふりをして見たところでは、かの女の心はまたもろい涙にむせびかけたのである。この頃では、かの女が人の子の話をしてもわが子の思ひ出し泣きをするので、渠は成るべく死んだ兒のことは勿論、他人の子のことをでも、かの女の前では云はぬことにしてゐるのだ。そしてたまに口に出してくよ〱云ひ初めることがあると、これをたしなめる爲

め、可哀さうだが、あたまから一喝して、叱り付けて置く。が、今晩はまことにいいことを教へて呉れたので、

『あ、それだ』と、渠はその場に思はず自分の膝を叩いた。そしてかの女を慰めがてら、「戰爭がすんでからは、もう、何もすることがなくなつたやうにお互ひに氣がゆるみ、わしも自分のことにばかり屈托してをつたので、ちよッとそんな智慧は出なかつた。さうぢや、澤山の子どもを俄かに授かつたとおもや、わしも氣を換へてこれから面白くやれよう。さうぢや、さうぢや！陛下の藩屏になるおかたがたをわしらの子どもとは少し畏れ多いやうぢやが、この方針で行けば、恐らく、お思し召しに十分報ひ奉ることができようと思ふ。』

渠はそれから自分の學校に對する正直な親しみと確信とを得て、新らしい方針がきまつたやうに思へた。が、自分の生徒を愛すると云ふことは、自分には、自分の部下の軍隊を愛して來た經驗に從ふより仕かたがなかつた。軍隊は君の爲め國の爲めであるからこれを愛することができたので——華族の學校の生徒も亦、自分には、さうでなければ自分の愛が起る筈はなかつた。そしてそれには、矢ッ張り、山鹿素行や松陰によつて知り得た武士道的精神と紀律とが必要であつた。精神と共に身體も健全でなければならなかつた。

別に反對も出ないので、いつもこの方針を以つて教授や講師どもに注意を與へ、また生徒をも教訓

した。そしてハンケチや手ぬぐひを持つてるのも生徒の身ぶんとしては贅澤だから、それに代る白木綿の切れを持たせることにした。夏期休暇にはまた海岸に行つて生徒の水泳を奬勵し、そのあひまあひまには自分の昔の見聞や經驗のうちから渠等のためになるやうなことを講話して聽かせながら、自分もふんどし一つになつて每日渠等の仲間入りをした。それが爲めに、否、老人が餘り海に這入つた爲めに、しほに刺戟を受けた耳が中耳炎になり、たう〳〵半年ばかり赤十字病院に入院した。そして不思議だと思はれたほどおとなしく醫者の言葉を守つて、ひとへに養生に努めたのも、徒らにいのちが惜しい爲めではなかつた。

『耳ぐらゐで陛下の御信任を空しくするやうなことがあつては不本意ぢや』と云ふのであつた。

反對も出るだらうと遠慮された男子部のことは、却つてそれでよかつた。そしていよ〳〵女子部の方にも手をつけようとなると、渠の實は容易だと思つてたのが案外にもいろんな故障を生じた。渠は男子部のと同一なる方針の應用として、先づ、華美な服裝の禁止問題を女子部の會議に持ち出したのである。すると、眞ツさきにこれに反對したのは同部の婦人部長だ。

『どうしてぢや』と、その方に目を見張つたが、渠は初めは高をくくつて出た。そして、その前に、或友人から、君の學校には一名、なか〳〵喰へない狸ばアさんがゐるから注意せよと云はれたのはこだ、な、と思つた。が、その意見を聽いて見ると、自分の今日までの質素な畑では全く豫想外の云ひ

ぶんであつた。

『男子に健全な體育が必要だと致しますれば、女子にはまた優美な趣味の必要をお忘れになつては困りますのでございます。』それからいろんな理窟が竝べ立てられたが、その結論としては、女子一般には體美と美貌は勿論、美服美裝もたしなみの種類として必要であると云ふのであつた。そして、ましてこの女子部へ來る生徒は尋常一般の家の『武骨むすめ』や『田舍もの』ではないから、と！

『さうか、なア——さう云ふ理由もあるのか、なア』と、渠は半ば否定的に答へて見た。自分には初めから娘を育てた經驗はないが、ここに尋常一般の娘と云ふことに武骨とか田舍ものとか云ふ、惡く取れば冷かしの形容詞が附けられたのを、人を——殊に、軍人なる自分を——馬鹿にしたのだと直覺された。で、われ知らず不快な顏をした。そして若しこれが軍隊內のことなら、この上官を上官とも思はぬふる舞ひを、直ちに軍律に問ふて處分することもできると思つた。が、まづ實際に不慣れな方面のことだから、如何に院長としても、かかる考へや不快な顏が遠慮されて、直ぐ當り前らしい微笑にまぎらせてしまつた。そして自分ながら少からず僞善だと思へる心持ちを以つて、

『今どきの婦人は皆さうしたものか、なア、わしのやうな老人には一向事情が分らなかつた』と述べた。そしてこれがこの議案を一應撤回する意味になつてしまつた。

『をんなは男よりも殊に人間ですから、ねえ、そのおつもりで取り扱つて戴かなければ』と、部長は

おとでうち解けてゐたが――。

考へて見ると、年は取つてゐてもなほどこかに若々しいところがある部長だ。かの女と時々坐談的に渠も相對してゐると、何となくこちらの氣ぶんまでが優しく賑やかになつて行つて、その時だけは自分の屈託をも忘れた。そこらが多分人間ですからの結果であるかも知れぬ。これに似た氣ぶんを自分は若い時にちよツと、若しくはさんざんに、或藝者に就いて味はつたことがあるとも記憶されるが――兎に角、自分のうちの婆アさんなどは如何にも口かずが少く、如何にも武骨で、田舍ものくさく人の心をいささかなりとも晴ればれさせるところがないのは事實だ。そして自分はそんな女一人しかまじめには碌々知らないので通つて來た。今の開らけた女から云ふと、恐らく、かの女などは人間でも女でもないのだらう。

『そこが少し理窟に合はぬ』と心に云はせて、獨りでゆツくりほほゑんで見た。

けれども、院長としての體面を部下の一婦人に多少でも傷つけられたことを私かに不愉快に思ひながら、その日、規定通りの時刻に歸宅してから、――別に訴へる人もないので――これを自分の妻に語つて見た。すると、かの女は自分を慰めて呉れるつもりでだらうが少し昂奮したやうで斯う云つた、

『けしからんではございませんか、女ふぜいで上官に反抗致したりして？』

『いや、さう一概には云へん。』この自分で自分を僞はるやうな言葉が、殆ど自然の如くわけもなく、自分の口から飛び出すのを、渠は、自分ながら、不思議にも思へた。本心ではかの女の昂奮とその意味とを確かに承認して、如何にも尤もだと云ふ同意やらあまへ込みやらの感じまであつたのだ、これを自分はかの女にさへ正直に發表しなかつた。そしてただ表面上の事情を述べた。『わしは學校では一番新參ものぢや。殊に今の女の事情には全く明きめくらも同樣で――ああ云はれて見れば――それもさうぢやと思ふより外にまだ考へが出ない。男子部の敎育には反對もなく段々親しみもできて面白うなつて來たが――』

『それに致しましても、軍人の婦人會は申すに及ばず、愛國婦人會に致しても皆、質素をむねとしまして、儀式の時にも綿服で通してをりますのに――』

『わしもそれがよいと思ふのぢやが、な――』渠はどうしても自分の妻と同意見であるらしいのが、悉く部長をいいことにしてゐる樣子ある女子部に對して、却つて一層自分を心ぼそい獨りぽツちにさせるやうであつた。自分の心の目前には、女自身からうわべの美貌や美裝を必要だと主張するところの、乃ち、自分に取つては全く從來と勝手が違ふ、新らしい世界が俄かに現はれたのである。そしてその世界に住む女どもは皆、この老人が考へるとは別な、そして一個のつよい意志を持つてるやうだ。その華美な姿にもなか〳〵人に下だらぬ强情を包み、多辯のうちにだがその思ふところをずん〳〵云

ふ。この一點だけを見ても、むかしかたぎ從順一天張りの女どもとは全く違つてる。近頃、舊友どもの家庭に於ける若夫婦の不和や離婚問題をよく聽くが、かかる時勢の變化を示めす一端であるとすれば、職掌上うツちやつては置けないことになるではないか？ひよツとすると、愛國婦人會や軍人家族會の會員のやうなものでも、從來一般にきまつてる質素な出で立ちを心から喜んで守つてるのではないのだらうかと云ふ疑ひまで起つたので、渠は――『若し皆が本心からやつてをらんやうでは何にもならん。』

『でも、必らずさうときめて置いたらよろしうございましようが――？』

『いや、わしは人の本心に反するやうな敎育を施したうはない。』

渠は實際に女子部の改革には初手から行き詰つてしまつた。そして反對のなかつた男子部の方までも返り見て、自分のやり過ぎがないか知らんと考へ直して見た。が、この方は着々自分の方針や計劃が進んでるし、生徒と一緒に親しく水泳をしたことなどは自分の舊友どもに語る大得意の一つであつた。

『…………』然し女子部だけは、兎に角、渠は當分手をつけないことに決心した。そして或小宴の席でだが、盃を取りかはしながら云つた、『君の注意して吳れた例の婆アさんは如何にもなか〳〵の難關ぢや。』

『旅順を落した勇將でも、なア――』
『あは、は!』
そのうち、この部へ畏れ多くも貴顯の御女性の行啓を仰ぐことが生じた。
渠は何日も前からその筋の人々ともよくうち合はせをして、小心翼々、落ち度のないやうにこまかい手筈までもきめて置いた。そしていよ〳〵その行啓の前日になつた時には、同部の會議に出かけて行つて、これも落ち度のないやうにと、くどいほど訓戒やら相談やらをしたが、それほどのことは毎年のことで、重々承知ですと云はないばかりの態度を皆のものがしてゐた――教授たる婦人どもも、男子どももだ。
渠はこれを初めて看破した時にはちよツと怒りに顏を赤くしたけれども、直ぐそ知らぬふりになつた。そして雨降りの日であつたので、若しあすも雨がつゞいてればどうしよう?それでも無論お出でに成るにはきまつてるから、こちらもそのつもりでお迎への爲めすべての女生徒を門內の庭に整列させるが、
『たとへ雨が降つてをつても、その時生徒にかさを持たせてはよくない』と云ひ添へた。
すると、部長がまた反對した、
『わたし達の生徒は兵隊さんではございませんから、そんなことはできません。』

『………』如何にも、なアと、この時、渠は何げなく云ひかけたのであるが、相手の言葉が反對意見を述べる時にはいつも、ヒステリ性の女の如く、何となくとげ〳〵しいのに思ひ及ぶと、こちらも素直には物が云へなくなつた。さきには武骨ものを人間でないかの如く云はれ、これで二度までも、高が女づれの爲めに院長としての面目を失するのだ。長生きすれば恥多しのことわざも私かに思ひ出されて、あの子供と共に戰死してゐた方が寧ろと云ふ後悔が、始終起るやうに、この時にも起つた。それでもただじツと苦笑しながら、

『わしも、女生徒を兵隊とは間違へてをらんつもりぢやが、行啓のお迎ひにかさをさしては、な――』

『ですから、雨降りの日なら、玄關のお廊下でお迎へ申し上げる習慣になつてをります。』

『わしにはそれでは畏れ多いやうに思はれるが――』

『おかみは決してしもじもに御無理をお强ひになつたことはおありになりません。』

『それもさうぢやが』と、渠は多少うち解けて見せた。が、若しなほ自分の考へ通り行はせるには、前以つて教師や生徒の美裝美服主義を嚴禁して置けばよかつたのだと思へた。女と云ふものはどうしてもその着てゐる物を大切がり過ぎるやうだからツて。『それぢやから、早う綿服制度にして置けば、こんな時に皆が思ひ切りが付かう。』

『院長ともあらうお方が以つての外な』と、また〳〵突ッ込まれた。『却つて畏れ多いではございます

まいか？わたくし共を初め生徒も皆、立派な禮服で立派にお迎へができますものを、わざ〳〵濡れてもかまはぬと申すやうな、自分たちで見くびつた綿服に致せば、却つてそれだけお上に對し奉つて失禮に當りましようが――？』

『……………』渠は思はぬ不敬を平氣で語つてゐたのに氣がついて、今更らのやうに身ぶるひをした。そして斯う云ふより外に仕かたがなかつた、『尤もぢや。わしが大きに思ひ違ひをしてをりました。』

おもてには微笑を見せたが、渠の胸の奥には、なみ〳〵ならぬ恐縮と共に、一つの大きな疑惑が起らないではゐなかつた。一體、自分はどの時代に生きてる人間だ？渠等と同じ時、同じ場所に住んでゐながら、現今の女子教育に對する自分の考へをかたツぱしから渠等にぶち毀わされてる上にも、また自分の最も誠實に保つべき、最も大切に思ふところの、忠義心をまで一婦人の爲めにあざ笑はれてるのだ！

忠義心は自分に今も昔も變はることがあらう筈はない。忠義はどこまでも忠義の意味しかない。が、綿服問題に當てはめて說明を與へられて見ると、今の通り自分の考へは確かに間違つてゐた。否、間違ひと云ふよりも、自分ながら打ち棄てならぬ不敬であつた。こんなことを教授會議で直ちに指摘されたのはまだ〳〵幸ひで――若しこれを生徒一般に訓授したり、掲示したりしたあとのことであつたら、上に對しても、世間に對しても、もう、取り返しがつかぬのであつた。斯う考へると、自分のふ

つつかな心が、矢ッ張り、殆ど立ち場もなくその場にふるえおののいてゐた。

われに返つてから、兎に角、會議をそこ〱に終はらせ、罪を犯したものの心持ちでこそ〱と女子部を退出し、馬上で男子部の方に來たが、院長室に引ッ込んでなほ再び自分のことを責め考へて見た。自分が時勢に後れたものであることは重々知つてゐないではないが、この時勢に後れたことが忠義心と衝突するのであらうか？無論、そんなことのあらう筈はない。今の時代は自分から見れば華美に流れ過ぎてると思ふが、それも止むを得ないとならば、自分は不賛成だが、必らずしもそれを禁止するには及ばない。して見ると、自分の言葉のどこがさう不敬に當つたのであらう？――どこが？――さうだ、ほかでもない、自分が綿服ぐらゐなら濡れたツて惜しくはないと云ふ意をそこに云ひ添へたからであらう。が、雨に濡れるのが惜しいとか、惜しくないとか云ふことは初めから自分自身の考へではなかつた――雨どころか、彈丸硝雨の間にも衣服などはおろかなこと、一身をも投げ出して來た自分だもの！して見ると、まだ若い娘の子どもの心をへたに思ひやつて、そこに自分の理窟をつけようとしたのが、意外にも――そこが現今の一般生活の事情に暗い點だと云へば云へようが――不敬なことを自分が云ふことになつたのだ。

言葉は成るほど愼まなければならぬ――が、矢ッ張り、綿服主義その物が悪いのではなかつた――渠等の利害關係を離れて若し本心から渠等に質素の旨を敎へ込んで置けば。――さうだ、さうだ！矢

ツ張り、自分の趣意を不敬でなく押し通せる餘地は十分に殘つてゐたのだ。
渠がここまで思ひ至つた時には、自分の息づかひまでが生き返つてゐた。そして、もう、いつもの沈着な自分であつた。
そこへ丁度女子部の教務掛りから電話がかかつて來たので、晴ればれした氣持ちに笑ひを含ませて、渠は出しぬけに自分から斯う云ひ出した――何だか云ふべきことをまだ云ひ置かないで來たやうな氣がしたので――
『部長さんに叱られたので、わしは今自分を責めてをつたところぢやが、叱られた原因はわしの云ひかたが惡かつたのであることを發見しました。』
『左樣でございますか？』
『生徒に美服を許してある以上は、わしも無理に雨の中に立てとは云ひません。』この言葉のうちにはその代り、今後、時期を見て矢ツ張り綿服主義を實行すると云ふ覺悟がきまつたことを含めたのであつた。が、渠はまだそこまでうち明ける時ではないと思つて明言はしなかつた。
『その行啓の件に就きましてですが』と云つて、教務掛りが傳へたところでは、また一つ困つたことができた。或生徒の家庭に赤痢患者があつたことが發見された。そして傳染病のあつた時はすべて御遠慮しなければならぬことになつてゐる。

『そりや困つた、な！』渠のあたまに先づ浮んだのは自分が不行き屆きにもそんなことを取り調べて置かなかつたことである。お上の御都合ばかりを伺つて、こちらにかかる手落ちがあつたのは、もう、地團駄を踏んでも取り返しのつかぬことだと悔いに悔いられた。教務會議の不面目には左ほど表面にまでまごつきを見せなかつた自分の顏も、これには全く眞ツ青になつてしまつた。『部長さんをちよツと電話ぐちまで呼んで貰ひたい。』

けれども、部長は既に退出して、そこにゐないと云ふのであつた。

『………』何だ、こちらにばかり心配させてと云ふ氣が、日ごろからかの女の院長を院長とも思はぬそぶりに對する渠の不快を、こんな時だと云はぬばかりに刺戟して、ふと、無言の憤りやら復讐じみた感じやらに渠を走らせた。そして渠はかの女に直接相談の電話も掛けないで、直ちに自分がその主務省に急ぎ、あすの行啓中止を願ふことにした。

この時、渠は私かにいよ〳〵自分の辭職決心をしてゐた。これは、然し、必らずしもかの女に對する不快や不平ばかりからではなかつた。向ふは女とは云ひながら、教育のことに長い間の經驗や研究を積んで來た者であるから、こちらがそれに自分のふつつかを指摘されても、また馬鹿にされても、ほんとうに止むを得ない。が、自分はたとへ新米の教育家としても、殊にかかる性質の學校に對して、餘りに經驗や智慧が無さ過ぎるのを、自分ながらまことに不甲斐なく思へたのだ。

然し、渠はきまつた式をうツちやつても置けないので、その當日、――丁度天氣になつたのを幸ひ、――時間より早く先づ女子部に出勤して、一度はちよツとできかけたその親しみも、既にまた全く無くなつたところの、院長控へ室の椅子に就いた。そして、もう、別に積極的な計畫や希望もないままに、ただ〳〵けふ一日を無事に、自分の不面目な失敗やら思ひ違ひやら――これが自分には一番惡魔のやうに恐ろしくなつた――をしさへしなければと、心に祈つてゐた。女子部長が早くやつて來ないあひだを自分にはいつも通り少し安心な時間で――かの女の姿が見えると、直ぐ、また何か云はれはせぬかと云ふ不安やら面倒やらを、最近には、いつも豫期するやうになつてゐた。

ところで、かの女が出勤すると直ぐ、この日も亦果して渠に喰つてかかつた。

『失禮ですが、行啓をお中止におさせ申し上げたのはあなたでございますか？』

『わしぢやが』と、無理にも不斷の調子で渠は何げないやうに自分の顏をかの女に向けた。が、自分の目は寧ろ弱くをののくところの自分の心の方に向つてゐた。そしてかかる重大な件に就いてさう手易く突ツ込まれるやうな落ち度はまたとしてゐない筈だがと考へた。然し、これを押し隱す爲めにやわらかな微笑を見せながら、『赤痢患者があつては畏れ多いことぢやから。』

『それは、もちろん、御遠慮しなければならぬ範圍にございますればでございますが、――第一に、あなたは一體その患者がございましたのはいつのことか、實際にお調べなさいましたでしようか？』

『いや――』また胸にどきツと來たが、おもてには泰然として、『わしが調べるまでもなく、教務掛りの言葉は信じなければならぬによつて――それに、また、相談相手のあんたがお引けになつてたものぢやから。』

『は、はア』と、少し胸を反らせたかの女の態度が渠には小癪に見えた。『あなたがさうお澄ましになつていらツしやるなら――』

『いや、澄ましてをるわけでは――』ばかにのし出さうとする我を渠は押さへるに努めたけれども、六ケしかつた。

『今一つお伺ひ致しますが、――たとへわたくしが引けましても、電話もございますことですのに、どうして先づ一と言わたくしにおはなしがなかつたのでございます？』

『………』成るほど、さう云はれて見ると、それもよくなかつた。女子部のことは同部長に一應は相談してからすべきであつた。けれども、この場合、どうしたものか、今一度前言を繰り返して、『今云ふ通り、あんたは引けてをつたから』と云ふ返事が出た。自分ながら問ひとはつじ褄が合はぬと思はれたが、どうせけふ一日を過ぎれば辭職するのだから、いま／＼しい氣がして、このまづい言葉を取り消しもしなかつた。而もその上に、押さへられて我が張つて來て、ここだと云はぬばかりにその意味を別な方へ持つて行つて、かの女が學校に對する不熱心と云へば云へる一つの點を暗に注意したつ

もりになつた。學校がすむと直ぐさう〳〵急いで歸らないでも、今少しとどまつてればいいのだ、現にきのふの如き急を要する事件が出來することもあるのに！

かの女は、然し、これにも反對であつた、

『學校が引けますれば教師も歸宅致しますのは當り前ではございますまいか？軍人や一般官吏などとは違ひまして、教育家は自分どもの修養の時間も必要でございます。翌日の課業のした調べもさせて置かねばなりません。わたくしはそれが爲めには自分からその實例を實行してをりますつもりでございますが――』

つまり、この抗議のつづきをも渠の辛抱して聽き取つたところでは、お前はそれに反して思ひやりがなく、軍人や一般の官吏か何ぞのやうに、いつまでも、のんべんだらりと教師どもを引ッ張つて置いて、貴重な時間を無駄に費やさしめようとすると云ふのであつた。かの女の反對に出逢ふ度每に、一々それが尤もだと思はれる。

『如何にも、な』と、少し言葉を和らげてゐた、『よいことを聽かせて下ださつた。』

『それに、わたくしは』と、かの女はまだ和らがないで、『無論、あなたのもとにでございますが、――女子部の全責任をしよつてをります者でございます。それが引けてをりましても、それが爲めには當直も置かれてございます。電話もかかつてをります。それをさし置いての御處置は――』

『いや、もう、よく分りました。これもわたしの手落ちであつた。』否、實は、自覺的に多少の私憤をもまじへてのことであつたのだから『わしの手落ちは幾重にもお詫びします』と答へる外に一言もなかつた。

　なほかの女の言葉に據ると、驚いたことには、かの女は、生徒の家族に赤痢患者があつたことを――その生徒からの電話に據り――とツくに知つてたのに、誰れにも云はなかつたのであつた。

『けれども、それは、もう一週間も以前のことでございます。それでも若しなほ傳染の恐れがございますなら、その生徒だけを御遠慮させればよろしいのでございますが、その生徒は當日も――わたくしが前から申して、出校しないことにさせてあるのでございます。何も一週間前からあなたがおきめになつた特別な行啓を、今更らおとめ申さないでも――多くの生徒が樂しみにして、喜んでお待ち受けしてゐるのでございますから？』

『然し、もう、お斷わりして、生徒への掲示も出してしまつたから。』渠はこの點だけは斷然とはね付けて、最も確信ある者の如く動かなかつた。

『掲示などは直ぐはがせましようが――』

『さうも行かんて。』

　この最後の短い兩句が云ひかはされた時には、もう兩方とも多少うち解けて來たやうに渠には思へ

た。若しできることなら、一度二人が寄り合つて――そして酒を飲めるなら、一緒に飲んでもいいが――意志の疏通をも試み、また教育上の意見に關するかの女の教へをも乞ひたかつた。

『軍人がたとはどなたも皆さう御小心でいらッしやるのでしようか』と、かの女は微笑をまで浮べた。

『………』罪のない冷かしだとは見えたが、渠にはかの女の意志がよく分らなかつた。ただ笑ひながら、辯解をでもするやうに、『軍人はいざ君の爲め、國の爲めとなれば、一身を投げ出して本統の勇氣が出るもので――』

『それを――いかがでしよう――教育家は不斷に持つてをりますと致しましたら？』

『然し――』勇氣と云ふものは實戰の經驗がなければ本統に分らぬと說明しかけたのだが――。

『さア、もう、斯うしてはゐられますまい』と、かの女は時計を出して見た。そしてまたきッとなつて、『それでは、あなたは今一度行啓をお願ひし直しては下さいませんか？』

『とても。』

『では、わたくしからお願ひ致して見ますのに御異存は――？』

『若しできることなら。』斯う曖昧に答へて、渠も自分の時計を出して見て、『もう、四十分しかないから。』

『いえ、よろしうございます。わたくしがまゐつて見ます。』

『…………』そんなことが――この婆アさんに――？斯う心ではあざ笑ひながら、渠はかの女の去るのに默禮した。

『先生、矢ッ張り、いらッしやいますの？』直ぐ室外の廊下からこのあまつたるい生徒の聲が聽えて來た。

『え、矢ッ張り？』また別なのだが、これも渠にはいきなり張り飛ばしてやりたいやうなあまい聲だ。

『ええ、多分』と云ふ答へは部長のであつたやうだ。これも亦、こちらに向つた時とは違つて、餘りに權威が無さ過ぎた。

『さう――多分？』

『嬉しい、わ！嬉しい、わ！』

『…………』渠はその方にじッと聽き耳立ててゐた顏をしがめて、そッぽうを向いた。そしてあんな狀態は、しッかりした仕つけかたをしないからのことだから、もッと嚴格に改めなければ――と考へられた。この學校は生徒をあまやかし過ぎてるのだと。

けれども、現に壓迫されてたやうな氣ぶんを少しでも晴らす爲めに、窓のそばへ立つて行つて、門の方をながめてゐると、行啓御中止のことを知らない生徒だらうが、いづれも嬉しさうにしてどしどし這入つて來る。皆その身なりの派出過ぎるのが時勢の浮薄を示めすやうで――自分には、どうも

――氣に喰はなかつた。

渠等を軍人にするつもりでも、軍人の家族にするつもりでもない……――が、――金のあるもの等だからと云つて、部長の云ふ通り美服を着る權利があるかのやうにさせて置くのは、國家の爲めに考へ物だらう。

兎に角、ここに自分の爲め一つの活路が開けると思へたことには、ことごとに意見の相違を發表した女子部長も今度こそは最後にかぶとをぬいで、こちらへ降參してしまうに違ひはなかつた。

さうかうしてゐるうちに、時間は刻々に迫つて來た。そして、もうあと十分と云ふ時に、部長が自働車で獨り歸つて來たのが見えた。それ見たことかとこちらの心は躍りあがつたけれども、これをじつと沈着に押しこたへてゐると、案外にも、かの女は勝手にへぎ取つた掲示の紙を手にしながらここへ這入つて來た。そして嚴格に、

『時間通りにいらツしやいます！』

『………』渠は俄かに、自分では區別のできぬいろ〳〵な感じに引き締められて、自分では何とも云へぬ氣持ちの爲めに全身が顫えをののいた。

* * * * *

式が無事に終はつてしまうが早いか、渠は部下に裏切られた者のやうに自分の學校を出た。そして

獨り馬上にゆられながら、途々考へて見ると、陛下の御知遇には感激したものの、自分は學校の女子部に於いては不面目だらけである。萬事が自分の腑に落ちないで、自分のふつつかに終はると同時に、萬事がまた自分の豫想外に進行して行く。その最後のがけふの一大事件で――。

自分に代つて小倉聯隊旗を取り戻したことにして呉れたその時の野津大佐や、その後實際にまた、屑屋とまで落ちてこれを發見し、取り戻して呉れたその時の赤木少尉は、丁度今の女子部長のやうであつた。自分の仕事はいつも、天佑によつての如く、他の力でどし〳〵運んで行かれる――斯う思ふと、お上とかの女とが自分には一緒になつて、おそろしくも又なつかしくなつて、いつのまにかありがた涙が浮んでゐた。

この私心なき心持ちを以つて今一度辭職を思ひとまり、今少しの間をできるだけ御知遇に報い奉ることができまいか？

それには、日ごろ尊敬もし親しみもしてゐるあの神道家△△氏を今夜にも訪問し、そこへ部長にも來て貰ひ、部長の同郷人なるよしみを以つて、同氏に中を取らせ、こちらも今後は軍人的な頑固を愼む代りに、部長もまたこの老人をさういぢめないで、おだやかに忠告を與へて呉れるやうに取りきめたいのであつた。そしてそのついでに、自分の落欵を携へて行つて、先夜酒を酌みかはしながら十枚ばかり書いた物に自分の名を押して來ることまでも考へる餘地ができてゐた。

それに、部長がこちらを小心とからかつた意味も、今になつて分つたやうな氣がする。かの女は昔、宮づかへをしてゐたこともあるばかりに、あんな大膽なわざもできるのであつたらう。
歸宅してから、このことを語ると、妻は不斷の愼みにも似ず、うか〳〵と斯う云ひかけた、
『典侍なんて――』
『畏れ多い!』一喝に渠はかの女を驚かして置いて、
『ちと言葉を愼め』と叱り付けた。
君のお爲めは一刻も忘れてゐない。が、學校に於いても、また家に在つても、自分の獨りぼつちが返り見られると、君の爲め國の爲めにも自分の愛兒どもに死に後れたこの時勢後れを――妻を叱つた口のうらから――自分で悲觀しないではゐられなかつた。そしてどうせ斯う生き殘つてゐるなら、女では駄目だから、せめては、死んだ兒のうちの一人をでも話し相手に殘して置きたかつた。
天地に向つて許して貰ひたい――これも人間の弱味だらうから!あの世のことが分らぬ寂しみとこの世の現職に暗いなさけなさとが一緒になつて、頻りに自分を襲つて來る。そして日ごろの精神修養にとておぼえたり守つてたりした古人の言葉などの力を、いつになく疑はれた。
電話をかけて見ると、△△氏は部長をも呼んで、今夜めしを共にすることにすると云ふ返事であつた。が、向ふもなか〳〵強情な婆アさんだから、こちらの多少無理な申し出を素直に聽いて呉れるか、

どうか分らない。

渠は半ば棄てツ鉢になつた。これはまだ晝めしのことだのに、例になく酒を添へさせ、獨りで一と醉ひするつもりで、ゆふかたまでは人が訪ねて來ても誰にも會はないことにした。

――（大正六年十二月）――

非凡人の面影

一

渠は自分で忘れもしない、大正六年九月三十日の夜であつた——夜中にばり〳〵ばりと云ふ大きな音を聞きつけて目をさますと、宵のうちからのおほあめ風が一層ひどくなつてるのであつた。雨戸ががたツぴし云つて、自分の寢てゐる二階が地震のやうにゆすつてる。けれども、電燈は消えてるし、特別な音が何の音であつたか分らないので、暫らく耳をくらやみにすましてゐた。そして、かかるおほあめ風にまぎれて、まさか、ぶち毀わしの强盜が來たのでもあるまいと思つた。

今一度おそろしい音がした。それで分つて少し安心したことには、うら隣りの家根のかわらが吹き飛ばされてこちらの戸に當るのであつた。

『兄さん——兄さん——大變よ。』隣りの三疊敷きでは、あわててマチを刷りそこねてゐる樣子だ。ぱツと火がともるのが二三度ふすまのあはひから見えたかと思ふ毎に、また暗くなつてしまう。

『………』へたな返事をしてこの上かの女をあわてさせまいと思つたので、渠は暫らく默つてゐた。

すると、やがて火を點したはだか蠟燭を手に持つて、妹はふすまを明けて這入つて來て、あわただし
く、
『兄さん!』
『おい』と、直ぐ返事をしたので、かの女は却つてびツくりした。まだ眠つてると思つてたらしい。
『起きてたの?』
『無論、さ。』あふ向けになつて蒲團を半ばかけてるままで、『けれども、心配すな。これ以上のことはあるまいから。』
『さうでしようか?』
『そとまわりにどんな損害があつたからツて、おれ達の持ち家ぢアなし――』
『そりやさうだけれど――』妹は短い蠟燭を手に持つてからだを顫はせてゐる。
『まア、その火を何かに立てたらいいぢやアないか』と云ひながら、渠も自分の身を蒲團の上に起して坐わつた。妹はかの女自身の使つてる繪の具ざらを見つけて來て、これに蠟燭を立てた。
下の家族も騒いでるらしいので、渠は下りて行つてちよツと見舞ひの言葉を述べた。それから再び上つて來ると、妹は矢ツ張りもとのところに坐わつたままでゐるが、多少その心は落ち付いた樣子であつた。そしてうちのことは、もう安心だが、麹町の方が心配だらうと云ふことを注意した。

麹町とは、今、熱海へ赤ン坊と共に病氣保養にやつてある渠の病身な妻の里である。そこには老人夫婦と妻の妹なる十六才の女の子とがゐるばかりだ。渠等がこのおほあらしに手傳ひもなく、家の中をまご付いてる樣子が忍ばれるので、渠も自分の妹がこの場合けなげなことを云つて吳れたと喜んで、見舞ひに行く氣になつた。

時計を見ると、もう、午前一時を過ぎてる。が、思ひ切つて濡れる覺悟をして外へ出ると、おほあらしであるばかりでなく、その風がどこか近處の火事をでも運んで來たかのやうにむツと生あツたかいのである。ふと、こんな時にどこかの海岸に津浪でもありはしないかと云ふ恐れが浮んだので、第一に郵便局へ立ち寄つて、見舞ひの至急電報を熱海の方へ打つた。

かわらが飛んで來たり、家根の看板が落ちたり、道ばたの立ち樹が倒れたりするので、あぶなくツて、うか／＼歩いてゐられないのである。かうもり傘などは豐玉橋を渡る時に取られてしまつた。それでも無事に龜屋の横丁を銀座の通りへ出た。電車がないのは覺悟の前であつたが、たとへあつたとしても、とても通じないのであつた。街樹が勝手放題に倒れて、東京第一の往來を立ちふさいでゐた。その上、街燈がすべて消えてゐて、場末の暗い町も同然であつた。

渠は無方針に吹きまくるあめ風の銀座街を殆ど夢中で突ツ切つてから、多分二つ目か三つ目の或る狹い横丁を見ると、ちよツと曲つたところに、一臺の人車があるのを發見した。天の與へだとまで喜

んで　その方へ這入つて行つて

『おい、三宅坂まで行け！』

『どうして、どうして――このあらしに歸りそこなつて風よけをしてゐるばかりですから。』

『一圓やるから――』

『…………』

『貳圓でも出す。』

『…………』車夫は、これも濡れ鼠になつてゐながら、とう〳〵參圓の金で動いた。幌は取り外してあつても、なほ、から車では吹きさらはれさうになるので、そこに風の止むまで避難するつもりであつたのが、人を乘せれば左ほどでもあるまいと思ひ直したのであつたらう。

　渠は車夫に注意して成るべく危險な物の飛んで來ないところを通ることにさせた。ところか、車は有樂橋を渡つて馬場前門に出たので、

『おい〳〵、くるま屋、冗談ぢやァない――三宅坂へ行くんだぞ。』渠は氣が氣でなく、斯う云つて車屋を責めた。

『知つてますが、ね』と、さきはちよツと踏みとまつて、當惑した樣子だ。『でも、あぶなくないところツて云やァ、まア、この中を通るより仕かたがございますまい――？』

『さうだ、な。』渠自身もやツと危險物の下をくぐり拔けて來た心持ちがしてゐたので、成るほどそれもさうか知らんと考へた。無論、遠まわりになるのは分つてた。

車夫はそのまま足を運んで馬場前橋を渡つた。けれども、なほ一つ、トタン家根の一片らしいのがどこからか飛んで來て、渠等の雨にぶつかりながら進むその横手へぢやらんと音を立てて落ちた。すると、車夫は突然足をとどめて、こちらをふり向き、

『旦那、實際、いのちがけですぜ』と云つた。この時、車夫の進みの調子が狂つたせいか、また一吹きの烈風に車が横ざまに吹き倒れたのである。幸ひにも、お互に大した怪我はなかつたが、渠は肱にすりむき傷を受けた。そしてその傷ぐちへ雨のしづくがしみ込んで痛い。

こんな目に逢ふ位なら、何も遠まわりなどはしないで、日比谷公園そとの堀ぷちを來てもよかつたのだ。

『お前は少しあわててゐたんだ、な』と、車夫をからかひ半分に斯う云つて見たけれども、實は、渠自身を責めたのであつて、自分の心の烈しい動搖が引き續いてゐた。

櫻田門を出てから、參謀本部したを通る時が恐らく最も危險と思はれた。あたまの上には化け物か何ぞのやうに森の大きな樹ががう〳〵とうなつてる。自然ばえの樹だから、植ゑた街樹のやうには根こそぎ倒れまいが、そのおほ枝の一つでも二つでもが折れて來たら大變であつた。その上、横手の土

手へ車體が吹きつけられれば、深い堀なかへころ〳〵落ちてしまう恐れがあつた。けれども、思つたよりも無事に坂をもすべらず、吹き倒されもせずに登れた。

來て見ると、果して老人夫婦はおほまご付きをしてゐた。家が高臺のはづれに立つてるので、一枚でも戸が外れると、風の爲めに家根まで持つて行かれると云つて、眞ツぱだかになつた渠も渠等と一緒になつてあぶなさうな戸を折さへたり、釘づけにしたりした。雨もりの箇所もあつた。車夫は、また、どうせこの風にから車を引いて歸れないから、夜が明けるまでここに置いて呉れろと云ふので、これをも幸ひに手傳はせた。

『このあらしによく來て呉れた、な』と、老人は餘ほど元氣が出たやうであつた。何しろ、明治何年かにあつてから、久し振りのおほあらしだからと云つてゐた。

高臺であるから、一層ひどいのであらうが、雨を投げつける風はなほ縱横自在にひゆう〳〵と吹いてゐるのであつた。渠は今、家の中にあつて、これを聽いてると、自分ながらここまで來たのが不思議であつた。そして遠くにゐる妻子のことが思はれた。殘して來た妹のことも心配になつた。また、葛西の海岸の借り別莊に留守居させてある甥のことも忘れられなくなつた。けれども、そんなことを一々老人夫婦と話し合ふひまもないほど二階の雨戸や雨もりの始末に忙がしかつた。

『もう、大丈夫――夜もおッつけ明けるだらうから。』老人が斯う云つた時には、雨はやみ、風の勢ひ

も少し滅じてゐた。すると、やがて、横庭を一つ隔てた隣りの大工どもの多人數の聲がして來た。その家根のうへからららしい。そしてトン／＼と物を打ち付ける音もしてゐる。
『家根を飛ばされたんでしようか、ね』と云ひながら、渠はおづ／＼二階の戸を一つ細めに明けて見た。老人夫婦も今また蠟燭をつけ直したところの提燈を手にして集つて來た。
『なんだ、夜が明けてるのか？』車夫は投げ出すやうに云つた。
さすが職業がらでもあらうが、大工どもはこの風にも恐れず、その自分等の長くつづいた二階長屋の家根に登つて、そのトタン張りがへぎ取られたあとへ家根板を打ちつけながら、冗談を云ひ合つてるのであつた。そして打ちつけられた板がところどころに白く、そして大分弱くなつた風を受けながら立つたり、しやがんだりしてゐる大工どもの姿が黑く、こちらのぼやけた眼に見えるほど空は明るんでゐた。
庭の植ゑ木や板塀もすツかり倒れてゐるやうすであつた。飛ぶだけの物は飛んでしまひ、倒れるだけの物は倒れてしまつたらうから、もう危險はあるまいと思つて、渠は皆の先きに立つて二階を下り、外へ出て見た。果してどこもかしこもさんざんな體で、周圍の塀が右や左りにねぢれ倒れたのはここばかりではなかつた。そして隣りから隣りへとすツかり平等に見通されるやうになつてゐた。
『ひどいあらしでした、な』と、ここの老人はお向ふの主人に挨拶した。

『これぢやア、お互ひに恨みッこがありませんや』と、お向ふも棄て鉢の冗談であつた。

二

渠自身は、然し、斯うしてはゐられない氣がした。おばアさんの手早く用意した朝飯を喰ひながらも、その心は三方に分れて心配した。

『このぶんぢやア、電信も不通だらう』とは云はれながらも、渠は自分の妻から返事が來てゐるかどうかを知りたい爲め、おぢイさんの着物を借り着して、先づ早く自分の家に歸つて見ることにした。で、同じ車夫を丁度好都合だからまた歸りの便にやとつた。が、途中の見じめな見聞を思ひ出すひまさへ與へられぬほどの事件が自分の留守のうちに自分の家にも起つてゐた。

矢ッ張り、龜屋の横丁から松晶洋行のそばの橋を渡つたのであつたが、三十間堀の水が橋のしたにだぶ／＼接近してゐると思ふと、自分のさして行くべき方面には、二つに分れたどの道も水が一杯にあがつてた。

『おほ水が出たのだ、な』と、獨り言のやうに云つて見たが、胸が特別にどき／＼し出したので、後半夜ぢうの親しみを得た車夫とは橋のたもとでそこ／＼に別れてしまつた。

往き來の人々の顔いろや目つきも尋常一般でなかつた。皆がはだしや尻まくりであるので、渠もか

まはず尻まくりになり、ぬいだ下駄を片手に持つて水の中に這入つて行つた。
雨がはの家々はどこも障子や格子を明けツ放してあつた。床うへ二三尺まで浸水したあとが戸や柱についてゐて、家の中では濡らした疊を起してゐるところもあるし。また、うまく疊やおはちを濡らさないで、床のうへなる俄か仕立ての臺のうへに乘せてあるところもある。或かみさんなどは、また見すぼらしい寢まきを着たままで、家の中をまごついてるところが見られた。また、或家の勝手口からは人糞が浮き出してゐる。
最も驚いたことには、その間を一方の橫丁からボートが一つ――小いのであるが――やつて來た。そのうへなる青年を、渠はいきなり、
『おい、呑氣すぎるぢやアないか』と、責めた。
『僕も人を見舞ひに來たのです』と、青年は口をとんがらかして答へた。
『…………』渠自身は人の見舞ひどころか、自分の家に急ぐのであつた。
到着して見ると、ここは、もう、水が床した少しばかりまで引いてゐた。が、矢ツ張り、床うへ三尺まではあがつたらしい。臺を三尺以上にして、とツ付きの二疊と奧三疊とのたたみを一つに積み重ねてあつて、そのうへにまた蒲團などを乘せてあるのが見えた。
『あら、兄さん！』妹にたすき掛けになつて、したのちイさん、ばアさんと共に雜巾がけをしてゐた

が、渠のすがたを格子うちに見ると、片手に雜巾を持つたまま迎へに出た。『大變よ、お勝手とおてうずとが一緒になつて！』

『それどころかい！』渠は思はず人の難儀に同情してゐるやうな口ぶりを聽かせた。そして床にとび上るが早いか、先づ自分の私かにきまり惡い腰を自分の持つてたハンケチで拭いて、まくつてた裾を半ばまでおろした。そこへ手拭ひを持つて來て呉れたかの女の、さきのはしたなさをなほもおもて向きではたしなめるやうに、『お前のいのちが助かつたのをありがたく思へ。』

斯うは云ひながらも、勝手の手桶に乘せかけてある古わたの一包みから水が垂れてるのを、何よりもきたなく感じられた。そして、ここが若し今回のために始末にをへないやうなら、直ぐにも自分等だけはどこかへ引ッ越してしまへばいいのであつた。

氣味の惡い水ッけを自分の足のさきまで拭き取つてから、皆のしてゐる通り、自分も自分の下駄をはいた。そして、ぢイさんに向つて、

『どうも、大變な出水です、なア、どこの川が溢れて來たのか知らないが』と、言葉をかけた。

『兄さん、津浪よ』と、妹はよこから說明をした。

『えツ！』渠にはこれがまた意外であつた。木挽町と云ふ、この帝都では一つの有名な町で、大劇場の一つまであるところが、小田原や沼津の邊鄙な海岸に於ける如く津浪に襲はれたのであつた。

渠は無論——そこまでに立ち至らなかつた間にも——實際、自分が非常事にぶつかつたのであることを感じてゐた。九死に一生を爭ふべき非常事にだ。そして自分の精神と生活とにも何か面白い變動が起りさうに思へてゐた。ゆふべの烈風の中を無事に通過し得たのも面白かつたが、その面白最中にまた津浪の現場を免れてたのが一層面白い。ところで、この面白ついでに、いツそのこと、あの厄介なる病身な妻子があちらで水にさらはれてゐたら——と云ふやうな、凡俗道德超越の考へまでが浮んだのである。

『麴町の方はどう？』

『無事だ——熱海からまだ電報は來てゐまい、な』と云つて、心では反對に來ようにも、もう、出し手がないと云ふことなどを想像しながら、兎に角、二階へあがつた。

夜を徹して神經を刺戟して來た疲れが手傳ふ爲めでもあらうが、日本中の人が皆倒れ死んだり、溺死したりして、自分だけが大將や金滿家になつて生き殘つたらと云ふやうな空想が渠のあたまを取り卷いてた。そしてこの幕が破れて正氣の自分に返る度每に、見るのもいやなのは、自分の書齋なる四疊半が殆ど三分の二までしたの追ひあげ荷物で塞がつてることであつた。今まで見もせず、氣が付きもしなかつたほどきたならしいぢイさん、ばアさんの夜具や、風呂敷包みが、朝まだきの薄びかりに照らされてるのだが、やがて日が照れば、ぷんと惡くさい臭ひがして來さうな感じまでする。

けれども、そのまま渠は、自分の出しッ放しになつてる蒲團を引きかぶつて寢てしまつた。そして晝過ぎに目をさますと、近所の水は大分に引いてゐた。新聞では、果して諸方に津浪があつたり、電信不通の箇所があつたりしてゐる。そして水害の最もひどく、人死にや人家の倒れが多いのは砂村だとある。ところで、渠は砂村のさきなる西宇喜田の海岸に人の別莊を借りて、つい、一週間ほど前まで自分の妻子を置いてゐた。かの女らが熱海へ轉地してからも、まだ引き上げない荷物もあるので、留守居かたがた自分の甥なる十七才の男の子をやつてあつた。それがどうなつたかがまた一つの氣がかりだと云へば云へた。

何にせよ、自分等のところでも飯をかしぐ水がないと云ふ騷ぎだ。水道さへも便所の水と一緒になつてしまつた。近所で借りつけの電話によつて、雜誌社へは斯う〳〵云ふ始末だから休むと云ふことを自慢さうに通知したついでに、或友人にも見舞ひの握り飯でも持つて來いとかけたら、

『馬鹿な、如何におほ津浪だッて、木挽町へ水が來ることなどあるかい』と云つて、本氣に受け取つてくれなかつた。無論、新聞なんか當てにならぬとしても、遠方の水害などはどし〳〵電報で出してゐながら、つい、その足もとの損害地に氣が付かずにゐたのだから。然しそけだけ、渠には、おほげさで而も秘密な面白味があつた。

何となく昂奮してゐる渠は、今までの生活以外に何か面白いことが出來して來さうな氣がしたので

その翌日、晝めしを喰ふと直ぐ自分の雜誌社へ出勤した。すると、自分一個の受け取りかたによるのかも知れぬけれども、社長を初め皆のもの等が、矢ツ張り、何かを待ち設けてるかの如き態度で、話を新聞に出た各地の暴風や水害のことにばかり向けてゐた。その留守に麴町の老人が珍らしい津浪と聽いて見舞ひに來たさうだが、そんなことは左ほど氣にもとまらなかつた。

そしてそのまた翌日も、同じ話の仲間入りをしてゐたさに、同じ心持ちで不斷よりも早く出社した。新聞の記事によると、各地の被害の範圍と程度とがいよ〳〵分るに從つてます〳〵大きくなつて行く。そして砂村よりさきのことや、殊に飛び離れて熱海のことが、まだ書いても分つてもないのが、渠の昂奮を一層つないでゐた。

ところが、その晚、乃ち、十月三日の夜に熱海から妻のたよりが郵便であつて、當地は大したこともないが、東京は水も出たよし、どうであるかと云ふ見舞ひ狀だ。こちらから出した電報が着したのか着しなかつたのか、この點は判然しなかつた。が、兎に角、自分の妻子が無事であつたことが分つたのに、それが分ると同時に渠は一大非常事を逸したやうな氣がした。そして矢ツ張りこれまで通り平凡な關係を持續すべきわれであつたかと思はれて、俄かにがツかりした。

『では、もう、誠ちやんのことばかりが心配よ』と、妹は渠に渠の甥のことを取り調べるやうに云つた。が、渠は――もう――これも、思つたよりは何でもないのだらうと考へて、氣のりがしなくなつ

た。

『若し死んだのなら、今更ら騷いでも仕やうがなし。』渠には自分以外の人間の生き死にが、なほ、重大事ではなかつた。何しろ、自分の留守に木挽町の町なかまでも海水が溢れて來たのだ。津浪は二度に來たのだが、よく聽いて見ると、最初のは床したに流れ込んだだけであつたが、二度目ので急に床うへ二三尺、はしご段の二つ目までにも達した。隣りの細君か目かけか分らない婦人の如きは、乳み兒と二階に獨り寢てゐたが、何だか變だと思つて下へ下りるとたん、疊が浮いてるとは知らないでそれにいきなり足を置いた爲め、水の中へ引ツくり返つたさうだ。何しろ、一ときはボートが市中を漕がれたと云ふ大事件だ。

四日になつても、自分の家を初めとして、隣り近所が濡れ物を家根のうへや道の眞ン中に出して乾してゐるので、渠が心に消えかけてた昂奮もなほ名殘りを惜しんでゐた。その午前、もう、晝近くになつてから、——けふは少し出社の時刻を普通の通りに無精してゐたのだが、——甥からの電報が屆いた。

『スグキテクレ』とあつた。よく見ると、一日の午後三時發だが、今日まで延着となつてる。いのちの無事なだけは分つたので、兎に角、見舞ひに行つて見ることにした。人もして來た通り、今度は自分も持てるだけの握り飯を用意して、午後二時半に家を出た。

渠がよせと云ふのに、妹も物好きについて來た――而も寫生の道具までその肩にぶらさげて、――ところが、深川の高橋まで來ると、蒸汽船がまだ通じてゐないことが分つた。止むを得ず、そこから小名木川の運河の河岸を眞ツ直ぐに四里半ばかり歩いて行くことにした。

三

このあたりは水が床うへ六七尺もあがつたらしい。高橋の汽船乘り場の食庫の如きも在り荷がすべて臺なしになつてゐるまゝまた。そして濡れた疊、腐れたやうな茣蓙やむしろなどが、至るところ、河岸ぷちの石垣や道路の上にところ狹きまでに乾してある。或家にはきたない着物やぼろが綱で萬國旗のやうにつるされてゐる。かは水のどろんと濁つた上には傳馬や五大力などがごちや〱と、まだ澤山うツちやられてゐる。

人り船橋の手前まで來ると、大きな五大力が一つ陸上にうちあげられてゐて、多くの人がそれを押しおろさうとしてゐるのだが、なか〱動きさうでもなかつた。尤も、動きさへすれば、水はまだ少しそこの窪んだ河岸をうへに出てゐるのだから、直ぐ浮び出るのであつたが――。そのかたはらで、七八名の男や女の子供がはだしの尻はしよりで、ぴちや〱云はせながら、何か腹の光る小魚をわけもなくすくい上げてゐた。近よつて見ると、どこの養魚場から流れて來たのか、澤山の金魚であるが、

すべてそれが死にかけて横になり、半死半生のいきをあぶ〳〵させてゐるのである。中には、もう死んでるのもあつた。

そこの橋をのぼり詰めて渡つて行くと、直ぐさきはまだ水に深く浸つてゐて、とても二人にはかち渡ることができなかつた。勞働者らしいものどもは皆眞ツぱだかになつて、へその上までも平氣で這入つて行くのだが、二人はそれを見ながらどうしようかと相談した。この様子をいやアにながめて通るもの等は、舌うちをしたり、

『燒けらア、な、こツちやア水だのに』と云つたりした。

『馬鹿々々しい！こツちもそんなことどころかい』と、渠は心に云はせたが、自分の妹には成るべくそんな意味を感づかせたくなかつた。

傳馬が通つたので、これをあらしの夜の車夫に於ける如く無理に賴んで呼び戻し、それでやツと向ふへ進むことができた。傳馬の船頭に何でああ云ふ勞働者どもが多くけふに限り手ぶらで行くのかと聞くと、方々の會社で不時に賃銀を拂つたり、施米を分つたりすることになつたからとの答へであつた。

どうせ下駄や足袋はよごれたので、淺い水はそのまゝびしや〳〵と渡つたが、今一つ船を賴まなければならぬところがあつた。そのうち、中川のおほ橋へ來ると、大きな鐵船が一つ橋のしたへ喰ひ込

んだまゝになつてゐるのがおそろしかつた。それでも小橋の方は無事に通れた。そこから有名な小名木川土手で、川と平原との間を一里以上も眞ツ直ぐに續いてるのだ。風景のみで見ると、平原一杯に引き殘りの水がみなぎつて、その上を西に傾いた太陽の光がきら〳〵と横照らしに照らしてゐるので、たださへ寂しいのが一層寂しいわけだ。が、土手の上の往來がいつになく忙がしいので、ゆふがたの迫つて來るのが左ほどの心配でもなかつた。

ところどころに土手の切れたところがやツと砂だわらで塞げてゐる。その上に一層手を入れてゐる人夫もあつた。それから、疊おもてや茣蓙を運ぶもの――芋やしようゆうをかついで行くもの――こちらと同じやうに救助物を提げてくもの――。

土手の中途にかかつてるちよツと細長い橋の如きは、中が殘つて兩端が取れた爲めに、その兩端には丸太が二本づつ足してあつた。

新堀村を進む時には、藁ぶき家根の家が水でじゆく〳〵して、二つまで押しつぶれてゐるのを見た。少し日が暗みかけた時、やツと栗渡しへ着することができたが、その僅かの川はばを向ふ岸へ渡らなければならぬのだが、渡して吳れる船がなかつた。それが爲めに、勞れた足ではあるが、こちらの岸をなほ二十丁、三角橋まで行つて、向ふ岸をまた二十丁やつて來なければならなかつた。

七時頃には、もう、足もとまで暗くなつて、向ふ岸には忙がしさうに提燈の火が往き來し初めた。

渠は自分の妹の慣れぬ遠みちに弱つてるのを知つてたけれども、今更らどうすることもできないので、自分がかの女の厄介な寫生かばんまでを引き受けてやつて歩みを急がせた。そしていよいよ三角橋を渡つてから、渠等は自分達のやつて來た方向へ違つた方の岸を曲がるが早いか、最も豫想外の光景に接したのである。夜目にもかねて見知りの土手みちだが、それを左り手に外れたがはの廣い田地はすべて、見渡す限り大海と變じてゐて、その土手みちも左りから半ばまではびちやびちやと浪が寄せてる。そしてその浪ぎはには、ずらりと列んで、別々にだが、菰を敷き、菰をまた後ろからはすかひに上へ廣げて、その中を家みたやうにしてゐる家族どもがある。そして『浮長』とか、『浮熊』とか云ふぼんぼりを軒に吊してゐるのもあるのを見ると、すべて自分等がさして行く宇喜田の村民の避難所になつてるらしい。

そのうちの或假り小屋では、女のうんうんうなる聲がして、特に人だかりがしてゐるので、渠もちよツと背延びをして見て、これもはたに立つてる者に

『どうしたのです』と聽くと、

『この騷ぎの中でお産です』との不平さうな答へであつた。

『高島の家は無事でしたらうか？』ついでにかう聽いて見た。

『あすこも店を流された、な。』

『死人があつたでしようか』と、突ツ込まずにはゐられなかつた。

『さア、よく分らないが、どこでも三人や四人はやられたよ。』

道理で、殆どその軒並みに線香や蠟燭を立ててあるのは、すべて死人の爲めだ。ちやんと寢棺に入れたのもあるし、桶になつてるのもあるし、また菰をかぶせたままのもある。それが一つづつならまだしもだが、一軒毎に二つ、三つ、若しくは四つも並べてある。

『南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛』と唱へる聲が行くとして聽えて來る。が、それは皆小屋にゐる殘つてる女や子供の聲だ。男どもはすべて氣が立つてるせいか、うつて變つて權幕が烈しかつた。忙がしさうな往來をちよツと人にぶつかりかけても、こちらはけんつくを喰つた。で、渠はともしたはだか蠟燭や提燈の光を手賴りに、見知りのものが小屋の連中にゐないかと、こわごわ軒並みをのぞきつつ歩いた。お産の箇所が今一つあつた。そしてちよツと小屋が途切れたところで、浪ぎはの薄やみから、自分等の來たあとをふり返りながら、これも矢ツ張り同じ氣ぶんでらしくふり返つてる妹に、

『ひどい、なア』と、一こと聲をかけた。自分ながらその聲が壓さへ付けられて、呼吸の切迫してゐるのをおぼえた。そして妹は全く返事もできなかつた。かの女も、恐らく、二人がただ一人殘つてる母を失つた時のことを線香のにほひに思ひ出したのであらう。そしてその感じを今南無阿彌陀佛を唱へてる人々のうへに及ぼして見たのだらう。男性たる渠には、然し、この場合、そんなことばかりで

はなかつた。死んだもの、生き殘つたものの見じめなそのこと以外に、この騷がしい恐ろしい一大事變の間に平氣で生れて來るものの偉大さの方が一層渠の心を壓迫してゐたのだ。渠自身を決してえらい者としてゐないだけに一層、この偉大さに自分の心は擊たれたのである。

見よ！ここで初めて氣が付いたのだが、土手に並んで植わつてる大木は左り手のが殆ど皆根こそぎ洗ひ出されて倒れたのだ。そして往來の邪魔になるところだけはその枝でも幹でも切り拂はれたのだ。今渠等の立たずんでるところの倒れ木がそれでも幹や枝がそツくりしてゐるらしいのは、浪ぎはに添つて倒れてゐて、餘り往來の邪魔にならぬからであらう。そしてその却つて天の方につツ立つた枝々の間から、なみ／＼した臨時湖水のおもてがのぞかれる。そしてその湖水のあなたには、本土手を栗渡しのさきから分派して向ふ宇喜田村へまわつてる豫備づつみのうへに、矢ツ張り人が非常の往來をしてゐる爲めの提燈火が賑やかに見える。而もその火がすべてこちらの方へ水に映つてちら／＼と夜の色をあやどつてる。

この麗はしさ、この騷がしさ、この悲しみの中をうぶ屋として生まれるもの等にも道德があるとすれば、渠自身が最初厄介な妻子もいツそのこと死んでしまへばと考へたほど昂奮した時のと恐らく共通なものであらうと思はれた。自分には、矢ツ張り、これも凡俗道德は超越してゐることだ。そしてさきに何か大きなことをと待ち受けてた心持ちは、これをここに多少內部的に解き得るところの糸口

を發見したやうな氣がして來た。

四

非常時の赤ン坊と自分とに共通な點を發見した如く、渠はまた小名木川の水と臨時の湖水とが一緒になつた時があるのを發見した。本土手に一旦切れたあとが二ケ所もあつて、そこは砂だわらで假りにつくろはれてある。その最初のところでは、暗いうへに氣が付かなかつたので、渠は重い足をつまづきかけた。が、二度目のには、

『あぶないぞ』と、勞れた聲で妹にも注意してやりながらとほつた。

栗渡しの水ぐちから、細い堀り割りに添つて一直線に行ける十丁ばかりの榛の木道があつて、いつもはこの近みちをするのだが、三四間も行つて見ると、一方から竹やぶのかげが蔽つてるところにどこかの死人が菰をかぶつたまま棄てられてゐる。そしてそこからさきは土が崩れたり、水に浸つたりして道が絕えてゐて、あやうくも落ち込むところであつた。で、豫備づつみの方をまわつて行くと、青年會のぼんぼりを提げて村の青年どもが應急の道普請をしてゐた。

『おう、先生』と呼ぶものがあつた。渠はこの村へは一週間に一度ばかり妻子を見舞ひに靜養がてら來てゐたのだが、一部のものには尊敬を受けて、うか〳〵してゐると青年會の會長に擧げられるとこ

ろであつたのだ。
『奥さんは助かりました、なア、うまく逃げてしまつて。』
『でも、誠さんも無事でしたよ。』
『高島では誰れだれがなくなつたのでしよう』と、渠は尋ねた。そして分つたことには、主人の老父母と子供二人とだ。多分、流れたと云ふ店の方に不斷寢とまりしてゐたものばかりだらう。渠には、兎に角、甥の無事なことだけは信じてゐることができてたので、直接の損害がありとすれば、借り別莊に殘して置いたがらくに道具ばかりであつた。

東のそらが明るんでたと思つてたら、果して月の出であつた。而も丁度滿月であつた。不斷は百姓どもが鍬を以つて耕作する土地のうへへ、恰も品川灣か琵琶湖のおもてに於ける如く、月はきらきらした光線を段々と延長して來た。
『あア、いい景色、ねー』後れがちな妹も立ちどまつて、ここに初めて少しゆツくりした息がつけるやうであつた。
『………』渠はただ默つてゐて、自分の重いやうな輕いやうな、乃ち、現在、目の前の事變に着いてるやうな着いてないやうな、一種深刻な動亂の氣持ちに、天もこの新らしい光景を以つて一層莊嚴の趣きを添へて呉れたやうに思へた。そして少し足もとが明るくなつて進んでると、稻の穗が海の瀟く

づのやうに靡いてる水中の淺みで、何かの魚が人の足おとに驚いてはね飛んだのを、渠は自分の精神の一飛躍と見た。そして愉快な調子で、『もう、來たぞ』と妹を急がせた。

人家の集つてる部分に這入つたが、見おぼえの家が倒れたり、あとかたも無くなつたりしてゐる。まだ土手の崩れたままのところもある。が、いよ〳〵高島の家に歡迎された時には、渠は全く傍觀的な態度でゐるつもりであつた。おも屋はしツかりしてゐるので外形はそツくり殘つたが、その周圍の板や壁は流されてしまつた。壁のところなどは、中なる竹のしんまでが無くなつた。そして自在に吹き込む夜かぜを殘つた板戶やよしずで以つてやツと防ぎながら、その中に床板のぢかに蓙や莚を敷いて知らない人々までがごろツちやらしてゐるのが、薄ぐらいランプの光に見える。渠が持つて來た僅かの食物などは皆にとても渡りさうがなかつた。それでも、まだ、家を無くして土手の浪ぎはに寢てゐるもの等よりはどれだけましだか分らない。

けれども、まだ鹽けやどろ水のあとがかはかぬ何だか別なくさみの中に、ここでも亦線香や死人のにほひが嗅ぎ分けられる。一方の隅には、聽いた通り、四人の、これだけが白く新らしい寢棺が据ゑられてある。

『どうも殘念なことをしましたよ。』主人は酒に醉つてたが、最初の挨拶がすむと、何よりもさきに斯う云ひ出した。『餓鬼どもは、まア、また生めば生まれるものですけれども、年寄りを二人とも死なし

たことは、な！わたくしも、兄さん、どうも殘念なことをしました。この子などは、兄さん』と、半ば向ふの隅を振り返り見ながら右の手をその方にちよツと延ばした。むしろの上に坐わつてこちらを見てゐる女の子をさし示めして、『七つですが、一旦流されまして、二十丁もさきのお寺の樹の枝にとまつて助かりました。から云ふ運のいいものもあるのにわたくしはどうも、兄さん、殘念なことをしましたよ。子どもの二人や三人は無くなつても何でもありませんが、どうもかけがひのない年寄りを死なしたのは、な、どうも殘念で――。』

『…………』醉つてくど〳〵しくなり而も人に物を云ふ餘地を與へないのが兼て主人の癖であるから、こちらもさう自分の意にとめないのだが、自分が來てから、もう二回も死人どもの位牌に向つて主人が殊勝にも線香をあげて、南無阿彌陀佛を唱へるのを見ると、自分にも十分同情して吳れろと云つてるのだらうと思はれた。で、自分も『どうもお氣の毒でした』を繰り返した。そして、妹を促して眞ごころらしく立つて行つて、主人のしたやうに線香をあげた。

それからやツと渠は自分の聽きたい津浪の時のことに話を移したのだが、東京に於ける如く矢ツ張り二回に來て、二回目に大抵のところはやられてしまつた。高島家にはおも家とは離れて別に店があつて、この村での日常品をすべて取り扱つてゐた。それが倒れ流れたばかりでなく、おも屋に最も接した釜屋も、のり製造場も、物置きも皆、流れた。ずツと海岸に出たところの、渠自身の借り名義に

なつてた別莊も――高島で保管を托されてたのだが――全くあとかたがなくなつてるさうだ。が、誠ちやんはその前夜、あまり風がひどいので、留守居の相棒に毎夜來て貰つてた若い衆と共に高島の家へ引きあげてゐた。尤も、ここで毎日の食事はして貰つてゐたのだから。

『一體、水の二三日前に蟹が釜屋の家根にあがつたのが神のお告げでした、な』と、主人は云つた。

『わたくしどもがそれをあとになつて氣が付いたのが間違ひでした。』

『そりやア、穴物が高くあがれば水、巣物が低く巣を喰へば風と、昔から云つてあるさうです』と云つて、渠はあまり默つてる無愛相をまぎらした。尤も、主人がとめどなくしやべつてるので、口を出すひまがなかつたのだ。

『それを忘れてゐたのがわたくしどもの間違ひでしたよ。時計を見ると十一時でしたが、どうも樣子がをかしいので皆を蚊屋の中に呼び起して見たけれども、若いものは皆たわいもなく眠つてました。十二時過ぎに思ひ出して、わたくしは土間へおりてあの太い柱の根もとを調べて見ました。一を書けば一、二を書けば二が、しとつてあらはれるではありませんか？あの柱がしとれば、もう、油斷はならぬぞとは、こりやアわたくしのおぢイさんからの遺言です。さア、大變と、わたくしは蚊屋も何もまくり取つて皆を叩き起しました。それからわたくしは實際どうしてゐたか今でも分りません。やがて第一回の津浪が來て、いきなり水がわたくしどもの立つてる胸よりもうへに成りました。さうして

まだ〳〵ずん〳〵ふえて來るのです。わたくしどもは皆浮いた板につかまつてゐながら、どうすることもできませんでした。――

『ところが、兄さん、誠ちやんはさすが書物を讀んでゐるだけあつて、感心な思ひ付きをやりましたよ』と云つて、なほ主人が續けたところをこちらで解釋して見ると、こちらの甥は斯う發議したのだ――まご〳〵とこんなことをしてゐたら、やがて天井につかえて皆が息を詰めてしまうだけだ。どこか、らくなところを突き拔いて天井の上に出よう、と。皆はそれがいいと決議した時、ふと、若い衆の一人が天井のないところがあるのを今更らの如く思ひ付いた。たツた十七歳の子に智慧を與へられるほど皆が錯亂してゐたので、渠等にそんなへまなことのあつたのも自然であつたらう。考へて見ると、自分だツてあのあらしの夜、わざ〳〵危險な道へ車夫を遠まわりさせたやうなへまをした。ところで、皆はそこから天井にあがり、明り取りの窓から見ると、どこかの家が既に流れて來て、その家根の端がこちらの窓のところへ當つてゐた。皆は一旦窓から出て向ふの藁家根を足場としてまたこちらのおほ家根に移つた。

『けれども、向ふの店にゐた年寄りどもがあぶないと思つて、わたくしは助けにまゐりましたけれども、どうも殘念です、とう〳〵助かりませんでした。』

『隨分お大抵ぢやアなかつたとお察し申しますよ。』こちらは床の上のむしろに坐わつてるのが痛いの

で、あまり目に立たないやうに橫ツ尻をしてゐた。

『さア、一杯おやりなさい。酒にでも醉つてゐなければ、わたくしはこの殘念は忘れられないんです。』

『御尤もです』と答へて、渠も主人の細君が持つて來たお燗を少しおしようばんした。酒も賣つてたし、水害後簞笥の引き出しを明けて見たら銀貨で四百圓もあつたと云ふし、この家がかかる時にも酒を缺かさないのは、別に不思議ではなかつた。

『わたくしはどうしても殘念です』をまた繰り返したと思ふと、主人はまた線香をあげに立つた。

渠の持つて來た物はおもに誠ちやんと、お寺の樹に助かつた女の子と、うちの若い衆に分配された。

渠は香奠を出さうかどうかと私かに自分の妹に相談して見たが、まア、あすのやうすにしようと云ふことになつた。

五

渠は甥をつれて歸るつもりだが、どうせ今夜のことにはできない。さうかと云つて、疊も蒲團もまだろくに整はないところでらくに休むことができないのも承知であつた。

誠ちやんはこの狀態で二三夜を慣れた爲めだらう、他のもの等のやうにむしろの上に寢ころんでし

まつた。が、渠は自分の妹と共に腰をかけて夜を明かすことにした。菱がたをして一方の眞ン中に圓い穴が明いてる踏み臺を借りて、二人は隅ツこの柱を脊にして一緒に腰をかけた。そして渠は疲れ切つた眼と精神とを落ち付けようとしたけれども、如何にも窮屈で、なか／＼眠られない。そしてあらし以來東京で出くわしたことや、三角橋の土手に於ける見じめさや、ここの家人どものいぎたない寢すがたやが、かはり番こに浮んで來た。そしてそれがまたおしまひにはごツちやになると同時に、例の何か知ら偉大な昂奮がまた滿月の光となつて、自分の目の前にちら／＼する。

　それでも、その間を矢ツ張りうと／＼してゐたのだ。ふと氣が付くと、自分は知らず識らず熱を求めて自分の妹に寄り添つてゐた。で、そツと肩を引かうとすると、かの女も目をさましてきツとなつた。その次ぎには、また、妹の方から肩を引くのが渠自身にも分つた。そして分つてきツとなつた時は、異樣な感じをおぼえながら、その度毎に一層夜さむの氣をおぼえた。斯うしてさめたり眠つたりして、やツと夜明けに達した。

　渠が腰かけを離れた時、妹もそこから立ちあがつたが、これも後半夜のことをおぼえてゐたかして、ちよツと顏を赤めて横を向いてしまつた。それが爲めに渠自身は恐らく一層、心の顏が赤らんだ。そして若しこれも一つの超道德的な感じであつたのなら、この大事變と關聯しないでは解釋できないものだと思へた。

渠がそとへ出ると、妹もついて來た。

『どうだ、寫生ができるか？』笑ひながらこの冷かしを云つて、渠はかの女に對して全く氣を轉換することができた。

『とても――』と、かの女も微笑して、もと〳〵通り可愛らしい首をかしげた。

この邊の家はすべて土手のうちがはに土手をおりて建てられてた。けれども、水は土手を越えて泥をまで運んで來たからして、高島の釜屋や物置きのあとにもすべりさうな泥が一杯にあがつてる。そんなところを成るべく避けるやうにして、ついそこまで來てゐる浪ぎはへ行つて見た。栗渡しからの近みちなる榛の木みちは直ちにここに達してゐたのだが、この並み木も倒れ、その形も崩れて見ることができない。そしてここにも一つ、大きな枝のはびこつた松の庭木が水の中に倒れてゐる。そしてその枝々へ寄つて來てゐる大きな魚はすべていなである。ゆふべこちらの足もとからはね跳んだのも確かにこの種類であつたらう。

朝めしをすませてから、二人は他家への見舞ひやら見物やらに誠ちやんを伴つて出たので、初めて誠ちやんの氣がねなきうち明け話を聽くことができた。

『隨分困つたらう、な、電報が延着して』と、渠は慰めがてら云つた。電報は實に一日の日に人のついでを頼んで二里もさきで打つて貰つたのだが、どうしたのか四日まで屆かなかつた。

『僕は兄さんを待ちかねただけで、別にさう困りやしなかつたけれども』と、誠ちやんは答へた。

『高島のおぢさんのあわてかたツたら、なかつた。皆を叱り飛ばすばかりで、自分は何もできないのだ。僕が先づ店の方の人を呼んで來たらと云つても、それどころぢやないなんて云つて、ただまごまごしてゐた。そのうちに水が來てしまつた。店にゐたものを呼んで來ようと思つたら、そのひまは十分にあつたのだ。』

『ぢやア、お前が呼んで來てやつたらよかつたのに。』

『けれど、おぢさんが出たらあぶないツて云ふんだ。』

『そりやア、あづかつてるお客だから、若しやのことがあつちやアと心配したのだらう。』

『一ときは生きてる氣がしなかつたでしよう』と、妹も從つて來ながら口を出した。

『でも、今となつちやア面白かつたよ。』

『まア、云つて御覽、そのつぎを。』渠は子供らしい問答よりも高島の主人のことを聽きたかつた。

『ゆふべ、あいつの云つたことなどは皆うそが半分だ。』

『女の子が助かつたこともかい?』

『いいや、年寄りを助けに行つたことなどは。』

『へい――?』

よく聽いて見ると、あの主人はあわてふためいてゐて、やツとおほ家根のうへに出てからも、なほ自分のいのちをあやうんだのだ。そしておも屋よりも店の方が水につかりかたが少いのを見て、皆もあツちへ渡れと主張した。そして誰れよりも先きに自分の女房にさうしろと促した。乳呑み兒をかかへてゐるものが水の流れを渡つてそんなことのできよう筈はなかつた。その他のもの等も贊成しなかつた。ところが、とう〳〵怒つてしまつて、自分だけが逃げて行つたので、主人としては、あとのものを見棄てたかたちであつた。その上、年寄りを助けるつもりでも何でもなかつた。その證據には、第二回のおほ寄せがあつた時、今度はまた店の方があぶないと見たので、自分だけでまた泳ぎ出した。この時七歳の女の子がおぶつて行つて呉れいと父の肩に飛び付いたのを、主人は夢中でふり切つたらしい。その子があとで語つたと云ふのによると、

『お父さんがわたしを突きのけたので、わたしは水をがぶと呑んだ。それから、獨りで泳いでると、いつのまにか木の枝につかまつた。いくら呼んでも誰れも助けに來て呉れないので、じツとしてゐると、夜があけて來て、段々水が引いて行つて、わたしは段々したの枝へおりて行つたけれども、お寺の高い木であつたので、もう、枝がなくなつて、木の途中にとまつて泣いてゐた。そこをよそのおぢさんにはしごでおろして貰つた。』

『あれは不斷から氣丈な子には相違なかつたが――』

『それでも、よくさう遠くまで泳げました、ね』とは、妹の感嘆した言葉であつた。

『あアに、流れが非常だツたんだ。――でも、あの子が見棄てられたのは事實でしよう。年寄り二人も棄てられたんだ。僕等も一旦棄てられたんです。ところが、おほ家根に殘つてた僕等はおほ津浪の勢ひを見物しながら、何でもなかつたけれど――』

『暗いのに見物ができるかい、なま意氣な？』

『でも、雨かぜの中を透かせば見えてた』と云つて、誠ちやんはなほ調子づいた話しぶりで言葉を續けた。この事變がこの子をも俄かに小なま意氣に、否、寧ろ大人らしくしたらしい。その所謂見物をしてゐたもの等に店の建て物のひツくり返つたのがかすかに見えた時には、かみさんが聲を擧げて泣いた。そしてお父さんも、年寄りも、娘三人も皆、死んだものと諦らめた。ところが、夜が明けてから、先づ主人が歸つて來た。そしてまだ家根の上に殘つてるものらを見て、どこからかはしごを持つて來て、皆をおろして呉れた。そのところへ七歳の女の子も歸つて來た。

主人の方はわれからとう〳〵押し流されて、やツと例の眞正面に當る小名木川土手に泳ぎ付いたのだ。尤も、他の家の話をも聽くと、生きたものも死んだものも大抵はこの土手へ着いた。

主人は一度歸つて來てから死人の死骸をさがしまわつたのだが、四つとも揃つたのは水から二日目のことであつた。棺に入れてから、線香を立てた最初の一度は濟まんことをしたと云つて拜んださう

だ。それから引き續いて燒け酒を飮んでるのだから、その醉ひは死人に對する悲しみを忘れようとしてゐるのではなく、その實、自分の良心の苛責を免れようとしてゐるのであつた。

誠ちやんには、大人びた考へが出て來ただけ、一般月並みの凡俗道德になづんで行つて、主人のありさまを然るべき應報覿面の苦しみと思つてるやうだ。が、昂奮した氣ぶんを東京からして持つて來て、なほここでもそれが斷續してゐるこちらには、この主人の取つた自我中心の態度は現はれかた次第では決して否定すべきものではなかつた。否、主人としても後悔するには及ばないのであつた。が、無學のなさけなさには、無論、非凡人としての意識も自覺もなかつた。たとへ非凡人でも、あわてふためく場合もないとは云へないから、それを何も後悔するには當らぬ。これが若しこちらなら、自分としてあとで平凡なそして僞はりの申しわけをしてゐるのをこそ後悔すれ、さきのその場の自我擁護は俯仰天地に恥ぢぬ公明正大のおほ努力、おほ仕事であつたのだ。先づ自分を救へないものが、人を救はうなどと考へるのがおほ間違ひだから。

『誠ちやんにはまだ分らないことがあるよ。世間には、な、自分を救ふことができないのに、利いたふうに慈善とか、人の爲めとか云つてるものが多いのだ。』こんなことを渠は、それ以上には說明しないで、みち〳〵自分の甥に語つた。

少しでも知り合ひになつてる家は殘らず訪問した。同情の爲めと云ふより寧ろ物好きの爲めで、成

らうことなら、自分の斯う云ふ考へを確める材料をこの上にも得たいのであつた。ところが、至るところ、一人や二人の死人を出してゐない家は殆どなかつた。そしてそんな家の主人どもはみな高島の主人と同じやうな申しわけを云つてる。そして誰れだれが死んだかと調べて見ると、いづくも同じ、をんな子供でなければ、老人か病人か、兎に角弱いものばかりであつた。

これは渠の偉大な道理だと思つてゐるところによく附合してゐる。如何に生きた物でも、必要があつてどれから棄てるべきかと云はば、役に立つ物を一層充實させる爲め、先づ弱い物、役に立たなくつた物から棄てるべきだ。そして強い物なら、たとへうツちやつて置いても獨りで助かる。渠には、この獨りで助かるものはぐづぐづして弱いものの亡ぶその道づれになるべきではなかつた。

こんな村にでもこの偉大な道理が行はれてゐたのである。否、こんなやくざな村にでも、詰り、非常の時には俗想を脫した非凡人のおもかげが闇のうちに現はれたのだと思へた。そして渠はこのおもかげを斷片的に自分のあたまで能く寄せ集めるのが愉快であつた。

けれども、この村の村長を尋ねた時、渠は一つの興ざめた話にぶつかつた。最初、出しぬけにお禮を云はれたので、何ごとの爲めかと思ふと、渠が〇〇新聞の記者を紹介して置いたら、その記者が來ての視察記事がきのふの夕刊に出て、村長の息子が大いに模範青年として讃められてたのだ。讀んで見ると、何のことはない、おのれのうちの離れの二階に女中がランプをつけ殘して來たのが、家の動

くと共にぐら〳〵倒れさうになるのを見て、火事になつては困ると云つて、泳いで行つて吹き消して來ただけのことだ。けれども、村長は取り澄ましたもので、
『いづれこの勇敢な行爲は新聞で表彰されましよう』と云つてゐた。さう云ふことを約束する新聞も新聞だし、また喜ぶものも喜ぶものだ。
最後に、渠は自分の借りた別莊を海岸へ見に行つたところ、全くあとかたもなかつた。その歸りに、自分に屬してゐた物らしい竹のステキを一本、ずツとこちらの土手のそとがはに發見したけれども、その握りのところにぬら〳〵するほど泥がついてゐた。
香奠の件は、かう多くの家へ一々分配する用意もなく、力もないので、とう〳〵どこへもやらぬことにきまつてしまつた。

六

晝過ぎになつて、高島の家まで引ツ返すと、もう、酒氣を帶びてる主人が突然、
『兄さん、村長のせがれが新聞で讃められてるさうです』と、こちらの罪でもあるやうに憤慨した。
主人の向つてる大きな角火鉢の上の鐵瓶にはお燗が入れてある。
『………』この流儀で水の眞ッ最中にも見當違ひのあわてふためきをして、自分から自分のいのちを

失ひかけたのだらうが、ここにも既にきのふの夕刊の話がこちらの留守のうちに傳はつたものと見えた。が、あれはこちらの紹介した新聞記者が書いたのだと云ふことを、渠は、いつまでも、ここの主人に知られたくなかつた。新聞も雜誌も同じだらうと云つたことのある、人のいい然し無學な主人は、記者の腹でやつたことをもこちらがさせたのだと、感違ひするかも分らなかつた。で、こちらは飽くまでそ知らぬふりをして、然しこの話を少し馬鹿にした心持ちで、『今、わたしも村長さんのところで讀んで來ましたが、まア、それも結構でしよう。』

『何が結構だか？』

『………』渠はまた主人のますく憤慨して來たこの樣子に、今度は、少し油をかけて見る氣になつた。かかるいたづらな氣持ちも、これをもツと大きなことにちやんと徹底的に押し通せは、一つの偉大な仕事だと云ふことは、自分の最近の刺戟に受けた一暗示であつたのだから、自分は左右の妹や甥には意味を含めたにこ付きを見せて置きながら、主人に向つては矢ッ張りそ知らぬふりで斯う云ひ添へた。『村長さんのお話では、おツつけ新聞社から表彰されるさうです。』

『また表彰さわぎかい、下らない！』

『………』渠は主人のこの簡短な意見には全く同感であつた。近頃のやうに地方に青年會の起るのは、ちよツと見れは結構らしいけれども、要領を得ないもの等が幹事や會長になり、これも要領を得ない、

否、要領を得過ぎて餘りに形式に流れた官僚學者などが都會から演說に來るので、地方の人民がちツぽけに完成しようとして自然に外面の形にばかり重きを置くやうになつてる。そして社會の耳目たる新聞までがこれに迎合して、無理に摸範青年とか表彰的行爲とかを拵らへ上げて、これはまた不自然的に地方の人氣を取つてる。こんなこともすべて根本から革命を要するのだ。今回のはそれが爲めの大々事變であつたかも知れないのに、青年會のやつてる仕事を見ると矢ツ張り月並みの見當違ひが多い。道路の修繕もいい。棺桶が不足なので樽を配つたのも思ひ付きだ。が、こんな場合にもツと緊急なのは新事實の創造、乃ち、精神の改革と食物不足の補充とであることを、渠は至るところに發見してゐた。

『下だらない』と、主人は然しまだ比較的に有福なだけ太平樂をつづけた。『わたくしどもは、兄さん水で騷いでゐたんですぜ、それに、あのせがれめが火事の出ないやうにランプを消して行つた。それがどうして村の爲めになります？火事が出ようとしても出る道理がないぢアございませんか？またとへ出たとしてもうツちやつて置けば、獨り手に消えます。それを消しに行つたツて、それが何になります？津浪の中を泳いだのがゆうかんなら、私どもはおほ浪を突ツ切つて年寄りを助けに行つたんです！これを何と名づけて呉れます？ゆうかんもゆうかんそのまた上の『ゆうかんでなければなりますまい……』

『………』こちらには、主人が勇氣のゆうかんと新聞のゆうかんとをごツちやにしてゐやアしないかと云ふ疑ひもあつたが、兎に角、今讀めたところでは、凡俗な良心の苛責を主人の免れようとすることが、今度はまた一層凡俗と呑氣とになつて、世間並みの評判を相爭はうとしてゐるのだ。自分の家の中の土間の上には天非がないことは不斷から分り切つたのにそれを思ひ出せなかつたほどうろたへてた時には、斷片的にだが偉大なことをやつてゐながら、その場をたツた二三日だが過ぎると、もうそれを云ひ憚つて押し隱し、成るべく凡俗の小理窟に合はせようとする者こそ一しほあはれだ。渠の心はいつしか主人のそこに最も侮蔑の同情を持つやうになつてゐた。で、こちらはただやわらかに笑ひを見せて、火鉢に手をかけながら腰をしやがめ、向ふをなほ勝手にしやべらせて置いた。

『泳ぐことがゆうかんなら、この子だツて』と、また女の子を返り見てから言葉を次ぎ、『二十丁もさきまで泳いで行つて、お寺の樹にとまつて助かつたんです。それだけのことなら、うちの若い衆にも幾度でもさせて見せます。』

『うちの若い衆だツて、わけもなくそんな藝當はできませんよ』と云つて、かみさんは三人の食事を奥の室に揃へて呉れた。『さア、どうか、何もありませんけれど――』

『ちよくを添へておげろよ、ちよくを。』

『いや、それには及びません』と云つて、渠は他の二人と共に奥のむしろに移つた。かみさんはこち

らが飮み手でないのを知つてるので、この方はすすめようともしなかつた。

『酒だけはこんな場合ですけれどいくらでもあります。わたくしはこれでもないとわたくしの殘念が――どうも――忘れられません。道路の修繕の手傳ひには若い衆を代りにやづてありますから、わたくしは、もう、死んだ隱居の代りも同樣で、斯うやつて隱居の新らしいお位牌を番してゐればいいんですから。然し、わたくしも――どうも――殘念で溜りませんよ。かけがひのない年寄りをなくしてしまつたんですから、な。』

『…………』こちらでは、それにかまはず箸を運んでゐたのだが、渠がそのひまにそツと主人の方を見ると、坐わつて揃へた膝ツこが着物から喰み出してる上へ筒袖の兩手を置いたり、その片手を以つてあたまを撫でたりして同じやうなことを云つてゐた。

『あ、またおれもお線香をあげなければなるまい、な。』思ひ出したやうに立ちあがつて、主人も奥の方へ來た。が、その前から七才の女の子は佛前で蠟燭の火のしんを四ツ並んでるそのかたはじから一つづつ切つてゐた。

『…………』親に敎へられたのであらうか、若しくは人のすることを見て眞似してゐるのだらうか、かの女がどんなところまで事情を分つてるのか、その心持ちを渠は知りたかつた。突ツ放された時、赤ン坊なら無論そのまま死んでただらう。そしておやぢの自我的決心の證據を――おやぢが不爲めだと

思ふやうには——あとになつて人にあばかなかつただらう。けれども、多少でも泳ぎを知つてたので、夢中ながらも、速い潮に乘つて行つて二十丁もさきで助かつた。歸つて來てからも、喉がかわくと云つて水をがぶ〳〵飮んでただけで、左ほど疲勞も病氣もしなかつた。そして一旦はおやぢに向つて涙一杯、恨みごとらしい言葉をかけたさうだが、おやぢに何とか云ひくるめられて、そのままにそれ以上を繰り返さなかつた。そして今ではおやぢを矢ツ張りもとのおやぢと思つてゐるらしい。だからきのふ見ても、けふ見ても、いつも素直に笑つて子供らしく云はれる通りにしてゐる。

『どうも殘念なことをした、なア、お前のおぢイさんやおばアさんを死なして。』主人はこんなことをこの子にまでも云ひながら、蠟燭の火を線香に移してゐた。

八

渠は香奠のこともあるし、甥の受けた世話に對する謝禮のこともあるしするから、今一度出直して來ることにして、他の二人と共に一先づそこを引き上げた。

ゆふべとほつたまわり道をまたまわつて行つたのだが、道ばたの水中には大きな魚の泳いでるのがいくつも見えた。そして違つた喰ひ物のできたのを喜んでるやうだ。それとも、また、從來の喰ひ物がないので探しまわつてるやうだ。いづれにしても、大分に澄んで見える限りの水中は勢ひがよかつ

た。

渠はふと、自分の好きな釣りのことを思ひ出したのである。

『殘念なことをした、な』と、立ちどまつて魚の泳ぐのを見てゐたが、目で魚を追つて行つて、とうとう、青年會が積み上げて置いて、まだ手をつけないところの、石の道普請材料の上につま立つて脊延びをした。そして後ろのものをも見返らないで、『釣り道具を持つて來たらよかつた！』

『わたくしも――どうも――殘念ですの方でしよう。』甥は渠の思ひも寄らぬことを云つた。

『かけがひのない年寄りをなくしてよ』と、妹も笑ひ聲でうまくも合ひ槌を打つた。

『馬鹿！』渠は微笑しながら石材の上を飛び下りた。そしてまた歩き出した。

『兄さんはわたしが寫生かばんを持つて來たのを笑ひながら、自分であんなことを！』

『だツて、それが爲めにおれの厄介になつたぢやアないか？』

『だから、今度は誠ちやん賴んである、わ。』

『……………』渠が見ると、自分の殆ど忘れてゐた妹のかばんを甥が自慢さうに提げてゐる。

小名木川の本土手に達した時、渠はゆふべの菰の上のお産がどうなつたかを考へて見た。そして生れた赤兒や、高島の七歳の女の子やは、渠には、ただ無邪氣のかたまりばかりではなかつた。

『二十丁もさきへ流れて行つて、お寺の樹にとまつて助かつたんです』と云ふ、高島の主人の言葉を、

ふと、主人同樣に渠自身も繰り返して見ながら考へると、この二つのかたまりには自分の心をそそる潜在の偉大力があつた。けれども、その力を實力的に而も超越的に所有してゐるのは、今の場合、自分がその實例であると考へられた。自分には、今、青年會や地方有志に於けるが如き俗惡な束縛がない。あらゆる形式思想を脱してゐる。そして而も自分から涌くところの偉大な實力を感じてる、今なら、どんなところへでも生まれ出られるのであつた。

渠はこの實感を乃ら自分の待ち設けてゐた大きな事であつたときめてしまつた。そして自分を最も充實した人間と思つて東京へ歸つて來たのであるが、東京では、その一二日前に比べると、もう、世間が大分おだやかになつてゐた。そしてあらしや水害のことは新聞の三面記事としても時代後れの說明に過ぎぬありさまであつた。渠自身としても、目前の仕事に忙しい爲め、日に日に心は他の方へ向つて行つた。

あらしの當夜を必要上東京の市中に出て實見したり、水害地中の水害地と文字だけではなほ書かれてる宇喜川村を實生活的に見舞つたりした渠ではあるが、それから得たと思つた非凡な事や非凡な氣持ちを人にも云ひ傳へることができず、自分としても實際に示すことができなかつた。たツた四五日か一週間かの以前と以後とを殆ど隔世の感ができた。そして自分や高島の主人やその他に於ける非凡人のおもかげはほんのただその場に得たはかないひらめきであつたことが分つた。

『それでも詩人か小說家かであつたら』と、渠は或夜、皆が寢靜つてから、自分の書齋に在つて考へた、『あの時の大きな實想や臨時的大生活は十分にこれを書き殘して置くことができたものを！』矢ツ張り、自分も凡俗人であつて、あんな大事變に直接に遭遇してゐながら、今となつては、もうそれに受けた刺戟と昂奮との斷片しか思ひ出せなかつた。

――（大正七年一月）――

强い相手

雜誌の依賴に應ずる小說の題材を多いうちからどれにしようかと迷つて、なか〳〵筆が進まなかつた間に、約束の期日がもう三日以內に迫つたその午前をも僕は來客の爲めに費やしてしまつた。それから、なほ多少のぐらつきを覺えながらも、やツと書き初めたのは、ゆふべから午前の二時に床へ這入るまでに決心をつけた材料であつた。それはこの七八年來いつか書かう書かうと思ひながらその機を得なかつたところのもので――。

それを半ぴらの原稿紙に三片半ばかり書き進めた午後の四時頃に、門が明いたので、まだ來客かと云ふ不快な期待を感じた。やがて格子がけたたましく明いたと思ふと、頓狂な聲で、

『お宅の御子息が馬力に敷かれて今、折戶の山下病院に手當てを受けてをられます』と云ふのが聽えた。それから息苦しさうに言葉を切り〳〵『早くーどなたかー來て下さい！』

『ど、どこで敷かれましたか？』

僕の妻は直ぐ緣がはへ飛び出したやうだが、これも既に聲が詰つてた。

『庚申塚の――踏み切りの――こちらで。』

『………』僕は二階で筆を擱き、手と足とにかけてたオキシヘラを既に半ば取りはづしてゐた。

『あなた、一雄さんが大變ですよ！』

『………』僕は丁度どてらをぱツと脫ぎ棄てたところであつた。急いではしご段を下りた。そして半ば明いた格子戸のそとに、古ぼけた茶色のトンビを着た男が見えたので『どうも、よくお知らせ下さいました』と、そこ〳〵に挨拶して茶の間へ這入り、帽子を取つて、かぶつたが、羽織りを着ようかどうしようと奧座敷へ行つて見た。が、見付からないのでわざ〳〵それに妻を呼ぶまでもないと思つて茶の間へ立ち戾り、ぢかにマントを引ツかけた。それがどうも矢ツ張り不調和な氣がするので、また奧へ行つて見たが、かぶつてる帽子までが毛糸で編めた西洋婦人帽で、かかる場合にはなほ更らどうせ不調和なのだからと思ひ返して、そのまゝ履き物をはいた。

トンビの人は待ち遠しがつて、既に門をも出て行くところであつた。近處のをんな子供が集つて來てゐた。渠はずん〳〵先きへ進んで本通りへ曲つて行くので、僕も惡い道を高い足駄で成るべく急ぎ足で追ひ付いて行つて、

『山下病院でどこでせう？』

『折戸です――馬力の男を逃がしちやア詰りませんから』とばかり、その人はずん〳〵進んで行く。

『………』兎に角、敷いた者を取り押さへてあると云ふのがこちらの突然ぽかんとしてしまつた心に強い手ごたへであつた。よしんば、子供は蟲の息になつてゐても、さうさせた相手が取り押さへられてるなら、まだしも心いせにはならう、と。そして行つて見さへすればすべてが分ることで、たとへ萬事休すであつたとしても、それは仕かたがないと思つて、子供がどこを敷かれたのかを問ふ氣にもなれなかつた。

それにしても親切な人があればあるもの――自分自身の利害にでも關してゐるのかのやうに足を速めて行き、僕が少しでも重苦しい足を休めようとすると、その後ろを向いて、早く早くと云はないばかりに僕を促すのだ。僕も止むを得ず急いだが、雨あがりの道が惡い上に足駄の齒が曲つてゐるので、直ぐ息が切れさうになつた。そして歩調をゆるめると、その人はまたこちらをふり返つて、無言でだが僕を勵まして呉れる。それに釣られて僕は一緒に驅けたのだが、腹の中では、然し、どうせできたことは今いくら驅けたツて取り返しの付くわけではないと云ふ多少の反感があつた。

一體、その人が『御子息』と云つて來ても、長男の一雄ばかりではない。末のは既に學校から歸つてたが、中のもまだ留守であつた。それにも拘らず、妻は長男のことにきめてしまつた。そして僕も亦さうと最初から信じ切つて家を出たので、僕の目の前には今渠の平生の姿ばかりが浮んでゐる。渠はもう十六才で總領だけにどこかおツとりした長所がありながら、一方にはまた至つてそそツかし屋

で、買ひ物にやつても勘定を間違へて來たり、ちよツと郵便を入れに行つても物に蹴つま付いて血を出して來たり、二三年前のおほつごもりには、おほ急ぎで引き出して來させた郵便貯金十五圓をその途中で落したか取られたかした。きのふの如きも、また、火鉢の猫板につま付いて、茶碗に入れてあつた熱湯を父親の膝の上にぶちまけて叱られた。

云ふことを聽かなかつたり、失敗をしたりした時、たまには横ツつらをなぐり付けてやつたこともあるのだが、そんなことさへ或は、もう、できなくなつたのではないかと思ふと、僕は驅けながら、可哀さうな氣もして來た。

けれども、渠にはその上にも、――これは惡い癖か、それとも善い癖か――中學の往き來を、みちみち梵語文典や法華經などの書物に讀み耽る習慣ができてゐて、僕はこれを見つけると、いつも戒めてゐたのだが、どうしてもそれがやまらなかつた。然し、こんなことは、僕自身だツて昔やつたおぼえのあることだから、僕は餘り嚴しく責めることはしなくなつてゐた。すると、この頃では、中の息子までも兄の眞似をして豆本などを小學校の途中にとどまつて讀んでることがあるやうになつた。

妻は危險だからと云つて、いつも渠等をやき〳〵叱つてるけれども、僕は左ほど頓着しなかつた。その代り、僕のあたまには、いつも、何となく、子供三名のうちのどれかがいつかは自轉車なり自動車なりにぶつかつて、死んでしまうなりおほ怪我をするなりの豫想が――ぼんやりとだが――ないで

はなかつた。そして子供が死んでしまへばそれまでのことだし、片輪になつても、精神的には却つてさうでなければ得られぬ何物かを子供自身にかち得るだらうと云ふ考へであつた。

だから、僕はこの豫想があまりてきめんに現はれて來たとこそ驚け、大して悲しみの氣ぶんにはなれなかつた。

『まだ物が云へますか』と、妻が人に聽いた時、その人は何でも

『少しは云へますが』とか答へてゐたやうであつた。

『………』畜生！豚兒！わが子ながら、かさねがさねの手數を親にかけて、くそいま／＼しかつた。死んでしまへばまだしもだが、死にそこなつて片輪として生き殘るのは、親なり本人なりのけがれだと思へた。兎に角、現場に行つて見れば分ることだと考へながら、自分のさきへ進む人には『どうも――わざ／＼――お知らせ下すつて――まことに――濟みませんでした、ね』と、苦しい息の間から切れぎれに愛相を述べた。そしてそれで一時しのぎの申しわけができたかの如く、僕はまた歩をゆるめた。

少し傾斜のあるところで、而も道はばが狹くなつて、幅全體に道がぐちや付いてゐた。僕はその眞ン中で足駄の一方を吸ひ取られ、片足をたびはだしにした。で、いツそのこと兩方をはだしにして行かうとも考へたが、履き物を提げる不恰格さを思ひやられたので、そのままからだをねぢつて片手で脫げた下駄を泥から拔き取り、よごれたたびのままそれをはきながら、少しまた息を入れたのであ

る。
その間待つてて吳れた人は、また歩き出してから、
『もう、ぢきです』と云つた。直ぐ折戸の通りになつたので、それを右へ驅けながら、渠は後ろを見い見い、
『人が澤山立つてますから、直ぐ分ります。』
如何にも、人だかりのしてゐるところに山下醫院と云ふ看板が見えた。來て見ると、僕がこの二三年來胡瓜や茄子の苗を買ひつけてる店のすぢ向ふに當つてた。僕は俄かにあたまへのぼせて、長男の手が折れたり、顏が崩れたりしたその光景を豫期した。が、わざとにも心を落ちつけるやうにして多くの子供や守りッ子を押し分けてドアを這入ると、今までからだをあがりッぱなから玄關の疊の上に延ばして奧の方を見てゐた勞働者が一名、からだを引いてあがりッぱなの板敷きにきちんと腰をかけ直した。
『お前か――轢いたのは？』
『へい、どうも大した粗さうを致しまして――』
『待つてろよ、そこに！』僕はづか／＼とあがつて行つて、奧の診察室に這入ると、洋服を着た醫者が僕の方を後ろにして負傷者の足に繃帶をしてゐた。寢臺の上に横になつてる長男は顏を上げて、

『僕が荷車のあるのをよけた時、後ろから馬力が來て、敷かれたのです！』

『…………』それ位物が云へるなら大丈夫だと思へた。渠の顏が少し青白く見えたのは恐らく、敷かれてびツくりした結果だらう。かた一方の足くびぐらゐ折ツぺしよれたツて自業自得だと云つてきかせたかつたのだが、僕は寧ろ怒りの氣ぶんにあふれてゐて、優しい言葉などは少しも出なかつた。

先づ、馬力の住所を聽かうと思つて玄關へ戻ると、その場に僕がちよツと忘れてゐたトンビの人も立つてゐて、

『わたくしはこれで失禮します』と云つた。

『いや、ちよツとあなたの――』僕はその親切な人の姓名をも聽いて置きたかつたのだが、人はどうしたものかそこ〱に逃げるやうに出て行つてしまつた。

『一體、お前はどこだ？』

『高田村です。』

『待つてるのだぞ、今控へるから』と云つて、僕は醫者の細君に紙切れを請求した。

『わたくしは何も逃げも隱れもしません、逃げるなら最初に逃げてしまひます』などと、渠はその間に半ば獨り言のやうに云つてゐた。正直さうな男であつた。懷中から古びた小さい木の看札を出して、

『これが無ければ馬力が引けないのです。名はそこに書いてあります。』

僕は醫者の細君が持つて來て呉れた半紙にその名とその主人の名とを控へ取つた。そのうち、醫者の手當てがすんだと見え、僕の方へ來てその醫者は斯う云つた、

『これで一應手當てはすませて置きましたが、ほんの應急手當てですから、この上なほ局部に熱を持たないとも限りません。早く順天堂なりどこなりエキス光線科のあるところへ行つて、骨が碎けてゐるかどうか調べて貰ふ方がよろしいでしよう。』

『では、さう致しましよう。』

『まさか、骨は碎けてゐまいと思ひますが』と、馬力の男は口を出した、『こつンと車に手ごたへがあつたので馬が直ぐとりましたのですが――三百六十貫も米を積んでる車ですから、若しかすつたのでなく轢いたものなら、たまりませんや。』

『然し轢いたのは事實です、僕が自分で見ましたから。』一雄は殘念さうに斯う僕の方へ顏を向けて訴へた。

『見えてた程なら、どうして自分でよけなかつたんだい?』

『ぢやア、若しかしたら轢いたか、な?』馬力の人は疑はしさうにだが、首をかしげた。

『骨のところは、兎に角、わたくしには專門でないから分りませんが』と、醫者はおづ〳〵してゐた。

『……』どうせ風引き醫者だらうからと僕には思へた。こんなところにぐづ〳〵させて置けば置く

だけ傷ぐちの熱が增して行くのかと考へると、僕は自分の足までも病む氣持ちになつた。そして昔子供の時自分が大きな斧をおもちやにして、足の指の上に落し、すんでのことでそれを切り落してしまうところであつたのを、幸ひにも刄が石にとまつて、指の骨だけは殘つた時のことを思ひ浮べた。あの時には親に內證で自分の室に隱れようとしたが、その途中で氣絕したのであつた。けれども、今、自分の子が一時氣絕したのかどうかを尋ねるだけの弱みさへ見せたくなかつた。『兎に角、車を一臺呼んで來ねばならぬが――。』

『わたしが呼んで來ましよう。』

『お前は、まア、待つてゐなよ。』

『何も逃げも隱れも致しませんよ。わたしだツてかかり合ひですから、出來るだけの人情は盡すつもりですから。』

渠がこんなことを云つてる最中に、僕の妻は子供の着かへ衣を持つて來た。そして心配さうに、

『おほ怪我？』

『なアに、足くびをやられたんだ。』何でもないやうに云つて、『骨がどうなつてるかまだ分らないので、今から順天堂に送ることにしよう。』

『車で？』

『うん、今呼びに行つたが、ね。』馬力の男が無理に出て行つたのを僕はさう怪しみもしないやうになつてゐた。尤も、渠の出して見せた看札をこちらに持つてたので、たとへ逃げてもあとで分ると云ふ安心もあつた。

　妻にも矢張り不斷云ふことを聽かないからと云ふ心がある爲めだらう。かの女は子供にはあまり直接に言葉をかけないで醫者の細君と話をしてゐた。

　この時最もおど〳〵し出したのは醫者の細君で、ドアの方を氣にしながら、

『正直な男のやうだが、最後に逃げたのぢやアないか知らん――あまりおそい。』

『なアに、車を呼んで來るでしよう』と、僕はわざと落ち付いて見せた。かの女はその亭主が施した手當の代價を取りはぐれるかと心配してゐるのであつた。

『應急手當の費用はその加害者から取れる規則になつてるのですが――』

『その點は、なアに、わたくしの方で引き受けて置きますから。』斯うは云つたが、多少疑はしくなつたので、僕はそとへ出て見た。すると、向ふから、矢ツ張り正直な男は車をつれて來るのに出會つた。

　負傷者はこれを車に乘せてここを送り出し、僕はあとから電車まで行くことにして、先づ馬力の男をつれて受け持ちの交番へ向つた。兩方の間がどう解決するにせよ、一先づ屆けて置く必要があると

思つたからである。臆劫ではあつたが、庚申塚の踏み切りを横切つて板橋の方へ六七町も行つたところの巣鴨村派出所であつた。そこで男の述べたことは僕に語つたところと少しも矛盾はなかつた。が、敷かれた時のことはまだこの男の云ふ通りを聽いてるだけで、こちらの云ひぶんは聽き糺して置くひまがなかつたから、それはあとのことにすると云ふ注意を僕は巡査に與へて置いた。

『一體、告訴するつもりなら、この男を拘引して置くが――』

『いや、それには及びません』と、僕は答へた。『この人は正直であるやうですし、若しその主人と云ふのが僕の方へ出て來ておだやかに話をつけるなら、僕はそれでいいのですから。』

『では、主人を早くつれて行かないといかんぞ』と、巡査は男に向つておどし付けるやうに云つた。

『へい』と、男はすくんでゐた。

『兎に角、僕は斯う云ふことがけふあつたとお屆けして置くのです――結果はいづれ報告致しますから』と云つて、そこを引き上げた。

僕と並んで歩いて來る男は、筒袖の兩手を襟の中に組み合はせて、その上に下向きにあごを置きながら獨り言のやうに云つた、

『主人と云つても、辨當持ちでこちらが毎日通つてるので――』

『その日やとひの者だツてその日の出來事の責任はその主人がしよはなけりやア――』

『御尤もです。よくわけを話したら、出て來ないとは申しますまいが――責任は矢ツ張りわたしが持つより仕かたがございますまい。』
『お前に持てるかい？』
『そりやア、旦那がたとは身ぶんが違ひますから、五十兩の、百兩のと申しましては――』
『おれだツてそんな六ケしいことは云ふつもりぢやアないが――』斯う云つて、僕はどんな要求をすべきかを少しも云ひ漏らさなかつた。心ではどうせこの災難の全部をこちらで引き受けねばならぬだらうかとも覺悟しながら、兎に角、向ふの出かたを飽くまでつき詰めて見たかつたのである。
『矢ツ張り、出針を打つたのが惡かつたのだ』と、男はこちらにも聽えるやうに獨語した。『けさ、家を出る時に足袋が破れてゐたのを見つけ、よくないとは思つたけれど、一針ぬはせた。それが矢ツ張り惡かつた。』
やがて庚申塚の踏み切りを渡り返すと、右がはに八百屋があるそのすぢ向ふにからの荷車が一臺置かれてあつた。
『…………』僕は子供のよけたと云ふのがこれだ、な、と思ひ出した。
『ここです、まだあとがあります』と、果して男は説明した。『敷いたとは思へないが、な。』
『でも、子供は確かに敷かれたと云つてたちやアないか？』

『それはびツくりした結果、さう思つたので、多分、かすつただけでしよう。』

『………』この點が若し爭ひになるとしても、僕には見證人が欲しかつた。それにはかのトンビの人が一番よかつたのだらうが、うまく逃げてしまつた。

今で思ふと、その人は餘ほど世間慣れた人だ。通りすがりに出くわした被難者のことをその親へわざわざ息せき切つて知らせに來て、再びその場まで案内もして吳れた親切は、ただ物好きではできないことであつた。けれども、渠は名乘つて吳れなかつた。名が分つてゐさへすれば、僕としては挨拶にも行くし相當の禮もするのが當り前であつた。が、渠に於いてそんなことをさせないつもりで姿をくらましてしまつたのなら、如何にも遠慮深い、奧ゆかしい、またありがたい心がけの人だ。その上になほ氣をまわして考へて見ると、僕が今暫く引きとめようとした時に何とか云つてこそ〳〵と出て行つた樣子でも察せられる通り、渠はかかる親切の上にもなほくどい親切を積むの愚を避けたのだらうと云ふのは、名を名乘つて置いて、若しこの事件が爭ひにでもなつた時に裁判にまで引き合ひに出されるやうでは、僅かの謝禮を受ける位では埋め合せのつかぬ時間や勞力を費やさなければならぬわけにならう。僕は渠を知つてゐたらさうしたいとまで現にここで思ひ浮べたではないか？ところが、渠はうまく逃げたっが、僕は決して渠を恨まないで、親切でもありまた利口でもある人々の一人として思ひつづけたくなつた。

そして馬力の男やその主人に對しても、向ふがおだやかに出て來さへすれば、どうせ二人ともその日ぐらしの者らしいから、もう一文だツて出さないでもかまはないと決心した。

被難の場所から四五間さきに男の馬力はとまつてゐた。ぎツしり米の俵を積んでるのだから、男の云ふ通り、實際に三百六十貫もあるだらう。果してこれに敷かれたとすれは、無論、子供の足は折れてゐるに違ひなかつた。僕はこの馬力を見ると同時に何事をも忘れて、子供の足ばかりが氣になつて來た。

『では、お前は今晩用をすませて歸つたら、兎に角、主人に來るやうに云つて呉れ』と念を押して、僕は男に別れた。そしてこれから病院に行くつもりで、ちよツと家に立ち寄つて見ると、妻が迎へに出て來ていきなり、

『とてもあんな人から損害金は可哀さうで取れませんよ』と云つた。『それに、うツかりしてゐたのがこツちの落ち度ですから。』

『おれもさう思つてるのだが――兎に角、今晩、主人を來させるやうにしてあるから、來るだらうよ。あやまりだけでも云はせなけりやア。』

『兄さんは馬鹿だ、な、どうせ敷かれるなら、成金の自動車にでも敷かれればいいのに』と、中の息子が小癪なことを云つた。

『生意氣を云ふな』と、僕は輕く叱り付けた。『手めえも敷かれないとは限らないんだぞ！』

僕の書きかけた原稿は斯う云ふ方に變つてしまつた。そして世に貧乏人ほど自分の相手として强いものはないと思へた。

――（大正七年三月）――

蛇の記憶

○○君、僕も蛇のことに關して小說を一つ書かうと思つてたところに、生憎、君に先んじられてしまつた。けれども、君の蛇の話に於ける蛇に關する部分はポウの黑猫の行きかたを狙はうとしたものであつて、而もその趣きはポウの如き神秘、悽慘、並に奇怪の興味に乏しかつた。なぜ乏しかつたかと云つて見給へ。黑猫の運命はあの一篇を貫いての主眼になつてるが、君の蛇は篇中の一部分に挿し入れられてるだけで、君は他のことを書きながらちよツとポウのすごみをもてんがうに取り扱つて見ようとしたに過ぎなかつたからであらう。君のかち得ようとしたすご味は蛇その物から出てゐないで、君自身の說明に終つてしまつた。壁の中に塗り込まれた猫には猫その物に恐ろしい運命が現はれてるが、板壁のうちに釘づけられた蛇はその釘づけの單純な事實しか運んでゐない。これは作者なる君が蛇と共に全篇を終始するだけの執念がなかつた爲めとも云へるだらう。

然し、君、僕の書かうとするのも別にかの凄い神秘的短話家の向ふを張らうと云ふ野心があつてのものではない。奇怪な運命などを材料にするなどは、內部的現實に沒入する傾向が盛んになつた現代

では、却つて、もう、舊い、單純な、うわツつらの、馬鹿々々しいことであるよ。僕の書かうとする蛇は僕の少年時代に於ける一つの記憶に過ぎないことを前以つて斷わつて置く。

一體、僕の家は最近の先祖數代を東京に於ける藩公のお屋敷に送つたもので、明治維新の國引けの時に初めて國へやられた。僕はそこで生れまた育つたものの、土着の士族や町人とは他の國引け士族と同樣に習慣も違ひ、言葉も違つてた。で、小學校へ這入つても、年うへのいとこが一人――それも煮え切れない――味かたであつた切りで、あとはすべて仲間ではなかつた。否、そのすべてからいろんな意味で敵に見られたり、のけ物あつかひにされたりするのであつた。或時など、僕の味かたになつたらしくよそほつて學校の歸りを慣れ〳〵しくついて來て、ちよツとのすきを見て僕の襟もとへ砂を投げ入れて去る者もあつた。僕は僕等の士族屋敷をそとへ出ると、自分の警戒とすべてに對する侮蔑とばかりだつた。そして家に在ると、孤獨の念ひと復讐心とに燃えてゐた。

『ねツから、ね』と、國の穢多がよく云つた。そして僕も『ねい』と云ふところから、僕は穢多の江戸ツ兒にされてゐたのだ。まるで、君、横暴な白人の間にアメリカ印度人が一人這入つてたやうなものさ、ね。

『おい、ねツから』などと僕のことを呼び初めた。そのうちの一人に宿屋の子で、留吉と云ふのがあつた。これが僕に出會ふたんびに、『おい』と僕を呼びとめ、しな〳〵する物を兩手でしなはせる眞似

をしながら、『ぎゆうツ、ぎゆうツ』と云つて、前方へ意張つた步みを運ぶ。僕が初めて靴をはかせられ、父の乘馬用の鞭を持たせられて、學校の式へ行つた時の冷かしだ。渠はおツちよこちよいだが、これだけが割り合に無邪氣な親しみのある子であつた。

その子の家の、二階の軒うらに、或時、僕等が蛇のゐるのを發見したのだ。

『へびや、へびや』と、留吉はおそろしさうに叫んだ。僕は何かの用事でその宿屋へ父の使ひに行つてた時であつた。近所の子供は直ぐ集つて來た。そのうちの一番脊高の、最もいたづらツ兒なる直さんは長い竹ざをを持つて來て、長物のからだの出た部分をつツついて見た。が、少しも動かなかつた。

兎に角、家根がわらと軒板との間から出した首を、また別なところからかわらの下へ突ツ込んでるので、僕等に少し曲つて見えてるのはほんの僅かの部分であつた。その全體の長さは分らないが、その太さに至つてはおとなの親指と中指とを以つてしてもまわし切れさうではなかつた。

『靑大將が雀の子でも喰ふたんだろ』と、おとなの一人が云つた。

直さんは棹のさきへうち曲げた釘を結び付け、これを蛇に引ツかけてこわごわ引いて見たが、出て來ないばかりでなく、矢ツ張り動きもしなかつた。

『ほたらかして置けば、どツちやか行く、わ、な』と、留吉の母親は自分の家のことでありながら左

ほど氣にも留めてゐないやうであつた。『可哀さうに、別に惡いこともせんのに！』

『雀を喰ふやないか？』留吉はこの方に同情を持つた。そして『やツたれ、やツたれ』と、直さんをおだてた。

直さんは少し勇氣を出して、今一度釘のさきをかけて、ぐツと引いた。それでもなか〳〵向ふに抵抗力があつたところを、留吉やその他の二三名が手傳つて引ツ張ると、今度はずる〳〵と二つに折れて出て來て、ばツたりと下の地上へ落ちた。君、五六尺は確かにある靑大將だツたよ。ばた〳〵と逃げ出す子供はあつたが、當の物は却つて長いからだを延ばしただけで、別に少しものたくらない。

然し、腹のあたりに一ケ所ふくれてるところがあるので、僕は果して雀の子か玉子かを一つならず呑んでるのだと思つた。その箇所が特別に延びたり縮んだりしてゐる。その以前に近在から出て來た人に聽いたことだが、鼠を呑んだのがそれをこなす爲めに、物もあらうに、人のはづしてゐた枕を卷き締めてたさうだ。今はそんな用明きの枕もないから、苦しまぎれに圖々しくも腹の皮の延び縮みをやつてるのだらうと考へると、僕もそれをおそろしいよりは憎々しくなつた。同じ棹を以つて四五名の子供はかたみ代りにそれをうちのめした。

誰れであつたかが獨りでえらがらうとして、蛇のしツぽの方を握るが早いか、それをふり上げてその勢ひと共に自分のからだをも一まわりさせた。蛇が五六尺四方に圓をゑがいてふりまわされたの

だ。

『えらい、なア』と云つて逃げ出したものもあるが、僕は初めからじツと默つて見てゐた。すると、蛇の首の方が僕のどうかしてゐた右手の甲に當つた、ちよツと齒のかすり傷ができた。

『阿呆や、なア――逃げとればええのに！』留吉は斯う云つて、僕を馬鹿にしながらも、そばへ寄つて來て心配さうにして吳れた。

『………』僕は苦笑ひしながら、矢張り默つてたが、かすれた傷ぐちへつばを附けて、あり合せの紙で以つて何度もしツかり拭いた。そして自分のそんな目に會ふ頓馬さ加減を私かに口惜しがつた。

今ひとり、大膽な人――これは子供ではなかつた――が現はれて、一旦投げ出された蛇を兩手で拾ひ上げ、くる〳〵と鉢卷きの形にしてそのあたまに載せた。

これを見ると、君、僕は一層氣味が惡くなつた。第一、詰らないことをしてきたならしいではないか？それに、毒でもあつたらどうする？現に、僕は既に自分の血管に多少のそれがまわつてゐはしないかと氣になつてゐたのだ。が、ただ さう云ふ弱味を皆に見られたくなかつた。蛇のあたまをぶつけられたのは如何にも頓馬であつたらうが、蛇のふりまわされるのを見てわツと逃げ出したもの等には僕もあざけりの默笑を投げた。そして今、手の傷を氣にしてここを直ぐ親のもとまで去るのは、逃げた渠等よりもずツと卑怯だと考へられた。

まむしに嚙まれて死んだ人のことなどまでも思ひ出しながら、多少は痛い氣味のしてゐる手をも平氣な風に垂らして同じところに突ッ立ち、皆のすることを見てゐると、また一旦人の頭上から投げ出された物は、その圓い結びを獨りでに解いて、ゆッたりと一線のやうに延びた。それをまたこわごわ下駄で踏んで見たものもある。

『もう、死んだんや、海へ棄てに行こ』と云つて、直さんは自分の棹のさきへくちなわの胴體を引ッかけてさきに立つた。僕も皆のものと共にあとさきになつてそれにつゞいた。

○○君、僕等が海べへ達するまでには、途中ででもその蛇をいじくりなどしてゐたので、時間が二三十分はかかつたものと承知して置いて吳れ。その間に、君、蛇の腹の物は可なりこなれてゐたに相違ないのだ。そして蛇その物が死んでたと思つたのは僕等の思ひ違ひであつた。

僕等が浪もとへ行つて、それを浪うちぎはへ棄てると、しほ氣にほだされてか、段々とよみ返つて來た。

『まだ生きてる！生きてる！』皆は却つてそれを面白がつてるやうすであつたが、僕は見ると、今まで皆に負けぬ氣で押さへ〳〵てゐた氣味の惡い心配を辛抱し切れなくなつた。蓋し僕の氣ぶんでは、自分の血管中にも蛇と同じやうな物がむく〳〵と動き出して來た。そしてその蛇の腹でこなれた食物が自分の血にまじつた毒を一しほ有效にしてゐるやうであつた。自分の目の前によみ返りつつある蛇

と自分とが生き死にを交換してたまるものかと思はれた。隣りへ燃え移りかけた火事でも、火もとが早く消えれば、無事ですむ。蛇の毒だツても、その蛇が死にさへすればこちらは大丈夫だらうと云ふのが、君、單純だが僕のその時の論理か信念か感情かであつたのだよ。

『ちよツと貸せ』と云つて、僕は直さんが一端を引きずつてるその棹に手をかけた。

『まア、待て。まア、待て。』渠は僕の方には取り合はなかつた。

そのうち、皆の目の前で浪のはじになぶられてた白い腹の全體が砂の方へ向き直ると、俄かにその僕の手にかすり傷をつけた鎌くびをもたげて、丁度また僕の眞正面へ飛びついて來さうであつた。

『あ、あア』と、僕は思はずこの時初めて何とも云へないおびえ聲を出して、横ざまに飛びのいた。

これが皆の前に見せたまた一つの弱みだが、元氣に返つたくちなわは却つてこれに驚いてだらう、その方向を直ぐ海に轉じて、浪の上に乘つた。それを逃がしてたまるものかと云ふ考への爲めに、僕は直さんから棹をいきなり奪ひ取つたが、なかなかおもたいので、これをふり上げて打ち落した時には、そのさきを蛇はらくに逸してゐた。

それが勢ひよくすらすらとおだやかな茅渟の海を眞ツ直ぐに大阪の方向へ泳ぎ出したのだが、そのもたげたかま首が平らかな浪を切つて向ふへ進むに從つて、首のところが眞ツさきのかどになつて、その菱がたの波紋も亦ずんずんとさきへ延びて行く。僕はその瞬間に自分のいのちをゆるいくさりの

如くずる／＼と引いて持つて行かれてるとしか見えなかつた。皆のものに對する恥辱の念や侮辱心の爲めに今まで張り詰めてた自分が、これが爲めにがツかり力を失つて、氣が遠くなるほどになつた。自分の腹には全く力がないのをおぼえた。尤も、何でも飯がうまく喰へる秋のことでありながら、晝めし時間を外してゐたと云ふことも、そこには手傳ひをしたに相違ない。

『えらいやツちや、なア――どこまで行きやがるか』と云ふ留吉の聲がしたと思へた。

『あの速いのを見い！』これはまた別な子の聲だ。

『………』僕が一端を浪に洗はせながらこちらの一端へ自分の手をかじり付かせてるその棹の方向にばかり、眞ツ直ぐに自分の腹やまなこまでも消え入つてると、――僕は、君、この時子供ながら不思議に思つたよ――それが窮極の念力ででもあつた如く、蛇の首が急に向き直つた。そして僕等の立つてるところとは三角形の弦に當る線を、再び陸の方へ近づいて來た。

今で考へると、君、きやつも海をどこまで泳いで行つたツてしやうがないとでも思つたのだらう。それに皆にぶたれたり握られたり引きずられたりして、大分にいた手を負ふてゐたのだから。僕としては、然し、今度は自分がよみ返る氣がした。向ふが泳ぎ勞れて上陸するところを、ただ眞ツぷたつに切り殺してしまひさへすればよかつた。若しさうでもしないと、僕が受けたと思ふ齒の毒のにほひにいつかは親しんで來て、向ふは魔物だから、晝も夜も、僕の家のうつばりなり石垣の間なりに潛んで

て、僕のからだ中に段々と毒のききめがまわつて行くのをこツそり見張りしてゐるやうなことになるかも知れなかつた。

向ふを生かしてこちらが殺されるか、こちらが生きて向ふを殺すか？この二つのどツちかの外に、その時の僕としては道がなかつたよ、君。君なら、或は、苟も世に生を受けた物だから可哀そうだと云ふやうな、流行の言葉で云へば所謂人道主義的な僞善心――と云ふのが失禮なら、遊戯心若しくは餘裕――を出すだらう。けれども、僕はその時でも餘裕なんかちツともなかつた。それに、君は今日でも君の蛇に於て現實から多少離れた神秘などを眺めようとしたが、僕には若し神秘があつたとしても、直ちにそれが現實の範圍内であつて來た。兎に角、僕のこの時の恐怖や復讐心をたとへ空想的であつたとしても、その空想を現實に引きおろさなければ承知ができなかつたのである。

僕は尋常な子供の手にはさう自由にならぬ程のおもい長い棹をこの時夢中にふり上げて、驅けて行つて、蛇の水からあがるところを遠くの方から一打ちした。渠はぬれた砂の上に一度のた打つたが、直ぐまた首を擧げて逃げ出したので、僕は再びふり上げた棹を打ちおろした。全身の力を籠めた打擊を二度も受けたので、蛇はそのままに白い腹を出してもだえ初めた。そこをまた二三打ちした。

これで多少僕の恐怖と復讐心とが癒えて來たのをおぼえた。すると、今更らの如く、この大濱のよく見慣れた景色が目に寫つて來た。隣りのおぢさんに伴はれて、或日、朝早く、たい松をとぼして、

この白い砂の上を通り行き、向ふに見える石垣の出ざきや、そのかげになつてる磯べで、潮の引き殘つた箇所にまだ寢てゐる魚を捕へ、夜が明けてからは、またさざゐ、あわび、なまこや蛸を取つた。浪よけ土手やそのうちがわの松原には、また、澤山の松露が出てゐて、二三日前には姉と共に來て、それを小い籠にだが一杯拾つて歸つた。斯う云ふ思ひ出が俄かに僕の食慾をそそり初めて、空腹の上にも空腹を感ぜしめた。そしてそれがたまらなくなればなる程、僕自身の腹の皮も今やなま白に變じてゐやしないかとまで思へた。

『もう、行こ――今度こそほんまに死んでしもたんやさかい』と、留吉が僕を促した。

直さんは死んだ蛇のしつぽを遠くから手を出して摘み上げ、

『ほうら、往んで喰へ』と云つて、皆の方へ投げた。

『………』今までこわがつてた癖にと、僕は、渠が第一着に蛇を釘にかけて引きずりおろした手から者であつたに拘らず、渠をも卑しまないではゐられなかつた。そして海から輕く吹く風のかざしもにゐた僕は、ぷんと何だかいやなにほひを潮の香と共に嗅ぐことができた。

『往んでも直ぐめしは喰へんぞ』と云つたものがある。

『ペツ、ペツ』と、先づ留吉がつばきをした。すると、皆のものもさうした。

『………』僕は恐らく一番胸が惡いのをもこらへて、なほこれ以上の成敗をして置く必要を感じてゐ

た。人が持ち合せたあを竹の細いのを奪ひ取り、これをまた生き返らせない爲めに蛇の口にさし入れ、そのうわあごを下駄で小石の下に踏まへて、竹を蛇の體内の半分以上までぐつと突ッ込んだ。この時、たまたま蛇の口が裂けたのを見て、いつそのことその全身を裂いてしまうことになつた。そのからだがびり〱と裂けて行くに從つて、中の物がはみ出して來たところ、そこに羽根のやうなものがくッついてた。

『さア、見て見い！』僕は誰よりもえらいことをしたつもりで、自慢がほに皆のものを返り見た。渠等は少し離れてゐたところからそのまま首を突き出して、いづれも横向きにつばきを吐きながら、頻りにのぞき込んでゐた。

『雀の毛がある』と、直さんが云つた。

『毛はこなれてない、なア。』

『もつとほたらかして置いたら、こなれたかも知れへん。』

『そのうちにや、くそに出てしまうだろ。』

『は、は、は』と留吉は笑つたが、それから憤慨してゐるやうに頓狂に叫んだ、『畜生！矢ッ張り、雀を喰ふてたんや！』

『見ともない、見ともない――ペッ！』

『………』僕もとう〳〵つばをしたが、直ぐその場を少し遠ざかつた。それから、また立ち戻つて、その死體をしつぽの裂けてないところで摘み上げ、浪もとへ持つて行つて、海の中へ投げ棄てた。そしてこれで自分のからだにまわつてる毒も綺麗さツぱり、自分を離れたものと安心した。それを棄てたところとは少し違つた水ぎはで砂を掘り、その穴へ潮が來たのを待つて、よく兩手を洗つた。それから、また口をもそそいだ。

死んだ物はと今一度見やると、浪と共にそこの砂にあがつてゐて、腹の白いところが又僕の目にとまつた。僕はまた皆と同じやうにつばをした。

歸りに通る濱の白砂や松原には少しもきたならしい感じのするところはなかつた。が、僕は留吉を初め、皆のものに取り圍まれて、けふに限り一番えらいことをして見せたところの主人公に仰がれながら、自分の足の歩みが重なる毎に、つばきの度合ひも増して行つた。

僕は自分の濱屋敷のかどで皆に別れ、家に歸りつくと直ぐ、何喰はぬ顔で既に取り殘されてた膳に向つた。そして時間を違へたのを姉に叱られながらお給事をして貰つたが、空腹は事實であるに拘はらず、二度目の箸からめしが口へ運べなかつた。そしてそれを無理に呑み込んだら、直ぐもどしてしまつた。

『どうしたのです』と、姉は見て驚いたが、僕はその原因をうち明けなかつた。

○○君、これをも君は僕の子供の時のつよがりの爲めだと云ふかも知れぬ。が、決してさうではなかつた。僕はただ蛇を殺した現場の思ひ出がまだ納まらないだけのことなら、直にもさうと云つて、そのいたづらを叱られても笑はれてもよかつた。が、僕としては、この時、自分のいのちを交換し得たのであつた。そして蛇が死んだ代りに、その執念を自分が受け繼いで、もツとこツぴどく土地の田舍ものに復讐してやると云ふ氣ぶんになつてゐた。

こんなことを、君、如何に姉にでも、うち明けられなかつたではないか？

――（大正七年四月）――

憑き物

この作は、五部作の『斷橋』原形の終りの方と、『斷橋』として東京日日新聞に載せ切れない爲め、別に『寢雪』として雜誌新小說に連載した分と、『川本氏』と、原形『憑き物』とを、事件の性質上取りまとめることにしたことを斷わつて置く。

お鳥は、兄のところを拔けて來る場合が見付かり難かつたとて、四日目にやつて來た。そして直ぐ入院した。持つて來た行李までも運び込まうとしたので、義雄は、
『荷物までも入院させるには及ぶまい』と云ふと、
『お前は信用でけんから、ね。』顎をつき出し、目を細く延ばした。
『もう、質屋へは入れないよ。』
『分るもんか？』
『けちな奴だ』とは云つて見たが、義雄はかの女の始末なのを一年以上も利用してゐたのを思ひ出す。思ひ通りの贅澤はやらせることが出來なかつた代り、いつもまとまつた金の取れた時に、それをすべてかの女にまかせたのである。
すると、それを大事がつて、よくしまつて置き、ちびり〳〵と實際生活上の必要にしか出さない。

そして、一ケ月なり、一ケ月半なりのうちに、みんな無くなつてしまう。然し、それでも、まとまつた金を受け取る時の嬉しさをかの女は忘れられない樣子であつた。

然し時々その手を氣が付いて自分のつまらないのを訴へることもあつた。そんな時は、かの女の望み通り、西洋料理屋なり、音樂會なり、三越、白木屋などにつれて行つた。

『考へて見れば、若い女をむざ〳〵と、可哀さうでもある』と、成るべくお鳥の爲すがままにして置くのである。

寂しいから、夜だけは義雄の方へとまりに來て呉れろと賴んだが、それも人の手前、をかしく思はれるからいやだと云つた。

『みなに何と云はう？兄さんだと云ふて置こか？』

『そんな嘘を云つたツて、人には直ぐ分るよ。』

『どう分るの？』

『亭主でなければ、色男、さ。』

『いやアなこツた！』かう云つて、わざと橫を向き、『そんなおぢイさんを——さう思はれるのは耻かしい。』

『耻かしいたツて、覺悟の上ぢやアないか？』

『では、お父さんだと云をか』と、からかつて笑ひながら、『けふも、直ぐ旦那さんにすれば、年が行き過ぎてる云ふてたさうだもの。』
『年寄りの旦那さん――西洋人なら、いくらもあらア。』
『毛唐人ぢやあるまいし、いやアなこツた。――それとも、お前が田中子爵の樣に金持ちなら――』
『さうすりやア、どうせ、お前ばかりではない、五人でも、六人でも、意張つて女を持つかも知れない。』
『若く生れ變つてお出でよ。』
『その時ア、寫眞屋さんなどは女房にしない、さ。』
『誰れもお前の女房にして吳れとは云ふてをらん。今、少しで、仕あがるところを惜しいのだけれど――』
『さう、さ、仕上がる頃には、寫眞學校のハイカラ生徒とくツついてゐたのにと云ふんだらう？』
『御心配には及びませんよ。獨りで寫眞屋を開業して、若い人を喰はしてやらア、ね。』
『それがお前の理想か？』
『へん、お前の無理想とか、屁理想とか云ふのとは違ひます。』
『利いた風なことをぬかすな』と、義雄は、眞面目になつて、自分の威嚴を持つて主張する主義にね

けも分らずロを入れる女を叱りつけた。

お島は、看護婦や入院患者等に親しみが出來、病院の勝手が分つて來るに從ひ、金錢上の不自由を感ずる樣になつた。

それを小分けして見ると、三等室の患者は役員や賄ひまでに馬鹿にされることもそれだ。ほかの人は二枚も三枚も立派な着がへを持つて來てゐるのに、自分はいつも一枚しかないこともそれだ。人はつき添ひの婆アさんを雇つたり、看護婦を賴んだりしてゐるのに、自分はたツた獨りぼツちであることもそれだ。また出るお膳だけではうまくないと云つて、罐詰を明けたり、うなぎをあつらへたり、間食をしたりする人々の間で、自分ばかりがつつましくしてゐるのは、如何にも貧乏臭く見えることもそれだ。

『あなたは感心に間食をしませんな』と云はれたのを、お島は非常に輕蔑された樣に思つた。

心細くもなつたのだらう、また一つには、義雄をつき添ひと見せる爲めでもあらう、せめて、毎日、渠を幾度も病室へ見舞はせたり、また自分から渠の下宿へ出かけたりして、多少の滿足をしてゐる。

義雄も亦、お島の特に氣分が惡さうな時は、閉門時刻までも、そばについてゐてやることもある。

そして、氷峰の細君になるときまつたお鈴の弟が――義雄に一度遊廓をおごられた關係から――病人の見舞ひとして、ビスケットの罐を贈つて來たのを持つて行つてやると、お島は他の患者等に對して

見えがいいと喜んだ。

夫婦としては餘り年が違ふと云ふこと、並びにお鳥がそこではおほハイカラに見えることが注意を引いて、ただささへ新らしい話し種を求めてゐる患者間に、おほ評判となつた。『なか〳〵親切な旦那さんです、な』などと冷かされながらも、お鳥自身は病院内でなか〳〵持てるので、その點はかの女も愉快らしかつた。

或時、義雄が見舞ひに行くと、お鳥は隣りの寢臺の、『わたしの良人は教育家です』と意張つてゐる、小學教員の細君に寫眞を出して見せてゐる。かの女等が寫生した物ばかりだ。

隅田川の景色もあれば、大森の八景園や鎌倉の大佛もある。男生徒と女生徒とが田舍者の夫婦に假裝して、わざと道化た取り方のもある。またお鳥自身が特に修正までしたと云ふのには、或る庭園の茶室の縁がはで、ハイカラな青年の腰かけたのが寫つてゐる。そして、それと同じ庭園の一部らしいところで、お鳥が片手に蝙蝠傘をつき、一方の肩に寫眞機を入れた角カバンをかけてゐるのもある。

義雄は最後の二枚を見て、むら〳〵と嫉妬の念が起つた。そして、その男とお鳥とが互ひに自分等を寫し合ひしたのだと思ふと、確かに一つの疑問の見當がつけられた。

然しその場では何とも云へないから、何氣ない様に再びその二枚を見かはすと、どちらの人物も歯

の浮く様にきざなのが目に立つ。男は長い髮を眞ン中で奇麗に分け、ハイカラの洋服すがたが、如何にも女に見せてゐる様で、腰かけ方までいやににやけてゐる。女はまた持ち慣れないコダクを下手に肩にかけ、その重みで顏の筋肉までが多少一方へ引き下げられてゐるのに、無理に澄まし込んで、その澄ました口がおのづからさきの方へ押し出されるのを、一方の傘で後ろにつきささへ、お負けに、片足をあげて、まさに段々をおりようとするところだ。女の氣取るのも、ここまで來ると、あきれるよりほかはないと、義雄は思つた。

『無學で、淺墓で、虛榮心の强いものは仕やうがない』と思ふと、嫉妬などはどこかへ行つてしまつて、――不斷は、或程度まで虛榮心を許すべしと主張しながら、――輕侮といや氣としか起つて來ない。『然し、それも若い女のことだから』といふ様な、寬仁の態度で迎へて見ると、義雄は娘に對する父の様な氣にもなつて、ただ、かの女を監督してゐさへすればいい位の冷淡な考へにもなることがある。

　渠の年輩として、老成じみた理性が兎角、智、情、意合致心の一角に高まり易いにも拘らず、その理性を情化合一するほどの心熱が、渠の主義として主張する刹那的强烈を以つて、戀と實現する用意は、いつも、渠の胸中に缺けてゐるのではないと、渠自身は思つてゐる。

　然し渠はその勢ひづいた鼻さきを折られる様な經驗を、さきには東京に於けるお鳥、最近は札幌に

於ける敷島によつて得た。云はば、有形的な事業や渠の所謂戀愛的努力――すべての努力を戀愛的に解してゐるが――に極度の疲勞を來たし、――それでも、その疲勞のうちに疲勞の内容を握つてゐれば渠としてはいいのだが、――ただ疲勞の爲めに疲勞をおぼえる樣なゆるみが出來て來た。

この樣なことは、その他にもないでもなかつた。然しそれが有る度每に、渠は、自分が深刻な命脈にはづれて、トルストイの冷刻にもならず、ドストイエフスキの熱刻にも行かず、ただ淺い、淡い、なまぬるい感じと氣分とにぐらついてゐるのをおぼえる。然し、渠自身はいつも强烈深大の不愉快と悲痛とを進んで受けてゐるつもりである。苦痛があればあるだけ、その苦痛をもツと深入りしたいともがくのが生命だと思つてゐる。

然しまた渠は、今、雲上から落ちた天人の樣に、大切な刹那をはづれて、その氣力がない。目前に接近する女性をも、熱烈に自己化しようとは努めず、ただあツさりと取り扱つてゐる。お鳥は、今では、却つてその方を喜ぶので、初めはそれと反對かも知れないのを恐れて、義雄の下宿へちよく〳〵きても直ぐ歸つたのが、段々いい氣になつて、長く話をしてゐる樣になつた。

そして、かの女はのろけまじりに昔の所天のことや近頃會ふ人々のことを語り、義雄の燒き持ち心を挑發しようとする。そして、

『副院長さんはあたいに氣があるんだよ。ほかの患者がをつても、あたいが行くと、おほ騒ぎだ――あたいもあの人に診察して貰ふ方がえい、な』などと云ふ。

また、或看護婦がお鳥を二等室の一患者に取り持たうとしてゐるとか、男子の病室のものが時々廊下で待つてゐて、話をしかけて困るとか、すべて、かの女の根本的病狀を知つてゐる義雄には、可笑しと思はれるのろけ話だ。

『そりやア、まことに御結構――お鳥さんのではなく、庭鳥の聲です』など云つて、義雄が受け流すと、馬鹿にされたと思つて、かの女は急にその色の白い、然し筋肉にたるみある顏をくしやくとしがめ、鼻息を荒くして、渠に向つて來て、

『このおぢイさん』などと渠を打つたりつめつたりする。

然し、それではまだ足りないと思つてか、義雄が爐を右にしてからす窓のそばの小机にもたれてゐるのを押しのけ、その席を奪つて、自分が机に向ひ、渠をじらすつもりで手紙を書き出す。手紙のことでは、義雄も、かの女と一緒になり立てには、隨分嫉妬的注意を拂つてゐたのである。自分以外に、どんな關係者があるかも知れないと疑つてゐたからだ。かの女は、然し、自分の出す一切の郵便物の宛名を、姪や自分の朋輩に送るのでさへ、渠に見せたことがない。渠は、たまに、見ないふりして見て置くくらゐのことにとどめてゐた。ここへ來てからも、隨分出したのは分つてゐるが、東京の

『本鄕區千駄木』云々と、上書きに書いてゐるのをちよツと見て、あれは寫眞學校の先生のところだ、な、と思つたほか、別にどれにも追窮はしなかつた。

義雄の下宿には、お鳥と同じ年輩の娘があつて、練習がてら、或産婆の手傳ひをしてゐる。師匠の忙がしい時は、自分が代理になつて產婦の家へかけつける。そして、兩親に厄介はかけないで、自分の衣服などは自分で拵らへられるだけの給料は貰つてゐる。

その娘が、今年は、雪中を出あるく時の用意にとて、縞セルの被布を拵らへた。お鳥はそれをうらやましくなつて、然し入院料で心配させたあげくであるから、さう強くは云へず、義雄に一つ買つて吳れいと云ふ謎を懸けた。

『ふん！』漠が鼻であしらふと、

『へん、御親切だから、ねえ』と、笑ひにまぎらし、『然し、あんな田舍ツぺいが被布を着たツて、似合やせん。』

『お前だツて、東京ぢやア、まだ田舍ツぺいだ。』

『そんなら、あたいが通ると、東京の人が年寄りでも見かへるのはどうしたわけだ？』

『それかい？』義雄はわざと輕く受けて、机の上にある自分の旅用の小鏡をつき出し、

『これと相談したら、分らう。』

『ふン！』お鳥は額にゆるい皺を澤山寄せて、鏡を引ツたくつて、脇へ投げつける。『あたいだッて、さう悪い顔ぢやない。』

『色が白いだけ、さ――お前のおほ廂と顔の造作とが釣り合つてゐない。』

『何でもえい、さ――お前の世話にはならん！』かの女は締りのない顔をそむけ、光りの青い目を疊の上に投げる。

『この娘は實際自分自身の處分をしてイらア、ね。』

『あたいだッて、寫眞の方を卒業すれば、そんなことは出來る！』

かう云ふ風な云ひ合ひもあるが、義雄は宿のものにはお鳥を體裁上妻と云つてゐる。お鳥はまたさう思はれたくないので、わざと、義雄の困る樣に、人々の前で、また聽えよがしに、勝手なだだを捏ることがある。

お鳥は、最後に札幌に着した日から入院して、義雄の下宿にとまつたことがない。且、義雄の口には毒蛇のやうな毒があると云つて、お鳥は渠を避けてゐる。渠には、それが却つて意外の疑念を挿さむ餘地を與へたので、ひそかに女の方の容態を確かめる爲め、或日、身づから病院の婦人科へ出かけた。

車つき運び寢臺の上に乘せられ、魔睡劑の利き目がまだ殘つてゐるのが運び去られる。母らしい老人に負ぶさり、足のさきに繃帶された娘が出て行く。ハンケチに包んだ藥り瓶を提げ、實に氣持ち惡さうな青白い顏が、そろり〳〵と歩いて行く。

膽振や日高の切り開かれた道路の兩がはの、黑土の脇腹に火山灰層の白い筋が通つてゐる樣に、白ペンキで塗つた板かべの腰に二本の赤筋の通つてゐる廊下で、義雄はそんな患者等に出會つたが、それに比べては、お鳥の病氣はまだ輕いと思つた。

そして、かの女の屬する治療室の入り口まで行くと、看護婦等は何の用があると云はないばかりの樣子だ。また、一方のベンチに腰をかけつらねてゐる婦人連は一切にこちらの方へ目を向ける。立派た身なりのもあつた、さうでないのもあつた。奥さんらしいのもゐた、苦勞人らしいのもゐた。

奥の方には白い幕が張つてあつた。雨の降つてゐる日で、室内も周圍から壓迫したやうに鬱陶しくかげつてゐる。

『西藏密敎の奥の院！』何だか、こんな感想が突然起つたが、それ以上は門外漢に神祕のやうだ。左りの方に掛り員室の入り口があるのに氣がつき、義雄は直ぐそこへ這入り、來意を告げる。

ちは鬚のはねた若いのが、洋服の上に白衣をつけて、忙しさうにしてゐたのを見た。それがお鳥の好きな醫學士だらうと思はれた。

その翌日、三ケ條の責任ある回答が來た。第一、お鳥には梅毒の恐れは決してない。第二、ただ一たび移された淋毒が慢性になつたのだ。第三、それも經過はいい方だと云ふ。これで、義雄は自分以外の關係者が、自分の東京出發後、もしやあつたかとも思はれたその證據を實際に發見することが出來なかつたのである。

で、何げなく、お鳥を安心させる爲め、この回答を見せても、なほ、かの女は最初と最後との證明を信じないほど、自分の病氣を苦にしてゐるのである。

二

義雄はお鳥を世話する間にも、豫備金の不足になるのを心配した。そして、森本春雄に別れる時頼んで置いた通り、小樽へ手紙を出したり、電話をかけたり、また手紙を出したりした。然し松田からは一言の返事もない。

そればかりが氣にかかるのと、渠の無謀に見える態度に友人等が同情を失ふ樣につたらしいのとの爲め、義雄は外出もせず、病院見舞ひのほかは、下宿にばかり引ッ込んでゐた。ところが、或時、お鳥を見舞ひに行くと、その場所にゐない。

あれだけ行くなと云ひつけてあるのに、また例の二等室だらうと思つたから、知らない振りでその

前をとほつて見ると、お鳥と看護婦との賑やかな聲にまじつて、男の咳をするのが聽えた。あれが肺病患者のだらうと思ふとたん、その聲が、

『また旦那さんが來てもかまひませんか』と云ふ。

『かまひませんとも！』お鳥の聲だ。

『叱られますよ』と、これは看護婦らしい者の聲。

『叱られたツて、どうせ別れるつもりですもの。』

『いい氣になつてゐやアがる』と、義雄は憤慨した。如何に蟲を殺してゐるからとて、あかの他人にこちらの恥辱となるやうなことをしやべつてゐるほどの馬鹿な女だ！

こちらもやがて別れるつもりだ。然し多少あの病氣がよくなるまではと辛抱してゐる。この寛大な取り扱ひを却つていい氣になつてゐる――ええツ――けふは、わざとこれツ切り見舞つてやるまいと決心して、久しく會はない樣に思はれて來た氷峰をその下宿に音づれた。

渠もいよ〳〵窮して來た。雜誌の第三號印刷代の內金を渡せる見込みがないので、原稿をまはす日限が來たに拘らず、まだその標準も立つてゐない。

『おい、どうする氣だい――ぐず〳〵してゐると、これまで世間が持つてゐた期待と信用とを失つてしまうぞ』と、義雄は注意する。

『そりやア知れたことぢやが、なア。』氷峰は例の芥子坊主の樣な、そしてまた竹の筒の樣な顏に苦笑ひをしながら、『來月一日から、また、今度は通常道會が招集されるので、十勝から出て來るあの議員を捉へて、いよ〳〵泣きついて見ようかとも思うてをる――然しそれには、雜誌が全く僕の實權内にある樣になつてゐなければ困るから、なア。』『それがいよ〳〵金を出すなら、氷峰一個の利益の爲めに出して吳れるのである。そして、その實、社は川崎の物だとすれば、もし衝突して追ひ出されたりなどすると、その出金者に對しても、もう、再び泣きつくことが出來ないからである。

幸ひ、晴天で、小春日よりの樣な午後であつたから、渠は鬱憤晴しに義雄を誘ひ、中島遊園に散步と出かけた。そして、池のふちをめぐつて、大中本店の池の中の座敷の裏がはが見えるところの、椎の木のもとにあるベンチへ腰を懸けた。

氷峰は若杉貞子と密會した時のことを思ひ出して語るのである。

『あの』と、池の中の座敷を指さし、『障子を貞子が用がすんでから明けた時、この木のものに』と、そばの椎の方に向き、『お鈴が意外にも裁縫友達と立つてをつたのぢや。』

『おこつたのも尤も、さ。』

『うちへ歸つたら、もう、來てをつて、大いにふて腐りやアがつた。』

『今となつて見りやア』と、義雄は氷峰を見て、『その若杉といふ娘と一緒になつてゐた方が雜誌の爲

めにも融通がついてよかつたらう。』

『然しあいつは、實際、娘であつたか、喰はせ物であつたか、分りやアせん。』

『今、どうしてゐるだらうか、ね？』

『北海道には、あんな素性の分らぬ女がすくなくない、さ——當てにならん。』

こんな話を聽いてゐる時、義雄はその後會はなかつた加藤忠吉とその鐵道局に於ける一人の同僚とに出會した。四人は一緒に舟を浮べようといふことになり、わざと細長い丸木舟を選んで、それに乘つて遊んだ。

『時に』と、加藤は櫂の手を休めて、義雄に、『あの牧草地の一件はどうだ、ね？』

『あれか？』義雄は他のことにかまけて殆ど忘れてゐたのを思ひ出し、『どうせ駄目だよ。』

そして、渠は自分の考への段々ぐれて來た事情を語つた。

義雄と氷峰とは加藤に別れてから高見呑牛を音づれて見た。

『書記先生、どうぢや、な』と、氷峰は云ふ、『また、道會ではないか。』

『うん』呑牛は目をぱちくりさせ、微笑しながら、『十一月一日から、さ。下らない議員どもを相手に、面白くもないが、喰へないなら仕方がないから、なア。』

『それもさうぢや。』

『然し、この頃、北海メールに對して、進步派の機關新聞が出る計畫があるよ――主筆を僕の方に持つて來さうだから、條件さへよけりやァやつてやらうと思つてをる。』

『あれも、然し、まだ當てにならん。』

『そりやアさうとも――お互ひにかうごろついてをつて、なかくいい儲けもないものだ、なア。』

『僕も實際閉口ぢや。君の北星などを社會の上からは踏みつぶしたわけになつた北海實業雜誌も、こんな風で倒れてしまへば、結局、僕等仲間の恥辱、さ。』

『共倒れのわけだから、なア。』口を圓めて笑ひながら、『然しまだ北海道は大きな働きの出來ないところだ。』

『君ア、なぜ』と、默つて聽いてゐた義雄が口を出し、『東京へ出る氣がないのだ？』から云つて、渠は以前から疑問にしてゐたことを糺す。渠は香牛がその得意な人物評論などに於いて中央公論の黑頭巾的筆法を眞似てゐながらも、なかく達者で鋭利な記者的才能があるのに敬服してゐる。そして、あれ位の才能があれば、碌な記者の少い東京に出ても少くとも筆の上だけでは決して後れを取るまいといふことを語る。

『それは僕も多少考へないでもないが』と、香牛は云ふ、『北海道に十五六年も住み慣れると、矢ツ張

り、この田舍がいい樣にも思はれて、なア。』ぽかんと口を圓く明けて、僞りのない樣子をする。『それに、僕は惡辣な筆の爲めで排斥されるのは筆の人たる以上は却つて名譽だが、ほかに刑事と僞稱して、或油屋の升が規定に反してゐるとおどしつけた――もう、過ぎ去つた夢だが――そんなことで中流以上の人々に排斥されてをる。それを打ち消して、香牛も紳士になつたと云はれるまでは、意地づくでも札幌に喰ひついてゐたいのだ。喰へないで逃げたと思はれるのは、僕に取つて、千古の遺憾だから、なア――まア、つまり、まだ未練があるの、さ。』

『それぢやア、止むを得ない、ね。』

『實際、君』と、氷峰も義雄に、『北海道に來て、一度新開地の味を知つたら、なかなか忘れられないものぢやぞ。』

『如何にも、ねえ』と、義雄は受けて、『さう云はれて見りやア、僕も何だかさういふ風な味が出かかつて來たところだ。』かう云つて、北海道に來てから感じた――而もそれが渠の刹那刹那の生命に吸收されてゐたと思ふ――新らしい臭ひと色とを思ひ浮べる。

若葉の綠り――血の湧く青年――人生の奔放時期――僞りなき自我の天地――かう云ふ風に北海道を考へて行くと、自分が失敗と蹉跌との爲めにここに踏みとどまることが出來ないなら、それだけあはれな老境に入つたわけではないか知らんと思はれる。

そして、どうせ、ここを退去して、內地へ歸らたければならないのかと思ふと、渠には、北海道のみづ〳〵しいのに比べて、おやぢ臭く思はれる內地が目のあたり、脊の高い、大きた鼻のさきの赤い、目の鋭い、嚴丈な、白髯の老翁と見えて來て、やがて、義雄を力強くその面前に引きするて、——義雄は曾て實際にさらされた時の力を感ずる——

『馬鹿！』——『不孝者め！』——『先祖代代の業さらし！』などと、非常な權威を以つて糺明する。

それが去年義雄の亡くした父のおもかげであつた。そして、そのおもかげは、その後ろに、義雄を廢嫡しようとばかりたくらんでゐた、そして今は里へ逃げて歸つてゐる繼母を初めとして、義雄の妻、子供などを從へてゐる。それらが、たとへば、神經過敏な畫家マカルトの面前に、渠の使つた多くのモデルが、時をかまはず、一齊に現じて來た如く、また一齊に攻め寄せて來た。そして、そのすべてが饑ゑて死んだ餓鬼の如く瘦せ衰へた姿で、どうして吳れる、どうして吳れると叫ぶのである。

『ああ、いやだ！いやだ！僕は東京へ歸りたくは無い』と叫んで、渠は兩手であたまを押へたまま、呑牛と氷峰とのかたわらに倒れる。

『然し、君、あの明き屋買ひ占め問題は駄目だ』と云つて、呑牛は義雄の相談相手にした畑中新藏が、きのふ、詐僞取財で拘引されたことを說明する。新藏は、室蘭に於ける鐵工場の發展を見込んで、その地の人々と組み合ひ、土地の拂ひ下げを運動した。そして、その間に立つて、運動費や拂ひ下げ代

金を詐取した。

道廳が一たび、所謂羽織ごろの運動屋並びに無資本の土地轉買者等を退じにかかつてからと云ふもの、この種の人々はいつも成るべく重い刑に處せられてゐるのである。

『僕も駄目らしいと思つたから、當てにやアしてゐなかつたのだ。――どうしても僕は歸京するほかなからう。――僕は、もう、事業と計畫とに疲れてしまつたのだ』と、義雄は答へるほかは無かつた。

『君は計畫に疲れたと云ふが、疲れついでに、君』と、氷峰は義雄に、『いツそ、ずツと格を落して、札幌に襤褸會社を起して見たら、どうぢや？』

『らんるとは』と、呑牛にもまだ分らなかつた。

『ぼろ切れ、さ――つまり、ぼろ買ひまで落ちるわけぢやが、札幌中でも、毎年ぼろの出るのは大したものだらう。それを社員――と云ふても、くづ屋ぢやが――を使うて、買ひ込むのぢや。資本などは何ほども入るまい。さうして、製紙會社へ買ひ上げさすればえいぢやないか？』

『如何にも、さういふ話はあつたが』と、呑牛は合點して、『どうも、身分に關するなど思つて、まだやり出したものはない。』

『考へて見給へ、三井木材を初め、王子製紙などがあの樣に手を廣げて行つたら、北海道の山林は、

ここ十年も立たぬうちに、見す〳〵平らげられてしまうだらう。さうして、椴松、蝦夷松の様なものは用材として、また燐寸原料として伐截される上に、また製紙原料になつてをる。纖維のあるものなら、大抵な木は――製造法さへ發達して行けば――紙にされてしまふのだから、その代りに、苫小牧の王子や釧路の富士へ少しぼろを押し賣りしてもよからう。』

『然しそんなことよりもツと面白いことがある。』呑牛は調子づいて、『桐の林がどこかに一つあるさうだから、それを探檢したらどうだ？』かう云つて、北海道には獸類で鹿と狼とがゐない如く、樹木では桐がないこと、然し一ケ所――どこか分らないが――あるといふことを語る。

それは義雄が聽いてゐるとかう云ふわけだ。仙臺の或古老の話に據ると、伊達家の侍ひがあつて、昔、本道へ來て、桐の苗を澤山植ゑつけたことがある。それがどこの山であつたか、記錄には殘つてゐない。ところが、近年、或人が金坑や石炭坑を發見するつもりで本道の深山をまはつてゐたところ、ふと珍らしい林に出くわした。木はいづれも一かかへ以上もあるが、幹にはすべて厚い苔がまとつてゐるので、何木であるか分らなかつた。然しその苔を剝いで、初めてそれが桐の古木林であるを知つた。他人には祕してそのありかを云はず、或利益と交換する相談をしてゐるうちに、その人は急病で死んでしまつたと云ふのだ。そして、呑牛はつけ加へた、

『この發見を仙臺古老の實話に參照して見ると、必らず桐がどこかの山にあるに相違ないのだ。然し

いまだにどこか分らないので、北海道中の金儲け熱心家の間に、一つの疑問となつてをる。――田村君、一つ、どうだ、それを探檢して見たら？』

『そりや面白いぜ。』氷峰も乘り氣になつた樣に膝を進め、『田村君は詩人、文學者から蟹の鑵詰製造家に變つたり、鑵詰屋からまた明き家買ひ占め屋に化けたりするほど、突飛な勇氣を出すのが得意ぢやから、今度一つ、よろしく桐山の探檢家になるべしぢや。』

『空想家だから、なア。』呑牛はしみ〴〵とこちらの顏を見る。

『空想ぢやアないよ、僕には』と、義雄は起き上つて、威儀を正す。

『僕を空想家と見るのは當つてゐない。僕の主義は僕が社會に懇々主張したくらゐで、苟くも自分が努力してゐると思つたことなら、そこに必らず實行が添つてゐる。成功、不成功は問ふところでない。空想とは、この努力と實行とをはづれたことを云ふのだ。』

から云つて、渠は自分の刹那主義は手段や方便ではないこと。詩人たり、實業家たり、耽溺家たり、探檢家たることは、その人の生活の外形的變化であるなどと區別して、その生活者の內容もしくは進境だけが眞の人生や藝術だと云ふ樣な說は間違つてゐること。その代り、渠自身には、その內容もしくは進境が即ち詩人、實業家、耽溺家、或は探檢家その物で――一つの物から出る區別ではなく、一

つの物その物であること。さうでなければ、全心全力を傾注する、全人的な、最も眞率眞劍な、最も無餘裕な肉靈合致を悲痛の自我に實現することは出來ないこと。それには、然し、自分も、その必然の成り行きとして、自己のエネルギの蕩盡を惜まなかつたこと。そして、

『エネルギの眞劍な蕩盡は自己の神經を心熱的に働かせる努力だ。そして、かう云ふ努力のあるところには、決して理想や空想を入れる餘地がない』と語る。

渠は、神經の過敏もしくは衰弱が必らずしも不健全の流行を證據立てるものではないことをよく承知してゐると思つてゐる。渠は、世の無努力もしくは半努力の煮え切らない論客等が、內容貧弱の健全や偉大を得意げに看板にするのを、罵倒したものである。そして、渠等の所謂健全、偉大よりも一層健全、偉大の努力をする爲めに過敏や衰弱になるのは、却つて渠の誇りとするところである。つまり、渠は神經とエネルギとの蕩盡を男性的、威力的に實行するデカダンであると自信して來た。

『若し僕自身がその桐の山を發見しようとすれば、きツと空想的な態度でなく、その探檢を實行して見せよう――この場合、外部的に成功はしないでも、その努力さへしたら、內容は實行であるが、然し僕は今それだけの勇氣が出ない――僕は疲れ切つてゐる!』

から云つて、渠はまた力なげに疊の上へ横になる。

『田村君終に倒るか』と、氷峰も亦そのそばへ横たはる。

『僕のことを人が云ふ樣に』と、呑牛は微笑しながら、『腎虚しかかつてゐるのぢやアないか？』

『ほんに、なア』と、氷峰もぐツたりした聲で、『田村君が女に離れては、――雪の屋先生も同じぢやが――水を出た膃肭臍の樣なものぢや。勢ひがなくなる。』

『馬鹿を云ひ給ふな。』義雄も然し吹き出す。

『膃肭臍でなけりやア、砂上の蛸か』と、呑牛。

『羽抜け鳥も古いから、なア』と、氷峰。

『とど、海馬でもいい、さ――兎に角、勇氣の回復策を講じなければ』と云つたが、義雄は自分に實際の寂莫と疲勞とをおぼえた。そして、井桁樓と敷島とを思ひ浮べて嚢中の無一文を苦しみ、入院中のお鳥を思ひ出してはその不自由な病氣を呪つた。

そして、呑牛の細君お繁が酒肴を運んで來る姿をつく〴〵見て、あのどこがよくツて、呑牛は遊廓にとまらなくなつたのだらうといふことを考へた。お繁さんは大した美人でもないが、北海道的な色白で、脊が高く、固肥りに肥つてゐる。その精力の强さうなのを呑牛の事情に思ひ合はせて、義雄はひそかに微笑した。

『まア、酒でも飮み給へ。』呑牛はあとの二人をあしらつてゐるうちに、氷峰の話にのぼつた雪の屋主人、文學士の淺井能文がやつて來た。

『やア、うわさをすれば――ぢや』と、氷峰は席を開らいて、『どうした、近頃は謹愼か？』
『あア』と、雪の屋はただにこ〳〵して坐わる。
『一向見えない，ね。』呑牛は自分で自分の猪口に酒をつぎながら、『君も飮むかい？』
雪の屋はその問ひには頓着せず、
『借金で首がまわらない、なア』と、實際にまわり難さうな自分の首を窮屈さうに――これは渠の癖だが――傾けたまま、おほきな口を明く。
『君の首はいつも曲つとるのぢや。』氷峰は遠慮なく一方の癖を指摘して、『餘り見ッともよくないから直せと云ふとるのに――では、高砂樓も駄目ぢや、な。』
『駄目ぢや、なア。』のろい口調で聲を引ッ張つたが、首の傾きは直さない。
『然し地まわりは相變らずか』と、呑牛がからかひ氣味に云ふ。
『地まわりはたまにやる――夏休みの釧路の講習會が崇つて、なア――』
『そりや、自業自得ぢや』と、氷峰。『倫理學の講演者が妓樓にばかり耽溺してをつたんぢやもの――麥藁帽子の裏に、いくら女の名を書かして來たツて、それが君の下宿屋の拂ひの役には立たん。』
『それは、まア、その時の思ひ附きであつたのだ。』雪の屋はそれを別に辯解するでもないやうだ。
『細君を呼び給へ、細君を』と、氷峰に云はれた時、雪の屋は非常にいやさうな顔つきをして笑ひに

まぎらした。と云ふのは、渠の妻子は國の里かたに歸つてゐて、いくら渠が呼び戻さうとしても戻つて來ない。多分、締りのない所天を放棄してゐるのだらうとは、氷峰等の推察である。雪の屋自身もさう感づいてゐるので、神經の鈍い男にも拘らず、こちらの見たところ、友人から細君のことを云はれるのがいやさうである。

『そんなことはどうでもいい』といふ風で、雪の屋がした話に據ると、渠の校長――代議士だ――が演習參觀に出發する前、敎師等を集めて演説した。酒を飮むのはまだしもだが、おほぴらに女郎買ひだけはやめて呉れろと。『それで一つは僕も方針を換へた』と、渠が云ふ。呑牛や氷峰は聲をあげて笑つた。と云ふのは、渠は女郎屋に行く代りに、もと女郎であつて、渠も買つたことがある女を女房にしてゐる配下の書記の宅へ遊びに行き、毎晩の樣に、その女の義太夫などを聽かせられて、恐悦がつてゐるのを知つてゐるからである。

そこへ、

『號外』と云つて、それを玄關へほうり込んで行つたものがあるので、呑牛はお繁さんに命じて、取つて來させた。

『伊藤さんがどうかしたのですか』と、かの女が驚いた樣子で持つて來たのを見ると、北海メールの號外で、公爵が哈爾賓に於いて韓國人に暗殺されたといふことが載つてゐる。一座は振動した。

義雄も疲れたからだをはね起した。

『本當だらうか？』

『誤聞ぢやアないか？』

『まだ分らん、なア。』

　こんなことを云ひながら、いづれも疑問のまなこを熱心に紙上にそそいだ。然し、どう讀み返しても、銃殺されたに違ひない様だ。

『ただ一片の電報なら』と、呑牛は考へ込んだ様に、『誤聞なり、誤電なりのこともあらうが、かう第二信も第三信もあつて、倒れるまでの順序まで分つてをるのだから、ね。』

『お氣の毒です、なア』と、お繁さんが口を出したには頓着せず、

『さうぢや』と、氷峰も沈んだ調子で、『プラトフォームで打たれてから、汽車へ歸つて倒れるまでに何ほどの時間もかかつてはをらん。』

『人間はもろいものだ、て』と、呑牛。

『眞に然りぢや。』氷峰も賛同して、『北海道長官を待遇がいかんと叱りつけたのは、つい、こないだのことであつたが、なア。』

『敵も十分うまくやつたものだ。』

『そりや、もう、前から計畫してをつたのだらうから、なア。』

『然し暗殺ぐらゐは覺悟の前であつたらう――公も出發前に、それに似た言を吐いた、さ。』

『飽くまで好運なおやぢめ、死ぬにまでもいい役割であつた！』

二人のこんな話を、默つて、雪の屋はのん氣さうに聽いてゐたが、義雄は自分の心中が搔きまぜられた樣に騷ぎ立つのをおぼえた。

渠は、自分の主義から歸着する獨存自我の考へを以つて、神は勿論、偉人豪傑なるものをも――自分と關係なしには――認めない。若し神なり、偉人なりがありとすれば、それは乃ち自分その物の範圍内であるのを信じてゐる。自分に關係なきものは、すべて空想であるからであると。

然し渠は、奇體にも、自分の獨存自我說の生々的威力發展主義が確立する頃から、その一例として、日清戰爭にはまださうでもなかつたが、日露戰爭には、その勝利を全くそれが自己その物の發展だと思つた。渠は一たび樺太の土を踏んで、一層この感を深くした。若しここ七八年のうちに、米國との戰爭があらば、また一層の發展だと思つてゐる。

ところが、この思想を殆ど神託的に體現した歷史上の人物として、義雄は昔では豐太閤、現代では伊藤公を推稱してゐた。

戰爭は一種の機關である。この機關を動かすには、いかめしい勳章を帶びた軍人といふ職工を動かせばいい。要はただ時代思想といふ油を横溢させるものにあるのだ。

そして藤公はそれだと。

藤公不斷の活動がある間は、義雄も自分の努力を軍事上、政治上にも實現してゐるとまで思つてゐた。公の死は、義雄に取りて、自己の一部をそがれたのである。

義雄がさきに東京を乘り出した汽車の上で、退屈と疲勞と睡眠不足と臨時習慣性との爲め、汽車の動搖が自分の神經の働きとなり、そして、曉け方、東北の青い野原をうはばみのぬたくる樣に進んでゐる汽車が、渠の散文詩で歌つた通り、自分その物になつてしまつた。そして、その時、東京から同室であつた一婦人が或停車場で降りると、自分の一部を失ふかの樣な氣持ちがした。

渠が伊藤公を失つたのも丁度その樣な氣持ちで、實に、がツかりせざるを得ない。そして、『死に場所を得たといふべしだ、ね』とは云つたが、自分の半ば敗殘者たる現狀を返り見て、こんな狀態で實際生なる物の價値があるか、ないかの問題を自分に提出した。

『然し伊藤さんは死んでも』と、氷峰はからかふ樣に義雄の方を見て、『田村君と云ふ第二の伊藤さんがをるからよからう――?』

『その第三世は雪の屋先生か、ね?』呑牛は斯う云つて淺井の顏を見る。そして、見られた渠は何も

答へないが、にや／＼笑つて、急に得意の色を顯はす。淺井の雪の屋は、話が少しでも女のことになれば、初めて乘り氣になつて來るのである。

然し義雄には渠等の意味することが不愉快に取れた。と云ふのは、渠が公を友人間に推稱するのは時代思想の權化であつて、而もそれが義雄自身に屬してゐると思ふからである。義雄も女もしくは女の幻影がなければその生活に元氣がないが、その元氣は性慾並びに生々慾が軍事、政治、實業、文藝などを合致したものであると信じてゐる。

この確信を、雪の屋には勿論、氷峰や呑牛にも發表するには餘りに偉大、餘りに深刻、餘りに神聖だと思つて、義雄が語るのを躊躇してゐた。すると、呑牛は、何かの拍子で、そばにあつたちツぽけな地方新聞に手を觸れたので思ひ出したのだらう、

『それはさうと、これを見給へ』と、その新聞を義雄に取つて渡す。見ると、文藝欄で東京の『文藝革新會』の提燈を持つてあつて、別に同會の反對する自然主義家のおもなもの三名ばかり――そのうちに田村義雄もあつた――の名を擧げ、渠等はもう時勢に後れて舊派だと書いてある。つまり、その記者が革新會が形式的な、内容の貧乏な理想、生命、發展などいふ看板に『新』の字をくツつけてゐるのでたぶらかされたのであると考へたから、

『ふ、ふん』と、義雄は鼻で笑つて、新聞を横の方へほうり出し、『田舍者はどこまでも田舍者、さ。』かう云つて、革新さるべき人々が革新會などを設けるのは、抑もおのれを知らない骨頂であることを語つた。

『では、一つ』と、雪の屋が受けて『僕の學校へ來て、演說して呉れ給へな——君を崇拜してをる生徒もある樣だから。』

『そりやアいいだらうよ、英語の話か、旅行の話を——文藝論などはどうせ中學生などに分るものぢやアないから。』かう、義雄は答へたが、何となく自分の考へてゐる伊藤公の話がして見たくなつた。何か好きな演說でもすれば、弱つた元氣が恢復するかと思つたからである。

その翌日、義雄は雪の屋の出る中學校で演說した。

先づ伊藤公の略歷から初め、公を以つて現代の豐太閤と爲し、公と時代思想との關係を說き、わが國將來の戰爭と發展との根本的性質に及び、歐米諸國の僞文明を排して實力を尊ぶ野蠻主義の必要を述べ、藤公の一缺點はその野蠻主義を押し通す勇氣に乏しかつたところにあり、また、豐太閤と同樣、心に餘裕、乃ち、ゆるみを生じたのが間違ひであつたと評し、生々、强烈、威力、悲痛、自己中心の刹那主義を說いて結論にした。

渠にはそれが伊藤公を語るのでなく、自分を語るのであつた。初めは、渠の現在に疲れた低い聲で

出た。そこの敎頭は氣を利かしたのだらう、三間ばかりもすさらして立ち並ばせてあつた五百名の生徒を、演壇一間ばかりのところまで進ませた。

然しそれは渠を知らなかつた爲めで、渠は敎師をしてゐる時、その聲が敎壇のテイブルの表面を振はせるかと思ふほどになつて、敎室全體に鳴り響くので、その敎室以外の人々にもよく聽え、それが面白い話ででもあると、他の敎室の生徒や敎師までがその方に氣が取られたくらゐであつた。義雄の熱心が段々加つて來るに從ひ、われを忘れるほどのおほ聲をつづけざまに發し、それが講堂中を振動させた。無論如何におほ聲でも練習があれば調子の取り樣もあるのだが、暫らく聲を出さなかつた爲め、渠は度を失つたのである。

渠が餘り無法な、調子はづれの銅鑼聲を張りあげるのを見て、渠に比べるとずツと呑氣な雪の屋はづか〳〵と演壇に進み來たり、

『餘りおほきい聲を出すと、からだに惡いから、注意し給へ』と、こちらに耳打ちした。

『よし、分つた』と答へながらも、義雄はまたおほきな聲を出す。それが却つて滑稽に取れたのだらう、割り合に感動する生徒は少かつたらしい。そして、二時間も演說したあとで、

『豐太閤も、伊藤公も、現代の發展的思想に於いては全く僕に屬してゐるのだ――乃ち、僕自身の物である』と叫んだ時、眞率な演者には最も大切な要點であるのに、滿堂の生徒は申し合はせた樣に一

齊にどツと笑つた。それが、こちらの調子を一層狂はせてしまつた。渠はぱツたり演說を中止し、一堂を睨みつけてゐたが、
『おれは宇宙の帝王だ！否、宇宙その物だ！笑ふとはなんだ？』
どツとまた滿堂の笑ひ。
義雄は非常に怒つた。そして人々があやまりを云つてどめるのも聽かず、鳥打帽子を忘れたまま、とツとと驅け出して歸つて來た。

三

義雄は自分の演說に自分が激動してゐた上に、滿堂の笑ひを受けた爲め一層その激動の餘勢が殘つてゐた。
『中學生なんて分らないものだ。おれがまじめに話を進めてゐるのをどツと笑やアがつたのだ、おれは演說を中止して歸つて來たのだ』と、自分の歸りを待つてゐたお鳥に語る。
『でも』と、かの女はなほこちらの樣子を不思議がつてゐるやうにして、『中學生ぐらゐのことにそんなに目の色を變へて來んでもえいのぢやないの？』
『…………』渠は二度もかの女からさう云はれて見ると、自分ながらも何だか自分の目が飛び出さうな

感じもする。けれども、餘りに高い聲を出した爲めに近眼の工合がちよツと違つたのだらうと考へたので、この方の不愉快さは自分よりも寧ろかのずツとひどい近眼の有馬が年中經驗してゐるのだらうと同情された。

兎に角、非常に勞れてゐる。そして手や足が自分のものではないやうに顫へて、自分の目のしたのあたりに絕えずぴく〳〵と痙攣がある。自分の發する言葉にも、いつも身づから感じて控へ目にする強い、明確な調子がなくなつてる。

そしてただ湧き出る不愉快の爲めに、渠はかの女が縫ひ物を持つて來てしてゐるそのそばへ無言で寢ころんでゐると、そこへ雪の屋がいつもとは何だか違つた樣子でやつて來た。

『どうした』と、義雄はさし向ひになつてから、客の變な顏つきを無理に微笑しながら見つめる。

『帽子を持つて來た。』客はわざ〳〵意味ありげに隱してゐたと云ふやうな工合ひで、ふところから勢ひづけて鳥打ちを出した。

『さうか？』こちらはここに初めて自分の忘れ物に氣が付いたのだが、そんなことには左ほど氣が移つて行かなかつた。

『…………』客は暫らく默つてゐてから、例ののツそりした口調でまた口を明けて、『帽子のことではいつも君は逸事を殘すのだ、なア。』

『………』こちらの爲めの歡迎會の席へ海水浴帽をかぶつて行つたことを云つてるのだ、な、と分つた。が、それを今自分が斯う激動してゐる心持ちで解釋放言して見ると、世間のやつらを馬鹿にしたに過ぎないのだ。逸事でも何でもない。

が、客の來るまでこちらに向つて衣物を買つて呉れいとねだつてたお鳥は、それをうけがはれないのに、不滿を見せてゐた爲めでもあらうが、この時、

『演說で意張り過ぎて、自分の物を忘れて來たんぢや』と云ふ。

『なんだ』と、義雄はかの女に向つてきツとなつた。『歸れ！手めへのやうな物はゐたツて邪魔だ！』

『歸るとも！反物一つ買へん癖に――』かの女は他の兩人が默つて見てゐるところでぷり〳〵しながら手早く仕事をかたづけると、直ぐ立ちあがつた。そして歸りがけの駄賃にでもするやうに、義雄のあたまの腦天をゆびの先きではじいた。

『何をしやアがる！』義雄は突然のことにその方へふり向くが早いか、右の手でかの女の裾を捉へてかの女を引き倒す。

そのとたん、かの女がからだをささへようとした右の手が、義雄と爐をさし挿んで相對してゐる雪の屋の膝にとまつた。

雪の屋はにやりと笑つたが、お鳥はきまり惡さを重ねた爲めだらう、恨めしさうに義雄を睨みなが

ら、急に坐わり直し、

『けふは、餘ッぽどどうかしてる！』

『何だと！』義雄も瞰みつけ、『おれをさッきから氣違ひ扱ひにしやアがる！馬鹿、おれは天下の一大事業に一段落つけたのだ！豐太閤の仕事にも、伊藤公の仕事にも、おれが一段落つけてやつた。』

『そんなえらさうなことを云ふて』と、お鳥も負けない氣になり、『また、あの有馬に馬鹿にされようとおもて。』

『有馬の様なしみッたれが何を云つたッて、かまやアしない！』

『そのしみッたれに厄介をかけてをつたぢやないか？』

『厄介をかけたのぢやアない、供物を獻じさせてゐたのだ。』

『ヘッ、神さんぢやあるまいし。』

『何だ、神ぢやアない？馬鹿を云へ！おれは神も同様だ！宇宙の帝王だ！宇宙その物だ！それが分らない様な女なら、おれの女房でない！妾でもない、色女でもない！無資格、無價値の色氣違ひめ、下らない男にだまかされてばかりゐやアがつて、いよ〳〵實際になりやア、棄てられてばかりゐやアがる！』

『お前もわたしを棄てたのだから、その下らない男だらう？』

『何だと！貴さまはどうせ不具も同樣だ！片輪だ！』

『片輪なら、誰れがした？お前ぢやないか？早う直せ！』

『直すなら、然し――』

『早う直せ！』お鳥の呼吸は烈しくなり、義雄を見つめて、じり〳〵と詰め寄せる樣子になり、まさに飛びかからんばかりに、兩手の親指をおの〳〵四本の指で握り固める。

『………』義雄はこれを見て、さきに、かの女を見限つて姿を隱したが加集の宿でかの女に見附かつた時のかの女の樣子も――立つてゐたのが違ふだけで――斯うであつたことを思ひ出した。こんな時にかの女の癪がさし込むのだがと氣が付いたが、ただ睨みつけながら、『直すなら加集にも賴め――寫眞の先生にも賴め――その學校の生徒にも賴め！』

『そんな人に賴むわけがない！』それツ切りお鳥は暫らく無言で呼吸を整へてゐたが、その燃える目は雪の屋のゐるのも見えなくなつたかのやうに、『畜生！』かう叫んで、固めた兩手を以つて義雄の胸を突いた。

『………』渠はもろく横に倒れたが、直ぐあぐらをかき直して、

『出て行け！』

『出て行くとも！嚊アも氣違ひなら、おやぢも氣違ひぢや。そんな氣違ひぢぢィは御免ぢや』と、立ちあがる。

『出て行け、出て行け！』義雄は自分でも濁つたやうに、そしてきよと／＼したやうに思へる目でかの女を睨みつけて、『宇宙の帝王と二等病室の肺患者と、どッちがいい位が分らないのか？』

『ヘツ、氣違ひよりやアまだ肺病の方がえい。』から云つてお鳥は雪の屋に挨拶もしないで出て行つた。

『…………』雪の屋はかの女の出て行つたあとまでも暫らく無言で、見てゐたが、やがて、『隨分亂暴な女だ、なア。』

『馬鹿で、無學だから、仕やうがない、さ——偉人の本體とその神經末梢との區別がつかないのだ。』

『末梢とは何のこと、さ？』

『寫眞屋や肺病患者、さ。』

雪の屋は、これを聞いて變な顔をしたのが義雄にはまた變に思はれたが、暫らくまた無言でゐてから、歸つてしまつた。

義雄はランプを消し、寝床に這入つてゐた。その障子を明けて、

『田村君、起き給へ』と、氷峰の聲だ。

『田村君』と、呑牛の聲もする。

『出し拔けに、どうしたんだ？』義雄は起きあがり、手早く衣物を着直し、マチを摺つて火をつける。

『まだ寢るのにやア早いでないか？』呑牛は正面の爐ばたに坐わりかける。

『けふの演說で、久し振りのおほ聲を出したので、非常に疲れたから。』義雄は、薄いかけ蒲團と敷蒲團が延べてある上に、その不足を補ふインバネスや座蒲團を載せてある床を、そのまま圓めて障子の方に押しやる。『まだ火はある筈だが』と、机の前の爐ばたに坐わり、炭火をかき起す。見ると、この二人も亦先刻の雪の屋のと同じやうに常とは違つた、變な顏をしてゐる。來るものも、來るものも、けふに限りどうしたんだらうと、義雄は考へた。

『君はあの演說で大氣焰を吐いたさうぢや、なア。』と云ひながら、氷峰は義雄と相對する爐ばたに腰を下ろす。

『大氣焰も、小氣焰もない、さ――ただ當り前のこと、さ。』

『君としては當り前かも知れんが、聽いたものには非常なことであつたさうだぞ。』

『そりやア、さうだらう、さ――僕の說は僕自身の發明であつて、他に何びとも思ひ當らなかつたことを說いてゐるから。』

『では、僕が聽きたいが』と、氷峰は呑牛を返り見てから、――そしてその樣子がまた變に見えたが、――再び義雄に向ひ、『一つ說明して吳れんか？』

『何だい？』

『國家の主權者と君とはどちらがえらいと思ふ？』斯う云つた氷峰を見ると、兩手を膝にかけて肩を怒らしてゐる。そして呑牛はまた目をぱちくりさせてたが、刑事のやうな注意を向けてゐる。

『そりやア、主權者にきまつてらア、ね――然し』と、義雄が云ひかけると、氷峰は呑牛とちよツと目を見合はせた。義雄は二人がわざ〱何かからかひに來たのだと感づいたが、そんなそぶりは見せないで、『然し、そのえらいのは、――僕がわが國神代の生活狀態を歐洲の表象主義に照り合はして、ここに新らしい眞理を發見して出來た刹那主義だ――この主義に據つて代々生々的威力を體現して來た。そして、この主義に合してゐる間は、日本が世界の最大最强の國になるにきまつてる。』

『さうすると』と、氷峰はちよツと考へてから、『日本國と君との關係はどうなる？』

『僕は刹那主義を以つて日本國を背負つてゐるの、さ。』

『罐詰事業や文藝で國家が背負へるか？』

『馬鹿を云ひ給ふな！』義雄は目を銳くして、『君等は外形と內容との一致が分らないか？事業や文藝をただ外形で見る目には、政治も敎育も亦外形だ。いや、外形ばかりだ。そんなことでは、その內容

を別に探らなければならない。然し、たとへば、ニイチエが氣違ひになつたからツて、氣違ひとニイチエ哲學とを離して考へれば何等の生命もない。內容が乃ち外形であるまで物は充實してゐなければならない。內容が乃ち外形、偉人が乃ち國家だ!』

『ちやア』と、今度は呑牛が引き受けて、『伊藤公も君も偉人——偉人が同時にいくらも出來て、君の獨存說に合はないだらう?』

『いや、それは一つにまとまる。すべては僕の主義を最も強く實行してゐるものにまとまる。殆ど神託的に、その國家を、たとへば、豐太閤なり、伊藤公なり、また他の人なりに背負はして立つことになる。さういふ偉大な政治家もしくは思索家は、今云ふ神託的に、國家その物だ。』

『君の場合はどうだ?』かうまた呑牛が試問する。

『僕は渠等よりもずツと現代的な偉人だ。』

『は、は!』二人は顏を見合せる。

『何がをかしい!』かう云つて、義雄はまた激動して、二人を見つめて、『馬鹿にし給ふな!君等はおれをからかひに來たのか?僕が眞面目に話してゐるのに、笑ふとは何だ!反對があるなら、眞面目に反對するがいい!』

『まだ反對するとも、贊成するとも分らないのぢや——實際、君の——』と、氷峰が何だか辯解しか

ける。

『いいや、馬鹿にしてゐる！さツきの雪の屋君と云ひ、君等と云ひ、最初からの出かたが面白くない！出直して呉れ！』

『そりや出直してもえいが――』氷峰がまた言葉を出さうとするのを、義雄は何も云はせず、一圖に、

『歸れ』、『歸れ』と浴びせかけ、引ツ立てる樣に二人を立たしめると、二人が障子を出てから、呑牛はこちらへふり返り、

『おい、貴樣はこの』と、氷峰をゆびさして、『男を知つてゐるか？』

『馬鹿を云ふな、呑牛！』かう云つて、義雄は障子をぴしやりと內から締めた。

義雄は力拔けがして、いやアな氣になり、ランプを――いつも火を消して寢る習慣であるのに――机の上につけ放したまゝ、再び褥の中にもぐつてゐると、つか／＼と這入つて來る足音が聽えて、

『わツ』と、渠の枕もとにお鳥が泣き伏した。

『どうしたんだ！』渠はびツくりして、首をあげる。

『き、氣違ひになつたと云ふぢやないか』と、すすり泣きだ。

『馬鹿！だ、だ、誰れがそんなことを云つた？』とがつた聲と共に起きあがる。そして、かの女にま

だ最後の愛情は殘つてゐる、な、と思つたから、聲の調子を和らげて、『島田だらう?』

『………』お鳥は兩の袖で涙を拭きながら、首で『うん』と答へる。

『馬鹿々々しい!』自分は氣が狂つたと思はれるほどのことをしたか知らん? 如何にも、中學の講堂では激怒した。氷峰等に對しても、亦、叱りつけた樣なことを云つた。然しそれが氣の狂つた證據でも何でもない。

多少、他人には强過ぎた言葉や態度であつたかも知れない。理解を以つてこちらを信じないものらに對したとしては云ひ過ぎたとも。その點は、もツと和らげて發想することが出來ただらう。義憤と云へば義憤、私憤と云へば私憤、どちらでも、兎に角、自分の態度を明かにしたのだ。決して間違つた理窟を述べたおぼえはないと思つた。然しまた考へて見ると、今一睡した以前と以後とは丸で氣持ちが違ふ。

一睡するまでは、氣が張りつめて、あたまが重く、大責任を背負つてゐるかの樣に壓迫を感じて、隨分のぼせてゐた樣だ。それが一睡後、今目をさましたら、重荷をおろした樣にからだが輕くなつたのをおぼえる代りに、また氣拔けがした樣だ。晝間からの意氣込みはわれながらどこへ行つたのか分らない。

失敗に失敗、疲勞に疲勞の結果だらうか? まるでがツかりしてゐる。こんな無氣力で生きてゐるく

らゐなら、寧ろ伊藤公の如く花々しく死んだ方がいいとも思ふ。そして、自分が日光で或藝者に夢中になつてゐた時、その藝者がわざと自分のところへ泣いて來たのを、本當の號泣だと思ひ込んだことを思ひ出した。そして、お鳥のもその手ではないかと、かの女の顏る見ると、實際に涙のあとがある。

『氷峰と呑牛とがここからの歸りにお前のところへ仕つたのだらう。何も心配するにやア及ばない――人の思ひ違ひだ。

『それなら、安心だけれど――』笑顏を見せて、かの女はその涙を袖の端で拭く。

『馬鹿だ、ねえ、お前は――さツきもおれを氣違ひなど云ふから、その罰で、人の思ひ違ひを本氣でさう信ずる樣なことにもなるのだ。

『然しさきほどは少し變であつたよ。』

『そりやア、少し、おれが演說から激してゐたから、のぼせてゐたのかも知れない。』

『まア、それなら、安心だ。』お鳥は微笑しながら立ちあがり、『もう、時間だから、あす來る、わ。』

『ぢやア、早く歸れ。』

義雄はお鳥が出て行つたあとで、また獨りで床にもぐり込んだ。どうせ、本心の冷淡な女などを戀しくもないが、その代り、自分も亦いつになく自覺的な疲勞と失望とを感じて、がツかり延ばしたか

らだの熱に痛む節々から、自分の言葉と行ひとの不一致――これが、渠の主義から云ふと、老衰に向ふしるしだ――に落ちて行くのを苦しむ聲がしてゐるのを聽いた。

四

蝦夷富士の稱ある後志羊蹄山、マクカリヌプリが麓まで眞ツ白になつたのは、二三日前のことだ。札幌市外に遠く見える山々も、もう、いつのまにか一面に白くなつた。そして市街にもけふは初雪が來るだらうといふ十月二十八日――伊藤公横死の號外を見てから三日目、義雄の激動した演説の日から二日目の午前だ。

『川村が氣違ひになつた』と云ふ評判を却つてこちらからあざ笑つて返却した義雄ではあるが、激動後の反動の爲めか、段々に氣拔けが增して、自分ながらぼんやりしてしまつた。そして、お鳥に對する冷淡の度も增しただけ、あたまにも亦取りとめがなくなつた。

『ああ、僕は疲れ切つたのだ！』義雄が爐ばたに倒れて斯う叫んだ時、渠は自分の元氣をも精神をもあの敷島のからだに吸ひ取られてゐたのではないかと思つた。

『兎に角』と、お鳥はただ心配さうに、『醫者に見てもろたらえいぢやないか？』

『馬鹿！おれは醫者の樣な草根木皮で左右出來る人間ぢやア無い。』

然しお鳥は、氣を利かしたつもりで、ひそかに自分の掛りの副院長に相談し、見ただけの容態を云つて、同病院で精神病受け持ちの醫者に、それとなく、診察に來て貰つた。

すると、義雄はそれを感づいて、直ぐさま追ひ歸した。

氣の毒さうにして送つて出たお鳥は、宿の玄關のところで、

『大丈夫でしようか』と云つた。

『大丈夫でしよう――さう心配するにやア及ぶまい。』

『さうでしようか？』

『おれをまだ氣違ひだと思つてる、ね――馬鹿！』

『でも、目の色までこの頃は變な色だ。』

『これは、ね、實は、あの女郎の恨みかも知れない。』

『へん』と、馬鹿にしたやうに横を向く。

『然し、あいつとも別れた。お前とも亦別れるのだらうが、心配するな――お前の病氣だけは直してやる。』

『早う直して貰はんでは困るぢやないか、――この雪が降り出さうとする時節にもなつて――若しこの旅で二人とも病氣にでもなつたら？』

『二人が病氣になれば、どうせ、その結果はどッちからも無理心中、さ。』
『では、一緒に死のか?』お鳥は斯う云つて、微笑しながら、坐わつてる義雄のからだに自分のからだを押し付けた。
『死なう』と、渠も冗談に答へて、かの女を優しく見つめながら、『お前の白い肌を人に渡すのは惜しい。』
お鳥は自分の病氣に就いてその當初のやうにはやきやき訴へないが、自分で思ひ出すたんびに痛さうな顔をする。そして、もう、診察時間だからと云つて、病院へ歸つた。
義雄は獨り机に兩肱をつき、ぼんやりと、がらす窓から、狹い範圍の空を仰いでゐる。空は低く灰色に曇つて、今にも雪が降り出しさうだ。それが丁度、渠がこれまでに通過して來た、そしてまた今でもそこに落ちることがある疑惑の世界の色の樣だ。
その灰色の空に壓迫されて、隣りの物置き小屋の低い家屋が見える。それがまたどうも自分自身の姿の樣に見える。その家根を越えて、一本の立ち木の葉は落ちて、枝ばかりのが見える。ふと、義雄は氣がつくと、その木の枝にまたがせて、漬け殘りらしい大根が、一束ね、懸けられたまま、寒さうにしなびてゐる。
『あの大根の仲間はどこへ行つたらう?』から渠は自問して、『井桁樓の廊下に並んでゐたやうな漬け

樽の中だ』と、自答した。そして香の物のにほひと燒きもろこしのにほひとが義雄の神經に同時に復活して來る。そして最も人間らしく起つた聯想は、敷島がどうしてゐるだらうと云ふに始まり、あのイタヤ樹下のもろこし老爺――きのふは氣づかなかつたが――は、またゐるか知らん？もう一度、あの、札幌を代表する百姓馬子等の呼び賣り姿を見たい。今一度、鐵工場の鐵の響きを聽きたい。かう考へて來ると、渠は市中を散歩して見たくなつて、銘仙の袷に銘仙の羽織のまま出かかつたが、どうも寒過ぎる様な氣がするから、例の乘馬用にした洋服に着かへた。

燒け跡に、また新築中であつた北海道廳の建て物は、いつのまにか出來あがつてゐた。そこを通り拔け、灰色の寒風にインバネスの袖を吹かれながら、氷峰の社のそばの四つ角へ行く。

槲やナラの葉の、赤い色が褪せて、乾反り葉になつてしまつてから、やうやく色づくのだと云はれるイタヤもみぢも、その一と角に既に眞ツ赤に紅葉してゐる。然し、そのもとに店を出して、いい臭ひをさせた燒きもろこしの老爺の見馴れた顏は、どこへ行つたか、影さへも見えない。そのにほひが、義雄の初めて札幌並びに北海道に親しむ一つの手づるであつたのに――

且、そのすぢ向ふの鐵工場の柳の青い枝に對照して、義雄が常に見慣れた赤塗りの機關釜も、どこへ持つて行つたか、跡かたもない。

義雄はなつかしい思ひ出中の知己を二つも見失つたのに失望した。そして、開墾者等が野生の樹木を殆ど全く切り去つた跡の市中を、かの植ゑ殘されて誰れもそのありかを知らないと云ふ桐の山でも探檢するかの樣な鼻息で、ただわけもなく歩きまわつた。

然しなつかしい燒きもろこしのにほひはどこにもしなかつたばかりでなく、カイベツの出盛りにはカイベツ。林檎、もろこしの盛りには林檎、もろこし。ココア、くるみの季にはココア、くるみ。漬け大根の節には漬け大根、の樣な物を馬の脊に載せて呼び歩く百姓馬子等の影も、もう、見ることの出來ない季節である。

義雄は、あの百姓馬子等は速かに變遷するこの地の季節をこの市街に送り込む神ではなかつたかと思ふ。それに離れたのは、義雄が曾て信じてゐた耶蘇敎の神を棄てた當時の樣な心持ちだ。正義、博愛、平和、文明などいふ外形ばかり美しい幻影が破れた樣に、渠の空想してゐた札幌市中の樹影の美觀が滅してしまつた。

そして、枝葉の枯れ落ちた木の樣に、自分は赤裸々の自分だといふ感じにもどつて、大通り散策地の故黑田伯の銅像の前を横切る時、忍びに忍んでゐた灰色のおほ空から、今年初めての白い物がおほきな花がたになつてぽとぽとと落ちて來た。そして、見る〳〵、義雄の歸りさきを遮ぎつて、一間さきが見えないほどに降り出した。

＊　　＊　　＊　　＊

お鳥はまた義雄の下宿へ來て、留守居のつもりでか、ほどき物をしてゐた。義雄が東京で買つてやつたセルの衣物を被布に仕立て直して呉れいと云つてたのだが、それの半ばほどいてあつたのは全くほどいてしまつて、今や洗ひ古して色の褪めたぼろ衣物を解いてゐるところであつた。その少しづつほどけたのを奇麗に延ばし重ねてゐたところへ義雄が歸つて來たのだ。

『どこへ行てたの』と、かの女が出向へた時、義雄はインバネスの雪を拂ひながら、

『愉快ぢやアないか、このおほ雪は？』

『愉快どころか、かう寒うなつて！』かの女は自分の衣物の用意が足りないのを暗に訴へたやうだ。

義雄はインバネスをかの女に渡し、また洋服の雪を拂ひ、靴の編みあげを解いて、あがつて來た。

『氣分は、もう、直つたの？』かの女はこちらの後ろへ來て、『聲の調子までちごたやうだ。』

『………』別に答へはしないで、渠が室に這入ると、糸屑や解き物で殆ど一杯にちらかつてゐるのを見つけた。かの女がそれをかたづけるのを暫らく立つて見てゐた。そして、破れたり、色が褪めたりして、餘り見ツともよくないぼろ切れにかの女が手をつけた時、義雄は何だかぷんと寢小便のにほひを思ひ出して、殆ど忘れてゐた妻とその度々生んだ子供といふ物を聯想した。そして、お鳥も何だか所帶じみて來たやうなのをあざけるつもりで、冗談ににツこり笑つて、姙娠を假定して、

『お若いのに、もう、おしめの用意が出來ます、ね。』

『ふン』と、お鳥はあまえた鼻聲を出し、額に皺を寄せ、立ちあがつて、義雄を見つめながら、渠を捉へて二三度力づよくゆり動かした。『そんなこと云ふと、聽かん！』

五

十月廿八日は夜ぢう降りつづいて廿九日はいい天氣であつた。家々の家屋から、庭から、道路までが眞ツ白になつてゐる上を、立派な太陽がきら〳〵照らす。空氣は乾燥して、實に清新だ。非常に氣持ちがいい。北海道の冬は却つて健康にいいよと、曾て札幌から東京へ歸つて來た友人が語つたのは、乃ち、これだ、など義雄は思つた。渠はお鳥に引ツ張られて、セルの仕立て直しを頼みに丸井呉服店へ行つた。

三十日はまた雪、三十一日は天氣であつた。そして、十一月一日から、通常道會が開かれた。

一日の朝、おほ雪を冒して、義雄は、陸軍演習參觀から歸つて來た北海メールの社長、昇敏郎を大通り一丁目の角なる本宅に訪問した。

煉瓦の高塀で角の二方を圍まれた、ちよツと見榮えのする家で――間口一間の玄關の、摺りがらす入りの兩びらき戶を入ると、直ぐ左りが西洋風の應接室である。壁には名も知らない人の油繪やら、

大きな世界地圖やら、アイノの刺繍やらが掛つてゐる。一隅の三角棚には、土人の古器物も二三据ゑてある。義雄が初めて面會した時、奥から出して來て見せた物徂徠の掛け物で、この支那崇拜家が例の變挺な字畫をひねくつてあるのも、一方の壁に釣してある。奥の狹い庭に向いた窓のレースの間から、まだ葉の殘つてゐる萩などが見える。

　この室の中央の圓テーブルを挿んで、主客は相對してゐたのである。

　義雄は自分の最後に殘つた希望、乃ち、アイノ研究並びにその滯北費の周旋に關し、遠藤道會議員は既に昇代議士に相談してあることだと思つてゐた。ところが、遠藤は天鹽から歸つて直ぐ道會に於ける黨派問題の爲めに多忙であると見え、まだ昇に會つてゐなかつた。で、義雄が直接にその相談を持ちかけた時、昇は怪幻な顔をすると同時に、後ろにもたれて一方の膝に乘せた一方の足を、スリツパを穿いたまま横手に突出し、持ち前らしい横柄な口調で、

『社は君の一身を引き受けるほど深い關係を結んだつもりではない――ただ君が旅行したいと云ふから、原稿さへ貰へばいいとして、こちらから遠藤に相談してやつたのではないか？』

『無論、さうに違ひないです。また、それ以上に僕はあまえ込まうとするのではないです。』から義雄は聲をとがらせて答へた。渠は、遠藤が昇と相談して見ようと云つた問題があるので、それを遠藤のまだ渠に相談しないうちに、ただ直接に云ひ出したと云ふに過ぎない。それも決して必らず相談に乘

れと云ふのではない。見込みがなければ早く歸京するだけのことだから、多忙な遠藤を待つ暇もないと思つてゐたのである。

それだけなら、まだしもよかつた。然し昇は同じ口調で、義雄が遠藤から相當な金を受け取つて十勝へまわつた上に、また旅費の追送を社へ請求して來たのを責めた。そして、

『そんなことも怪しからんぢやないか』と云ふ。

『そして、送つて吳れましたか？』義雄は怒りの胸をとどろかせ、飛びかかりたいほどの勢ひを制して、から皮肉に出る。

『無論、送る筈はない。』

『送らないで、そのお小言が何の役に立ちます？』

『然し遠藤から君は隨分金を出させたさうだ。』

『それはあの人に別れてからの費用にでしよう？それなら帶廣に至るまでに殆ど必然的に入るだけで――その報告は天聲君にもしてあります。』

『おれはまだ聽かん。』

『聽かないで、勝手氣儘な想像はおよしなさい！而もそれを以つて人を責める樣な口調はどうしたのです？』

『まア、さうおこらんでもえいぢやないか？』

『おこりますとも、あなたの出かたがどうも面白くない！――それに、全體、あなたの社が人のふんどしで相撲を取らうと云ふ樣なやり方です。』

『社が仲に這入らんければ、旅行も出來なかつただらう？』

『それは結構です、然し僕のあれだけの――またここ三四日つづきます――原稿に對して、あなたの社で何ほど出したと云ふのです？』

『そりやア、社が直接に出したのは少い、さ――然し――』

『御覽なさい！社以外で出たのはすべて遠藤氏と僕との關係です。あなたは紹介者だけであつて、それに對する僕の謝禮はメールに原稿を書いたので十二分に濟んでゐます。』

『だから、その點は君に禮を云つたぢやないか？』

『禮を云ふだけならかまひません。然しさう横柄に出るなら、さし引き、それが消滅したと同樣です。』

『然しさう横柄に出たわけでは――』

『いや、お待ちなさい！あなたの態度は地方のヘツぽこ記者に對する態度でしよう？地方の記者ならそれで濟みましようが、僕は決して許しません――侮辱も亦甚しいです！』

義雄の態度は寸毫も假借しないと云ふ勢ひだ。そして、忿怒の爲めに、相手を見つめる目が燃えて來た。昇は然し左ほど熱しない。兎に角、おほやうに折れて出て――毬栗坊主の一文學者の云ふことなど、どうでもいいと思つたやうだ。

『ぢやア、君の氣に喰はない言は僕が取り消さう。然し、社で君の一身上の世話は出來ないぞ。』

『無論、社に頼んだのではありませんが、もう、あなたにも頼みません。然しなほ一言云つて置きますが』と、義雄は決して新らたに原稿料を貪るつもりでこんな罵言を云つたのではない。餘り人を馬鹿にする樣な昇の態度を反省させたので――帶廣から釧路行きの旅費を電報で請求したのも、天聲がそれ位の請求はあとから出來る餘地を殘した證言をしてあつたからだと云ふことを、いつまでも誤解を殘さない爲めに、はツきりと辯解した。

『そりや天聲が勝手を云ふたのだらう。』から云つて、昇は目を轉じ、自分の庭の松や萩に雪のおほびらがどん／＼降りかかるのを見てゐる。

『それにしても』と、義雄もその方に向き、おもさうに地上に直角に下る北海道のおほ雪――それが、もう、所謂消えない寢雪だ――を見て、『僕がそんな意志の不疎通があなたと天聲君との間にあつたとは、初めから知らう筈がないです。』

『兎に角、もう、分つたから、その話はよさう。』

『僕も歸ります。』

かう云つて、義雄は立ちあがり、昇が後について來るのを見もしないで玄關に出で、靴の紐を結ぶ時、自分はまたのぼせたのであると思ふ。下を向いてゐる顏に血が行きどころもない樣に充ちたのか、兩の頰ぺたが何となく熱して膨れぼツたい。

同時に、ふと、昇と云ふ奴は、性格があの畑中新藏に似てゐるところがある。顏の大きいところも亦さうだ。然し、昇のは碾き臼の上石の樣だと思ふ。そして、また、あの大きな口が一文字に延びてゐると。

『また、ひまにやつて來給へ。』

『いや、もう』と、義雄は渠の方を見て土間につツ立ち、『東京へ歸ります。』

『では、達者にし給へ』と云つて、主人は引ツ込んで行つた。

どん／＼降る雪は、風がないのに、ただ義雄の無謀に進む勢ひに亂れてか、渠の前後左右から、お前の樣なものは早く北海道を去れと迫るかの樣に、渠の洋服にまとひつくのだ。

昇の家の角を曲つて、大通りの散策地が、近頃出來あがつた永山將軍の銅像だけをむき出しにして、地べた一面白くなつて、枯芝一つも見せない路傍を、東に進んだ。

無謀の歩みは渠が燒けになつた時の習慣である。渠は曾て燒けッ腰の餘り、雨中をどろ下駄の重みが癪にさわり、身をその場で泥濘中に投げ出したことがある。今も亦殆どさうしかねない勢ひだ。昇の横柄な言葉を思ふと、癪にさわつて溜らない。あんな奴の爲めに原稿を書いてやつたり、身の上のことを賴みに行つたりしたことが、また癪にさわつて溜らない。雪がうるさくまとひつくのがまた癪にさわつて溜らない。

『これが東京なら、もう、これッ切り、行き倒れになつてもかまはない！』然し北海道で死に恥も生き恥もさらしたくないと思ふと、如何に季節上の事情を實際に知らなかつたとは云へ、勇や氷峰に注意はされながら、かう雪の降るまでまご／＼してゐた自分を、無見識だと身づから嘲けらざるを得ない。

思ひ出すと、樺太の鑵詰業者でも、見切りのいいもの等は、秋の蟹は割合に利益にならないとして疾くに、今年の仕事を切りあげ、東京などへ、來年の發展もしくは契約の爲めに出かけてゐる筈だ。ましして、その見込みもなくなつた自分が、弟や從兄弟をそのままにして置くのは、北海道よりも早いおほ雪の中で、渠等を進退に窮させるばかりだ。

然しそれどころではない――今は自分自身が全く窮してゐるのだ。二三年の經驗があつたから、あの旭川新聞にゐた俗謠詩人はあの時に逃げ出したのだらう。また自分と一緒に歸らうと約束してゐた森

本春雄の上京も、たとへ、父が亡くなつた爲めに早くなつたのにせよ、何となく自分は渠の先見に鼻をあかされた樣な氣がする。それが如何にも殘念で溜らない。
『この無先見の馬鹿野郎！』から、自分で自分を罵倒しても見る。然し、昇に對してまだ云ひ足りなかつたところもある樣な氣がするので、それを言傳てさせる爲め、昇があとで行かなければならないと云つた北海メール社に行き、天聲を訪ふて見た。まだ來てゐなかつた。
また雪を冒して、渠の宅へ行くと、細君が兒を產んだといふ騷ぎだ。
『それはお目出たう』と、入り口に立ちながら云つたが、義雄はこの寒いのに御苦勞なお產だと思ふ。渠は自分の妻子を聯想させるものはすべていやだ。妻が兒を產む、そして所天に對する愛が薄らぐといふことが鼻について以來、義雄の持論として、また曾てそれを勇のゐるまへで勇の細君と云ひ合つたことがある通り、兒を產む女、兒を可愛がる男などを見ると、馬鹿だとも下等だとも思はれる。そして、兒といふ物を見ると、最もうるさくツて溜らないのである。
ましで、こんなに氣のいら〳〵してゐる時だ――『おぎやア、おぎやア』といふ聲かぞツとするほどいやだ。早く立ち去らうとした。
『まア、ちよツとあがり給へ』といふ天聲に向ひ、敷居のそとから、昇の言葉とそれに對する反駁とを語り、

『君が社と僕との間に立つて、意志の疎通を缺いたのを今更ら責めるのではないから、ただ昇に向つて、君からも一つ僕の公明正大な不滿と渠の間違つた態度とを證明して呉れ給へ――僕はもう歸京するから。』

『證明はいつでも出來るが』と、天聲は心配さうに、『歸京するツて、金があるか？』

『なアに、持ち物を賣りツ放す、さ。』

『僕も氷峰君と何とか相談して見よう。』

『氷峰だツて、今窮してゐるから、ね。』義雄は、心安立てに、暗にメール社でもツと奮發すべきだといふことを諷じかけた。が、どうせ天聲の力では及ぶまいし、昇には立派に云ひ切つて來たのだから、それツ切りにした。

そして、そとを歩きながら、まだ火照つてゐる自分の顏に大きな雪の花がぶつかるのを、ひイやりと心よく感じた。

六

東京へ歸つてやると、今度こそはいよ〳〵決心したが、義雄はお鳥にそれを語らなかつた。と云ふのは、まだ暫らく入院してゐられるだけの分を拂ひ込んであるから、それが盡きないうちに、兎に角、

何とかして、自分だけが歸京したい。そして、どうせいつ直るか分らないお鳥と遠く別れてから、手紙の上のいい加減な相談で、かの女から逃げてしまはうと思つてゐるからである。

一日の午後――雪は降りつづいてゐた――まだ鐵道局が引けないうちに、義雄は加藤忠吉を停車場の二階なる會計部に訪問し、樺太から着て來た銘仙の衣物と羽織とをこツそり賣つて貰ふことを賴んだ。それさへ賣れたら、下宿屋の拂ひだけは出來る。加藤は夕方までに返事すると云つて、それを引き受けた。

歸宅して、義雄はまた汽車賃と途中の費用との工面を考へた。さし當り、目的物は銀時計と金ぶち眼鏡とであるが、これはどうも放したくない。いづれも去年の末、學校を辭職した時、敎へた生徒一同から贈つて呉れた記念だ。渠はこの一つの記念を見る度每に、あれだけ叱りつけた生徒だが、自分が英語の敎へかたが上手であつた爲めに、よく親しんでゐたことを思ひ出す。また、學校に關係があつた時は、一日置きに大きな聲を出すので、それが非常にいい運動になつたことを思ひ出す。

で、この二つは、どうも放したくない。さりとて、その他に賣り拂ふものはない。再びあの書きかけた論文原稿『非痛の哲理』に思ひ及ばざるを得なかつた。あれを徹夜してでも一生懸命に書きあげ、東京へ送り、無理にでも一時の立て換へをして貰はうと考へた。それに、加藤に賴んだことも實際うまく行くか、どうか分らないからである。

この考へに多少の活氣を回復し、義雄は机に坐わる用意として、まづ近處の床屋へ髭を剃りに行つた。すると、左りの目ぶたからあたまへかけて、ひたへ中を縫つて貰つたおほ傷の跡のある男が散髪をして貰つてゐる。

その男の實話に據ると、熊にひツかかれたのである。鑛山探檢に行つた歸途、その熊に出くわした。熊といふ物は人間の聲がすると逃げる。慣れた郵便脚夫などは、遠くおやぢの影を見ると、その場で石の上などへ腰をおろし、『えへん、えへん』など云ひながら、ゆツくり煙草を飲んでゐる。すると、向ふから近よらない。然し、どちらも不意に一間以内のところで出會ふと、おやぢもびツくりするのだらう、直ぐ後ろ足で立ちあがり、人に飛びかかる。

そこを、アイノなら直ぐマキリを以つて熊の胸に飛び込み、喉にある月の輪を刺すのだが、渠はそんな用意も手練もなかつた。おまけに、子づれ熊と來てゐた。子は逃げたが、親は立ちあがつた。熊は内手が利かないから、胸ぐらに飛び込み、そこに顔を當ててゐたら、決して傷を受けないと、兼て或アイノから聽かされてゐたのを思ひ出し、渠は夢中でその胸ぐらにつかみ附いた。

熊と自分とは一緒に倒れたが、その時、額をかきむしられたのだらう。氣がついた時は、もう熊はゐなかつたが、自分は顔中血みどろになつてゐるのが分つた。

『然し手術といふものはありがたいもので、目玉までくり拔かれたかと思つたほどの傷が、兎に角、

この通り直つたのだから、なア』と云つた。おととひも、博物館へ行つて陳列してある剝製の熊をいろいろ見たが、あのおそろしいざまをしてゐる大畜生の胸ぐらへ、どうして、まア、つかみつくことが出來たかと、今更ら思ひ出してもぞッとするが、『おほかた、おそろしい一心で夢中になつたからであらう』と云ふことをも云ひ添へた。

床屋にゐたものらはすべて吹き出した。

然し吹き出すどころではない。義雄はその時一心、それが自分の論文の急所にもなるのだと思ふ。

この新らしい絲ぐちを得たのと、鬚を剃つたいい氣持ちとにそそられ、直ぐ筆を執る氣になつて床屋を出た。然し旅行前にちよツと見た『氣象考』のことを思ひ出し、それを一材料にする爲め借りて來るつもりで有馬の家へ行く。

勇はここ一週間ばかり、毎晩、奥州松島の瑞巖寺から來た某師の『碧巖錄』提唱を聽きに行き、その度毎に參禪をしてゐた。舊派の而も平凡な敎訓的短歌を作つたりする渠としては、割合に感心な試みだと義雄は思つた。然し、却つてまたそんな俗習家に限つて、禪など云ふ、義雄が催眠術の一種に過ぎないと不斷罵倒してゐる工風を、この上もなくありがたがるものだと見ると、馬鹿にして見た

もなる。

『ゆふべでやツと參禪は終つた』と云つて、多少得意げになつてゐる勇に向ひ、義雄は、

『禪と云ふものは、僕は松島でもやつたし江州の永源寺ででもやつたが、すべて野孤禪に終ると僕等は見爲してゐるが、君はどう云ふ結果を得た？』

『そりやア、僕等にはまだ分らないが』と、勇はこちらのいつもの壓迫的態度を逃れようとする樣に、然しまた辯解もして見る樣に、『いろんな結果を得る、さ。』

『たとへば、どんな樣に？』

『たとへば、生死の巷に立つて、膽力が鍛へる。』

『馬ア鹿な！そんなことを、わざ〳〵三十棒のもとで鍛へて貰はなければならない樣な人間では駄目だ。』

『あの先生は、然し、打つ樣なことはしないので有名ださうだ。』

『打たないでも、形式は同じだらう――自己催眠がやれると云ふばかりで、而もそれが肝心の内容を空虛にしてしまうものだから、死物になるも同樣、さ。死物の膽力とか、不動心とか云ふのは、ただ物に感じない無神經の虛飾に過ぎない。』

『禪は無論神經の刺戟を離れて、純粹の觀念を凝らすものだ。』

『それが既に間違つてゐる。觀念とは、プラトンの所謂イデーを初めとして、全く消極的なもので、矢ツ張り、人の無飾活動を殺す形式の範圍になる。僕等は神經を鋭敏にと動かすべきで、それを離れて現象も、實體も、活動も、自我もないとするのだ。』

『然し無我といふことが禪には大切だ。』

『實際に無我なら、もう、膽力も、くそも入る筈がないぢやアないか？全體、禪は矛盾と云ふよりも、ただぬらり、くらりとした不眞面目な態度でその人の無内容を胡麻化してゐるに過ぎない。無我とは結局無内容だ。無内容は空だ。空な物が膽力どころではない、これから何物をも贏ち得ることは出來ないのだ。現代に必要な自我の充實と國家の發展とに於いては、耶蘇教思想と共にわが國から排斥すべきものだ。釋宗演が――無論、くそ坊主だが――東京帝國大學派の哲學會で、「悟道とは何ぞや」といふ演說をやつたことがある。――

『大學の先生どもは、どうせ無獨得の淺薄者流ばかりだから、下らないことに笑はせられたりするので、外道禪などは催眠術にも似てゐるようが、達摩禪、圓頓最上乘の禪はさうではないなど云はれて嬉しがつた。そしてその最上禪とは何かと云ふに、壇上で興行師の樣に一喝して見せ、曰く云ひがたしだ。――

『不言の言、非思料の思料などとは瓢箪なまづ的の胡麻化しだ、老子の

は、メテルリンクの態度もさうだ。つまり、誰れでも、そこまでは行けるといふところにとどまつてゐる。自然主義の初歩者にも、「默の一字あるのみ」など云つて、空虚な高踏派的態度のがある。その實、何等の内容も、生命も握つてゐないのだ。――

『僕等は主義として、自分の云へないこと、乃ち、エキスプレス、發想し得ないことは、すべて價値のないものと信じてゐる。たとへ發想とサジエスト、乃ち、暗示と云ふこととは區別して見ても、暗示する物は自分の神經で握つてゐる物でなければならない。そして、その物が本能力であつたなら、まだしもそれだけ禪の取り柄だが、それは心理學の發達した今日、催眠心理學の方がずツと正確だ。それも、曰く云ひ難しなどの程度にとどまつて、發想もしくは暗示し得ないのは、自分で獲得してゐないことだ。まだ獲得してもゐないものをかうだとか、あアだとか、直觀自覺せよだとか云ふのは、手の平に握つてゐない物を當てて見よと云ふのと同樣、人に虚僞を强いてゐるのでなければ、空想を實際だと誤信してゐるのだ。――

『そんなことで、實際に、眞の實際に、どうして膽力が鍛へられる？僕の刹那主義に於てこそ、充分に膽力の鍛練も出來ようが、三昧とか、無我とか、無念無想とか云ふ、俗人原がわけも分らず喜ぶ無意義の形式を以つて、「思想感情の最高頂」もあきれらア、ね。――

『自己を超絶――ふん、自己を超絶したる、空だ、死だ！大我――馬鹿な、我に大小を別つのは既に

考へ方が淺薄だ！積極的――そも却つて消極的なのを知らないのだ！』

知らず識らず自問自答になつて來た義雄の長談議を、勇は小乘的だと云ひたさうにして聽いてゐた。が、まだ口を出さないうちに、義雄はその辯解もする。

『大乘とか、小乘とかいふことが佛教思想には離れられなくなつてゐるが、それも下らないことだ。小乘であつて、大乘ぢやアないといふのは、自己の無內容を知らず人のことを下等だ高尙ぢやアないと云ふのと同じで――佛教の俗習家等の空言空語だ。色卽是空といふことも、僕が井の哲博士の現象卽實在論を駁した樣に、全くのナシングネス、空でなければ、ただ觀念的程度にとどまつてゐる。えらいことも、玄妙なこともない。えらいとか、玄妙とかいふ形容がつく實際の內容を握つてゐないからだ。そこへ行くと、僕の刹那主義が初めてその內容の充實した事實を表象と正當な暗示とを以つて現じ得るのである。』

『その表象といふことをいつか君は詩の論で云つたが』と、勇はやツと義雄の言葉を引き取つて、『さういふことが禪にもあるよ。君は物を云ひ切つてしまへば、却つて物の全體が現はれないから、舊來の和歌なるものが駄目だと云つた。』

『さう、さ。』

『ところが、禪でも、暗示といふことを云ふよ。說明してしまへば何でも

『そりやア、今云ふ內容がないからのこと、さ。僕等が暗示とか、表象、乃ち、シムボルとか云ふのは、發想と共に生きてゐる。ただその發想が、以心傳心など云つて、胡麻化しの消極的寓意手段ではない。乃ち、禪の樣な無神經、もしくは脫神經の假空的暗示でなく、大膽で赤裸々の人格實現が發想その物で、それが直ちに人世全體の暗示になつてゐるべきものだ。』

『然し禪にも內容がないとは云へまい？』

『ぢやア、どんなものがある？隻手の聲など云つて、徒らにキト、頓智を弄してゐるに過ぎない。』

『頓智ではない、さ。』

『そんなら、それにどう云ふ工風を凝らした？』

『それは云はないことになつてゐる。云へば、ただ人の冷笑を買ふだけだから、ただ自分で自分の工風にしなければならないぞと云ふのだ――さうなると、師に對する一種の信仰の樣なもので、信じないものにはつまらなくなるのだ。』

『信不信によつて、つまる、つまらないぢやア、もう、語るに足らない、さ。木石も神と思つて信じたら、病氣も直るといふのと同樣、矢ツ張り、催眠術、よく云つて、自己催眠にしか當らないことになる。暗示も、膽力鍛練も、そんなもののお世話になる必要がない。僕等は自己催眠など云ふ手段によつて消極的な、外向的な、死滅的な宇宙を觀ずるのではない、立ちどころに、現實の自己の覺醒・自

己の滿足、自己の充實、自己の發展を內觀するのである。』

『さう云つてしまへば、さうだらうが――』

『その位にして置かうよ。どうせ、君の禪を攻擊してゐるのではないから、ね――僕はあの「氣象考」、ね、新居守村とかいふ少敎正の――あれを見せて貰ひに來たのだ。今の樣な議論も、僕の論文には這入るが、あの少敎正の書をも引き合ひに出さうと思ふから――』

『見せてもいいが――』勇は少し不興らしい樣子をしてその書を出して來る。

『ちよッと借りて行つてよからう。』

『うん。』勇は急に考へた樣に、渡さうとした書を引ッ込めて、『借してもいいが――』

『無くしては困ると云ふのか？』義雄はむッとした。

『さうぢやアないが――』

『矢ッ張り、隻手の聲で、祕密だと云ふのか？』

『いや』と、勇はなほ重々しさうに、『餘り人に見せて吳れては困るが、ねえ。』

『から云ふ珍らしい掘り出し物を人に見せないで、祕藏するつもりか？』

『一概にさうでもないが、――これが君には立派な材料にならうが、人から見ると、僕が敎育家とし

て、こんな物をこツそり讀んでゐると思はれないでもないから。』
『これが讀破出來りやア、教育家としても、君はえらい筈だ――スプリングピクチュアでも、正直に云ふと、教育家は見て置く必要がある。』
『世間はさう思はないから、ね。』
『そんなことを心配するから、人は何も出來ないのだ。新主義を主張するだけ、僕は大膽に古人の說をも採否するつもりだ。』
『君はそれでよからう――兎に角、濟んだら直ぐ返してくれ給へ。』
『よし、心配するにやア及ばんよ。』
義雄はその書並びに到着の雜誌一まとめを受け取り、そこを出た。そして、勇の樣な小膽者は奮式な禪でもやつてゐるに丁度よからうと思ふ。
義雄はその往きにも、復りにも、博物館わきの湧き水のそばにある、自分の好きな、例の幽靈の樣な枝を高く擴げたアカダモのそばを通つた。然しそれはもう立ち樹ではなかつた。根から切り倒されて、雪が降り、雪が積つてゐる道に橫たはつてゐる。そして、枝は枝で切り落され、幹は幹で三つばかりに挽き離されたままになつてゐる。義雄はそれが自分の形骸ではないか知らんと思つて、しめツぽく冷えて來た手に白い息を吐きかけながら、暫らく踏みとどまつて見てゐた。

立つてゐた時よりも、幹がずツと長い樣に思はれる。もう、樹木ではなく、木材だが、根は廣い道の眞ン中からその廣い道の片がはを横斷して、そのさきは、博物館構内のふちを流れる水の上に出てゐる。そしてこの木材にも雪が降り積んでゐる。

伊藤公追弔演說會以來の獨り激昂を思はずまた參禪論に於いてした爲め、神經が再び非常に過敏になつてゐるのが、今、路上の放浪者として、初冬のしめツぽさと冷氣とに當つて、義雄は夏以來の働きを一度期に目の前に浮べた。

そして、その疲勞の姿はこの木材であつた。そして、それを踏み越える時、かう考へた――自分は、もう、肉と靈とが分離して、生々活動のもとなる肉の幻影力を失ひ、靈ばかりが瘦せツこけた無生氣の亡者の如く、自分の運命を踏み越えるのではないか知らん？それなら、自分の主義の破滅だと。

七

下宿へ歸つてから、義雄は先づ『氣象考』を讀み通した。木版本で、おほきな字の本文の間に、また割註が澤山してあるが、薄ッぺらなのだから、直き讀めた。

渠がこの種の木版本で、渠自身の思想を反省するに至つたのは、さきに平朝臣玄道といふ人の『眞木柱』があつた。この書から、宗教的農學者佐藤信淵の『天柱記』、『鎔造化育論』並びに同著者の農

業本位の、而も最も古いと云はれる連山易と天主教の耶蘇教理とから綜合した日本中心主義を發見した。

今、またこの明治十八年に於ける少敎正の書によつて、天地萬物の生々的威力は陽根の氣に基ゐすると云ふ思想を得た。

いづれも義雄の說に於いては大切になつてゐるもので、渠等がなぜこんないい考へを持つてゐたかと考へて見ると、つまり、わが國の神道を離れないからである。そして義雄は宗派化した神道ではないが、神道の本源にさか登つて、わが國有史以前の神代の肉靈合致的生活から、歐洲近代の觀念的表象主義を矯正する心熱的表象主義――それが新自然主義だ――をうち立てたのである。渠の國家人生論はそこに立つてゐる。そして、日本中心說も、陽根本位論も心熱を刹那主義に追行しさへすれば、義雄の立脚地にぴツたり合致して來るのである。

義雄は愉快に『氣象考』を讀み返した。陽根の氣（發音、キ）が發音上轉じて身のミ、神のミ、君のミにもなつてゐるなど云ふ、徒らにわが國語の語源的說明に拘泥してしまつた弱點はある。また、あれだけの卓見を有しながら、それをうち消すかの樣に、普通の宋學者流の氣を、學理としては、外存的に、沒我的に解釋してしまつた缺點はある。然し、赤裸々に男女陰陽の關係を、自作の歌を以つて云ひあらはしたり、『古事記』を引用して說明したりして、性慾に關することだけでも、大膽にまた眞

摯に、わが國固有の生々主義を發揮してある。義雄は自分の『デカダン論』で說いた最も悲痛切實な自食的戀愛觀が、時代を云へば逆だが、既に讀まれてゐたかの樣に感じた。

然しまた外道禪もしくは病氣治療的手段にばかり落ちたところもある。然しその部分に於いて、女の癪を即治するには、男の〇〇を當てるに限るとあるに至り、義雄はそれを徒らに手段と見ず、眞面目にその理由を追窮し、自分の肉靈合致、生々刹那主義の論據を確かめた。宇宙の本體は實に威力ある男性、優強者たる自我にあるのだと。

そして、義雄自身は、愉快の餘り、全くこの思想に包まれてしまつて、男性的自我が火の樣に燃えて、觸れるものはすべて燒き盡す熱心があらはれた。火の樣な自我と燃えてゐる刹那は、渠の所謂獨存強者である。その狀態で考へると、この熱心の爲めに、自分の妻子も燒かれたのである。自分の崇拜者も燒かれたのである。自分の友人も、お鳥も、敷島も燒かれたのである。燒き盡されて無關係になつたものはまだしもいいが、半燒けのまま、まごついてゐるお鳥の如きは、一番面倒だと云ふ感想が、その間に、自分の體內に浮ぶ。

然し渠は、北海道生活を初めてから、今日ほど、すべての幻影を攝取して、自己の悲痛と孤獨とを强烈に感じたことはない。

この實際を書きさへすれば、自分の論文は無事に成立するのだと、勇み勇んで机に向ひ、原稿紙の上

に筆を持つて行くとたん、生憎、お鳥が勢ひ込んでやつて來た。而も出し拔けに泣いてゐるのである。

『どうした？』ふり向くと、かの女はそのそばへペツたり坐わり込み、義雄にかぢりついて、

『早く病氣を直せ！』

『…………』義雄はちよツとあツけに取られた。

『病氣を早く直せ！』かの女は渠をつき飛ばす。

『…………』

『早く病氣を直せ！』と、また、つき飛ばす。

『…………』

『早く直せ、早く直せ！』お鳥はます〳〵顏をしがめて、義雄を强くゆすつてゐた。が、義雄が持つてゐる筆も擱かないで、ただ目を圓くして見つめながら、かの女の爲すままにぐら〳〵からだをゆすぶらせてゐたのに堪へられなくなつてか、一と聲高く『直せ』と、渠を机にまでつき飛ばした。そして、自分は兩肱を後ろに曲げて、握り固めた手を乳のあたりに擧げ、それをゆすりながら、『え、え、えツ』と、齒を喰ひしばり、涙をほろ〳〵落す。

『…………』義雄はなほ無言で、わざとただそれを見てゐる。

『早く直せ』と、またかの女はつき飛ばす。
『よせ！』かう突然叫んで、渠はかの女の手をふり拂ひ、『おれは醫者ぢやアない！』
『そんなら、もッとえい醫者に見せて貰ふ！ちツともよくならんぢやないか？』涙の顏を義雄に押しつけて、『もう、死んでしまう』と云ふ聲は、義雄の袖に壓迫されて聽える。
『まだ死ぬにやア早いよ。』輕く受けて、渠は筆を投げうち、膝をかの女の方へ向けて、『死にたけりやア、いつでも死ねる、さ――人の死ぬのァ何でもないことだ。直ぐにも死ねらア、ね。ただおれと關係がなくなるだけのことだ。』
『生きてても』と、お鳥は顏をあげた、『いやだのに――死んでまで、關係があつて溜るもんか？』
『ぢやア、死ね、さ――火葬ぐらゐの世話はしてやらア。』
『お前などに世話してもろたら、たましひまでも穢れる。』
『穢れるなら、もう、穢れてゐらア、ね。』
『だから、早く直せと云ふのに！』なほ恨みを含んで、こちらの顏を見る、意地惡るさうな窪み目だが、うるほつてゐると、義雄には可愛くも見える。然し、もう、可愛がつてゐると見られるのを避けたいので、――無論、もう、愛情の八九分までも失せてしまつたと思ふので、――義雄は冗談にして云つた、

『うるさい、ねえ――いツそのこと、お前の望み通り、お前の形まで死んでしまつた方がいい――面倒くさいから。』

『面倒くさいものに誰れがした？』

『おれと加集と、それから、ひよツとすると、寫眞の先生と、その學校のハイカラ生徒と――』

『違ふ！違ふ！そんな呑氣なことではない！』

『呑氣なのアお前、さ。』

『お前こそ呑氣ぢやないか？』かの女は斯う云ひ放つた。『病氣になつた時、直ぐよい病院にかけて呉れたらよかつたのに、廣田の樣な、あんなへツぽこ醫者へつれて行て、もう、一週間で直る――もう、十日で直ると云ふて、直るどころか、なほ惡うなつた。それから、牛込の病院へ通つたて、遲かつたではないか？慢性になつてしまつて――それも、毎日、行けたのなら、運が惡いとあきらめもつくけれど、金が出來たり、出來なかつたりして、つづけて行くことがない爲め、よくなつたり、惡うなつたりするばかりで、ちツとも直りやせん。』

『慢性になつたら、なか〳〵直らないもの、さ――氣長に治療するに限るよ。』

『自分ばかり直つたので、人のことはちツとも思ひやつて呉れないんだもの。』

『いくら思ひやつてゐても、直る時が來なけりやア直りやアしない。』

『金さへあれば、勝手に直して見せる、さ。』

『さぞいいお醫者が出來あがるだらうよ、速成のをんな寫眞屋さんの樣に。』義雄はお鳥の持つてゐる寫眞にかの女自身がコダクを提げて寫つてゐるのを思ひ出し、『男の持つ寫眞機を肩にかけて、重過ぎるので、足が宙にあがつてらア。』

『何でもえい！』お鳥はこちらの批評を反省したかして顏を赤くする。

『時に、だ』と、義雄は少し眞面目になり、『お前は金、金と云ふが、さう澤山出來る見込はないよ――ここへも拂ひをする必要があるから。』

『然し、金の出來る見込みがあるの？』

『心配するにやア及ばないよ――病院の方はまだ新らしく拂ひ込む日は來ないだらう？』

『來たら、困るぢやないか？』

『どうかするよ――まツこと困るなら、おれだけでも東京へ歸つて工面する、さ。東京へ歸りさへすれば何とか出來よう。』義雄は暗に自分ばかりの歸京をほのめかす。

『歸つてしまへば、自分ばかりはよからう、さ――！』

『そんなことはない、直ぐお前の入院料のあとを心配しなければならないから。』

『へん！そんな人の氣休めになることを云ふて、――離れてしもたら、えい氣になつて、それッ切りになるのだらう？』

『さう思つてゐたら、間違ひはないだらうよ。』

『ふん、いやだ！いやだ！いやだ！』から鼻を鳴らして、お鳥はまた義雄をちから強くゆすぶり、『いやだ、いやだ！歸つたら、承知しない！』と、こわい目をしてこちらを瞰みつける。

『ぢやア、歸るまい。その代り、おれは何もしないで、遊んでゐよう。』

『それも許さん、金を拵へて來い！金を拵へて來い！』

『どこでよ？』

『島田なり、どこなりで。』

『あるもんですか？』

『ぢやア、どうするの？』

『どうする當てもない。』義雄はわざと斯う云つた。論文を書きあげてと思つた興味は、お鳥の爲めにどこへやら行つてしまつたのをおぼえるからである。

『だから、歸るといふの？』

『うん、歸るかも知れない。』

『歸つたら、もう、駄目ぢやないか、あたいのことなど思やしない！』
『ぢやア、一緒に歸る、さ。』
『いやだ！いやだ！またあの氣違ひ婆々アに』と、義雄の本妻のことを云つて、『いろんなことを云はれるばかりぢや！』
『ぢやア、どうしたらいいんだ？』
『ここにをつて、工面すりやえい、――東京へ行たら、また病院にも這入れないにきまつてる。』
『さうともきまらない、さ。』
『では、直ぐ大學病院へ入れて呉れるか？』
『入れてやる、さ。』かう答へたが、實は、義雄身づからさう云ふ氣にもなれないのである。
『うそぢや、うそぢや！』お鳥は今度は自分のからだをゆすぶり、『病氣がいつ直るか分らないのに、金がなければ心配ぢやないか？もう、十一月に這入つたから、十日も直きに來る。したら、また入院料を拂ひ込まねばならん。――ふん』と、またからだをゆすぶり、ゐても立つてもゐられない樣子をして、涙をこぼす。すすり泣きのやうになつて、『もう、直りやせん！直りやせん！』
『今夜に限つて、どうしてさう泣くの、さ？』
『それでも、つらいぢやないか？人が苦しい目をしてをるのに、ちッとも思つて呉れないのぢやも

の！』

『入院さしてある以上に思ひ様がない。』

『それでも、今、あの有馬のおやぢが病院へ來て、あたいを應接室へ呼び出し、下らんことを云ふぢやないか？いやになつてしまう！』

『………』まさか、あの男がくどいたわけでもなからうと思つたが、義雄は多少好奇心に驅られて、

『何を云つたのだ？』

『お前の惡くち、さ。』お鳥はこちらをその有馬の後ろ姿にでも對するかの様に睨みつけながら、『とても、見込みのない男だから、早く手を切れと、さ。』

『切れるなら、直ぐにも切らうよ。』

『それが行けんと云ふのぢやい！早く病氣を直してしまへ！』かの女は言葉と同時に義雄を叩いた。

『あんなおやぢの云ふことなど相手にせんでもえい！』

『おれもぢぢイぢやないか、お前の言葉に據れば？』

『ふん、そんなことはどうでもえい！病氣を直せ！』から叫んで、また義雄を叩いたり、つき飛ばしたりして、『今、有馬へ行て來たと云ふぢやないか、同じ様なことを云はれたのだらう？』

『なアに、おれにやア、もう、何も云はないよ。』

『うそぢや、うそぢや！』お鳥は然し氣をまわした。そして、義雄にせがんで、『あたいの惡くちも云ふたので、隱してをるのぢや――白狀せい、白狀せい！』

『云はないツたら、云はない！もう、歸れ！』義雄は辛抱し切れないで云つた、『おれは今これを書き出すところだ。これを早く書きあげて原稿料にするほか、別に當てがないのだ。』

『泥棒を見て繩を綯ふことをしてをるのぢや――間に合はんぢやないか？』

『間に合はないと云つてぐづ〳〵してゐりやア、なほ間に合はない、さ。』

『長くなるの？』かの女も俄かにちよツと氣をかへたやうだ。

『うん、百五六十枚にはならう。』

『まだちツとも書いてないぢやないか？』机の上の原稿の枚數を數へて見てから、『まだ三十枚しか出けてをらん。いつ出きることか分りやせん。』

『だから、急いで、徹夜してでも書かうと云ふのだ。邪魔になるから、歸つて貰はう。』

『歸ります、わ』と、お鳥はしぶ〳〵立ちあがる。『氣の毒ぢやとおもて默つてをると、一向、この苦しみを察して呉れないのだもの――あさつては天長節ぢやないか？それでも、あたいには何の樂しみもない。毎日、毎晩、生きながら地獄へ這入つてをる樣なものぢや。夢にまで苦しい目にばかり會ふ

てをる！――直さないと、取り殺してしまうぞ！』

かの女は最後の言葉を云ふ時にこちらを瞰みつけてしまう。そのあとで、渠は直ぐ筆を手にしたが、つい、今しがた湧いて來た思想の引き締りが丸でゆるんでしまつてた。そして、そのゆるみを骨ぶしから感じて來て、自分の生命なる努力は既に過去のものになつてしまつた樣な氣がする。

筆が一向動かない。そして、お島の色白い、堅太りの肉――それを義雄は東京で引き受けたのだ――の段々瘦せて來た姿ばかりがあはれにも浮ぶ。不斷から癇の强い女で、少しでも熱が出ると、なかなか直らない。或醫者がかの女を神經で以つて身づから病氣を惡くしてしまうお方だと云つたことがある。それに違ひはないのである。これまでに、兎角、癪や精神錯亂を起し易い女だ。やがては、またヒステリ性に落ちるのだらうと思ふと、どうしても、早くかの女の面前から遠ざかりたくなる。

義雄は自分の本妻が段々ヒステリになるに從つて、自分は段々にそれをいやになつた經驗を思ひ出した。そして再び第二のヒステリ面を見てゐなければならないやうなことになるのは、忍び切れないと思ふ。然し、本妻をも、お島をも、ヒステリなどにするのは自分だ、自分の熱刻もしくは冷刻な性質からのことだ。自分が愛するものに全身全力をうち込む代りには、その愛するものを全く占領してしまはなければ承知しない。この自分の性質を知つて、妻でも、お島でも、それに合する樣に努めた時代がある。然し自分には滿足が出來なかつた。自分の深刻なと思はれる心中まで、いづれの女も

十分に這入つて來る資格がなかつた。自分に向けるべき愛を、妻は子供の方に多く裂いてしまつた。お鳥は病氣の爲めに子供が出來るをりがなかつたのはいいが、妻が子供に愛を裂いたと同じ程度で、かの女自身に愛を保留してゐた。自分はそのいづれにも滿足が出來ない。その滿足出來ないところに滿足させようと努めたのが、女どもの精神と神經とを過勞させた。そこに、妻のヒステリやお鳥の癪を增長させる原因があつた。然しそのヒステリや癪が增長するだけ、自分の家等に對する反感も亦增長した。

　然しこれは自分の惡いのではない、女どもが自分の熱中する全人的性格に這入つて來ない淺薄な根性ッ骨が惡いのだ。かうして、おのれ自身から病氣になり、おのれ自身で恨み瘦せに瘦せこけて行き、やがては死んでしまうのだ。それが淺薄な女どもの運命だ。みんなこちらの爲めに精神的、神經的に取り喰らはれてしまうのだ。かうして、妻も死ぬのだらう。お鳥も死ぬのだらう。然し自分自身も亦、かうして、やがて死ぬのだらう。つまり、さう思つて、

『死ぬものは死ね』と、義雄は自分に一喝した。そして、『どうせ、いやなものは無用の長物だ！自分に關係ないもの、自分に合しないものには、すべて愛情も未練もない』といふ反感を盛んにして、僅かに過去の努力を復活させた樣な氣分になる。

然し、どうも筆が執れない。實際と實感とを破壞徹底した主觀が現じて來ないからでもあらうと思ひ、暫らく氣を轉ずるつもりで、有馬から受け取つて來た東京の雜誌を、手近にあるままに、取つて見る。

早稻田文學、文章世界、その他をひらいて、文藝に關する談話や評論を飛び讀みすると、その話者や論者は大抵こちらの直接に知つてゐるものではあるが、非常にうとましい樣に思はれる。と云ふのは、その話題や論旨が、相變らず、傍觀的態度とか、客觀的描寫とか、小主觀の排斥とかばかりだ。自然主義文藝の初步としては、さういふことも必要ではあつたらうが、そんなことばかりで現代の自然主義は成立しないのである。

破壞的主觀といふことに達すれば、主觀の大小廣狹は勿論、こと更らに客觀を物質的、外存的に考へる必要はない。且、この主義は徒らに區別的文藝の問題ではなく、直ちに天地の組織と社會の根抵とを革新する宇宙觀、人生觀である。それが乃ち義雄の刹那主義を發表した論著、『新自然主義』の要領である。渠は東京に於いて口が酸ツぱくなるまでもそれを論議し、友人等も多少それを認めてゐたと思つてゐる。然し、渠がゐなくなつてからは、渠等は殆どそれを忘れてゐるかの如く、矢ツ張り、もとの初步的な說を繰り返してゐて、一向にこちらの影響らしいのが見えない。

そして、一方には、まだ、まだ自然主義が起らなかつた時代の考へを蹈襲して、外表の事件その物

を以つて創作を批判し、少しもその內容の適不適に及ぶ素養も、思索力もない樣な談論ばかりだ。盜賊を書いたから行けない。女郎を描いたから、間違がつてゐる。强姦や姦通の事件だから、よくない。暗黑面でなく、光明界を出さなければならない。醜だから、美でない。苦しみばかりで面白くない。などと、そんなことは義雄等が主張した醜美論、苦痛美學だけにも觸れてゐないことばかりで、すべてその暗黑、耽溺、不道德などを描寫もしくは批判するうちに、どんな充實した內容や思想が這入つてゐるか、そこまで窮める力がないもの等の說だ。

義雄はそれを見て自分の說が大して影響してゐないのに失望すると同時に、自分はそんな賴母しくもない東京の文界へ再び舞ひもどる氣がしない。

『矢ツ張り、實感によつて、實感の眞劍勝負なる文藝でなければならない。』と思ふと、死んだ二葉亭が硯友社派的な遊戲文學者、餘裕文學者等と相伍するを嫌つたのは、今更ら卓見であつたのだ。そして、渠を再び呼び起して、自分の主義を十分に吹き込み、二葉亭の考へであつたよりももツと眞劍な文學者にして見たくもなる。

『然し渠も死んだ。自分も亦どうせ死ぬのだ。』いや、自分の努力が既に過去になつた上、その努力の影響がなかつたとすれば、もう、自分は全く死んだと同前だ。遺著などがあつても、何にもならない。現代の現實界が自分の物、自分その物になつて來なければ駄目だ。だから、自分その物の遺物はこの

空しく筆を動かさうとする形骸ばかりだらうと思ふ。

かう思と、もう何の努力も勇氣もなくなつてしまう。ええツ！どうともなれと、自分で自分の身を疊の上へ投げる。そして、『氣象考』の生氣ある說を考へると、自分もそれ以上に生々主義を主張してゐるのだが、自分の氣力も生々慾も、却つて、その說から、外存的に、たとへば地面がけふこの頃の寢雪に壓迫されて、段々凍つて行く樣だ。

そして、ふと、加藤がまだ來ないのに思ひ及び、渠に賴んだことが出來ないのだ、な、と考へる。あの衣物が賣れなければ、下宿屋の拂ひも出來ないのだ。それが出來なければ、旅費だけをたとへして呉れるものがあつたとしても、歸れないにきまつてゐる。

『伊藤公は奇麗に死んだ、なア！』そして自分の生き耻ぢをさらすのが意氣地ない樣になる。實際、自分は自分の主義を自分で持ちなやんでゐる。主義さへ棄てたら、死んでもいいのだ。いや、無主義は實際に於いて死だ。

かう考へて、寢雪の切々と降りしきる音を聽きながら、義雄はぼんやりと橫になつてゐる。午後十一時の時計を數へた。

そこへ、丁度お鈴の弟、原口鶴次郎が訪問して來た。

『まだ褥に這入つてゐない、な。』坐わつて、酒のにほひをぷん〳〵させる。

『………』義雄は投げ出してゐる自分のからだを起さうともしなかつた。
『起き給へ、君、女郎買ひに行かう。』
『この雪に僕はいやだ。』
『返りやしやんすか、この雪に』と歌ひながら、鶴次郎もそこに橫になり、病人の樣子を聽いたり、田村義雄はあの歡迎會で直ぐ歸つたら花であつたが、今ぢやア、歸る時期を失したのだと皆が云つてゐることなどを語つたりした。それから、氷峰、呑牛等が發議して、義雄の歸京費を醵金しようといふ相談があることを語つた。
『急には行くまいが、誰れが何ぼ、彼れがいくらといふことを島田君のうちで書いてをつたよ。僕にも出せと云ふてをつた。』
『僕も、そんなことをやつて貰はなければならなくなるとは、北海道に於ける新聞記者のなれの果てを見た樣ぢやないか？』
『然し、この場合、止むを得まいからと、島田君が云ふてをつた。』
『無論、僕の爲めにやつて吳れることなら、僕はことわりもしないが――』
『君は知らんつもりでをつたらえい、さ。僕等がうまくやるから――』
こんなことを話してから、鶴次郎は再び最初のことを云つて誘つたが、義雄は應じなかつた。應ず

るだけの力も出なかつたのである。すると、鶴次郎は義雄の銀時計を借せ、あす返すからと頼んだ。
義雄はそれを信じて、記念物の一つを鶴次郎に借した。そしていつも最も近く自分のからだにつき添つてゐた時計のちやき／＼云ふ音がしないのに氣が附いた時、自分の身のそがれたやうな寂しみをおぼえた。

八

翌二日に加藤を停車場二階の官房に訪ふと、きのふは要領を得なかつたから失敬したが、今しがたきまつて、現金が手に這入つたからとのことで、それを義雄は受け取つた。然し夜に入つても、鶴次郎は時計を持つて來なかつた。
そのまた翌三は天長節だ。同日の北海メールには、義雄の『天長節に關する一記憶』といふ小品的な原稿も一段半ばかり出た。
北海道の天長節には毎年必らず雪が降ると氷峰等から聽いてゐたが、果してその通りだ。然し午後からそれが止んだ。そして、お鳥は珍らしくにこ／＼した顔つきでやつて來た。かの女は、この頃沈み返つた顔をしてゐなければ、きツと泣くか、怒るかするのだが、けふに限つて違つてゐる。
『さう天長節が嬉しいのか？』

『そんなことではない。別に嬉しいことがあるの、さ。』かの女は自分の廂髮の前髪に注意せよと云ふ樣子をする。

『…………』見ると、そこに蒔繪のゴム櫛がさされてゐる。それを義雄はどこかの男から送つて來たのではないかと疑つたので、『どうしたのだ、隨分立派なのではないか？』

『さう、さ。』かの女はにこつきながら、『林檎を送つてやるからと云ふて、東京の友達から送つてもろたのぢや――ゆふべ屆いた。』

『男の友達だらう？』

『女、さ、國からこないだ出て來たばかりの。』

『本當か』と、念を押して見たが、兎に角、かの女の機嫌がいいのは、うるさくないだけ、義雄も喜ぶところだ。『からだにさしつかへないなら、市中をぶらついて見ようか？』

『行こ、行こ』と、お鳥も勇み出した。

『あたいが通ると、誰れでも、うるさいほど見向くよ』とは、かの女の常からの自慢で、こちらへ來てからも、矢ツ張りさうだと云つてゐる。

『あれだけのハイカラで、もツと美人であつたらと、人が氣の毒がつて見るのだらう』と、義雄がひやかすと、かの女は非常に怒つて、終日、

義雄はそんなことをかの女のさした櫛に附けても思ひ出した。

二人は停車場通りを大通りへ出て、南一條、二條の賑やかな街を歩いた。人通りの多いところは、五六寸も積んだ雪を道の兩がはから中央にかき寄せてあるが、人の餘り通らないところの道でも、雪がさく〳〵して水氣がないから、さう歩きにくくはない。

曇天ではあるが、積雪の天地に家並みの國旗がひる返つてゐるのは、如何にも新鮮で、氣持ちがいい。往來の人々も、平日とは違つて、よそ行き姿の景氣がいい樣に見える。

義雄はお鳥に從つて、丸井に立ち寄つた。セルの被布を催促する爲めである。その洋服店と吳服店とは、いづれも高い西洋建てで、賑やかな街の兩角を占領して、嚴しく分立してゐる。そして、諸國の國旗を結びつけた綱を四角の方々に引きまわしてあつた。そして、また、日が日だけに、店さきはなかなか賑はつてゐた。お鳥はその景氣におそれて大膽に這入り切れなかつたので、義雄がさき立つて、お鳥の云ふことを取りついでやつた。

お鳥は途中から車に乘せて吳れろと云ひ出した。局部が痛み出したので、歩いて歸り兼ると云ふ。僅かの道を車もつまらないと思つたから、義雄はかの女をつれて氷峰の下宿へ飛び込んだ。すると、お鈴さんが盛裝して來てゐた。

義雄はお鳥を、氷峰はお鈴を、互ひに引き合せたが、いづれもまだ正式の夫婦ではない。初對面の

挨拶をしたばかりで、お鈴は恥かしい爲めに口をつぐんでゐるし、お鳥はまた痛みの爲めにだらう顏をしがめて無言だ。

『天長節ぢやと云ふのに』と、氷峰は爐火をかき起しながら義雄に向ひ、『困つた、なア――足がないので、そとへも碌に出られん。たとへ出られたとして、面白いことも、何もない、さ。』

『御同前だが、ね』と、義雄は受けた。『さうすると、雜誌は今月出ないのか？』

『とても、出せん――金の出どこがない。』

『川崎は、もう、駄目なのか？』

『駄目ぢや、なア――社長はこの頃禿げ安に周旋さした方の口から矢の如く催促を受けてをる。そんな筈ぢやなかつたと云ふて、周旋者の禿げ安を探しまわつてをる。あのおやぢはまた自分が社長に返すべき金があるので、捕へられない樣に逃げてをる。――面白い芝居、さ。社長も苦しからうが、僕も苦しいよ。氷峰が大奮發の――實際、今回のが僕のありたけの智慧をしぼり出したのぢやと見られては止むを得ない――事業をやつて、一二號でつぶれたと世間から云はれちや、たとへ金は殘つたとしても、僕の將來に大不利益ぢや。況んやこのびい〱ではないか？この十五日にはとても間に合はんから、いツそ來年元旦の發行に變へて、十二月中に大準備をして、新年號から大發展としようかとも思ふてをる。』

『早く別な金主を見つけたらどうだ？』
『さうも思はんぢやないが、その先決問題として、今の社長と關係を絶つ時機を見てをるのぢや。僕を信じて資本を出すものがあるとしても、それが社長の左右するところとなつてしまう様ではつまらんから、なア。』
『無論だ。』
『時に、どうぢや――北海道の雪には面喰らつただらう？』
『聽かせられてはゐながら』と、少し恥辱を感じながら、『その時になるまでは、まさか、まさかと思つてゐた、ね。――然し、こツちの雪はばさ〳〵してゐて、その降り積む様子が内地のとは違ふ様だ。その上、雪のつんだあとの晴天は如何にも氣持ちがいい。うららかな太陽が白い上に反射して、空氣が如何にも新鮮で、健全らしい。』
『伊藤公の演設をして氣違ひになりかけた人の言とも思はれん、なア。この不健全文學、神經衰弱の主張者！』から云つて、氷峰は義雄の顏にほほゑむ。『あの時は僕らは突然の話でびツくりしたんだ。』
『健全とか、不健全とか云ふには』と、義雄も微笑を以つて受け流しながら、『俗人、俗見者流が考へる様な區別がつくものぢアない。常識ばかりで事に當るものは、表面上、健全だらう。然し、餘り高いところへも、深いところへも接觸することが出來ない。ところが、その高いところ、深いところに

接觸しなければ、人生の眞相を握ることは出來ない。それを握るには努力が入る。常識家にはその努力が不足してゐる。そして、極度の努力には、たとへ身心の過勞、神經の衰弱が伴ふものとしても、その過勞衰弱までに至る努力者が不健全で、殆ど無努力の常識家が健全だと云ふ區別はつくまい。よしんば、區別がつくとしても、そんな區別に由つて無意義の健全を貪るものには、進んで不健全と云はれるだけの名譽も見識もあるべき筈がないぢやアないか？』

『何か分らんが、然し僕は矢ツ張り常識家を以つて任ずる、なア――第一、僕は君のやうな堅苦しい無餘裕の努力家にはなれん。裃を着けて、耽溺するんぢやから、なア。』

『いや、常識家が勝手にそれを裃と見るのであつて、――裃がその人の常用であつたらどうする？』

『あたまはちよん髷と來るか、な？』

女どもは笑つた。

『馬鹿を云ひ給ふな。常識家こそ、ちよん髷をつけてゐるべき筈が、僅かにそれを切り去つた外形をよそほつてゐるに過ぎない。』

『然し、兎に角、君は何と云つても、根本は保守家であることが分つたよ。』

『無論、僕は日本を中心とする立ち場に於いては保守主義、さ――然し、そのまた奥に、斬新な態度を發揮してゐるから、その點に於いて新時代の戰士として努力したのだ――またこれからもするつもりだ。』義雄はそれから少し間を置いて、『が、斯う弱つちやア、僕も萬事が過去のやうで――僕自身は旣にしやりかうべか何かのやうな氣もする。』
『さう失望し給ふな。』氷峰はこちらを慰める樣に云ふ。
『あのセルがでけてたら、よかつたのに、なア。』斯う、突然お鳥はこちらを見て云つた。
『…………』渠はそれに答へもしなかつたが、お鳥がさツきからお鈴の樣子並びに衣服を意地惡さうに見てゐたのには氣が附かないでもなかつた。お鈴は小豆縮緬の羽織に黃八丈の小袖を着てゐる上に、からだも元のお鳥の樣に肉づいて、無病息災らしいのを見ると、葡萄色の唐縮緬羽織りのお鳥は、見すぼらしくもあり、また病人らしくもある。そして蒔繪の櫛が出來たぐらゐでは滿足しない慾心を起して、せめて、あのセルが仕立てあがつてゐればよかつたのにと、あせつてるのだらうと、思へた。
氷峰はそんなことに無頓着で言葉をつぎ、
『北海道では、これからまた活動期に入るのぢや。降雪期の活動はおもに山林の木材切り出しぢやが、雪で凍つたうへを運搬するのぢやから、却つて簡單で便利に行く。』
『若々しい北海道！』この印象が再び義雄の胸に刻みを深くした。これと同時にまた、氷峰が土地拂

ひ下げ活動をしかけたのを思ひ出し、『あれはどうした』と聽いて見る。

『あれか?』氷峰は詰らなさうに笑つて、『どうせ、駄目ぢやから、あれツ切りにして置いた。』

『天聲君の百萬坪はどうしたらう?』

『さア、あれは名義だけ貸したのぢやから、その運動はほかの人がやつて呉れるし、天聲の地位が兎に角札幌ではいい方ぢやから、成り立つかも知れん。――あれがうまく行けば、君も、約束があるのぢやから』と、初めて義雄を天聲の内へ案内した時の天聲の保證――戯言ではあらうが――を引き出して、『その一部分を貰ひ給へ。』

『僕もさう思つてゐる、さ――なアに、貰はないでも、安く買つてやる、さ。』

『買うては引き合はん、どうせ、直ぐ賣り飛ばすんぢやから。』

『その時の氣分が許すなら、直接に百姓になつてもいい、さ。』

『君に肥桶が持てるか?』

『そりやア、持つ、さ。』から義雄が云つたので、お鈴さんは聲を出して笑つた。お鳥もそのおつき合ひの如く苦笑した。

『それよりやア、君』と、氷峰は話題を轉じて、『雪が降り出すと、面白いことがある。』

『どう云ことだ？』
『山の活動は別として、さ、普通の家では、寒いので、そとへ出まい？北海道人に割合に物の分つたものが多いのは、內地で一廉の仕事が出來るものが移住して來たからであらうが、一つには、讀書によつて知識を吸收するからぢや。生活の程度も、それだけ、また進步してをる。野中の一軒家でも、家の造りが粗末ぢやからとて、水飮み土百姓が住んでをると思ふては違ふ――ビールのあき瓶が五六本は必らず裏口のそとに棄ててある。――
『越年中は、讀書するか、喰ふか、飮むか、寢るかぢや。子供の出來るのは名物ぢやぞ』と、また女どもの笑ひを引いてから、『面白いのは雪中の戀――戀と云へば、奇麗過ぎて當らないか知らんが、積んだ雪と降る雪との間で密談でも、何でもするのぢや。無論、人の少い田舍に多いのぢやが、人が通つても分らないし、自分等もぬくい――北海道の雪はしめり氣がないから。――僕等のもツと若い時にはよくあつたことぢやが、或熱心な女などはそれどころぢやなかつた。十丁もあるところから、一丈ばかりの雪を泳いで――北海道では、雪を泳ぐといふが――やつて來た時はその手足は殆ど全く死人の樣に冷えかかつてをつた。』
『あなたのところへ來たのですか？』お鈴さんが聽き咎める。
『さうとも。』

『いやな女です、わ、ねえ』と、かの女はお鳥の方へ向いて笑ふ。

『…………』お鳥はただ苦い顏をちよツとやわらげたばかりだ。』

義雄も亦これによつてお鳥が曾て語つたことを思ひ出してゐた。かの女が旭川に父と共にゐた時のことだ――今、由仁にゐる兄の勸めか、命令かにより、柔術を習ひに行つたこと――祭禮のあつた時、藝者の子と一緒に揃ひの衣物で踊つたこと――小學校の往きや歸りにいたづらをする男の兒を、自分の覺えた手で投げ飛ばすと、あたまからさきへ雪の中につきささつたこと――家へ出入りの獨身老人に、――それが學校の歸りを待ち伏せしてゐて、――自分のまだ弱い手を引ツ張られて、雪の中で、女房になつて吳れろと云はれたこと――

『あなたは』と、お鈴はなほお鳥に向ひ、『けふ、街を歩いていらツしやつて？』

『はア――。』

『賑やかでしよう？』

『大した賑やかでもありません――東京から見ると、札幌は丸で田舍です、ねえ。』

『あなたは東京を見ていらツしやるから、いいの、ね。』

『然し』と、苦い顏でだが氣取つた調子だ、『東京も、もう、いやになりました。』

すると、氷峰がまた義雄に向つて、

『君は歸ると云ふてをつたが、日はきまつたか？』
『あゝ――いや』と、義雄はちよツとまごついた。と云ふのは、お鳥にもほのめかしてあるのはあるが、實際に用意してゐるそのことはまだ語つてないのである。それをかの女に感づかれない樣にと、氷峰に、『まだ、どうともきまつてゐない。』
『早く歸る方がよからう、ぜ。』
『それはさうだが――。』お鳥を見ると、もう、感づいたのかして、こちらをちよツと睨みつけた。そして胸のそとまで乳のあたりが浪打つてゐるのが見える。
　お鈴さんもこの樣子に氣がついたのか、默つてしまつた。
『早くきめ給へ。』氷峰は親切に、『それがきまつたら、僕も天聲君などと相談して、一圓なり、二圓なりづつ、君の友人から醵金して見よう。』
『そんなことが實際出來るか知らん』と、義雄は云つて、天聲は氷峰に、氷峰は天聲に、相談をゆづり合ふ樣だと思つたので餘り乘り氣にはなれない。
『第一、有馬君がある。』
『いや、あれは可哀さうだ。』
『それから、天聲君。』

『あれも、今、子供が出來たりして困つてるだらう。』

『僕も、無論、今の場合、君も知つてる通りぢやから、なア――大したことは出來ん。』

九

晩餐をやつて行けと、氷峰やお鈴が勸めるのを辭して、義雄はお鳥をつれてそこを出た。もう、日は暮れてゐた。

默つて、新川水道に添ふて來ると、お鳥は突然、

『うそつき！畜生！』かう云つて、義雄を亂暴にも突き飛ばした。不意を喰らつてこちらは路傍の雪の上へ倒れかけた。それを踏みこたへた時の驚愕と忿怒とがこちらをまた無言にしてしまつた。

お鳥も、こちらにそのざまを見ろと云はないばかりの冷淡な風を見せて、ずん／＼さきへ進んで行く。一つには、例の痛みに耐へられなくなつた樣子である。

二人は別々になつて、義雄の下宿へ着いた。夕飯の膳が一つ出てゐたので、渠は今一つを拵らへて貰つたが、矢ツ張り、例の無關係の樣にして食事を濟ませた。

膳が引けてからも、亦無關係で、お鳥はそのまま横になつて手まくらをしてゐると、義雄は机に兩肱をのせたまま、そばのランプがじい／＼と燃えるのを見てゐる。

じい〳〵云ふ音に、ランプの石油はつづけざまに吸ひあげられるのである。丁度、それと同様、渠は自分のいのちが自分の一と息毎に吸ひ取られて行くのだと觀じてゐた。

『自分はいつのまにこんな無考へになつたのだらう？お鳥にすんでのことで突き倒されるところであつたし、またあの若輩の鶴次郎には』と、今しがた氷峰が語つたことを思ひ出す。鶴次郎は、何か事業上の頼みを受けて、きのふの午前、和蘭方面へ出かけた。そして、廿日ばかりは歸つて來ないと云ふのである。

して見ると、翌日返すからと云つてこちらの時計を持つて行つたのは、返すつもりがなくッて持つて行つたのに相違ない。きのふも、けさも、實は心待ちに待つてゐたのに――

『實に怪しからん奴だ』と、その出發したことを聽いたその場でも思つたが、その姉なるお鈴の手前もあることだから、何も云はないで歸つて來た。都合によれば、あの銀時計をも――近眼鏡までは外せないが――どうかしなければならないかも知れないのに、それをあんな無責任な者に渡したのは、今更らおろかであつた。

さうかと云つて、鶴次郎の留守にその親や兄等を煩はすのは、年甲斐もなく、ただ自分の愚を發表するに過ぎないと考へると、寧ろそのままにして置くよりほかはないとあきらめられる。自分の爲めに、醵金をしてゐると鶴次郎が告げたのも、さう安心させて置いて、時計を借り出すつもりであつた

かも知れない。無論、どうでもかまはないが、けふ、氷峰の言葉に由つて見ても、それがさう運んでゐるわけではない。

『ああ、自分は馬鹿であつた！豐太閤や伊藤公の透き、乃ち、拔けてゐた缺點をいつも指摘しながら、自分も亦いつのまにかその缺陷があつたのだ。』から考へると、自分の肉と靈、言葉と行爲、主義と實生活とが分離して、不一致の度がいよ／＼増して行くのを感ずる。そしてこれは、刹那充實主義の自分に取つては、散漫無氣力な死の影がおほふて來たのだと思ふ。

お鳥を見ると、矢ツ張り、向ふを向いて、手まくらをしてゐる。

『風を引くから、起きたらどうだ？そして、ここへとまるつもりなら、褥を取つたらいいでないか？』から義雄が云つても、かの女は返事もせず、動きもしない。『ふて腐れめ！飽くまで強情な女だ』とは私かに思つたが、どうせ感じの強い病人だからと、叱りつけることはしないで、その枕もとに行き、實は近々歸京のつもりで、準備してゐないでもないと云ふことをうち明ける。

お鳥はこれを聽いて、つぶつてゐた目を見開らき、義雄をじッと睨んだまま、顫える下口びるを嚙みしめ、おほ粒の涙をはら／＼とこぼしてゐる――渠がかの女に隱して、さういふ計畫をしてゐたのが殘念で、殘念で溜らないと云ふやうて。

かの女の心は大抵分つてゐるから、義雄も強いて物を云はせる必要がない。ただ、風を引くのを心配して、

『病院へ歸るなら、早く歸れ。』

『歸つてる留守に、今夜、逃げてしまうんだらう？』お鳥はその聲までが顫えてゐる。

『そんな皮肉は云ふなよ。』渠は笑つて何氣なく見せかけた。自分の逃げるのが――今夜でないとしても――多少事實に近いといふ顔つきをかの女の鋭い目から隱すやうにした。

お鳥は一層しぶとく横たはつてゐる。

義雄は毎晩の通り身づから寢褥を敷いてから、無言でお鳥を抱き起してやると、かの女は半ば自分の力ですツくとつツ立つた。無論、ふくれツ面をして、これも無言だ。

『おほきなからくり人形だ』と云つて見たが、かの女は目を横に向けたまま、なほ口を固く結んでゐる。義雄はそれを自分のかすりの單衣に着かへさせ、重い雛人形の樣に横抱きにして褥に入れる。

渠も亦、どうせ仕事は出來ないと思つたから、一緒に這入る。自分ひとりでは感じないあまいやうな、臭いやうな人間の肌のにほひがぷんとしたが、僅かの間に自分の鼻に慣れてしまつた。

渠は、東京にゐた時から、勞れるまでは、曉がたの三時までも、四時までも、褥に這入らないのが習慣であつた。それが、巡歷旅行から歸つてからは、普通の常識家、健全家の通り、可なり規則正し

く寢起きをすることが段々多くなつて來た。そして何時にでも枕にあたまが當れば、間もなく眠つてしまへる樣になつて來た。もとは、どんなことにも、努力が出來るだけして、そつ上に疲れ切らないでは、どうしても眠られなかつたのと比べると、非常な違ひだ。無論、それは所謂健全家の貪る安眠ではない、然しまたデカダン特色の努力から來る元氣ある疲勞でもない。もう、根抵から、ただ疲勞と衰弱とばかりだと思つた。

デカダンの生粹を以つて標榜してゐた自分だが、今では、その元氣ある道程を終つて、ただその最後の遺物をばかり握つてゐるらしくも自分自身で見える。

『遺物――形骸！』から考へながらも、渠はうと〳〵して、八時の時計の鳴るのを聽いた。そして、お鳥のからだがびく〳〵動くのが傳はつて、度々目をさました。

けふ、雪の中を歩いたせゐで、お鳥の痛みは非常な痙攣を伴つて來たのであらう。獨りでじれツたさうに苦しんでる樣子だ。そしてその苦しみがこちらにも傳はる度毎に、渠も亦――經驗ある思ひやりから――同じ苦しみをしてゐた。

『あ、あツ』と最後に叫んで、かの女はつッ立ちあがつた。

『どうした？』義雄もはね起きる。

『死の――一緒に死の！』

全く血の氣がなくなつて、消し忘れたうす暗いランプの光りにかの女の額の眞ツ靑な色が見える。こちらには、それが、實際、死の命令者たる權威でもあるやうだ。

お鳥が着物を着かへるので、義雄も手早く洋服をつけた。そして、下宿屋を一緒に出た。

空には、なほ雪を含んでゐるらしい。どす黑い雲の層が、地下に於ける石炭層の如く、幾重にもかさなり合つて、おもくこの大地に迫り、その間々から射照らす舊暦八日の月は、宿とさし向つてる病院のペンキ塗りの高樓にその光りを鋭くぶちつけて、寒い風も透かして見える樣だ。

お鳥はからだを縮めて、人通りのない積雪の中で立ちどまり、自分の兩手を、胸のところで、衣物のうちに握り合はせてゐるやうだ。

『一緒に死なう』と云つてから初めての聲を出して、

『どこにしよう？』

『豐平川の鐵橋がよからう。』義雄は斯う咄嗟の間に答へたが、自分の足は既にその方へ向いてゐた。そこは神居古潭の釣り橋のうへででも思ひ出したところだし、また最近には、自分が雪の屋のゐる中學校へ演說しに行つた時、そのそばを通つて知つてゐるところだ。

『…………』お鳥は素直について來る。

『鐵橋』と出た强い發音が渠に、今一度、人生の充實した響きを聽かせて吳れた。

渠は、今や、突然招集の命令を受けて、死の寢床から起き出でた靑鬼の樣に身づから思へた。生きてゐて面倒な女が渠から無關係に遠ざかつて行くのを、これ幸ひと、その死に場所まで案內するつもりである。途々考へて見ると、自分がかの女を棄てて逃げようとしたのも、自分の思想的生活に無關係になつて來たからである。それがおのれから逃げて吳れるのだ。これほど都合のいいことはない。それだけにまたこちらの顏も、雲間を漏れる月の光りに照らされると、眞ツ靑になつてるのだらうと思はれる。

月がかげつたり、照らしたりする雪道を進み、大通りを橫切つて南一條、二條を出た。まだ大きな店々の電燈が街を照らしてゐて、人通りはあるが、知り人のない二人が誰れにも認められないのは、渠が思ふに、丁度、もう、形のない死神と亡靈との並んで通つてゐるのが人間界のものに見えないやうなものだ。

渠は女と互ひに少しも口を利かない。

この無言の影二つは狸小路を堀り割水道に出て、それに添ふて少し南へ行き、それを渡つてまた東へと步いて行つた。

つき當つたところが豐平川で、それを札幌から豐平町へ渡す鐵橋は、昨年のおほ水――札幌をも半ば

浸水し、石狩川の沿岸はすべて大害を被つた——の時、大破損をした。まだそのままにたつてゐるので、別に木製の假り橋がかけてある。義雄の日あては假り橋の方ではなかつた。

　渠はこの時、過去の忙しかつたあらゆる直接經驗を旅行として思ひ出した。天龍川の鐵橋——大井川、富士川の鐵橋——利根川、阿武隈川、北上川の鐵橋。十勝川、十勝石狩國境の山中、空知川、石狩川等の鐵橋——記憶の耳には、がう／＼云つて、列車が通り過ぎて行く。そして列車の通り過ぎた跡は、すべてまた義雄の通り過ぎた跡だ。殆ど日本中の、汽車の窓からのぞかれる風景が、最後の幻影であるかのやうに、すべて一度期に映つて來る。

　まるで、あツと云つて自分が高いところから落ちて行くその瞬間に、ぱツと火ばなと咲く一生の思ひ出のやうだ。

『これでは自分が死ぬのだ！』斯う思ふと、然し渠は自分の死を案内してゐるのではなかつた。丁度幸ひに死なうと云ふ者を案内して、それにおつき合ひをしなければならぬなら、その時自分も死なうと云ふ覺悟なのである。矢ツ張り、さう云ふ風にして來たる死は決してゐたのだが——。

　この鐵橋は、無論、鐵道の鐵橋ではない。末は石狩川にそそぐ豐平川を、札幌區から豐平町に渡す人道である。然しその構造は汽車ががう／＼云つて通るのと同じ構造だ。つまり、義雄に東京の吾妻

橋を思ひ起させるのである。

するど、ふと、渠は肝心のお鳥をさし置いて、曾て本當の吾妻橋の上で、――自分の敬意を戀愛に轉じて思つてたをんなと別れたことがあるのを思ひ出す。それが友人の細君になつて、今、仙臺に家を持つてゐる。渠はこちらへ來る途中で、その家へ立ち寄つた。そして、歸りにも、寄つて見る氣でゐたのである。その女とその友人とがいよ〳〵結婚するといふ日の前夜、渠は二人と共に吾妻橋の上で別れの言葉を述べ合つた。それも、お互ひに變な感じに打たれた。半時間ほど皆がただ無言でつッ立つてゐたあげく、おの〳〵一言づつしか口に出し得なかつた。

『もう、別れようか？』

『ぢやア、歸らう。』

『どうぞ、ねえ、あんまり大きな聲で笑はない樣に――。』

女はこちらの特別な高笑ひが餘ほど氣になつてゐたのであつた。然し渠は、それ以前から、いろいろた失戀の結果、それを身づからまぎらせようとして、わざと高く笑つてゐたのが、しまひには自分の習慣になつてしまつてたのだ。

『あれは、秋であつた――千住の方から、圓い澄んだ月が登つたツけが――』然し、それはもう前世のことのやうで――今は、早や他界のこなたに來てゐる樣な冷たい感じで、渠は佇ずんでゐる。

どす黑い層雲は、動かない樣でも動いてゐるので、冷やかに笑ふ月の西に傾くその一端を見せたり隱したりする。その度每に、二人に殘る天地が消えたり、現はれたりする。

義雄には、その大體の形勢はよく分つてゐる。第七師團第二十五聯隊の兵營所在地なる月寒は、この橋を渡つて、約一里のところにある。それは區の東南に當つて見えないが、中島遊園の樹木の黑い影を左りにして、西方に向ふと、眼界は遠く藻巖、圓山、天狗、手稻の諸山まで開らけ、豐平川は、その南から東北に向つて、幾多の川洲を現じてゐる。

そして、六七十間の鐵橋は三ケ所の土臺——煉瓦を以つて巖丈に築きあげたの——にささえられてゐたのが、中央の土臺が昨年の洪水によつて掘り起され、川下に向つて傾いた爲め、鐵橋はそこから中斷し、上したに二三間の喰ひ違ひを生じた。こちらからの端づれが高いままで、あちらからは、もし渡つて來ると低くなつてゐるので、土臺石につき當つてゐるのだ。これは、こないだも、演說に行つた時、車の上からよく見て置いた。

義雄は、この中斷した橋の喰ひ違ひに於いて、その土臺石を圍んで、深い水が渦卷いてゐるのをさき頃見たと想像してゐる。そして、そこへお鳥がほうり込まれれば、大丈夫溺れて死ぬと考へてゐる。

雪の降つた跡でもあり、夜は段々更けて來たので、向ふの假り橋を提灯の火が一つ渡つた切りで、

幸ひに人通りは絶えた。

聽えるものは、鐵橋の上構造に當る強い風の響きばかりで――天候は、宿を出た時よりも險惡になつてゐた。周圍に近い人家もなく、また風防林もないので、橋のうへはそらに向き出した。月はくろ雲に隱れてしまつた。そして、その雲からいよ〳〵雪がちら〳〵やつて來た。

義雄の遲い歩みが橋の上に進むと、お鳥は一間ばかり離れてついて來る。いづれも無言だ。そして、その無言の影二つは、歩一歩、川なかのうへへ近づくのである。

雲の切れ目から、月がちよツと橫ざまに照らした。その照らしにはツきりと映つたのは、數丈高い空間に鐵材の構造が壟斷された鼻である。

その上に義雄は達してゐて初めて自分の心のおそろしさが分つた。同時に、下を見て目がくらつくと同時に、吹き飛ばされさうな風に自分の足をすツかり踏みこたへた。そして、再び下をのぞいて見ると、水があると思つたのは大したことでもなく、別に深くもなかつたかして、その上を平均してゐる雪の色が見える。

『ここぢやア、とても死ねまい。』獨り言のやうに云つて、渠はかの女があとから進んで來るのを見た。

『……』お鳥にはそれが聽えなかつたらしい。而もをかしなことには、水に濡れることをでもよけてゐるかのやうに、兩手で以つて衣物の裾の兩端をはしよつてゐる。

『………』義雄もただじツとのぞき込むやうにしてかの女を避けて通した。

かの女は壟斷された薄暗の鼻へおづ〳〵と進んで、『待つて下さい』と云ふ風で、あぶなツかしさうに少し腰をかがめて、向ふの下の方を見て、この鼻の幅だけを、右へ行つたり左りへ行つたりしてゐる。

『おれはこツちにゐるぢやアないか』と、義雄は云はうとした。が、ふと、氣が附いたその一瞬間に自分の胸が煮えくり返つた。かの女は和歌山縣の小學校で同僚としてくツ附き合つたが、どすかおん坊の血統だと云ふ評判を聞いたので、兄の不承知をしほにその男を——最後の夜を夜ッぴて泣き別れたと、かの女はこちらに白狀したことがあるが——棄てて來た。その男を、矢ッ張り、何かに附けて一番思ひ出してゐたのをこちらは知つてゐるが、こんなところでまたかの女は思ひ出したのだらう。洪水があつた時など、新らしく持つた家が水につかつたので、二人して夜、あぶない橋の上を手を取り合ふことも出來ず、——別々に這ふやうにして渡つたと云ふ。かの女が東京で一度女優になる氣でゐた時、こちらの前でその場合の樣子を獨りで試みに演じて見せた時にも、同じやうに裾をはしよつた。かの女は、今また、それをこれまでにも云ひ爭ひなどの時に起つた精神錯亂のうちに演じてゐるらし

い。これは渠が時々――時によると、二晩もつゞけて――見せられたかの女の精神錯亂の最後だらうと思はれた。

『要吉さん、渡して』とお鳥はさながらもとの男に實際にからだを托すやうにして、とツ鼻から手とからだとを延ばす。

『あぶない！』から叫んで、義雄はかの女に抱き附いた時は、然し、もう、どうせ死ぬんだと覺悟してゐた。

二人は、抱き合つて薄やみの中を落ちた。

義雄はこの場に、自分の一生涯にあつたことをすべて今一度、一度期に、一閃光と輝やかせて見た。然しそれは下に落ちるまでの間のことで、――落ちて見ると、溺れる水もなかつた。怪我する岩石もなかつた。この冬中の寢雪として川床に積み重なつた雪のうへだ。

二人は抱き合つた手を放した。そして、別々に起きあがつた。

お鳥が自分の肩から下の雪を雨手でふり拂つてゐると、義雄はまた鳥打ち帽をかぶり直し、自分の洋服のをふり拂つてゐる。然し、月はもうその光りを見せる隈がないほど、そらは一面にかき曇つて、風がおほひらの雪をぼたり／＼と二人の顏に投げ打つのである。

川床を札幌の方へ出るにはどうしても一つの細い流れを渡らなければならない。お鳥を脊中に負ぶつて、義雄は編みあげ靴のままその流れをざぶ〳〵渡つた。

川を出てからも、矢ツ張り、無言で、歸途を急いだが、お鳥は、ふと、降る雪の中に立ちどまつて、手を前髮の上へやつて見た。そして、動かない。

『どうした？』義雄が先づ聲をかける。

『櫛がないぢやないか？』かの女は泣き聲だ。きのふ、東京から屆いた蒔繪の櫛を云ふのだ。

『身代りになつたのだらう、さ——また買へばいい。』

『金がないのに、買へやせんぢやないか？』

『そんなこともないだらう。』

『買へやせん！買へやせん！』からだをゆすぶりながら、『探して來い！』

『馬鹿を云ふな！』かう、義雄は叱りつけた。そして、さくり〳〵と積つた雪の中をさきに立つて急ぐ。

餘りひどく降つて來たので、渠はインバネスを脫いで、かの女にかけてやつた。

下宿に歸つた時は、かれこれ二時頃であつた。たて寄せてあるがらす戸を開けて這入つたが、家のものは皆寢てゐたので、渠等に何ごとをも感づかれずに濟んだ。

渠は新たに第八章『獨存自我は神の如き手段にあらず』といふ項目に筆を執つたが、論敵は故綱島梁川（義雄はその生前に直接に攻擊したのだ）の淺薄な宗教論と大して違ひのない形式を應用してゐること。プラグマチズムの實用眞理說はまだ悲痛な刹那の一元的內容を十分に說明することが出來ないこと。『極端な個人主義にして極端な國家主義と合致する』義雄自身の『國家人生論』を引證して、獨存自我の出現は威力にあることと。『ニイチエは神をぶち毀したが、自我なる物を充實させることが出來なかつた。渠は悲痛に重みを置いただけ、その自我は多少內容的になつたが、ただ分裂的自我にちよツと威勢を附けたくらゐに過ぎない』こと。乃ち、ニイチエは『積極的自我の獨存的價値には思ひ及ばなかつた』こと。などを書いた。

第九章『論者とカライルと僕との相違』といふ項目を書き出す時、午前五時が鳴つた。お鳥を見ると、疲れてしまつたのか、たあいもなく眠つてゐる。

『まア、そツとして置け』と、義雄はつづけて筆を運び、カライル、ショペンハウエル、ニイチエ、ツルゲネフ、メテルリンクなどは耶蘇教國的感化を脫し切れないから、どうしても抽象的傾向を有することを指摘し、『近代の哲學的傾向が、物の分析をやつても、ある程度まで內向的を重んずる樣になつたのは嘉すべしだが、何等の能力もない死物もしくは虛無（といふ抽象物）に逆襲的壓迫力があるかの如く見なす思想が盛んになつたのは、生活の法則と思索的論法とを革新すべき任務ある僕等の注

意して反對すべきところである』と書いた。
この革新――これが威力ある自我の活動的實現になるのだ。渠は身を以つてそれに任じてゐたのだと思つてゐる。

第十章、『特別發現なるわが國の神代生活と現代的生活との比較』に至り、初めてかの『氣象考』の陽根中心說をも紹介した。そして、その說が豫想する肉靈合致の心熱的生活――『思想的生活』と命名してある――は、ヘブライ人やギリシヤ人の最古代には強烈に出てゐないが、わが國の古事記を研究して見ると、それが殆ど現代的なほど強烈に實現されてゐること。本末をあやまつてゐる今の神道者流が、もし他日一隻眼を開らく時が來たら、十年前の單純な日本主義にも奮起したほどなのだから、この義雄の國家人生論的神道の新哲理に奮ひ起つだらうと云ふこと。そして、思想と實行とは別々な生活ではない、また別々になつてはならぬのだといふこと。

第十一章、『強烈生活の本質と空影とを混ずる勿れ』に於いては、人生の心熱的態度は刹那主義に結びついて、初めて義雄の新說となること。『合致もしくは統一は強烈生活に於ける事實であつて、目的もしくは手段でない』こと。『分化や分業は、強烈的存在の影であつて、決して內容ではない』こと。刹那的燃燒の有無が萬事をその場に可否してしまうこと。強烈孤獨の悲痛生活を自覺するものは、刹

那の自己を、いつも、たとへば、『男女間の關係を最も極度に追行した時』の如く適切に感得してゐるといふこと。

この最後の論證を、男女間のことは殆ど知らないと世間から云はれてゐる論敵には、殆ど解し得られまいと思つて、義雄は微笑した。それと同時に、自分は妻に就き、お鳥に就き、また最近は敷島に就き、耽溺的努力を隨分經驗して來たことを思ひ浮べる。

然しその耽溺はまだ滿足を與へなかつた。と云ふのは、自分の自我心はそれに滿足するには餘りに熱刻、冷刻、もしくは深刻であつたからである。然し、兎に角、弱劣者でなく、優強者としてとほつて來たのだと思ふ。

ただ現今のお鳥の樣なものの爲めにおほかた心中までしかけたのは、優強者としての努力にゆるみがあつたばかりの間違ひだ。死といふ無内容物の魔がさしてゐたのだ。この論文がかうして書ける以上は、もう、大丈夫だ。自分には思索も實行だ。そして、實行出來ないことは思索にも這入るべきものでないし、思索にも這入らないなら、空物だ。宗教家の形式、禪家の一喝、神祕家の沈默、すべてこれらは實行的自我を逸する、否、無にする所以だと。

から勇氣が盛んになつたに乘じて、なほ、第十二章『利己心は優強者の憚るところなき特色』、第十三章『優強者政治の必要』、第十四章『優強威力者の幻影は現實なるべき表象主義』といふ樣な項目を

擧けて見た。その他に、まだ〳〵澤山書くべきことがある。

　然し義雄はここまで一氣呵成に運んだ筆を中止した。曉がた六時の時計が鳴つたのである。宿の臺どころでは、下女が起き出たらしい。そして、渠の神經はます〳〵冴えて來るが、あたまは疲勞して考へがまとまり兼ねて來た。

　それでも、お鳥の青ざめた顏をして熟睡してゐる寢床へは、何となく、いやな樣で、這入りたくない。

　風でも入れようと、窓のカーテンをあげると、そらは晴れてしまつたのが見える。いツそ散歩に出ようと決心し、獨りでそツと室を出た。

　積雪を渡つて吹く朝の風は非常に寒い。然しその新鮮な空氣を呼吸して散歩するうちに、義雄はあたまの遲鈍を恢復した。遲鈍が恢復すると共に、全身に自分の氣力が行き渡り、男性的慾望が身內に燃えて來て、寒いと思つた風も自分の顏に當ると、直ぐあツたかみを感ずる樣になつた。そして、『若々しい北海道！活動の好時期！』かう云ふ考へを思ひ浮べると、自分の想像はまだ踏みよごされない雪の上を渡つて、多くの木挽き等が雪の深山に椴松、蝦夷松の切り倒されたのを挽き、多くの人夫等がそれを橇で引き出すところに飛んで行く。

　健全なオゾンのにほひ、新らしい木材の音までも近く聽える。渠には、樺太トマリオロの奥なる石

炭鑛を見に行つた時、初めて意識して吸つた強いオゾンのにほひとそれが與へた元氣とを、いまだに忘れられない。

『北海道や樺太へは、然し、出直すより仕かたがない。』から考へて、義雄は大通りなる黑田伯の銅像を横切り、開拓碑の前に立つて、その石文を讀んで、自分自身とも思はれる北海道なる物の年齡を數へて見た。

二

お鳥はやッと八時頃に目をさました。そして、義雄のゐないのを見て、飛び起きて『逃げたのだらう』と考へたさうだ。然し、枚數の倍になつた原稿がそのまゝにしてあり、革鞄にも手をつけた樣子がないので安心し、顏を洗つて、病院に歸つたと、かの女が再びやつて來た時にこちらへ笑ひながら打ち明けた。そしてなほ續けて、相談らしく語るによると、かの女の留守に一つの手紙が來てゐた。寫眞學校の先生からのである。さきにちよッと直接に交渉があつた男生徒が、お鳥の兄(由仁にゐる)にも交渉したら、本人さへよければばとの返事だ。いよ〳〵お鳥を貰ひたいから、直ぐにも東京へ歸つて來て貰ひたい――病氣などは(勿論、今の樣な病氣とは知らず、まだ脚氣ばかりだと思つて)東京で治療させてやるからと云ふのだ。これをしほに、お鳥も歸京することに決心したらしい。

『まことに結構でしよう。』
『またそんな冷かしを！』かの女はこちらを例の如く攫んでゆすぶつた。
然し、まだ旅費の方が出來ない。義雄の衣物を賣つたのは下宿の拂ひになつてしまうし、病院から拂ひもどして呉れる分も僅かしかない。渠には、また、もう、賣り拂ふものがない。どうせ別れるかの女の物を今更ら曲げさせるのも面白くない。
お鳥のセルの被布が六日の朝出來るから、その日を出發ときめて、義雄は氷峰に相談して見た。すると、
『醵金でもしようかと思つてをつたが、君がいつ歸るか曖昧であつたから』と云ふ。
『いや、あの時はあいつがゐたから云ふのに困つたのだ——都合によると、こツそり、自分だけかへらうかと思つてゐたから。』
『然し、まア、かう急になると、僕等の方ではとてもまとまりかねるから、先づ香牛君に頼むのが早道だぞ。香牛君は或道會議員から少し出させてもえいと云ふてをつた。』
『兎に角、さうでもして、賴まうよ。』
『僕や天聲君も一圓や二圓は出さう——今の場合、僕は、なア——は、は、は』と、苦笑する。氷峰は雜誌どころか、自分自身も亦非常に行き詰つて來たのである。

『相見互ひだよ。』義雄は氷峰と自分とを慰めて置いて、呑牛を訪ふて頼むと、明日まで待てば、道會議員から出させて見よう――然し當てにしないで、他をも奔走して見給へとの返事である。
告別に北劍のところへ行くと、相變らず酒を飲んでゐる。相手は牧草培養者だといふ某氏だ。北劍はこの人とこちらとを引き合せ、
『このた、た、田村君もぼ、ぼ、牧草を、や、やりたいと、ゆ、云ふてをる』と說明する。
義雄はもうそれどころではない。けふしか來られないかも知れないので、歸京の日と大體の時間とを知らせ、
『また會ふ時もあらうから』と云ふ。
『ぼ、僕も、東京へ、ゆ、行くよ――ら、來年から、しゆ、出版屋をやるかも知れん。』
『それも面白からう。』
『その時は――君にも――世話にならう――ところで、き、君、君は歡迎會のあとで直ぐ、か、歸れば花であつたが、なア。』
『僕もさう思つたが、僕は歡迎されたツて、實はありがたくもなかつたのだ――寧ろ、北海道で苦しめられても、何か一つ仕事を發見したかつたのだ。殘念だから、また出直すかも知れない、さ。』
『お氣の毒でした、なア、本當に』と、そばからお豐さんが同情して吳れた。

その足でつゞいて遠藤の家を見舞つた。

渠は今檢事局の取り調べを受ける身となつてゐた。と云ふのは、今度の道會で、多數黨が勝手次第の決議をしたので、少數黨の新進辯舌家なる遠藤は義憤を發し、演說壇上に飛びあがつて、議長を椅子から引き摺りおろした。そして、毆打罪に問はれてゐるのである。

たださへ忙がしい人が、またその跡始末でここ二三日滅多に在宅しないと云ふので、義雄は卷き紙と封筒を借りて、歸京の日と世話になつた禮とを書き殘した。

遠藤と同じ町に、黑川信也といふ道廳の技師がゐる。その人の細君お宮さんは義雄と昔からの知り合ひである。お宮のもとの所天は義雄の親友で、而も一緒にその越後の所有地で養蠶事業をやつて、それを生活の基礎にして、共に文學に從事しようと云ふ約束をしてゐた。それが爲めに、義雄は信州に於ける有名な養蠶學校へ這入る準備までした。然しその友人は肺病で間もなく亡くなつた。そして、お宮は、その頃、未亡人として髮を切つてしまつた。十五六年前のことだ。

その後、お宮は自分の所天の兄と結婚した。それが黑川だ。もとの所天がまだ生きてゐる時から、そのおとなしい兄に相談を持ちかけてあつたのだといふ惡評をするものもあつたが、兎に角、圓滿な家庭で子供も五六名できてゐた。

黑川へ行つてからは、お宮さんはこちらと文通によつてもとの所天を忍ぶことは度度であつたが、

直接に會つて話したのはこちらが石川縣の金澤へ尋ねて行つた時ばかりであつた。その時、かの女はこちらに、

『あなたの樣な人は奧さんを持つても、直ぐ棄ててしまうだらうと云ふのが、女がはの評判でありましたが、却つて反對で、圓滿に行つてるるのは結構です』と云つた。

その圓滿が今日では全く破れてゐる。それだけ、義雄は年を取つて、ずうしくなつて來たのだと、身づから考へた。そして、その代り、氣分はまた段々若くなつて來たと自信してゐる。

黑川は農學士で、今、道廳古株の高等官であつた。義雄はお宮さんと暫らく文通が絕えてゐたから、ここにゐるのを全く忘れてゐたので――然し、きのふ、ふと思ひ出した。實を云ふと、誰れにか金を借りたいと云ふ苦心が、ふと、そこに思ひ及んだので、そのゐどころを調べて置いたのである。

『奧さんに云つて下さい、わたしは田村です』と、出て來た下女に云ふと、その聲を聽いて、かの女は飛び出して來た。

『來やうが遲かつたの、ねえ――うちでは、早く來さうなものだと云つてゐたんですよ。』

『實は、濟みませんが、忘れてゐたのです。』

『薄情、ねえ――メール新聞では每日の樣に拜見してゐましたが、どうして來ないのか知らんと思つてゐました。』

『濟みませんでした。』
『いつ旅行からお歸りでした？』
『もう、半月も前に――。』
『さうでしたか？尋ねて行つて見ようかとも云つてゐたんですが、まだお留守ではとも思つて――まア、おあがんなさい。』
『暫らくでした、ねえ』と、義雄は靴を脱いで、客間へとほつた。
黑川もちよツと挨拶に出たが、今夜出張に出る準備があるからと斷わつて、直き引ツ込んでしまつた。
『何から話していいやら』と、お宮さんは、前後させながら、もとの所天のことやら、巣鴨女學校の不始末な終りやら、そしてこちらはまた今回の事業の失敗やら、旅行中のことやらを、話したり、聽いたりした。そして、こちらが自分の家庭のめちや〱になつたことから、お鳥のことなどを正直に話すと、『矢ツ張り、ねえ』と、氣の毒さうな顏つきをして、『詩人と云ふものは、どうしても、一人の女で滿足出來ないのでしようか？』
『さうきまつたものでもないのでしよう。』義雄は苦しい微笑をしながら、『女には男の機嫌を取るのに下手なのが多いのでしよう。』

『いくら機嫌ばかり取つても、滿足しなければ仕やうがない、わ。』
『僕等を滿足させるだけの、つまり、深刻な女がゐないのでしよう。』
『あなたは隨分皮肉になつたの、ねえ。』かの女は血の循環のよささうな頰に兩ゑくぼを見せながら、
『メールの天長節號に出たあなたの「記憶」も隨分皮肉だ、わ。』

『さうですか、ね』と云つて、義雄は考へた。『天長節に關する一記憶』には、自分の子供の時のことが書いてある。この祭日に、小學校の敎員どもが式を濟ませると、料理屋に集つて一杯飮み、その一盃機嫌で市中を鼓や太鼓や笛や蛇味線を合奏して練り歩いた。それを自分は人の敎師として不都合だと思つた。しかし後ちには、また、敎員連の合奏やそんな遊びも、人間として、當り前のことだと考へる樣になつたと云ふことなのである。耶蘇敎を奉じて來たここの夫婦には、それが最も皮肉に取れたのだ。

然しその話を義雄はそれツ切りにしたので、かの女は、今度は、渠が一緖に旅行した遠藤その人の細君とはかの女が同一の敎會の信者であること。その敎會で、けさ、獨逸婦人を細君にしてゐる農科大學の敎授が、その二歲の子供の葬式を行つたこと。などを話す。それから、
『うちの子供を見て下さい――一號から六號まであるのですよ』と云ひながら、かの女は六名の子供

を順番に並べて見せた。そして、これが何雄、これが何子と、一々その名と小學校に於ける年級とをこちらへ云つて聽かせた。

義雄はかの女が殆ど年兒か、一年置きかに出産しながら、相變らず若いのに感心した。貴族院の長者議員をしたこともある家の娘で、氣がのんびりしてゐるのも一つの原因であらう。また、おとなしい所天に心配もなく待遇されてゐるのもそれであらう、と。

子供は一人びとり出て行つた。

かの女は林檎をむいて呉れながら、出してある寫眞帳をこちらに開らかせ、寫眞のうちで義雄が知らない人々を説明して行く。とツ端に、義雄の亡友で、ここの主人の弟で、お宮さんのもとの所天が張りつけてある。

『もう、ことしで十五年ですから、ねえ。』かの女はそれをこちらと共に見ながら云ふ、そして、さう、昔の樣な感慨も見せない。

『この人がゐて呉れさへすりやア』と、義雄は然しもとの親しみを思ひ出して、『僕の生涯も無事に行つたのか知れません。』

『ほんとに、ねえ、惜しいことをしました、わ。』

次ぎに、巣鴨學校の美髯校長がゐる。お宮さんともとの所天、また今の所天との關係には、この校

長は忘るべからざる人である。

『あの人も困ります、ねえ、ああ評判が惡くツては。』

『なアに、あれが本色で、もとは僞善者であつたのかも知れない、さ。』

『奥さんがなくなつてからですもの。』

『さうでもなかつた樣ですよ。』から云つて、こちらはこのお宮さんとも、校長でありながらいろんな評判のあつたことを思ひ出してゐた。

次ぎのはかの女と今の所天とが盛裝して寫つてゐる。まだ子供が出來なかつた時のらしい。その他に、義雄の直接に知つてゐるのもあるし、また今初めてこんな人がと思ふのもある。かの女の親戚ばかり集めてあるページもあるし、ここの子供ばかり寄せてあるところもある。

『詩人は詩人同志並べて置くのがいいと云つて、並んでゐるのがそこにありましよう』と、云ふので、義雄がそこを見ると、故磯貝雲峰並びに故北村透谷と共に、義雄の若い時の寫眞が張り附けられてある。

この三人には、その下に、特に姓名までが書きつけてある。

『この時から見ると、あなたも年を取つたの、ねえ』と、かの女はじツとこちらの顔を見る。

『あなたは相變らず若いです、ね』と、義雄は返した。『僕もこの頃では氣分だけは若返る樣です、第

一、女の若いのが好きになつて來たのを見ましても。』
『あんなことを！』かの女は美しい顔をやわらかにしがめる。
義雄の心はかの女の久し振りの、やわらかな、あツたかい樣な言葉に接して、その場では大分心が落ちついた。その代り、圓滿無事を樂しんでゐる家庭に向つて、その氣分を害する樣な旅費の立て換へを頼むほどの勇氣は出なかつた。

二

五日の午後、呑牛が受け合つたのが出來たか、どうか、見に行つた。すると、きのふ、けふは道會のごた／＼でとても會へないから、あすの朝にして呉れろと云ふ。出來ても、五六圓のことだからと云ふ注意もあつた。
然し今は、もう、それより外に當てがない。あすは多分出來るのだらうと思つたから、義雄はそのつもりで、みんなに歸る報告をしてまわつた。
六日の正午頃、また呑牛を訪ふと、出すことだけは向ふも受け合つたが、けふはとても受け取れないと云ふ前置きで、
『けふ、どうしても、歸るか』と、念を押す。

『どうしても、けふ、歸りたい――みなにも、けふの六時に出發と云つてあるから』

と、義雄は答へる。

呑牛は考へてゐたが、細君のお繁さんに命じて、衣物か何かを質屋へ持つて行かせたらしい。云つてゐただけの金を義雄の前に出した。

『どうも濟まないが、この場合、惡からず』と、義雄はそれを受け取る。

『どうせ、あすは受け取れるのだから』と、呑牛は餘り氣にもかけてはゐなかつた。

＊　＊　＊　＊

その歸りに、義雄は南三條西七丁目の角でお宮さんに會つた。雪が少しちら／＼してゐたが、かの女はコートを着てゐるばかりで、傘はもつてゐなかつた。

『どこへ？』かの女は立ちどまつて、こちらの向き出しの洋服で見すぼらしい姿をしてゐるのをながめてゐる。渠のインバネスは、きのふ、氷峰の入用なので、返してしまつたのである。

『歸京費を拵らへて來たのです』と苦笑する。

『そしていつ歸るの？』

『今晩の六時出發です。』

『では』と、ちよツと考へて、『見送ります、わ。』

『いゝえ、それには及びません、お子供もあるのですから。』
『それでも、氣は氣ですから、ねえ。』
『では、御隨意にして下さい。然し雪が降るかも知れませんから、遠方をわざ〳〵御見送りにも及びませんよ。』
『兎に角、行けたら、行きますから――。』
『また、今度お目にかかります。』
『…………』お宮さんは、こちらが行きかけても、矢ッ張り、こちらを向いて立つてゐる。そして突然のやうに最後の言葉を云つた、『あなたはいつも出し拔けに來て、出し拔けに歸るの、ねえ――今度もゆツくりお話も出來ないで！』
『さうです、ねえ』と、こちらは寂しい微笑になつて、『放浪者ですから。』斯う答へて別れたあとまでも、何となくかの女の昔からの親しみある言葉に心は引きつけられてゐた。

* * *

お鳥は病院を引き拂ひ、義雄の下宿にセルの被布を取り寄せ、それを着て、今一度、知り合ひになつた入院患者等へ別れを云ひに行つた。
義雄は車で時間を少し早く出て、先づ有馬の家に行つた。その途中にあつたアカダモの親しい木

――それは數日前切り倒されてあるのを見た――は、もう、どこへやら持つて行かれて、跡かたもなかつた。

勇は入れ違ひに義雄の方へ行つて留守であつたので、義雄はお綱さんにいとまを告げ、『氣象考』を返却した。それから北海實業雜誌社へまわつた。そこで車を返した。

氷峰はこちらを待つてゐた。お鈴さんも別れを惜しみに來た。

『早く結婚なさいよ』と、義雄がかの女に云ふと、

『まア』と、氷峰が引き取つて、『雜誌でもうまく行く樣にならねば、なア。』

義雄はズックの革鞄一つを提げて、一と足さきにそとへ出た。革鞄一つが荷物のすべてだが、その中には、樺太と北海道とに關する調査、見聞、感想を控へた手帳と、『悲痛の哲理』の前半六十枚ばかりとが這入つてゐる。この二つは渠の放浪を自分に具體化させる記念でもあり、所得でもある。

雪は殆ど人のからだが見えないほどに降り頻つて來た。渠はそれが自分のこの地に於ける最後のなさけない姿を隱して吳れるやうに思へた。

停車場に來て待つてゐると、先づ天聲がやつて來た。そして、もしあの百萬坪の件が成功すれば、こちらにも分けるからと云ふことを念押した。

そのうち、氷峰も呑牛も來た。

勇が來さうなものだと思つてゐるところへ、お鳥が車に乘つて、大きな行李のほかに、風呂敷包みの大きなのや、林檎の包みなどを持つて來た。そして、義雄に向つて、こツそりと、

『早く來ようとおもても、あの有馬のおやぢがまた下らんことを云ふて――しかづめらしく、分り切つたことをくど〳〵云ふてたの。』

『そりやア、お前だけを時間に後れさせようとしたのだらうよ。』

『いやアなこツた！』お鳥は、まア、よかつたと云ふ風をした。『見送つて來ないとよ。』

『どうして、さ？』

『田村が自分の忠告を容れないのだから、東京の細君に對しても申しわけがない。もう友人でないと、さ。』

『ぢやア、ほうつて置く、さ。』

『あんな無謀な氣儘者は北海道の雪に凍え死ぬくらゐの目に逢ふて見なければ、直らんと、さ。』

『もう、それだけでも十分だ。』義雄は餘り氣にはかけないで、『お前と手を切ることを云ひ置いて來なかつたから、あいつも心配して呉れてゐるのだらう。』

然し氷峰や天聲の餞別を入れても、二人の東京まで歸る汽車賃は出ない。義雄は仙臺までの三等切

符を二枚買つた。
お宮さんを今一度見たかつたが、ついに來なかつた。
三人の友人に送られて、義雄はお鳥と共に汽車に乘つた。
強い風はおほひらの雪をプラトフオムや車窓の中まで吹き込んで來る。電燈の光りが達する限りは、もう、一尺も積んでゐるのが見える。
汽笛は鳴つた。友人等は帽子を取つた。汽車はどん／＼降る雪の下をくゞつて進み出した。
かうして、義雄は、親しみの深くなつてた札幌から、舅の好かない婿養子の如く、追ひ出されたのである。
渠は、自分の乘つてゐる汽車のがた／＼云ふ響きに、たださへとがり切つた神經を摩擦せられ、今日までの斷橋的經驗を目の前に思ひ浮べて、足もとから追つて來る寒氣に、却つて、お鳥のからだの熱よりも一層あつい熱をおぼえた。

十三

お鳥と一緒に長い旅をすると云ふことは、義雄に取つて、あとにもさきにもこれが初めてである。
そして、これが若し東京に於いてかの女との關係のつき初める時に於けるかの鎌倉行きのやうなもの

であつたら、若いものに對する好奇心やら可愛みやらでまた自分の胸も若返りの樂しみに一杯になつただらう。そして、鎌倉の宿に於いてかの女が如何にも妖艶な微笑を以つて、

『ほんとに學校へ入れて呉れる』と念を押したのを、そのうへから顔ぢかく見おろした時、自分は――今思つても、多少强壓的なこわい顔をしてゐたらう――ただ一と言、

『無論です』と答へたツけが。――その時は全くうぶな女を持つたつもりであつたのが、そのあとから段々といろんなことが發見されても、ます〳〵自分の愛情はかの女にからまつて行つた。

が、今や自分らは別れる爲めに東京へ向ふやうなものである。いや、別れる爲めに、東京へ行つても自分は早くかの女の病氣を直してやらねばならぬのだ。そしてその厄介な入院料を再び出せるか、どうかはあらかじめ分らない。成らうことなら、何とかしてそれを御免をかふむりたいと私かに考へてゐる。

けれども、また、その別れが一ヶ月さきに來るにせよ、今、まのあたりであるにせよ、自分らがいよ〳〵別れてしまうまでは、自分でかの女に對する愛は――然らざれば、かの女に對するこれまでの苦勞した思ひ出は――まだ自分の心に十分殘つてるやうな氣がする。これは、然し、もう、自分からかの女へ積極的には發表して見せたくもない物であつた。

夜でもあり、またどこまでも雪が降つてたので、お互ひにそとの景色などに氣をまぎらせることも

できなかつたけれども、自分らは殆ど全く汽車中での言葉はかはさなかつた。

『どうせ歸りにはゆツくり立ち寄つて見るから』と思つて、行きには、車中から見て通り過ぎた駒ケ嶽やそのあたりの奇麗な沼も、とう〱雪やみのうちにまた通り過ぎてしまつた。今の自分には、たとへ時間があつたとしても、この見すぼらしい姿では、とても下車する氣にはなれなかつただらう。氷峰に借りてた外套は取り返されてたので、安ツぽい馬乘り洋服をむき出しである。それに、お鈴さんの弟へ貸した時計もそのまゝになつて來た。

『そんな者にだまされて貸してやつたのが阿呆ぢやないか？』斯う云つて、こちらの多くの失敗の一つをもいら〱した樣子で叱り附けもしたお鳥だ。かの女は初めのうち時々ただ恨めしさうな目つきをしてこちらを見つめたりしてゐたが、やがては勞れて來たと見え、こちらの寒さにふるえてゐる膝の上にその兩手を兩肱までかけ、そのうへへその顏とからだの上半身とを托してしまつた。そしてよく眠られないのが苦しいと云はぬばかりにして、時々その顏をあげてまたこちらをじツと見つめた。

『…………』義雄は自分が札幌へうツちやつて來ようとまで、一度は決心したところの、そしてかの女自身も東京に行けば別れようとしてゐることが分つてるところの女を、なんでいまだに斯う心で可愛いのかちよツと分らなかつた。

病氣が直つたのでもないのだから、夜を通して函館まで來るあひだ、かの女はこちらの膝の上で顏をあけたり、伏せたりしてゐた。

それまでは、まだしもよかつたが、函館から青森へ海上を渡る時、かの女は非常に船に醉つたので、青森で上野行き列車の出發を待つ間に、少しも食事はせず、ただ牛乳を一杯すつただけである。こちらには、こんなことでよくも女の獨り旅ができたものだと思へた。

青森からまた汽車に乘る時、腰をかける場所もないほど多數の乘客で——あちらの客車、こちらの客車と探し歩いても、一向に空席が見つからない。止むを得ず義雄はどこへでもかの女を押し込むつもりで、或客車の踏み段へ片足をあげると、かの女は立ちどまつたまま、

『あたい、そんな窮屈なところ厭だ、わ』とすねて見せた。

渠はかの女の財布の中と自分のポケトとをそらで數へて見て、大抵大丈夫だらうと決心し、かの女だけをその次ぎにつづく二等車へ乘せてやつた。こちらも三等に一ケ所空席を發見したので、そこへ腰を据ゑ、列車が動き出してから、ちよツとお鳥の樣子を見に行くと、熱が出て來たと云つて、足をのばして横になつてゐた。ひたへにさはつて見ても、然し、さう熱がありさうではなかつたが、横になるだけの空席はあるので、他の客が這入つて來るまでさうしてもよからうと云ひ聽かせた。胸が惡いとも云ふので、仰向けに寢られるやうにしてやり、胸から足の方へ毛布をかけてやつた。割り合ひ

に脊の高い女であるから、足だけは遠慮して膝を折らせ、乘り合ひの人々にも申しわけを述べて置いて、自分の席へ引ッ返した。昨夜の寒さで風を引いたのであらうと思ひながらだ。青森を離れてからこちらへは雪は見えないし、さう寒くもないが――。

再び見舞つて見た時、第一に氣が附いたのは、空席が一二人ぶん出來てゐたことだ。渠はかの女の顏の上へこちらの顏を持つて行つて、靜かに、

『氣分はどうだい？』

『吐きたいのよ。』かの女は肩をゆすつて眉をしがめる。これは、かの女があまえる時、よくする表情で、こちらは見慣れてゐるから左ほど驚きもしなかつたが、吐きたいと云ふのだから、室の中央に置かれた鐵の平たい痰つぼを近よせると、かの女は直ぐそれへ白い物を出した。青森で飮んだ牛乳らしい。他の乘客に見えない樣にそれをかこつてゐたが、壺から溢れ出したので、通りすがつたボーイにわけを話して、掃除して貰ふことを賴み、

『餘り惡いやうなら、盛岡か、どこかで降りてもいいから、ね』と、お鳥に注意を與へる。

『辛抱出けるなら、する方がえい、わ』と答へるので、他の人々にも無禮のないやうにして、落ちつかせて置いた。

盛岡へ段々近くなつて來た時、また見舞つて見ると、お鳥の車中の樣子が變つてるのに驚かれた。

他の乗客等のいづれもから無言で凝視されてゐる間に、一人の、古ぼけたとんびを着た肥えた紳士――それまではゐなかつたと思ふ――がお鳥の足の方にかけてゐて、その前に立つてゐるボーイと押し問答をしてゐる。

『貴様アボーイぢやアないか？汽車中を取締つて行く役目でありながら、こんな無禮を見のがして置くと云ふんか？』

『さう云ふわけでは御座いませんが――』

『だら、なぜ』と、おほ聲に足踏みして、『起さないんだ？』

『それでも――』

紳士は確かに醉つてゐるらしい。然し醉つてゐる爲めのくだ巻きでもない様だ。ボーイの顔をにらみつけて、『それでも』のつづきを待つてるらしいその顔つきを見ると、義雄が昔自分の同窓に於いて知つてゐた川本氏である。

然し自分は渠を嫌ひであつた。自分ばかりではない、渠を知る學友は誰れでも渠を嫌ひであつた。仙臺の或耶蘇教學校に自分等が學んでゐる時、年うへだけに渠は自分の先輩であつた。自分は英語を主にして普通學部にゐたが、渠は傳道師になる爲めの邦語神學をやつてゐた。もとは大井憲太郎の部

下に屬する壯士であつたさうだが、耶蘇敎に改宗してからは、非常に熱心らしい信者であつた。が、然し、さツぱり人好きのしない男であつた。まだ學生でありながら、敎會を一人で脊負つてゐるかの樣にがんばつて、定まりの集會に出ないと云つては會員を責め、出るとまた、態度が不謹愼だと云つてはそれを責める。笑つたと云つて責め、泣いたと云つて責めるので、渠のゐるところでは、新入會員等はどうしていいのか分らなかつた。しかし、渠はさういふことをしなければおのれの熱心がをさまらないばかりでなく、またさうしておのれの熱心を得意がつてるらしかつた。はたのものらは、しかし、渠一個の都合の爲めに自分等の行爲を左右されるのを好まなかつたから、成るべく渠を避けて、近よらないやうにしてゐた。

神學部を出てから、渠は矢張りさういふ態度を以つて傳道師になつてると、こちらも聽いてゐた。何も知らない田舍人は、その熱心に隨喜して、渠を牧師にまでも仕あげた。渠は得意になるに從つて、人の行爲に干涉することが甚しくなつた。そして人の行爲に干涉することが甚しくなるに從つて、それだけ渠自身の行爲を責めることが薄くなつて來た。敎會員はそを看破するに至つて、渠を放逐した。渠はます〳〵人の無情と罪惡とを指摘する性情が强くなつたと同時に、渠自身は酒をあふつて大道にごろつくやうになつた。

そこまではこちらも話に聽いてよく知つてゐるが、それから渠がどこへ行つたのか分らなかつた。

うわさに據ると、北海道で隨分よく開墾に成功してゐたが、持ち前の性分の爲めにまた失敗したことがあるさうだ。今でもそこにゐるといふ話もあつたから、こちらは札幌に於いて渠を時々思ひ出さないでもなかつたのだ。

その人が今、こちらの目前で、こちらの携帶者のことに就いて相變らず例の調子でボーイと押し問答をしてゐるのであつた。今更ら名のるのは好ましくなかつたから、知らない振りで通すつもりで、

『ちよツと――失禮ですが――若しこの婦人のことで起つたお話しなら、長くとは申しません、盛岡でおろしますから――どうかそれまで――。』

『なにイ！』川本はこちらの方に向いて、『君の席がここにあるのか』と、少し勢ひがゆるみかけた。

『いや、わたくしはあツちの室にゐます。』

『苟しくも』と、渠は再び威だけ高になつて『二等室に乘るくらゐのものなら、それくらゐの禮儀ア知つてをる筈だ。』

『御婦人ですから』と、ボーイは詫びるやうに受ける。

『婦人だツて、何だツて、おれの妻がゐたなら、矢ッ張り婦人だ。それが勝手氣儘に長くなるといふ法があるもんか？』

『實は』と、こちらは一層おだやかに出て、『船で醉ひまして――また汽車でゆられましたので、御無禮を致してをります。』
『無禮にやアきまつとる！』
『御病人ですから』と、またボーイが引き取つて、『お醉ひになつて――。』
『おれも醉つてるのだ！』
『それは、あなたはお酒にお醉ひになつてをられますので――。』
『おれも寢るのだ。ゆふべから眠らなかつたんだ。』
『それは、あなたの御勝手に、お眠りなさりませんでしたので――。』
『兎に角、あれを起せ、起せ！』川本は窓の方へ大きく無理にもたれかかつた。
義雄がお鳥はと見ると、案外平氣で、毛布の中で足は縮めてゐるが、仰向けになつたまま、目をつぶつてゐる。近よつて、わざと大きな聲で他の人々にも聽えるやうに、
『盛岡でおりるかい？』
『…………』かの女は目をひらいて、小さい聲だ、『人がやかましく云ふから、おりたくなつたの。』
『では』と、こちらはボーイを返り見て、『盛岡でおろしますから、それまで頼みます。』そこを出がけに、今一度川本に向つて、『何分、病人のことで、濟みませんが、それまでよろしく』と云つて見たが、

渠は、何の答へもしなかつた。また、こちらの誰れであるかを認めもしなかつた。
義雄は、多小薄氣味惡くないでもなかつたが、そのまま自分の席へ引ツ返した。時計を見ようとしたが、それがないのに氣が附いた。寂しい――眠くもある。

一四

やがて、お鳥の車室のボーイがやつて來て、こちらの室に空席があるかないかを探してゐる様子であつたが、一つ見つかつて歸り足をこちらのそばにとどめて、
『どうか、只今のは御勘辨を――時々、あアいふお客さんがあつて困ります。途中で三等から乘り變へたんで御座いますが、まだ切符を切り變へませんので、わけを話して、もとへ直つてもらふことに致しましたから――。』
『それは氣の毒でした、ね。』
直ぐ二人のボーイがおもい手荷物を提げて這入つて來ると、それについて、川本も苦い顔をして來た。渠はこちらのそばを二三席過ぎたところの、通り道がはの席を占める爲め、窓ぎはの客と肱かけの間に、でツぷりしたからだを横柄に割り込んだ。見てゐると、窓ぎはの客は、どんなえらい人が隣客になつたのかと云はないばかりに、からだを縮めて奥の方へ坐わり直した。

肱かけのそばで中央の道に、ボーイが積み置いた二個の荷物は、下のは何だか分らないが、上のはみやげ物の菓子折の樣なものや林檎入りの籠であるらしい。
間もなく渠は居眠りを初め、窓ぎはの客の方へもたれかかつて行つた。客は暫らく渠の方を見い見い無言でそれをこらへてゐたが、餘りおもみを感ずるやうになつたからであらう、咳ばらひをして胸をゆすつた。すると、川本はちよツと目を覺まし、何かしほらしい詫び言を云つてゐた樣であるが、今度はまた肱かけの方へたわいもなく、こくりこくりともたれて行つた。
義雄に限らず、車中の注意はすべて渠ひとりに集つてゐたので、渠のそのあり樣をただ見つめてゐる客もあれば、互ひに小聲で冷笑し合つてゐる客などもある。
『二等から天降つて來た醉ッ拂ひだ。』
『なアに、三等から切りかへて貰はうとしてことわられたんださうだ。』
『そんなに醉つてるとも見えぬが――。』
『酒樽の樣にふてい奴だ。』
『可哀さうに、眠いんだらうよ。』
人々がこんな嘲弄語を吐いてゐるのを聽きながら、こちらもいつのまにかゐ眠りをしてゐたらしい。
『わツはツは』と、手を打つて人々が笑ふ聲に目を覺ますと、川本は席からころげ落ちてみやげ物と

共に不恰好に倒れてゐる。
然し渠はのツそり起きあがつて、大きな風呂敷の中で長方形のものが角張つてがくがくしてゐるらしいのを手にもたげて、もとのところへ積み直し、おのれも元の席についた。
こちらは別に大したことでもないので、直ぐまた眠つたらしい。ふとまた目が覺めると、川本はこちらの方に向ひ、つッ立つて何かしやべつてゐたのだ。
『禮儀といふことを知ならければならないです』と、出しぬけにおは聲を聽かせられ、こちらはお鳥と自分とのことが惡くち云はれてゐるのではないかと驚いた。然しさうではなかつた。渠は、說教者の教壇に立つ樣な、おほやうな態度を持つて、暫らく無言で車中を見まわしてゐたが、おも〱しい、腹から出る樣な聲で、『禮儀——禮儀——禮儀をです』と繰り返し、『諸君は實に禮儀といふことを知らん。わたくしが席からころげ落ちたのを見て、ただ徒らに笑つてをるとは何のことです？——失敬ぢやないか？——無情といふものではないか？——諸君は實にあさましい人々だ！』
『………』そりやア、尤もだよ、川本君と、こちらは名のりまで擧げて現はれたやうな氣になつた。そして渠の昔の無反省の惡い癖などはここに問はないでもよかつた。人の弱點や失敗はうらから見れば誰れにでもいくらでもあらう。それを自分からさらけ出して他人に向ふなら、いくらでも——正直にだから——强いことを云つていい。自分はこれまでにさうしてゐることを少しも厭はなかつたが、

渠も――昔とは違ひ、餘ほど燒けッ鉢からの正直を得て來たものと見え――お互ひに語り合へば共鳴するところが少からぬやうだ。

が、なほ默つて見てゐると、車中のものはすべて渠の方を見つめてゐるばかりで、ひとりも渠を相手にするものはなかつた。渠は當然にも物足りなささうな顏つきをして席に着いた。然し直ぐまた立ちあがつて、

『世の中は實にあさましい。實にあさましいものと云はなければならん。――さうしたのが世の中の人の常かも知れません。然し、諸君、わたくしは今醉つてゐたのであります。酒に醉つたものには、少しも罪がないのです。――罪のない、云はゞ、無邪氣に倒れたものを目の前で見ながら、手を打つて笑ふとは何のことです。可哀さうだといふ考へは諸君に起らないんですか？――諸君は先づ飛び出して來て、わたくしを助け起してくれんければならんです。――諸君には、その考へが起らない。世の中は實にあさましいです。』

『…………』その最後の二句などには、最も誠實な語氣が含まれて、こちらには、今自分の氣ぶんでは、豫言者の熱誠も亦これには劣るとも、勝ることはあるまいといふ氣がした。弱い人間の身を眞ツぱだかに投げ出して弱い人間どもにぶつかつたのではないか？こちらは自分がかの中學でした演說に於いて氣違ひ扱ひをされてしまつたことを思ひ出してゐた。自分があの時あひ手にされなかつたやうに、

今、渠も亦誰れにもあひ手にされてゐない。その威嚴を全く滑稽にでも見てゐるのか、少しはおそれた氣味も見せながら、皆が皆北海道の雪を脊中にしよつて來たかの樣に冷淡で、一言たりとも同情の意を表するものはなかつた。

渠は、暫らく何かの返事または應援を待つて居る樣子であつたが、絕望の色を見せたかと思へると、急に顏を和らげて苦笑に轉じた。

『いや、から云ふことを諸君に申しあげてすみません――すみません――どうか、お許しを願ひます』と語つて、ゆツくりと席に着いた。渠のあたまに――絕望のほか――何ごとか浮んだ爲めか、その態度が突然變化した理由は、こちらに分らなかつた。

義雄が車中を見まわすと、俄かにあちらこちらに話し聲が起つて、その散漫なことは大きな豚小屋の中のやうであつた。その一隅には、どこかへ護送される囚人が五六名陣取つて、あみ笠の下からこの演說者のゐる方をじツと見てゐた。そして附き添ひの巡査二名のうち、一名は知らない振りをして煙草を吹かし、また一名は居眠りをしてゐた。川本自身の醉ひも醒めてしまつたらしい。こちらと巡查等とにそびらを見せて頻りに煙草のけむりを吹いてゐた。

然し義雄はその後川本がどうしたか知らない。今度の驛が盛岡だといふので、その車内を去つて、

お島を下車させる仕度にかかつた。

『あのおやぢはあれからどうしたの』と、かの女はいつ下りるとなつてもかまはぬ用意をしてから聞き糺した。

『おれの室へ來て、頻りに演說してゐたよ。』

『へんてこなおやツぢや——二等客になつて威張つて見ようとしたのだろて、皆が笑つてゐた。』

『いや、さう臆斷してしまうには可哀さうなところもあるのだが——。』義雄は斯う云つた切りで、川本のことは詳しくかの女に語つてやるまでもないと思つた。

一五

『…………』義雄はこんなにさし迫つた狀態では全く無關係な土地へは下車できなかつたのである。盛岡市には自分がさきに〇〇商業學校の講師であつた時に賴まれて自分の家で監督した生徒がゐた。勉强のことだけは隨分嚴格に監督したり、猛烈に英語の復習を强いたりしてやつたのだが、この場合、それをでも反對に手賴つて行くしか道がなかつた。

もう、日が暮れてゐた。停車場を出た直ぐわきの陸奥館と云ふのに這入り、電話で以つてその生徒を呼び出して見たところ、今外出してゐないとの返事であつた。何でも當地では隨分大きな金物屋の

息子で、あたまの惡い爲めにとう〳〵中學程度の學歴も終らないでしまつたが、北斗と稱して、土地の新聞に歌や短篇小說を書いてると聽いてゐた。その父親も、その子の爲めに、もとは義雄の家へ度度訪ねて來たことがある人だ。

殆ど一文なしの不安に驅られながら、二人の寢床を取らせてゐると、電話がかかつた。そして今から訪ねて來ると云ふのであつた。

『どんな人か早う見たい』と、お鳥は云つた。そして半ばぬいだ衣物を急いで再び着直してゐた。

『それどころかい?』義雄は少しも浮いた氣になれなかつた。そして、たとへ北斗が訪ねて來たツて、まだ親がかりであるからまとまつた金ができないとすれば、結局來たのが無駄であるが――と考へてゐた。

やがて案內があつて、久し振りで面會の挨拶が終はると、東京に於ける義雄の妻の顏をよく知つてた北斗は、ここに違つた若い女のゐるのをじろりと遠慮がちに見てから、それにも關聯させたらしい口ぶりで、然し眞面目くさつて、斯う尋ね出した、

『突然――また――どう云ふわけで――』

『…………』たツた三四年會はなかつたうちに、大分おとなじみてしまつたやうな言葉を向けるのを、義雄は賴母しくも思つたと同時に、自分の今の狀態を返り見ないではゐられなかつた。以前には、自

分の多少野心のあつた或婦人のところへも、自分の書生として渠を伴つて行つたこともある。が、その學業の後れてゐると反對に、年はその級でも一番うへの子であつた。數へて見ると、もう、確か十九歳にはなつてる筈だもの。

『こんなところへ？』

『どう云ふわけツて、實は、これが』と、義雄はお鳥が取り澄まして客を少し馬鹿にしたやうな顏つきで、これはまた度々、じろ〳〵と珍らしさうに見てゐる方へ顏を向けて見せてから、『札幌を出た時から工合がよくなくツて、船や汽車に醉つた氣味もあるが、持ち前の病氣がどうしても途中で下車をしなければならなくなつたのです。』尤も、ふな醉ひや汽車醉ひだけでは、如何にかの女が途中でぐづねてもおろしてやるのではなかつた。が、その病氣は若いものに向つては少し遠慮すべき性質のものであつた。

『そりやいけません、な。』

『いけないのはそればかりぢやアない。』渠は然し根本からうち明けて行かねばならぬと思つたので、ここへ下りたことは下りたものの、金がなくツて困ることを告げた。

『……………』北斗はこちらの云ひ出すことを前知して、たださへ煮え切れない顏つきを一層煮え切れなくした。

『何とか一とき、少しの都合をして貰へないか知らんて？』
『さア――かねのことは』と、火鉢にかけた兩手を引ツ込めて固くなつた。
『無論、東京へ歸つたら、何とかして必らず返すつもりだが――君もまだ親がかりだらうとは知つてゐるから、君が僕の爲めにおやぢさんと相談して見て呉れさへすりやアいいのだが？』
『…………』渠はまだ固くなつてゐる。
『それでも駄目なら駄目とするが、兎に角、賴むから相談して見て呉れ給へ。』
『では、まア、して見ますが――』
『この場合、君が僕に思ひ出されたのを災難と見て、ね。』
『…………』北斗もこちらの笑ひにつり込まれて苦笑し初めた。

『久し振りで會つて、直ぐ無理を云ふのは如何にも氣の毒だが、――それから今一つ賴みがあるのだ。別なことでもないが、これをどこかの病院へ入れなけりやアならんので――今夜と云つても、もう、時間がおそ過ぎるだらうから、あす、なるべく早く君の紹介で賴みたい。』
『そりやア知つてる病院もありますから』と、この返事には多少の元氣が見えた。『一體、どう云ふ種類の御病氣です？』

『婦人科でなけりやアならないのだ』と云つて、お鳥を返り見ると、かの女はこちらを見て平氣で微笑してゐた。こちらも笑ひにまぎらしながら、『實は、面白くない病氣だが、僕のは直つて、移つた方のこれに執念深く殘つてるのだが――。』

『………』この青年も何のことだか分つてるやうに笑つたが、それがまたちよツとにがい顏に返つたところに、そんなとばツちりをこんなところまで持つて來られては困ると云ふやうな心が見えないでもなかつた。

『出發の時に俄かにおほ雪となつたのがいけなかつたのだが、青森に來ると地上が僅かしか白くなつてなかつたし、ここぢやアまだのやうだ、ね。』

『ええ、盛岡ではまだ雪は積みません。けさ、ちよツとちら〳〵しましたけれど。』

『ところで、どうだおやぢさんの目かけ狂ひは？もう、いい加減に納まつたか、ね？』

『ええ――まだ――』

『そんなおやぢの子には却つてしツかりしたのが出る筈だが――』

『どうですか』と答へて、笑ひながらちよツと横を向いたやうすが、自分もおやぢや先生に負けないと云ふ意味であるらしかつた。

『ぢやア、君もやり出したのか？よくない、ね。けれども、やるならやるで、十分の責任を飽くまで

自分で持つ覺悟でなけりやアいけないぜ。おやぢがやるのはやるだけの資格があるからだが、子供が何の責任も持てないでおやぢの眞似をして、おやぢへすべての厄介を持つて行くのは、意久地のないことだから、ね。』
『それは先生が○○學校でも先生を御自分で辯解したお言葉でした。』
『よくおぼえてる、ね。――酒飮みや藝者買ひを公然やつてた僕にやアそれ以上の教訓はなかつた。やつても僞善になるし、また教訓として無駄だから、ね。』
『尤もだと思ひました。』
『へえ。』少し意外な氣がして、笑ひながら、『して見ると君は、あの時分から、そんなことが多少でも分つてたのかい？』
『さうでもありませんが――』
『僕はまた君を小僧同樣に思つて、僕が僕の女房と今に取りかへようかと考へてた女のところへ君をお伴につれてツたこともあるが、おぼえてますか？』
『下谷でしよう？』
『さうだ、さうだ！あれは、然し、僕と別に實際の關係などアなかつた。暫らく或る夜學校で英語を敎へてやつただけだが、さう斯うしてゐるうちに、よそへかた付いてしまつたよ。』

『先生に關する逸話は今でもよく新聞で拜見します。』
『なアに、あんなのにやア半分はうそがあるのだ。』
こんなことでその夜は北斗と別れてしまつた。如何に明けッ放しの義雄でも・金のことだけは目ごろの正直な責任論に殉じても持ち出したくなかつたのだが、切破詰つて止むを得なかつた。それにつけても、樺太まで出掛けて折角やつた事業の失敗が殘念であつた。それも人を信じ過ぎ・人に委せ過ぎたのが原因だが――。
『あんなへなちよこが目かけを持つなんて洒落過ぎてる。』
『そんなことがあるものか？』
『でも、今云ふてたぢやないか？』かの女はいつも通りのうわ目づかひをして、抵抗氣味に出て來た。
『また何かの聽き間違ひだらうよ。』渠は取り合はなかつた。いろんなことにかの女が聽き違ひやら思ひ違ひやらをするには、もう飽きが來てゐた。それでも半ば聽かしてやるやうに、『あれでも藝者買ひをするやうになつたのか、ね？それとも、お前なんぞよりやアあばずれでない純粹の令孃をでも戀ひしてゐる意味か？』
『あたいだツて、別にすれからしぢやない。』
『すれからしと云ふからしは蜜柑と一緒にやアできないか、ねえ？』とぼけたことを云つて、渠は默

つてしまつた。來た女中に再び床を取らせながら、この紀州に生れ、北海道に育ち、東京でこちらを捕へるまでにも、そして一旦棄てられながらも、そのいろ〳〵な間に何をしたか分らない女の、少し足りないやうで而も神經の鋭敏なのを、かの女自身のうち明け話やこちらの實驗やによつて思ひ出してゐた。

かの女に札幌へ追ツかけて來られてからも、渠は性的關係をかの女に求めなかつたのだから、別々になつて休むのは何でもなかつた。そしてその病氣を直してやるまで責任を持つと云ふ約束の外には、こちらは殆ど執着もなくなつてゐた。約束さへ守つてやれば、若しくはこの約束を守ることを誰れでも代つて引き受けて呉れる者があらば、もう、自分はかの女との最後の關係もなくなるのだ。長途の汽車にはかの女もちよツと刺戟を受けたやうだが――かの女が息づまるほどその痛みを苦にすると云ふことは、札幌に於いて二度目のたうけを經過してゐるし、東京に於いて女房に直せと云つて一度あつた如きかの女からの刄物三昧も、もう、今ではそんな恐れの必要がなかつた。渠はただ、この失敗のあとをどうして行けばいいかと云ふ自分自身のあせりと燒け苦しみとの爲めに、この二三ケ月を――かの女の追ツかけて來る前から――神經衰弱の氣味であつた。

存外に瘦せたと思はれる胸のあたりを蒲團の下で私かにさすつてゐるうちに、とろとろと眠りに入りかけた。すると、

『あんた、あんた』と、かの女に呼び起された。

『なんだ？』枕の上でその方へあたまを向けて見ると、向ふもそのままでこちらへ顏を向けてゐた。

『若し、あす、金ができんとどうするの？』まだ眠らないで、そんなことを考へてたらしい。

『そのときやア、また、その時のこと、さ。』渠には一度かの女から逃げた經驗があるので、また札幌へ置き去りにもしかねなかつたので、いよ〳〵どうにもならぬとならば、またかの女をうツちやるだけのことであつた。再びよりを戻したのがこちらのあまかつたところでもあり、また物好き過ぎたのでもあつた。』

『そんなこと云ふて、あんたはえいか知れんけれど、あたいは困る。』

『おれも困る、さ。』渠はそれツ切り反對の方へ向いてしまつた。あすの返事が心配でもあつたが、どうとも聽いたうへでなければ、それからのことを考へるのは無駄のやうに思へる。失敗の經驗とからだの衰弱とが渠をして思ひ切つて行き當りばツたりにならせてゐた。そしてかの女が言葉を繼がぬのを幸ひのことにして、うと〳〵と、ただ、かの女のしやくんだ顏が不平がる時に出す額の太いよこ皺をそらおぼえに數へてゐた。

あくる日、目がさめたのは九時頃であつた。大きな旅館相應の洗面場の水でたツぷり顏を洗ふのが

それでも、雪ばやい札幌の下宿に於けるけちな化粧湯よりもらくであり、また氣もちもよかつた。けれども、矢ツ張り、ここも雪もやうで、寒い風が吹いてゐた。

『あいつがやつて來るだらうか？』

『來ないでどうするんだ？』

『でも、金ができけんで逃げてたら――？』

『お前ぢやアあるまいし、ね、そんな卑怯な男でもなからうよ。』食事中の話だが、渠にはまだ自分に對する相當の自信があつた。北斗にして、若し――さうだ、金はできないかも知れぬが、それに對する報告をまで避けることは、以前の恩義若しくは關係から云つても、まさかあるべき筈でないと思はれた。と同時に、かの女が、その初めから見ると、ずツと疑ひ深くなつたのは、一緒になつてから一層いろ〳〵なことに出くわした爲めだらうと、多少のあはれみもできてゐた。

食事をすましてしまうと、丁度、果して北斗がやつて來た。そしておやぢと相談して見たと云ふ結果によると、現金はできないが、もと世話にもなつた先生のことだから、病院の方は北斗が紹介人になるつもりで、今よくそこの院長に頼んで來たのであつた。

『どうもお頼み通りに行きませんで――。』それでも一人前の商人らしく、もみ手などしてゐる。

『なアに、それでも結構。』義雄は寧ろその相手がゆふべの出よりも一層警戒深く且おとなじみてるの

に氣を取られた。惡い意味ではなく、君もなか〳〵商人じみて來た、ね、と賞めてやりたかつたが、違つた方へ思ひ取られては濟まぬから、さし控へる。

お鳥はまた客にも愛嬌のかげさへ見せず、むツつりしてゐる。

『……』義雄は別にまだ云ひにくい考へがあつてぐづ〳〵してゐると、北斗は、

『では、直ぐいらツしやつたらどうでしよう、向ふは室を明けて待つてをりすまから？』

『さうだ、ね――ぢやア、今から行くとするが、君、宿の拂ひも一とき保證して置いてくれよ、今、主人を呼んで事情は述べるから。』たとへ一ときのことだツて、宿屋のただどまりなんて、よく〳〵困窮してゐることが自分ながら返り見られた。

『いや、わたしが云ふて來ましよう』と答へて、北斗は獨りで向ふへ行つた。そのあとで、お鳥は憤慨したやうにこちらを見詰めながら、

『まるでお前の恥さらしぢやないか？』

『おればかりぢやアない、お前にも恥さらし、さ。』

『では、なんでそんなことにした？』

『お前の爲め、さ。お前の汽車賃をもおれが使へば、丁度眞ツ直ぐに東京までおれは歸れた勘定だが――こんなところの病院などへ寄り道しないで、ね。』

『お前が惡いのやないか――もとはと云へば？』
『さうだ。だから、ね、おれまでもお前と一緒に恥ぢをさらしてゐるんだ。』
『汽車賃さへなかつた癖に、大きな顏して！』
『何が大きな顏だい――お前の見ツともないその顏ぢやアあるまいし？』

一六

病院へ行つてからも、多少やわらかにだが、お鳥が不平と心配とを訴へる罵倒に對して、義雄はそれに報いる燒けツ腹の皮肉しか出せなかつた。その間に在つて、渠は先づ第一に思ひ附いて、札幌で一番親しくした氷峰へ電報を打つた。
『トリ、入院。カネタノム、モリオカ〇〇〇病院、タムラ。』
そしてその返事を待ちに待つたけれど、晩になつても來なかつた。そのうちに北斗が一名の年うへの同伴者をつれてやつて來て、共に文學談を聽かうとした。こちらには然しそんな談話をしようとする餘裕がなかつた。
『君等はまだ僕をもと〳〵通りの文學者に思つてるのだらうが、僕はあの事業をやると決心した時に僕の方向も一轉したのです。それが全然失敗に終はつたからツて、直ぐのこ〳〵と再び文學の世界に

顔が出せるか、どうでしよう？』

『そりや先生なら出せます』と、北斗の同伴者が答へた。

『僕の決心はそんな無責任、無頓着の性質のものではなかつた。たとへて云へば、僕はBの爲めにAを見棄てたんだ。この見棄てられたAを假りに女として見給へ。直ぐほかの男をこしらへてしまふ。』

斯う云つて、ふと、そのそばに寢てゐるお鳥を返り見ると、蒲團がかけてあると安心してだらうが、勝手に曲げてるらしいからだの輪廓をもく／＼させながら、こちらをにらみ附けてゐた。如何にも、かの女がこちらにちよッと棄てられた間に、こちらの友人なる加集とくッ附いたのであつた。けれども、渠はかの女に頓着しないで、『文學その物だッて同じことで、僕と云ふ背信者または反逆者などはこれをうッちやつて置いて、ずんずんそれ自身が進んで行つてしまふ。そのあとへ僕がたとへ復歸したッて、向ふも喜ぶ筈はない、僕自身も何の面目あつて歸り新參がつとまらう？』ここには專ら詩や小説の方面を云つてるのだ。

『えらいお見限りです、な。』

『……』北斗の顔に何だか失望のやうすが見えたのを、義雄はまだこちらを信じてゐて呉れるのかとありがたく思つたが、話の勢ひはとめることができなかつた。『今一ついい例を擧げて見れば、海外留學生だ、ね。文學に關する學問を研究しになら、まだしも多少の意味があらうが、文學と云ふ藝術

その物の爲めに洋行しようと考へるものがあらば、それは無意味でなければよこ道だ。そのよこ道をしたいものは、してもいい。が、僕が他へ轉じたと同樣の覺悟がなくてはならぬ。どうせその洋行から歸朝して來れば、新知識は愚か、却つてわが國の進步發展的時代に後れてるのはきまつてる。かの〇〇氏の如く、また△△氏の如く。』

『そりや少し遊びましよう』と、北斗の同伴者は口をさし挾んだ。『洋行となれば、誰れでも少くても二三年、長ければ五年、十年でもしますから、その間にわが國の時勢が分らなくなるのも尤もでしようが、先生のは文學を離れてから、まだ切りつめたところ半年にもならぬでしよう。』

『は、はア、成るほど、ね。』義雄は自分のことを人に手を取つて貰つたやうな氣がした。そして考へて見ると、如何にも、自分自身では樺太から北海道に於けることが一むかしも以前の如く見えてたのは、自分の現實ではあるが、乃ち、苦しまぎれの幻影に飛び込んだのであつた。

『それに、先生、今あなたは女のたとへをお出しになりましたけれど、――』

『………』お鳥はその客の方へ枕の上の顏を向けてる。

『女だツて一度關係のあつた男が立ち戻つて來れば、喜んで再び迎へますよ。』

『成るほど、ね。』義雄は苦笑して、まさか、この男がこちらの內實を既にすべて知つてるわけでもあるまいにと思つた。お鳥はと見ると、この時そツぽうを向いてゐた。恐らく、かの女の移轉さきの借

り二階へこちらが突然また顏を出した時、その瞬間に於いてこちらの薄情を全く忘れてしまつたかの如くその心に歡迎したのをおぼえてゐたのだらうか？あの時、曾て見せたこともないほどの優しい樣子をして、にツこり笑つたツけ。今や煮え上つたところの鍋ぶたを取つて、御はんはまだかと尋ねた。そして煮えた切り身をさかなにすることにして、酒を一合買つて來た。實は別な男に煮てゐたのであつたから、それが爲めにその男と一悶着があつたけれども、そしてかの女は毒を仰いで死にそくなつたけれども、とう／＼再びこちらの物になつてしまつたのだ。――成るほど、ね。――如何にも、ね。こんな女でもさうであつた。ましてその物としては意地も意志もない文學のことだ。こちらのもともと通りの努力一つで、十分にまた初めからやり直すことの容易でないこともなからう。自分は正直のあまり、生まじめに物をかたづけ過ぎていつのまにか自分の思想の反對なる輪廓ばかりに執着してゐるのであつた。さうだ、自分の詩から小說に移つたのも、小說から實業に投じたのも、矢ツ張り、輪廓の制限に捕はれたのではなく、自分と云ふ內部生命の方向轉換に過ぎないつもりであつたのだ。

『僕は思ひ違ひをしてゐた。いや、この最近に心がゆるみ過ぎてた。ありがたう。僕は意外なところで意外な警告と奬勵とを與へられました。』

『いや、大先生にさう云はれると、わたくしの方が意外です』と、その男はあたまをかいた。

『わたくしも文學をやりたいと思つてをります。』北斗がそれに續いて斯う云つたのはまだしもよかつたけれども、『どうせ、もとからの腦病で、相變らずあたまが惡いやうですから』と附け足したのを聽いて、義雄は憤らないでゐられなかつた。

『文學だから、病人もできると思つたなら違ひます！實業はあたまがよくなければできないと云ふなら、文學だツてさうです！その他のことだツて、皆同じだ。』

『そりやさうです、な』と、同伴者もこれには贊成した。

『……』義雄は北斗が氣まづい顏をしてゐるのを見て、自分の言葉の調子があまりつよかつたことを知つた。少し聲を和らげて、『然し、北斗君のはただ云ひかたが惡かつたのでしよう。つまり、文學が好きだと云ふことで、多少腦が惡いツても、實業が好きなら實業を一生懸命にやるだらう。』

『まア、さうです、な。』北斗も愛相笑ひをしたが、無理のやうであつた。

『やりたければやり給へ。僕も今の警告に一本まゐつたと同時に、新たに奮發心を得ましたよ。』

この時、お鳥は不作法に大きなあくびをしたので、二人の客は歸り仕たくになつた。尤も、時間も大分おそくなつてゐた。札幌からの返電がまだ來ないので、こちらは向ふの今困つてる事情をよく知つてるだけに、とても當てにすることができなかつた。

『返事が來ないぢやないか？それに香氣さうに詰らん話ばかりおほ聲でしてて――見ツともない！外

聞が惡い！』

『………』渠は返事をしなかつた。かの女には――これも如何にもだ！――詰らないだらうが、こちらには何よりも重大な問題をおのづから語つたのであつた。歸つた二人、殊に無意識にだらうがこちらに奬勵を與へた同伴者の方に懷かしみをおぼえながら、渠はお鳥の枕もとへ尻を向けて、今一つ新たに仙臺の友人へと鉛筆を執つて見たが、普通電報の時間が過ぎてるのに氣が附いて、手紙に替へた。そしてこれを認め終はると直ぐ、郵便箱へほうり込んで來てから、自分も休むことにした。

西洋室ではあるが、疊を敷いてあつた。割り合ひに綺麗な病院だ。けさ、車でとほつて來た道をあたまに浮べると、土塀や生け垣も衰微しつつあるあはれな士族屋敷ばかり多い市だのに、私立でよくもこんな病院が立つて行けるものだ、な、と思はれた。自分が今警告を得たその以前の内心のやうに、希望もなく、さびれ果てた市ではないか？それに、可なり美しい看護婦も四五名はここに使はれてるらしい。その一名だツてこの室にまだ一度も顏を出さないのが、既にこちらの事情を知つて、こちらをおろそかにしてゐるのだと受け取れても、別に致しかたがなかつた。

如何にも心細い位置に置かれては、また變つた女のあツたかみを望ましくならないではない。お鳥が來て入院の費用を心配しなければならぬやうになるまでは、札幌に於いては一とき、そんな氣持ちが續いて、五晩目が三晩目になり、三晩目が一晩置きになり、とう／＼おしまひには每晩のやうに一人

の女の爲めに遊廓へかよひ詰めた。そしてかの敷島も亦熱心になつて來たやうであつたから、若し樺太に於ける來年の方針さへ立てば、敷島をつれて再びあツちへ渡り、さきに僅かの金でそこに買つて置いたロスケ小屋に一と冬を越年して見てもいいとまで思つた。が、そんなことも皆一むかし以前であつたかの如く、義雄のあたまもからだも衰弱してゐた。そして渠が飽くだけのことを仕飽きた報いの無慾を、お鳥は札幌以來却つて結句安心なことにしてゐた。こちらも亦その方が、東京に於ける或時期などとは違つて、却つて面倒でなかつた。

一枚毎に何錢ときまつてる蒲團をさう贅澤に貸りるまでもないと云つて、渠はかの女が、『見ツともない』と反對したに拘らず、この室の一と組しか置かせなかつた。けれども、別に心は動かなかつた。

一七

翌朝になつて、

『あたがたのことが出てをります』と云つて、一名の看護婦が土地の新聞を持つて來て呉れた。今一名すがたを見せないのがゐたらしい。聲をかけた方のが直ぐ引ツ込む時に、かげのと顏を見合せたやうにして、くす〳〵と吹き出して行つた。見ると、『田村義雄氏の來遊』と云ふ見出しのもとに、『東

都の小説界にその人ありと知られたる田村氏は、北海道より歸京の途中、同伴の一美人が病氣の爲め當市に下車し、一昨夜は陸奥館に一泊、昨日その美人と共に○○○病院に移りたり。出發はまだ未定なりと云ふ』と書いてある。北斗が書いたか、書かせたかにきまつてるが、義雄は先づ、これを讀み返して見ながら、たとへば自分の知つてる或女が鐵道往生をでもした時の記事を讀んでる氣がした。どんな見ッともない女でも、死んでしまへば新聞には美人とまつり上げられるものだ。自分は今その手を自分の生きた物に對して喰つてるのである。看護婦どもがくす／＼笑ひをして行つた意味もこれでよく分つた。

『どんな惡口が書いてあるの』と云つて、お鳥が半ばからだを起してのぞき込みに來た方へ新聞紙を投げてやつて、

『見て見ろ！お前が世界一の美人だとよ。』

『……………』かの女は再び仰向けになりながら、枕もとの方へ行つて落ちたところの廣い紙を自分の手で――不精たらしくも――自分の顏のうへを越えて拾ひ上げた。胸のうへの蒲團が少しもち上げられたと同時に、かの女の大きなひさし髮のひさしがまたうへへ反つた。そこへまる出しに現はれたかの女の皮のゆるんだ額には、いつも通り、横に太い深い線が三つきざまれてた。渠はそれがかの女のしやくんだ顏その物よりも一層好ましくなかつた。が、かの女は天井の方へ新聞紙を兩手で廣げて、初

めは心配さうに默讀したのが、やがて、色だけはからだ中に渡つて白いのがこちらにもかの女のたツた一つの價うちであつたところのその顏をちよツと赤めると同時に、崩れたやうににこ〳〵し出して、熱心に二度も三度も默つて讀み返してゐた。

『……』渠は吹き出したくなつたほどにかの女の無邪氣を感じた。が、直ぐそれをいやがらせてやるつもりで、『お前も新聞で美人と書かれちやア、もう、——また一度毒を飮むか、くびを縊るかしなけりやア、義理がすむまいぜ。』かの女がこちらといさかひの末、芝公園のからす山で縊死しかけたのを助けたのもこちらの思はず出くわした拾ひ物であつた。

『もう、お前なぞおもとりやせんぢやないか？』かの女はこちらの方へその顏を勢ひよく向けたが、さきの無邪氣さは全くそのかけだになかつた。そして憎々しかつた。

『無論、それでおれの方の荷も輕くなつてるの、さ。』

『でも、約束通り、病氣が直るまでは世話せにやならん。』

『それ位のことは何でもない、さ。』

『何でもないと云ふけれど、今の今でも、金がでけんぢやないか？』

『ぢやア、どうだ、ね——今一度札幌へ立ち歸つて、あの川で例のやりそこねた心中をやり直さうかい？』渠としては、この意地わるい云ひ草は自分の心臟を自分でえぐり取つてるやうであつた。闇に

もそのすべこさが見えるやうな肌の思ひ出の爲めに、かの女をかの女自身の意志でだが毒を飮ませまでして一旦取り返した。それを東京に置き忘れたやうになつて、札幌の女にかよひ詰めた。今度はお鳥の方からやつて來たけれども、その時は既に金の工面は附かず、からだの精魂は拔けてゐて、その上にも北海道に於いて、熊や眞蟲よりもずッと恐るべき雪と寒さとにうか〳〵と迫られるやうになつた。うッかりとこちらも死に神の手に乘せられたのはその時だ。

かの女は最初に自分で自分の首をくくらうとした。それから、こちらの寢くびをかかうとした。次ぎには、かの女自身で毒藥自殺をしそくなつた。かの女のその時の愛情や決心はこちらもこれを十分に汲んでやつてゐたのである。たッた足かけ二ケ年のことだが、二人のそんな出來事や思ひ出がからみ合つて、豐平川に於ける心中――思へば、變態心中だ――をやつて見た。が、その時でさへ二度とはやり直せなかつたことを、希望のうす光りをいだく今となつて、再びこちらが本氣で實行できよう筈はなかつた。

『人を馬鹿にして！』かの女だッても、さうであらう。札幌の病院に於いてかの女が東京と二三度通信をし合つた男――それが寫眞學校の先生か、それとも、そこの同じ生徒か？どちらともかの女はこちらへうち明けなかつた。が、こちらの東京出發前に、かの女の學ぶべきことを寫眞にきめてやり、ここの束修やら二三ケ月分の月謝やらを渡して來たのだ。金が約束通り送れなかつたので、かの女は

そこの學僕じみたことをもちよッとやつて見たと云つた。その間に、その男との、どこまでかはこちらに分らない親しみができたらしい。それが今一度早く東京に歸つて來たら、何とでもしてやると云つて來たのだ。それが爲めにだらう。『お前などの女房にならんでも、東京にはえい奥さんにしてやると云ふて待つて與れる人がある』と、かの女は機嫌のいい時にはこちらをじらしてゐた。兎に角、かの女にはまたかの女相應の希望が私かにできてるとも見えてゐる。こちらはただそれを根問ひする必要を認めてゐなかつたのみならず、そんなことがあらば自分の責任からかの女が自然に離れて與れるから結構だとも考へてゐる。

『ぢやア、お前は矢ツ張り素人のつもりかい？』

『知らん！そんなこと聽かんでもえい！』

渠がとう／＼吹き出したので、かの女はふくれッつらになつてしまつた。

がらす窓からそとを見ると、ここでも白い物がちら／＼降り出してゐた。やッと免れて來た札幌の、冷淡にも寒い光景が再び思ひ出された。この盛岡の少しでも賑やかな部分を散歩がてら見て來ようと考へた心も、いつのまにかちぢこまつてしまつた。

北斗でもまた話しにやつて來るか知らんと心待ちに待つてるのだが、一向にそんなたよりもない。

そのうちに晝めしも過ぎて、二時に近くなつた。電報の來ないのも氣がかりであつたが、なほ一層氣がかりに思はれて來たのは北斗のことであつた。ここの保證をして呉れたのは、昔數へてやつた關係を思つてだと見てしまつてもいい。が、それだけでこつちに對する自由な責任若しくは義務が盡きてるわけでもない。向ふから見ればたまにこの地へやつて來てゐるのだし、こちらから云へばこんなに寂しい所在なさに苦しんでるのだし、毎日でも、また日に何度でも、尋ねて來てもいいではないか？それがゆふべおそく歸つた切り、今になつても顏を見せない。ひよツとすると、ゆふべの憤りが氣になつたのではないか知らんとも考へられた。こんな場合に入らないことを云つてしまつた。今夜も來ず、そしてあすから見限られては、こちらは札幌を出た時よりもまた一段と見じめな狀態ではないか？　どちらからか金さへ來れば、それをここに殘して、渠はせめては自分だけでも早くここを去りたくなつた。

外套も持ち合はせぬ、粗末な背廣では疊の上が寒かつた。渠はかの女の着てゐるかけ蒲團のその上へ行つて、そのうへでだが、かの女と同じ方向になつた。

『見ツともない、見ツともない！』斯う、やアわりしたかみがた口調で叫んだかの女は顏をそツぽうを向いた。渠はそのかの女の顏を右の手で無理にこちらへ引き向け、

『おい、美人』とからかひながら、その頰に接吻してやつた。可愛味がまんざら皆無でもなかつたの

である。
『………』かの女も機嫌よく微笑した。そしてけさ新聞を讀んだ時の嬉しさをまだ忘れてゐなかつたのかして、『あの 北斗も存外あぢを云ふ、なア――文章がうまい。』
『ふ、ふん！』渠は鼻で返事をした切り、これには相手になれなかつた。自分のやつて來た、そしてこれからも亦やり直さうとする職業を、こんな無學な女にけがされた氣がしたからである。
　すると、かの女はこれこそまた案外なことを云つた、
『あたい、あの男を引ツ張つて見たろか知らん？』
『………』渠は暫らくぎツくりしてゐたうへでだが、『腦病がその爲めに目をまわしてしまうだらうツて！』
『お前は好かん！』かの女はまた横を向いてしまつた。そして不平を籠めた聲と共にからだをゆすりながら、『人がまじめに物を云ふてる時、いつも冷かしてしまう！』
『ぢやア』と、わざと目を大きく明いて、『今のもまじめで云つたのかい？』
『さうやないけれど』と、再びこちらを向いて微笑にまぎらしながら、『さうして見たらどうするだろおもてん。』
『だから、目をまわすと――』

『また――知らん！』かの女は今度は天井の方へその白目がちな目を向ける。

『………』可哀さうに、もとはこんなにも心がすさんでゐやアしなかつたのにと、渠は少からず同情の念まで起した。北斗が十九であるとすれば、かの女は三つうへだ。まだ自分よりも年したな男をおもちやにして可愛がるほどの年増ごころになつてゐない筈だ。あの女が義雄の繼母をたよつて國を出て來た當座に、かの女とは一つしたの渠の弟をだまし込まうとしたと云ふ評判が專ら渠の家族中に在つたが、それをさへも渠はほんとうにしなかつた。そして今でもまさか信じてはゐないのだ。

日が暮れても北斗が訪ねて來て呉れないのに失望して、早くから床に這入つてると、札幌の氷峰からの手紙が屆いた。

『電報見た。お困りの事情はよく察せられますが、こちらも君の御出發の時に御存じの通りとても工面がつかぬ。他の友人はまたすべて君に多少の反感を持つたから、なほ更ら見込みがない。何とか外の方法を講じて、兎に角早く東京へ歸るやうにし給へ。多少はひどかつたとしても、前から分つてる病氣ではないか？盛岡へ下車したのが君の一大失策だと思はれる。願はくはこの忠告を怒らないで、早くあとの始末を考へるやうに――どうぞ。』

渠はかの女には見せないやうにして、先づ讀み終はつたが、直ぐびり〳〵と引き裂いて、

『駄目だ』と、簡單に叫んだまま、それのもみくちやにしたのを枕もとへうッちやつた。

『………』かの女はそれを、仰向けのまま、からだを延ばして拾ひ取り、その皺を直してつぎ合はせようとしてゐたやうすだが、こちらは涙がこぼれるのを防ぐ爲め眼をつぶつてゐるので見えなかつた。

『どうするの？』かの女も顫え聲になつて、渠の胸をゆすつた。

『………』渠は胸がつまつてゐて、返事を與へなかつたが、からだがゆすれたと同時に、熱いのが兩眼を溢れて枕の方へ落ちた。

『ええ、どうするの？』かの女は今一度ゆすつたので、

『夜逃げでもする、さ！』渠はなほ皮肉に出たつもりであつたが、これも聲が顫えてゐた。

『あたいは病氣ぢやないか？』

『………』もう、何遍となく何と云はれても、『あすまで待て』と叱りつけるより外に仕方がなかつた。

　その翌日は寒い風に曇つてゐても、雪は降らなかつた。當日も晩めし頃になつて、仙臺から返事の手紙があつたが、これも駄目であつた。どうせ仙臺までの切符を買つてあるのなら、病人だけを置いて、先づ獨りでやつて來い。その上で兎も角も話を聽かうと云ふのであつた。

　渠はいよいよその氣になつた。いや、なぜそんな考へが初めから出てゐなかつたのだらうと悔いられた。かの女のやうすは、決してつき添ひを要するほどではない。半ば贅澤に札幌病院に這入つてた

のと少しも違はないのである。考へて見ると、ここへ下りたのさへ――札幌の友人が云つて來た通り――失策であつたかも知れない。一番びツくりしたのは、かの女が大變に熱が出て、他の客の足もとへ物を吐いたことだが、これもただ汽車に醉つたのに過ぎなかつたではないか？少しでも突然にからだが惡いと、自分からあせつてます〳〵これを惡い方に進めるのは、神經のつよいかの女の癖であつた。

『風の關係は少しもありません。まだよく直らない子宮病の發作です』とは、かの女を初めてここで取り扱つた醫者の診斷であつたけれども――。

『おれはちよツと北斗のうちへ行つて來る』と云つて、渠は晩めしがすむと突然立ちあがつた。

『逃げやせん？』かの女の問ひはあんまり手まわしがよかつた。そして汽車の切符を渡して行けと云ふので、渠は素直にその通りにした。

ポケトには、まことに僅かのはした金しかないその洋服すがたも、自分ながら見すぼらしかつたが、さびしい暗い町を歩くには多少安心であつた。けれども、さして行くところはこの市の目ぬきの場所であるかして、自分の姿に比べては隨分賑やかであつた。

行き着いて見ると、北斗は店の用事で、きのふの朝から、汽車で當市を去る十里ばかりのところへ行つたとかで、留守だツた。まんざらこちらを見限つたわけでもないのが分つたけれども、そのおや

ぢも亦ゐなかつた。いま時分からは、いつも店にゐないと番頭が云ふのを見ると、矢ツ張り、もとからの巣が續いてるのだらうと思はれた。が、そんなことはこちらの構ふことでもなかつたし、結局、こちらが久し振りの面會をして、わざ〳〵恥ぢを見せないでもすむことが喜ばれた。

　そして出て來た北斗の母に——奥へあがれと云はれたのを斷わつて——店で會ひ、自分だけは工面の爲めに仙臺に立つから、殘つてる病人をよろしく賴むと云ふ北斗への言づてを告げた。

　そこを出てからも、鼻についたその店のかな物のにほひが今の渠には何よりもなつかしかつた。欲しい金錢のことは勿論、氷峰の雜誌社の前通りにあつた鐵工場や自分が樺太へ持つて行つた蒸し釜のことが思ひ出された。それに、また、自分が死んだ父の眞似をして芝にある家で梅の木の枝を刈つたはさみのことまでが——。

　戻つて來てから、渠は初めてかの女にうち明けた、——かの女の枕もとにあぐらをかいて言葉和らかに、

『おれはあすの朝仙臺へ出發するから、ね。』

『あたいを置いて？』かの女は目を見張つて、ちよツと不安さうに見えた。

『さうでもしなけりやア、工面ができないぢやアないか？』

『仙臺なら、でける？』直ぐ優しへなつて、枕のうへで首をかしげた。

『來てから話を聽かうと書いてあるから、ね。』

『では、でけたら直ぐ送つておくれよ。』

『無論、さ。』渠はこの返事が本氣のやうで、また不眞面目にも自分に聽こえた。當てができさへすれば無論、それを横取りして置くと云ふそんなさもしい不人情な考へは少しもなかつたけれども、できない場合には、もう、何としてもできないのだらうから、今どんな約束をして置いても無駄になることが分つてゐた。が、かの女はそこまで覺えてゐないのか、今夜に限つてさうくどくはなかつた。

『では、行くことにしなはれ』と輕く云つて、少しも心配さうではなかつた。そして機嫌のいい顏で、

『あんたの留守にあいたいも手紙を書いて、看護婦に出してもろた。』

『分つてるよ。』渠はかの女もこちらをあきらめて自分で工風をし出したのではないか知らんと推察した。

『では、どこ？』

『………』東京の例のところだとは直ぐ想像できたが、わざと方角を換へて、『美人と云つて呉れた感謝狀よ。』

『違ふ！――でも、あの人、をつて？』

『ゐなかつた。十里ばかりさきの驛へ行つて留守だツた。』
『いつ歸るの?』
『あすにも歸るだらう。』
『歸つたら、あたい獨りでも來て吳れるだらうか?』
『そりやア、賴んで來たから。』この言葉には少しも力が這入らなかつた。渠としては、その實、自分がゐなくなつた爲めにかの女までが追ツ拂はれさへしなければいいのだ。保證さへしてあれば、北斗自身がかの女を訪ねて來るには及ばない。向ふは放蕩をやり出したと自慢してゐる男だし、こちらは窮すれば身賣りも同様のことを義雄やその友人にもして來た女だ。もとの生徒にもとの教師が女を取られたと云はれても、女をくツつけたと云はれても、どちらにしたツてこちらの恥辱ではないか――病氣が移るのは本人の勝手だとしてもだ!
最初にとまつた旅館へも渠は事のよしを云ひわけしに立ち寄ることを忘れなかつた。

仙臺へ來てからも、一番氣にかかつたのはかの女のところへ北斗がしげ〳〵訪問しやしないかと云ふことであつた。けれども來て見ると、お鳥の可なり久しい間の壓迫はこれを肩ぬけしたやうに思はれたが、矢ツ張り、金はできなかつた。友人は隨分長く或女學校の校長をしてゐるので、貯はへもで

きてるだらうと思へたのだが、子供も多い爲めにやツとかつ／＼に暮して行つてるのであつた。樺太へ行きがけに立ち寄つた時にはお互ひにそんな話に觸れなかつたので分らなかつたが――。

どこへ行つても、自分のを切めとして、生活と云ふ物ほど眞面目なものはないと、義雄にはつくづく考へられた。そして、

『好きなことをすれば、それ位の報いは來る、さ』と冷かされてしまつた。

『矢ツ張り仙臺でもかねはできぬ。どうしても東京で工面するより仕かたがないから、直ぐまた出發して歸京するが、それまで待つてゐて貰ひたい』と云ふ手紙をかの女へ書いた。が、離れてゐると、さう云ふことを書くにも、もう、苦痛が餘ほどなくなつてゐた。

札幌に於けるお宮さんのことなども報告して、久し振りに少し心を落ち附けて一泊してからも、云はれるままに今一と晩とまることにして、友人の出勤を玄關まで見送つた。この地には義雄が昔在學してゐた耶蘇教學校もあつて、舊友どもが多くそこの教師になつてるし、前に立ち寄つた時には、もとの外國教師から晩餐の招待を受けたけれども、急いでゐたので復りの時を約束して、その招待を斷わつた。が、今度、斯う云ふやうなざまをしては、とても顏出しする氣になれなかつた。

友人の母や細君を相手にしてその日の晝間を送つた。この細君はお宮さんと同樣既に六人の子供の母親になつてるが、その昔、義雄が熱心に求愛してゐたのを友人に横取りされたのであつた。そして

そのことを渠は豐平川の鐵橋のうへでも思ひ出した。が、お互ひに、もう、然し、そんなことを恥ぢ合ふ年ではなかつた。相當に高級の教育があつた筈のかの女だが、その所天に對する不平などを、矢ツ張り、一般の細君どものやうに述べ出した時、

『ぢやア、僕と結婚してゐたらどうでしたらう。』などと、義雄は冗談を云つて見た。

『そりやア、まだうちの○○の方がよかつたでしよう、ね——教育家だけに、放蕩はしませんから。あなたでは、わたしのやうな者は、もう、とツくに離婚されてたでしようよ。』

『あなたも大抵にして放蕩はおやめなされよ』と、友人の母なる老婦人も義雄に忠告した。『もとはなかなかおとなしい眞面目な人であつたのですが、な。』

『眞面目は今でも、おツ母さん、隨分眞面目なんですよ。』渠は自分のここにも誤解されてるのを矢ツ張り止むを得ないことに見て、正直に告白をする氣になつた。自分の死んだ實父でさへ死ぬまでもその子を誤解して行つたのだもの！今や、外部の社會に對する反抗心のやうなものは影もなくなつて、ただ和らかな寂しい微笑をもらしながら、『お女郎にでも僕は札幌で本氣になつたんですから。』

『はア、それでおかねをたんとお取られになつたのでしよう』と云はれた。『うちの健つアんも』と、前からこちらの耳には殘つてる、この老婦人のお國なまりが出て、『少しは遊んで見た方がよろしうございますが——あれはまた堅過ぎて、奥さんばかりを毎日じりじりと叱つてて。』もとは、東京に於い

てその實子よりもと思はれるほどこちらを可愛がつて吳れたおツ母さんだ。どちらの子が行く行くはえらくなるだらうなんてくり返しながら、若いものが二人で親しく行き來するのを喜んでゐた人だ。

『……』その時のことに就ても、義雄は眞面目のそばへ不眞面目のかげを許し添はせて置くべきではないと云ふ氣になつた。その友人が相變らず克明にだがうまく世に處して行くのを考へて見てもだ。『今度こそ、おツ母さん、東京に歸つたら、もう、何をするにしても落ちつくつもりです。』

『それがようございますよ』と、二人の婦人は口を揃へて贊成した。

一八

渠は二十一二歲の頃に自分の母に死に別れた。そしてそれからはこの老婦人を一時實母のやうになつかしんだ。

まだ義雄の實母の存生中に、友人がその初めての戀人を親のゆるしを得て親の家へつれ込んでたことがあるが、義雄も亦そんなのを一度自分の家へつれて來て、

『これが將來わたくしの妻になる約束ですから』と云つて、親に紹介までしたことがある。

ところが、友人のも渠のも、共に間もなく、別々な事情で駄目になつた。それを知つた渠の父はそれからと云ふもの渠の友人を嫌ひ、

『あんな友人を持つてるから、義雄もその云ふことがいつもぐら〳〵して、當てにならん』と、怒つてた。そしてよく父と子との衝突があつたが、その間をよく取り爲して呉れたのは、渠の實母であつた。

『義雄にだツて、もう、自分の考へがあるでしようから。』

今、渠はここに友人の母のその時代に於けるなつかしさを思ひ起すと共に、自分の亡き母のことも思ひ出された。別に學問とてはなかつたけれども、よく味かたになつて呉れた。渠は今ここに子供のやうになつて、珍らしくもしんみりした涙のこぼれるほど心の安靜をおぼえる。

渠はもと耶蘇新教から脱却して來た者だが、さきにこの仙臺に於いて、或日、氣まぐれに天主教の會堂へ這入つて見ると、多くの婦人が純白のかつぎを着て式に列してゐた。そしてそれが年の若い渠を妙に刺戟して、おれは男子として一つ何でも大きな仕事をして見せねばならぬと考へさせた。今の心持ちは第二のそれである。友人の母も細君も、死んだ實母も、お鳥や札幌の敷島も、お宮さんも東京にとどまる自分の妻も、渠にはすべて今やいちやうに淨化して一緒に目の前に現はれ、純白のかつぎに不淨を遠慮した婦人どもであつた。そのうへを越えてキリスマのかをりが、その後ろにゐる自分の方までもして來て、それがきざはしの高い樂堂から落ちる莊嚴なオルガンの響きと調和したやうに、胸に自分の希望が悲しく痛くよみ返つてゐた。克明な點に於いてもここの友人に負けないやうに、自

分の生活を根本からやり直して、矢ツ張り、文學と云ふ藝術を一生の仕事にしよう。早く東京へ、早く東京へ！

その翌朝、友人から汽車賃と僅かの小使ひとを貰つて出發した。出發までは、何かお鳥からたよりがありはせぬかと心待ちにしてゐた。事件が起れば、いつにても電報をよこせと云つて、友人の番地を書き殘して來たのであつた。が、別に何もなかつたと見えて、音沙汰もなかつた。汽車のうへでは隅ツこに小さくなつて、自分で時間が分らないのも寂しかつた。時計がないので。

渠は自分の東京なる麻布の家に到着して見ると、當然豫期はしてゐながらも、あまりに荒れてゐるのに驚いた。親ゆづりで自分の所有に落ちた建て物を事業費調達の爲めに抵當に入れても、なほ不足した分は僅かに短い期限の信用借りで間に合はせた。その期限に當てが違つたので、何でも賣つてできることをしろと命令してあつた。ところが、自用の部屋々々が――書齋を初め――殆どからツぽになつてたばかりでなく、亡父から引き繼いだ下宿客の多くも大抵は見限つてしまつてた。そのうへにも三名の子供はその父の突然に歸つたのを珍らしがつて、順ぐりにこわごわ見に來るばかりで、こちらがみやげも呉れず見すぼらしい樣子をしてゐるのを孰れも皆輕蔑してゐるやうであつた。

『お父さんは馬鹿だから、ね、あんな女に迷つて』と、渠等の母が以前に時々狂ひ出したそのざまをその後も、書物若しくは家財を賣り拂ふ時やいろ〳〵考へ込む時などに、また繰り返してゐたに相違

ないことが想像された。それが爲めに、仙臺からつゞけて來たところの淸淨なそして落ち附いた考へがまたひツくり返りかけた。

『………』それまでは一冊だツて賣ると云ふことをしたおぼえのない書物の目ぼしいのがすべて無くなつて、明きばかり多くなつてる書棚を背にして、あはれな自分の書齋に於いて歸つたままの勞れたからだにあぐらをかかせた。そしてこのあはれな書齋に今や自分の書きためて來た長論文のあるのがせめてもの心だのみだと思はれる。成るべく心のいら立ちを抑さへてじツとして見た義雄は、出ようとする涙を無理に鼻で嚙み殺して、自分の過ぎたこと、これからのことをその場に無理にも吸收しながら、自分の心に語つた――おれは女に迷つて家を抵當にしたのぢやアなかつた。やがて四十の坂を越えようとするのに、いまだに人並みの金もできないのを殘念に思つて、新らしい事業に手を出した。けれども、失敗したのはおれに取つておれその物の事業の第一歩であつた。その第二歩は實際にこれからだ、と。

疲れてはゐたが、一と眠りもしないで、そのまま、また家を出た。

さして行つたのは小石川なる▽▽と云ふ友人で、文學にも好きであるが、その本職は別にあつて、月月の收入も一般地方の知事以上にはなつてる。先づ、それを心當てにするのであつた。

『やア、歸つたか、ね』と云つて出迎へて吳れたその人は、直ぐ言葉を繼いで、『丁度いいところだ。

今、〇〇會をやつてるから上り給へ。』その會とは二三年前に死んだ文學者〇〇を記念する會だから、集つてる人々は義雄にもおよそ分つてゐた。

『それもいいが、ちよツとその前に話があつて來たのだが――』

『ぢやア』と云つて、先づ別室に案内され、こちらの事情を語つて見たけれども、向ふも近來あまり遊び過ぎて借金に苦しんでるからとの理由で、物にならなかつた。

　會に列席の人々は、文學者でも畫家でも皆、義雄に多少の知り合ひであつた。いづれも苦勞のなささうに、景氣よく飮んでるのを見ると、然し、渠が僅かの間地方に行つてて自分でかち得て來たその考へとは大いにそぐはなかつた。そして都會生活と田舍生活とは、その傾向が浮華であると實着であるとの點に於いて、こんなにも違ふものであつたらうかと、今更らの如く思はれた。

　それだけ自分が田舍くさくなつてる證據にも見えたので、努めて盃をかさねたけれども、不斷は二三杯で醉ひが出る者であるのに、なか／＼醉へなかつた。そして自分には歸京第一に處分すべき者としてお鳥のことばかりが氣になつてた。が、連中には同じ藝術家と云つても文學の方面でないもの等があつて、そのうちから、こちらのしをれた姿を見て侮蔑し、それとなく反感を與へるやうなことを云つたのもある。

　渠はそれが最も氣に喰はなかつたうへに、もう、大分に夜が更けてたのを知つて、誰れよりもさき

に失敬した。若し主人がひまであつたら、金談のことは別としても、自分のこの最近のことを共に語り明してもいいと云ふつもりであつたのに！

東京の夜も既に思つたよりもなか〳〵寒くなつてゐた。

電車のうへでもふるえる身を押しかかへながら、今夜は歸つて來ないかも知れぬと獨りぎめをして出た家へ再び歸つて見ると、渠の蒲團は――それでもこれだけは殘してあつたかして――空虛のやうな書齋に取つてあつた。

やがてなまぬるい茶を入れて來た妻は、

『あとで來ますから、ね』と、押しつけるやうに云つた。

『……………』渠はぎよツとして返事をしなかつた。こちらも、當分は、或は二年なり五年なり、歸りたくないと云つてよこしたのだが、かの女も例のやき〳〵した口調で、歸らないなら歸らないでもいい、あなたのやうな人は子供までがさう云つてますと云ふ、最後の手紙をこちらへほうり附けた切りであつたのだ。

かの女はあとでやつて來たが、渠が口さへもきかず眠つたふりをしてゐたので、暫らくしてから矢張り無言でその手あしをぷりぷり怒らせて出て行つてしまつた。その顏が――晝間の印象では――見

ろもいやなほど頓狂に痩せてる割りには、その他の部分はさうでもないらしかつたが――。

そのあとで渠の心が獨りでに亂れて來て、最近には珍らしくもいろ〳〵に狹いことを見えない天井に向つて考へながら、神經だけが段々にその方へさえて行つたそのくら闇のかた隅に當つて、大きく頓狂なうなり聲が聽き取れた。妻の寢室からであつたやうだ。自分も思ひ出すと、若い時に特に大きくうなされたことがある。驚いて來た父に手を引ツ張られながらも、なほ暫らくは夢がさめなかつた。戀に心配して大分に神經がよわつてた時のことだ。が、自分よりなほ三つも年うへな妻が近頃毎晩のやうに、若しくはたまにでも、うなされてあんな見ツともない聲を出してゐるのだらうかと思ふと、こちらは何よりもあはれにも又あさましくもなつた。

自分も斯く疲れ切つてる狀態に在るところだから、若し無意識になつてる間に、いつ、どんな聲を擧げて、これまでやつて來たことをしやべらないとも限らない。眠ると云ふことが自分には恐ろしかつた。

その翌朝は、かのお鳥に別れてから三晩目の朝であつたが、渠は久し振りの机に向つて、自分が唯一の生命として持ち歸つて來たところの書きかけの原稿を、ずツくのかばんから出して見た。乃ち、例の自分獨得の哲學論で、札幌に於いて旣に六十枚ばかりを書いてあつた。これでも早く書き上けて取れる原稿料で、お鳥の處分をするより外に道がなかつた。

けれども、若しかの女が盛岡に於いてかの北斗にでも關係がつくと、もう、こちらは――恥辱とは思ふが――責任のがれになるのであつた。

ところが、案外にも別なことでかの女から無責任になることができた。かの女に當てた電報がこちらへ郵便で送り返されて來たので分つたのだが、さし出し人は東京のものである證據には、『小石川』局受け付けになつてあつて、

『チチ、キウベウ、マサル、スグカヘレ』と。

『……』義雄はこれに向つて俄かにまたむら／＼と忘れかけてた憤りを發した。思ふに、こちらを出し拔いて、あの『あたいも手紙を書いた』と云つたその手紙で、かの女はこのマサルと云ふ者――多分、同級の寫眞生徒なる男だらう――を呼び寄せたのだ。この男が出かけて行つて、少くとも接吻などし合つたらうへで、向ふをともどもに出發したあとへ、この電報が屆いた。實際にそのおやぢの病氣か、それとも、女を迎へるのに不同意の爲めの手段か、どちらにしても男の親はその子がかの女のもとへ行つたのは知つてたに違ひない。當て名をかの女にしてあるが、電報が屆いた時には既に二人はそこを出發してゐたので、それが病院から一と先づ北斗の手に渡つて、それからこちらへ郵便で回送された。それにしても、北斗が金のことを云はず、ただ電報だけを封書でまわして來たのは、拂ひがすべて濟んだからであらう。

から考へて來ると、渠の心はまたおだやかになつて、肩のおも荷をすツかりおろせたと云ふ氣であつた。嚴密に云へば、この一ケ年半ばかりを、自分を苦しめたりまた自分の利益になつたりしたところの憑き物が、今や落ちてしまつたのだと思へた。

絶えず壓迫を感じてゐた心が俄かにすツかり輕くなつたので、一方では自分の心がぽかんとした。何となく物足りなかつた。矢ツ張り、嫉妬なり皮肉なりがつよかつた方がいいやうでもある。

けれども、いよ〳〵生活を一新するのはこの時であつた――お鳥は向ふから離れて吳れたし、今度は前々から考へてた通り、妻とその同類なる子供とにこの家業をもツと改良させて與へたうへ、離婚してしまひさへすれば、もう、占めたもので――自分は自分ばかりであらう。

けれども、また、この心のゆるみで久しい間の疲れが一ときに出て來た。あたまのしんから眠氣がからだを投げ飛ばしさうに動くと同時に、そのからだ中に風氣か何ぞの熱が籠つてるやうになつた。

とても筆が運べないので、自分で蒲團を引き出して、朝から再び床に這入つた。そしてぐツすり寢込んでしまつたので、いつ日が暮れたか知らなかつた。

十九

その翌朝、また面白い手紙が届いた。おもてには差し出し人の名が書いてないので、妻も却つて直

ぐそれと察したのだらう。

『あなたはまたあの女をつれて歸つて來たのですか』と叫びながら、いや、寧ろわめきながら、かの女はこちらの寢てゐる室へ這入つて來た。そしてその所天の枕もとへ無作法にばたりと坐わつて、その手紙を突き出した。こちらはこの相變らずの氣違ひじみたがさつを嫌つてたのだ。そして今またこれを見ると、起きようと思つてたのさへ中止してしまつた。これがなほ一つ殘つてるところの憑き物ではないか？この妻が？

手紙の文面には、

『只今歸京致しまして、おもて書きの』と書いたのを、そのおもて書きのだけ塗り消して、『上野停車場前の〇〇と云ふ宿屋にをります。待つてますから、この手紙着次第直ぐ來て下さい』とある。

『何をまだ云やアがるんだい！』渠は仰向いて讀んでゐたのだが、それをほうり投げてかの女が手に拾ひ取るにまかせた。それから、くるりと腹這ひになつて、お鳥その者に命じつけるかの如く荒ッぽく、『そのかばんを出せ！』

『いろんな祕密が這入つてるんでしよう？』かの女は棄てぜりふでかばんを引き寄せた。手紙を渡してやつたに對しては少し安心したかして、齒ぐきまで出していやに笑つてる。こちらは曾てそこをお鳥の故を以つてなぐり附け、妻のその出ッ齒を血に染めさせたこともある。

『明けろ』と云つて、渠は鍵を投げた。

『………』かの女は物欲しさうに明けて見てから、『おや〳〵、おみやげ一つ這入つてないのです、ね――子供が待つてますのに？』

『親を親とも思はせてない子だ――どいつにも、こいつにも！』

『あなたがよくないからですよ。』

『馬鹿を云へ！手めへの云つて聽かせかたが惡いんだ！』

まだぐづ〳〵その中をのぞいてるので、渠は手を延ばしてそれを奪ひ取り、その中から封筒と盛岡からまわつて來た電報とをぬき出し、この二つをかの女の膝の上に投げた。

『あの女にやる手紙をわたしに封じさせるのですか？』かの女はまた顏いろを變へて、勘ちがひにこちらのさきを越し、身を振はせてこちらへ飛び附きさうな構へをした。

『また、もう、般若の面か？讀んで見れば分る！』兩手を疊の上に張つて、渠は自分のあたまを擧げると同時に、うつ伏しの胸を反らせてかの女の恨めしさうな顏をにらみ附けた。が、自分の本意では、以後お鳥とは最後にさうしたわけで全く無關係になると云ふことだけは見せて置きたかつたのである。

『………』妻は眞がほになつて電報を讀んで見てから、これを封筒に入れた。そして今度はまた凄い

ほどのあざ笑ひになつて、『だから、だまされてると云ふのですよ。』
『默れ――口かずが多い！讀んどきさへすりやアいいんだ！』渠はその中味のできた封筒をかの女から取り上げ、自分で封をして、鉛筆で以つて上野の宿屋かたの宛て名を書き、おもて裏には自分の姓をひら假名で出したばかりだ。そして私かに無言の緣切り狀、最も安い手切れ金だと思つた。
『向ふもさぞびツくりするでしようよ――わるだくみがばれてしまつて。』
『手めへは何も云ふ資格がないんだ！早く出させろ！』
まだ何かぐづ〱云ひながらかの女が封書を以つて室を出て行つたあとで、渠はまた蒲團にもぐり込んで、再び仰向けになつた。そして自分が舊い責任と云ふ責任をすべて果し得て新たに活動し初めるその勇ましい姿のかたわらに、お鳥が今の緣切り狀を受け取つてその大きな口――よくあまえても憎まれ口を云つたその口――をぽかんとあけてるのを空にゑがいて見詰めてゐた。

――(大正七年四月)――

空氣銃

この作は事件の性質により、『征服被征服』の中に合巻して刊行されたものである。

一

『ぢやア、一つ、久し振りで溫泉にでもあたたまりながら、二三週間ほど一緖に面白く送つて見ようか、な』と、約束した樺太からの友人が、俄かに都合ができてちよツと京都へまはつて來ねばならなくなつたので、耕次は友人よりもさきへ出發して、自分の家族と共に、やがては友人と落ち合ふべきこの目的地なる修善寺へ來たのである。

小十年も遠ざかつてたこの溫泉だが、その前には何度も來て勝手放題な眞似をした渠の舊跡でもあつただけに、宿では渠の爲めにあらかじめ次ぎの間附きの座敷を明けて置いて吳れた。奥なる八疊の方を明け放つと、その前には池が廣がつてゐて、大きな緋鯉が澤山泳いでるのも見える。手を叩くと、それがすべてこちらの女中ででもあるかのやうによく集まつて來るのだ。東京から伴つて來たお高と云ふ女中はそれを面白がつて、赤ん坊に見せてやると云つては、これを抱いて、石づたひに水ぎはへ下りて行つて、頻りにビスケツトなどをほうり投げてやつた。

山一つ向ふの熱海では、もう梅の花はとツくに咲き散つてしまつた筈の時節ではあるが、ここではまだ咲き残りがあつて、而もうすら寒かつた。着したのは午後の四時頃であつたが、どんな人々が來てゐるのかを見るには、先づその宿の大きな共同湯へ這入つて見るのがよかつたので、この地へは初めての妻をも案内して行つた。が、別に興味を引くやうなものはゐなかつた。けれども、宿の女中の話によると、渠の來るのを待つてたと云ふ人がある。誰れかと聽いて見ると、最近に某新聞を辭して浪人してゐる山崎であつた。この人は新聞記者をやめても、情話家として立つて行ける人で、その一流の感傷的な書き振りの書物は、耕次などから見れば極淺薄なものだが、世間では隨分これを愛讀するものがある。

で、その晩には、耕次は自分の室で山崎と食事を共にすることにした。そしてこれも久し振りで話し合つて見ると、お互ひに保養が主ではなく、一と仕事を持つて來てゐるのであつた。客は或人の依賴を受けてその人の情話的閲歷を例の書き振りで書いてるのだが、それができないと宿のかさんだ拂ひもできないと云つてるし、耕次はまた一昨々年から一ケ年計劃でやり出した或翻譯が、他の著述や創作の急がしい爲めに一向まだはか取らないので、ここへ來て全速力を以てその遲延を恢復するつもりだ。

『ぢやア、お互ひにだらしなく遊び合つてしまはないで、これから毎日或時間をきめて訪問し合ひ、

他の時間は專ら各自の仕事に勵むことにしよう』と云ふことになつた。

客は、耕次の妻がさきに近藤澄子と云つて新聞記者間に有名であつた時にはおほ酒を飲んだのを知つてる筈だからでもあらう、頻りにかの女に盃を指さうとしたが、かの女はその度每に斷わつて、神經のふるえを見せながら、かた苦しい手つきで客へお酌をしてゐた。これには耕次は多少の滿足を私かに感じないでもなかつた。曾ては、酒のうへばかりでなく、他のことにも如何に評判の惡かつた女でも、おれのところへ來てからは——いや、おれが救ひ出してからは、——無理にもおれの命令通りになつて、萬事に愼み深くなつてるのをそれとなく見て呉れと。けれども、客がかの女に時々投げる目つきには、たとへば、昔、藝者であつて今は人の妻として澄まし込んでる女に月並みの男が投げるのと同じやうな侮蔑が見えてゐた。耕次はこれを決して客の不注意とは見なかつた。渠はずツと以前から、自分の澄子の、まだ自分にも本統には分つてない閱歷を寧ろ呪ふ傾きになつてゐた。

世間にいろ〳〵評判になつた女を、そしてそれが爲めに世間から引ッ込まなければならなくなつた女を、六年前に物好きにも再び引き出して、そして三年前からかの女を征服する必要上而も自分の女房にまでしたはしたものの、最初の見込み通りにはとても感化し盡すことのできないのを發見して、さじを投げてしまつた。若し見込み通りに行けば、世間のどんな批難を共にしても決して厭はない覺悟であつたのだが、かかる決心はとツくの昔滅んでゐた。この溫泉へも、實は、かの女を何とかうまく

納得させて置いて、獨りで友人とやつて來るつもりであつたのを、出發の前夜になつて、かの女の實父の取り做しによつて、耕次は俄かに讓歩し、しぶ〳〵ながらかの女をも――從つて、赤ん坊や女中をも――つれて來ることにした。大正四年三月六日のことだ。

二

が、思ひ出すと、いまだに不愉快でたまらないのはかの女の仕うちだ。爭ひの初めは、またいつも通り、かの女の理解の足りない男女同等論であつたと思ふが、かの女の胸には、自分の所天が自分を邪魔にして溫泉へ一緒につれて行かないのだ、そして溫泉では友人と共に勝手放題に自由な行動をして見たいのだと云ふ邪推があつたらしい。

『あたしがついてゐない爲めに、あなたが修善寺でまた以前におしになつたと云ふやうな放蕩をなすつたら、この五六年の愼みが無になつてしまうぢやアございませんか？』

『それでもかまはない』と、渠は無雜作に答へた、別にそんなことをしようと云ふ野心があつて行くのではなかつたけれども。

『あなたがさうなら、あたしも考へます。』

『うん、幾度でも考へるだけよからうよ。これまでにも既に考へて置く筈であつたのだらうが、ね。

あの呉服屋のなま白い息子には年相應な若い色をんなができてしまつたし。』斯う皮肉に出てやるのが渠には自然のやうであつた。何もその男にかの女が關係してゐたと思つてるのではないが、年うへの女が年したの男を可愛がると云ふ近頃の流行にかぶれて、かの女にもそんな眞似をして見たいと云ふやうな野心がないでもないことは分つてゐた。そしてかの女の知つてる範圍でそんな相手を見付けようとするには。かの男しかなかつたのだが、かの女にして見れば首尾よくその野心を裏切られてしまつた。『そのうめ合せに、また、今度は反對の方針に出てかい？人もあらうに、あの年隱しのしわくちや哲學者にお氣がお向き遊ばして、ね――お茶飲み友だち志願だ。』渠はここまで皮肉を調子づけて行つて、獨りで『うふ』と笑つて見せた。

『何だツてかまはないぢやアありませんか』と、かの女はその聲までしやちこばつて來たやうすであつた。大阪でかの臺灣坊主の八百屋とくツ付いてると人に云はれた時のやうに。

『かまはない』と、わざと和かな口調にして、『かまはないが、ね、あいつは少し馬鹿だよ。おれがお前の爲めにお前の所謂話し相手になつてやらないので、別にその相手を見附ける爲めあいつと交際させて呉れいと云ふから、おれがそれを許してやつたんぢやアないか？けれども、あいつにこないだ會で逢つた時にやアそのことは何にも云はなかつた。そしておれから云ひ出すと、何と云つていいかに迷つてとぼけてゐた。あいつはお前がおれに隱れて逢ひに來たとでもうぬぼれてゐるんだらうよ。そ

れでなくば、お前のあいつへ云ひかたに手落ちがあるんだか、さ?』
『あたしにやアあたしの考へがありますから!』
『そりやア初めて聽いたよ。如何に男女同權などと新らしいやうでも却つて舊くさいことを云つてても、ね、女はそとから戸籍上におみやげを持つて來るやうなことを許されないのだ——男にやアそんなへまなことはないが、ね。』
『女だツても、それくらゐの用意ができないことはありません!』
『………』渠もかの女との間にそんな用意ある關係の時期もあつたことは認めるが、それをかの女がまた誰れか他の男に繰り返してもいいかの如き口扮に接すると、あまりの意外に打たれて、暫らく眞面目の沈默をつづけた。少くとも、中野に確かにさうであつたに違ひないことが思ひ出された。そして沈默してゐればゐるほど自分の心が怒りに變じて行くのをおぼえた。『そこまでまた實際に圖々しくなつて來たとすれば、ね、もう、以前の約束通り、そツちから先づ離婚の申し出をするがいいぜ。おれはただおれからの申し出を後れただけのことだから、直ぐにも承知するよ。そんな結構な用意のお心がけがあつたのぢやアないかと想像してゐたればこそ、おれは初めからお前を處女だとは思ひたくなかつた——如何に處女だと云ふ御自稱はあつても、ね。用意のあつた關係は關係とは云へなかつたと云ふのだらうから、ね。』

『昔のことを云つてるのぢやアありません！』

『なアに、今のことは昔の名殘りだよ。』

『さうならさうとして置けばいい、さ！』

『………』渠はかの女の最後の返事ぶりには餘ほどの捨てツ鉢があるのを感じたので、なほ一層突ツ込むのはこの時だと思へて、『要するに、手めへは』と呼ぶのを以つてかの女のいい、さに報いつつ、『結局おそろしい女、さ。そしてまた案外平凡な女、さ。』

『………』かの女は口答へをぷツつりやめて、仰むいたままで暫らく言葉もなかつた。それから向ふへ起き返つたかと思ふと、少し恨みを帶びたやさしい聲になつて、『あたしは手めへなどと呼ばれておそばにゐることはできません。』

『ぢやア、どこへでも行け！お前をあなたなどと呼んでやつてたのも、もう、近頃ぢやアおれの感情が許さなくなつた。』

『………』かの女は床を出て立ちあがつた。長襦袢にほそ卷きの姿でかの女のからだの神經をおもてにまでも細くふるはせてゐるやうなのがちらと見えたが、渠は矢ツ張り仰向いてゐて、目をとぢてしまつた。まだ瓦斯の光を消してなかつた狹い室のふすまが明いてまた締つた。玄關の間に出たかの女の足おとは、渠等の赤ン坊を抱いて寢てゐる女中の室に入らないで、客座敷の方へきこえて行つた。

便所にでも行くか知らんと耳をすましてゐると、さうでもなく、その奥にかの女の實父がけふからとまりに來て寢てゐるそのところへ行つた。そして何か一こと二ことと聲がしたばかりで、家ぢうはひツそりしてしまつた。

渠は不斷とは勝手のちがつた寂しさをあたまの天邊にまで感じつつも、それに對してよりも寧ろ別な發作にまた一段の憤りを高めざるを得なかつた。そしてこの憤りには不思議にもあるべからざる嫉妬までが加はつた。如何に實父とは云ひ條、女として亭主の目の前で他の男の寢室へ這入つて行つたのではないか？そりやア、二歳の時に母親を失つて、父親にばかり育てられて來て、女としての月役があることもそれから敎へて貰つたと云ふから、他の娘とは違つて、父に對することが丁度母にも對する親しみではあつたらう。が、既に三十を越えた女がその異性の種類によつて全く氣むすめ時代の純な心でばかりゐられるとは思はれない。そこが亭主に取つてはかの女の與へる侮蔑でないとは云へない。

渠は自分でかの女の心持ちのみならず、その實父が――如何に年寄りでも、まだ金さへあれば遊びにでも行きかねない勢ひだから、――今現に感じつつあると思はれるところのものをも想像した。そしてこちらに對してどうしても直ぐにも何とか挨拶をしに來なければなるまいと待ち受けた。そして渠のからだぢうはひイやりして、枕のうへにばかりのぼせてゐた。

『一體、どうしたわけだか分らないが――』足おとには氣が付かなかつたが、果しておやぢはやつて來て枕もとより下の方に坐わつた。

『……………』耕次はふとんを蹴つて半身を起すが早いか、ひどい權幕で殆ど自分の妻その者に云ふやうに、『澄子はいよ〳〵けふ限り離婚します！』

『さう一概に云つたツて――』

『いいえ、離婚は、もう、ふたりの間で長い間の問題であつたのですから。』

『そりやア、離婚される理由があれば仕かたがないが――』

『いや、されるのぢやアありません、澄子がさうして貰ひたいとも云つてるんです。』

『へい』と、おやぢはこの一言には驚いたやうすである。

『あたしがいつそんなことを云ひましたか？』ふすまのかげへ來てゐたらしいかの女は、斯う叫んで這入つて來た。そしておやぢの坐わつてるよこをとツかばと通つて、枕もとに近く坐わり込んだ。そのこちらを見つめてるおしろい燒けのひどい顏には、目の周圍にも口のあたりにも、ぴく〳〵と痙攣を起してゐるのが興ざめるほどはツきりと見える。『父の前でそらぞらしいうそを吐かれては、あなたよりもあたしが困ります。』

『何がうそだ！』まじめにこわい顏をしてこちらも向ふを見つめながら、『おれは人にうそを云つたこ

ともないのだぞ！』
『それはさうでしよう。然し、今のはうそぢやアございませんか？』少し笑ひを見せようとしたやうであるが、こちらにはかの女の口が一方へ引き釣つたとしか見えなかつた。
『馬鹿！』
『ふん、あなたは利口でしようよ。』
『まア、お前はだまつてゐな』と、おやぢは娘を制した。『一體、何のことだかこツちには分らないが、まア、耕次君、この老人に免じて今夜のところはお互ひに勘辨し合つたらどうだ、ね――そして僕が留守居に頼まれて來たのであるから、あすはお澄をも一緒につれて行つて呉れたら――これも實はそれを望みでふてくさつてるのだらうから？』
『わたしの心が承知しません、ね。』
『まア、さう云はないで、さ――君の氣性通り極あツさりと、な――？』
『あたしだツて』と澄子も云つた、『一緒に行ければ感謝します、いつか熱海へつれてツて貰つた切り、温泉などへはちツとも行つたことがないのですもの。それに、坊やをつれて行けばどうせ女中も行けますので、あれの脚氣の爲めに轉地療養になりますから。』
『さうだ、それも人だすけの一つだ。君、この老人が頼むから、ね。』

『……』はツきりとは承知の言葉を與へる氣はなかつたけれども、別に反對をくり返さなかつた。渠はこの强健だが八十に近い老人が年のわりに物の分つた人であるのに多くの同情を持つてたと同時に、二三年前と今日とでは碁の手加減がまるで違つて、さきにこちらが二三目は置いてたのが、今では殆ど對に落ちて來たのを死に目が近づいたのだと氣の毒がつてゐるところだ。そして離婚ばなしはまた他日の折を見てと思ひながら、『そりやア、お父アんのお賴みでありますから、澄子がわたしの仕事を邪魔しないと云ふ約束さへすれば――』

『子供ぢやアあるまいし。』その口は引き釣つてても、成るべく優しみに立ち返らうとはしてゐたらしい。

『お前はそんな口をお出しでない。』

『……』渠はまた妻の甲だかになり勝ちな聲を一ことでも聽きたくなかつた。この心持ちをおやぢにもこんな時に少し訴へて置くつもりで、『實は、成るべくお父アんには聽かせずに置きましたが、こんな話は今までにも何度も出たのです。そしてその原因は大抵澄子の方にありました。』

『母親がなくなつて育つた兒だから、隨分氣ままでお困りだらうとは思つてるが――』

『いや、氣ままばかりぢやアございません、分つたやうなことを云つてて極分らず屋です。』

『そりやア、何と云つても、女のなさけなさにやア、ね。』

『女だツて、男がその氣なら』と、かの女はまた意張り出さうとした。

『それが分らず屋だぞ！』耕次はここぞとおやぢの前でかの女を叱りつけた。『實は、斯う云ふ場合でなければ云つて置けませんが、ね、これは若い男をひとり自分の寵愛物にして置かうと思つたのに失敗したのです。』

『そんなことは、無論、よくない、ね。』

『別に關係したわけぢやアないし。』かの女は頗るまじめくさい態度であつた。

『ところが、今度はわたしよりもずツと年うへの男のお茶飲み友達にならうとしてゐるんです。』

『馬鹿をおツしやい！』

『なんだ、これが馬鹿か？これがうそか？おれは、ね、身を賣つた女のやうに心とからだとを別々に取り扱つてる者などを女房にしたくないのだ。たとへ男親のところへでも、亭主を離れて行く女はばいただ！』

『おやぢは別だが、ね』と、これもこちらを忍びかねて少しあざけるやうすを見せた。

『……　…』耕次は父を責める氣にまではなれなかつたのである。なほただ憤りを納めかねて、『わたしは兎に角澄子がわたしと一緒になるまでの處女性を疑つてます。』

『そんな筈はないが――兎に角、お前は口かずが多過ぎるから、以後よく氣をつけろ』と、おやぢは

その娘に注意してから、改めて耕次に向ひ、『あすは早からうから、僕はこれで休みます――ぢやア、お休み』と云つて、そこ〳〵に行つてしまつた。

『……』耕次はまだ不足を云ひ足りなかつたので、おやぢの逃げて行つたのをも不服に思ひながら、默つてまた蒲團を引いて仰向けになつた。そして目をつぶりながら、何もおやぢの早く死ぬのを待つてるわけでもないが、成るべくなら、これだけ親しみのできたおやぢであるから、無事に葬むつてから二人の間を別れるやうにしたいと思はれた。これには同意見を持つてる澄子は、暫らくしてから立ちあがつて、空氣入れのところでしゆう〳〵云つてる瓦斯の火を消した。

三

『ぢやア、亭主らしくすればいいでしよう』とも、かの女はおやぢのゐる前で云つたツけ。が、女は矢ッ張り實際には男よりも割りが惡いやうに耕次には思へた。かの女が如何に氣を變へて來ても、こちらには闇に於ける感情は明るみの時のそれを和らげなかつた。渠は自分で胸のうちにまで男の權威を保つべく強いられたかの如く、今ではかの女を實際はなぐさみの目かけかばいたとしか見たくなかつた。

だから、今、かの女が山崎からあざけりの目を向けられてゐるのを、耕次は可なり傍觀的な態度で

見て、かの女に前身がそれだけ弱點のあつた爲めの自業自得だと思はれた。が、かの女自身は自分の所天までが自分をさう突ツぱなしてゐるとは氣が付かないのであらう、所天の爲めに努めて客をもて爲して呉れた。すると、客は醉ひの勢ひで一緒に湯に這入らうと云ひ出したので、耕次は澄子等を殘して自分だけがつき合つた。すると、また玉突きをやりに出ようと云ふことになつて、これにもつき合ひをした。それから歸つて見ると、まだ十時過ぎであつたが、かの女はそ知らぬふりをしてさきへ寢てゐた。そしてそのかたはらには、渠の仕事をする机と火のある火鉢とを揃へてあつたけれども、渠はその氣になれなかつた。

一旦はそれでも机に向つて、東京から持つて來たかばんを開らき、飜譯すべき原書と字引と原稿紙とを取り出し、インキとペンとをも家にゐる時と同じ勝手通りに並べて見たことは見た。若しこれが獨りで來てゐるのなら直ぐにも元氣が出て、あたまも筆も活潑に動き、午前の二三時頃まで平氣でつづけられるのは、これまで度々の經驗によつても分つてることだ。そしてあくる朝は早くても九時頃に起き出で、湯に一あびしてから食事を急がせ、給仕の女中に、

『けさは大分お休みでした、な』などと云はれるのを待つて、

『なアに、その代り、ゆふべは明けがたまで仕事をしてゐたから』と、むツつりした顏に初めてゑみをたたへて、口かずのすくないうちからでも、これだけは得意さうに誇るのである。が、そんな單純

みもしなかつた。

四

川の兩岸を通ずる道路——この二つしか通りはない——には、修善寺と云ふ寺院に於いてきのふ行はれた新造のつり鐘供養の名殘りとして、まだいろ〳〵な店が並んでる。近在の人々の出も多かつた。耕次等は先づ寺の賑やかな境內に登り、その二かかへもあるらしい新らしい釣り鐘を鳴らして見たりしてから、向ふ岸に渡つた。そして一間も離れてあとから——これも不興な顏をして——ついて來るかの女を返り見て、渠は、

『ここにもとまつたことがあるのだ』と云つて、大川旅館の前にちよツと立ちどまつた。

『…………』その取り澄ました平べツたい顏に少しばかり表情の動きが見えただけで、かの女は別に返事をしなかつた。で、渠はまた二度とふり向きもしないでずん〳〵と川しもの方へ歩いて行つた。菊屋と云ふにもとまつたことがあつて、ここにも玉突き臺があるのを知つてるので、

『玉を突いて見ようか？』渠のあたまに浮んだところでは、かの女が自分と一緖になる前に或をんな友達と共に或俱樂部で玉突きを敎はつたことがあるとかで、その友達が自分等の新居を尋ねて來た時、渠の留守を幸ひにして、をんな同士で近所の玉屋の前まで行つたが、多くの人がゐたので這入らない

で歸つて來たと云ふことがあつた。そしてその後かの女から進んでこの技を習ひにつれて行つて呉れろと云つたことがある。けれども、今はかの女には別に進む氣もなかつたやうだ。

『とうでも』と、ただ半ば口のうちで答へて、わざとらしくまださきの方の山を見てゐた。どこに櫻の木があるのか見えないが、落葉樹のから枝でおほはれてる、さくら山と云ふ大した趣味もなかりさうな山をだ。かの女のまた例の單純な天然あこがれかと思ひ取れたので、渠の反抗心がむら／＼と立ち返つて、渠はかの女にかまはず菊屋の門を這入り、玄關まで六七間進み行き、玉場へ案内を乞ふた。

ついて來たかの女には勝手に椅子に腰かけて卷煙草を吹かさせて置いて、渠はボーイを相手に三度突いたが、さう上手さうでもないボーイに三度とも負けたのは、これも自分の妻が自分の精神に邪魔をしてゐるからであると思へた。けれども、渠は手持ち無沙汰にしてゐるかの女に向つて云つた、

『一度敎へて貰つたらどうだ？』尤も、渠自身で敎へてやるだけの氣にはなれなかつた。

『やつて見ましようか、ね？』かの女は突然によそ行き笑ひをして、兎に角、渠の置いたキウを取つて、少し顏を赤めながら、二十分間ほどに十點ばかりを突いた。

『もう、それ位でよからう。』斯う云つて、渠はかの女に玉代を拂はせた。何のことはない――その結果から云へば、――拂ひをさせる申しわけにかの女にもちよツとこの樂しみを分たせたやうなものだ。

渠は家にゐても、特別に自分の財布を持たぬ習慣であつた。

　そこを出てから、一番したの橋を向ふ岸へ渡り返す時、橋の上から、ここになると川ぞこがずツと深くなつてるのを見おろしながら、曾て來た時に、或男がその抱いた兒にここから下の流れを見せようとして、あやまつてその兒を手から落したので、あわてて助けにおりたけれども、兒は岩にぶつかつて既に死んでゐたと云ふ物語りを、簡單にかの女に語り聽かせた。

『ちよツとけしきのいいところですから、ね、おとなでもこんなところで死んで見たらと云ふ氣にもなれましよう。』

『まさか、あなたぢやアあるまいし。』これはかの女の失戀入水事件をわざと思ひ出させようとしたのであつた。實を云ふと、渠はこれに多少の好奇心が動いて、且、渠をかの女に紹介する者の言葉によれば美人だと云ふので、こちらもかの事業に失敗した當座の弱みを承知して結婚を申し込んだのであつた。そして先づ共同の生活から初めた。あなたと云ふ尊敬し合ひの代名詞はその時の名殘りであつて、今に至るまでも、渠がかの女に多少でも愛を感ずる時にはこの代名詞しか用ゐられないのである。が、かの女がたほ渠に接するまでは處女であつたと云ひ張るのが却つて鼻に附いて來ると同時に、かの女の平ベツたい顏が段々こちらの不興を催す種となつた。

　兩がはにすべて小い八百屋や、肉屋や、あんま針や、馬車の待ち合ひ場やがある路を、もとの中の

橋まで來て、再びこれを渡り、今度は川かみの方へ歩いた。第二流の溫泉やどがある外に、藝者屋に料理屋もあり、さかな屋もある。かの女はこのさかな屋で晩めし用意の爲めにまぐろの切り身を買つた。何しろ、二三日これを買はないと、

『暫らくおさしみに遠のいたから、顔が痩せました、わ』など云つて鏡に向つてる女だ。

『………』渠は別に反對しなかつた。

おみやげ物の店屋の前でもかの女は素通りしなかつた。そして細工物などは、まだ歸る時でないから、見ただけで求めもしなかつたが、わさびやうかんを買つて、

『お茶菓子にして見ましようよ』と云つた。かの女は酒をさし控へさせられてからあまい物好きになつてゐたのだ。

『………』渠は然しそんな物よりも、ここへ來た以上は、なま椎茸がいいので、それを尋ねてもツとかみの方へ歩いたところ、前に來た時に醉ツ拂つた勢ひでそこのおかみさんを追ひまはし、却つてそのおとなしい亭主がかげに逃げ隱れたのを知らなかつたその店の前に出た。ある時、ゆふべはどうしてああ逃げたのかと、あくる日になつて聽いて見ると、うちのがゐたのであとでおこられると惡かつたからと答へた。そこへもとの名乘りをあげないで這入つて見た。空氣銃の店だが、そのかみさんは年を取つたばかりで、相も變らず昔と同じやうに店番をしてゐる。

『さア、第一發は四點の幽靈か、ね？』渠は自分の妻の目の前にその妻が恨み言を云つたり、青筋を立てたりする時の姿を、それとなく現はしてやるつもりであつた。この皮肉だがまじめの氣ぶんが見當をよくつけて呉れたかして、引きがねをぱちッと云はせると直ぐ、果して思ひ通りになつた。したの絲が外れると同時に、これで引きしぼつてあつた變化の姿が、うへの行燈まがひの箱の中から、長い黑髮の青ざめた顏を出し、兩手を出し、白い着物で、ずる／＼と前方へさがつて來た。それが丁度妻の立つて見てゐる眞正面であつたので、かの女はちよッとびッくりして、

『あら』と叫んだ。そしてその自分の聲をきまり惡かつたやうに、笑ひにまぎらしてる。かみさんがあがつた絲のさきを引きおろすと、幽靈の體はもと／＼通りに引き上がつて行つた。相變らず飽きもしないで同じことをやつてるかみさんだ！

『今度は六點の蛇か？』調子に乘つて、渠はこれをもうち當てて女と云ふ者のいやに執心深い心の本體を見せてやらうと思つた。が、この二度目のキルク彈丸は後ろの板かべに當つて、それを放つた者の手ぢかへはね返つて來た。

『少しうへでした。』第二發を、もう、當るか當らぬかとかみさんがびく／＼し初めた樣子であつたが失敗であつたので、ぐッと安心したところがその聲と顏つきとに見えたのを耕次は見のがさなかつた。そしてこいつアまだおれを忘れてゐない、わいと、思はれた。それでも、そんなことに頓着せず、

『今度こそ當ててやるぞ』と云つて、今一度同じまとを試みたが、矢ツ張り彈丸ははね返つて來た。

『畜生！』

『少し下でした。』

『ぢやア、こツちの三點にするぞ。』耕次が込め直した彈丸はうまく行つて、矢ツ張りずる〳〵と出て來たものがある。

『骸骨です、ね。』

『さう、さ。』渠は得意になつて澄子に答へた。そして共になつてそれを仰ぎ見ながら、『このしやりかうべは昔ながらに腐らないやつ、さ、ね。』

『よく當ります』と、かみさんはこちらを賞めるやうに云つたが、再び勘定高い顏つきになつてゐた。

『そりやア、昔取つたきねづかだから、ね』と、渠は初めてちよツとにほはせて見た。若氣のままに宿へも遊びに來たり、わざ〳〵はやらぬ料理店へついて來たりしたのだ。『お前はあんまり氣が小いよ、景物をかけて射的をやらせる以上は、いくら點を取られたツて損をしないやうになつてる筈ぢやアないか』と、云つてやつたこともある。

『それはさうですけれど、あんまり當てられると、ひや〳〵するから。』

『なんとも、けち臭いをんなだ、なア』などと冷かされても、怒りはしないでただ笑つてゐたツけ。

こちらのことが實際に今でも記憶にあるとすれば、かの女は以前に渠があまりこの射的に熟達するやうになつた爲め、渠と今一人どこかの百姓にイさんらしい在郷軍人とを――儲けにならぬと云つて――斷わつたのをもおぼえてゐる筈だ。渠だけは、その時、然し、一杯六箇四錢の彈丸を六錢に價上げさせて、なほ毎日遊びに行つた。その時のことを私かにだが俄かにまざ〳〵と思ひ浮べさせられたので、當りはそれツ切りで、あとまた一杯はすべて失敗であつた。小だるまやさいころのやうな、ずツと手易いまとを狙つてもだ。

『ちツとも當らなくなつたぢやアございませんか』と、澄子はこちらの心持ちが分つてなかつたのも尤であつた。若しざツくばらんに打ち明けてやるとすれば、

『あんな女を』などと、また燒き持ち半分の侮蔑を見せるにきまつてるので、かの女のそんな時の見ツともない氣取り顏が渠に想像された。

『………』おれだツて、あんな男に獨り心中は！と、かの女にぶツ付けてやつたこともあるのだ。お互ひに現在の生活が改まつてゐさへすれば、古きずなんか今更ら問はずもがなだが、寧ろかの女の方が――新らしい女などと云はれるのを嬉しがりながらも――最も古くからの情的舊慣を破つてゐないのだ。をんなと云ふものはすべて淫奔だとしても、それが渠には靈的な戀愛などと云ふ野暮ツたらしい氣取りや僞善に隣れたものであつてはならなかつた。肉體すなはち靈魂だと云ふやうな、新らしい

充實氣ぶんは殆ど全くかの女には感じられないのを、渠はここでも思ひ出したのである。そしてかの女にも、一つ、玉突き屋に於ける玉の如く、空氣銃を試みて見ないかと云つてやるだけの興味さへなくなつてゐた。

五

その近處なる板の假り橋を渡りながら、直ぐ川しもの川中なる共同湯や、右ぎしなる宿屋、料理屋、藝者屋などの裏二階をのぞんで、渠等の宿の裏庭のそとがはへ行き着くのである。そこの裏門から渠等は自分どもの部屋へもどつた。

子供は眠つてゐた。女中のお高に茶を入れさせて、買つて來た菓子を試みながら、火鉢の中でなま椎茸を燒いた。成るべく大きなのからえらんで、三つや四つづつをぢかに火の上へ置いたのだが、ひツくり返したその小傘の裏のぎざ〱が、綺麗な白色から段々とび色に變じて、じゆう〱と云つてにほひのいい油が滲み出して來たのを待つて、渠は先づその一つを生醤油につけて、ぱツくりと口の中へ入れてしまつた。

『うん、こいつアうめい！』そしてまた他の一つを奪ひに手をつき出した。が、かの女は、

『ううん』と云つて、それを箸で以つて妨げたのが、殆ど駄々ツ兒のあまへかたであつた。渠は惡い

氣をしないで、不格恰に自分の手を引ッ込めた。かの女も自分の子供らしさと自分の所天の不格恰な調子拔けとに氣が付いたかして、そばに坐わつてるお高と顏を見合はせて吹き出した。けれども、つゞいて出した言葉には矢ッ張り神經質のけんがあつた、『よく燒かないぢやア當りますよ！』

『………』渠にはそれが齒ぎしりを聽くやうな感じであつた。かの女が斯ういら〳〵しくなつたのは、自分では渠の爲めだと云つてるが、渠の推察ではこれに同意できなかつた。油斷のならぬ男どもの社會へ好んで這入つて行つたものの、まだ時勢に添はぬ女として、それだけの用意もなく、意外の誘惑をやッと切り拔けたり、時々はそれにひッかかつたりした苦勞の結果――これも、あとの男に取つては、持ち込まれた一つの不快なみやげ物――でないとは云へなかつた。

一升の椎茸を殆ど半分も平らげてから、その殘りを吸ひ物にして、いッそのこと、晩の御飯にしてしまうことになつた。三食の人々の時間よりはいつも早いのが常のことであつたが、この日は二人の不斷よりもまた早かつた。日が暮れるにはまだ一時間餘りもあるので、渠は惜しいやうな氣がして仕事に向ひ、そのままあかりがついたあとまでにも及ぶと、澄子の心は落ち付いてるらしい。子供をこちらへ這つて來させないやうにあしらひながら、かの女も同じ電燈の光のもとで東京から持つて來た雜誌の一つを讀んだ。そこへ、

『遊びにいらッしやい』と、山崎が使ひをよこした。

『………』かの女は先づ寂しみを豫期したやうな顔をもたげて、こちらを見た。その筋肉のぴく／＼が物を云つてゐた。

『………』渠も默つてだが、かの女のそのつらが氣に喰はなかつた――どうしても、自分の聯想が惡くてだ。つツと立ちあがつて、自分は部屋を出てしまつた。

山崎は晝間のうちに仕事を六十枚したとかで、まだ飯も喰はないで、お蔦さんと云ふ女中を相手に機嫌よく酒を飲んでゐた。いつとはなしに、皮肉と内部の苦悶とがいのちになつてる耕次には、山崎のこの狀態はその書いてる物と共に一括されて、餘り尊敬を價へしなかつた。が、どこか無邪氣なところがあつて、そこに話の共通點が發見されないでもなかつた。

『母のなくなつた子供を三人も人にまかせて置いて、おやぢは度々かうして燒け半分の旅行をするのだが、それでも東京へ歸つてやると、おう、お父さん、歸つたか歸つたかツて、仲の子などは大いに喜ぶよ――可愛いもの、さ。』こんなことを云つて、醉ひの出た頬のあたりへ厚い近眼鏡のうらから涙を一二滴こぼした。

『さうだらう、ね』と云つて、耕次は自分が先妻にまかしツ切りの子供――これも三名――の心持ちを思ひやつても見た。そしてまた、命令が二途に出て渠等の心を中途半端にさせるやうなことのない爲めに、今は渠等をしてその母親と共にその父を憎んだり、卑しんだりするままにさせてあるこちら

の心持ちをも、ふと、ここに考へさせられた。

やがてこの部屋の主人が飯を初めることになつたので、あとで一緒に湯に這入ることにしてそこを辭した。まだ時間は早いのに澄子はまたゆふべの如く、もう、ふて寢をしてゐた。が、それにはかまはず、山崎が迎へに來ると共に湯場へ行き、そこでまた相談がまとまつて、ゆふべの玉屋へ行つた。

そして十時半頃に歸つて來ると、澄子は泣いてる子にしツこをさせてゐたが、かの女自身も泣きツつらをしてゐた。

『………』いささか可哀さうにもなつたが、かの女が下向きがちに默つてて、挨拶もしないのに報いるつもりで、『山崎は少しおれよりもつよいよ。』

『なにがです？』

『玉、さ。』渠はかの女の怒るのを承知の上であつた。

『また行つたんですか？』

『おれは、ね』と、直ぐ惡押しに念を押して、『お前に叱られにここへ來たんぢやアないよ。』

『………』

『おりやアお前の子供ぢやアない。』置きツ放しになつてる机にもたれて、ただ紙卷きをすぱ〳〵やつてゐた。

『……』かの女は子供を枕につけてから寢卷きの上に羽織を引ッかけて、しほ〳〵とこちらの方へやつて來た。火鉢のそばに坐わつて、ちよツとこちらを見あげた。電燈のかげになつてるが、兩のしろ眼が渠の印象にまた新らしく殘つた。『あたしがいつあなたを子供扱ひにしました——前の奧さまぢやアあるまいし？』

『前のに限らず、すべて年増の癖だ！』

『癖なら仕かたがありませんから、少しおほ目に見て下すつてもいいでしよう。——あなただツても、矢ツ張り——』

『また古くさい同權論はよせ！』

『そんな問題はどうでもかまひません。あなたはあんまり一つの物に耽溺し過ぎる癖がおありです。』

『かまはない。』

『でも、來さう〳〵、お友達があるからツてさう遊んでたんぢやア、宿屋の拂ひもできますまいに。』

『來さう〳〵だから』と、あくまでしやくつて、『まだ遊ぶんだ！』

『そのおつもりならかまはないでしようが——あなたの耽溺性は有名ですから、ね。』

『お前の所謂戀ひ人が昔、さう云つたとよ。』その戀ひ人とは、さきに一とき二人のあひだをやきもきさせたかの中野のことだが、その後渠は病死してしまつた。その原因は、澄子を思ひ切りかねてなほ

私かに慕つてたあげく、それが肺病にこぢれてしまつたのだと、中間の人からかの女が聽かせられたところでは云ふのだ。が、かの女もこちらも渠の死を聽いた時には、さう動搖がなかつた。けれども、今、かうしたついでに思ひ出して見ると、かの女に實物の渠がゐないと云ふことはこちらの痛快を感じることであつた。で、かの女もこちらのこの意地わるさを悟つて、

『ふん』と、ただ鼻であしらつた。それに、こちらの耽溺性云爲に闘する中野のわる口は[illegible]しかの女が寢物語りにこちらへうち明けた事實だから、何とも云へなかつたのだらう。

『おれはその持ち前の爲めに墮落もしたが、ね、またその爲めに根本からよみ返りもしたんだ。そこに理解のない理想論や戀愛論などアおれにやア無用だ。』

『無用なことは申しますまいが、あたしの不滿足だツて少しやア考へて見て下すつてもいいと思ひます。』

『何が不滿足だ？』實際に、こちらは正當なことには他の男よりも寛大にかの女を取り扱つて來たつもりであるのだ。だから、それを思つてこちらこそ不滿足な憤りの聲で、『お前の方で身づから不滿足を買つてるんぢやアないか？』

『…………』かの女は今夜は餘ほど讓歩してゐるらしい。顫えた聲でその云ふことに折れてるばかりでなく、眼には涙をさへたたへてゐる。渠にはその意味が解けてゐないでもなかつた。

『さうあたしをせついて、若しあたしが淫らな女であつたらどうします？』
『それは却つて結構です』と云ふ問答のあつたこともいまだに渠はおぼえてる。その頃は互ひに二人の間でなければ分らないところの微笑にからだまでも融け合つてゐた。渠がかの女以外に野心を持たなかつたのもそれが爲めだと云つてもよかつた。

が、この頃のやうに感情がこじれて來ては、同じしとねを分ちながらも、渠は目をつぶつてさへかの女に接近するのが不愉快であつた。この氣持ち惡い寂しみに堪へ切れなくなつて、無言のうちに妥協したことは、かの女の方からでもこれまでに度々あつた。この妥協を今かの女は殆どむせ返るばかりの言葉を以つてしようとするのであつた。

『あたしの――靈は――肉をも――要求します！』
『…………』小理窟も珍らしく斯う出て來れば、ちよツとうまい思ひ付きだと突然吹き出したくなつたが、かの女の不斷取り澄ました高尙がりを打破するのはこんな時だと思つたので、渠はわざと嚴格な語氣を以つて、
『ぢやア、初めツから靈などと氣取つたことは云はないがいい！　靈が肉を要求するのでなく、肉が靈として活きるのだ。』

こちらもこんな持論を以つて答へたが、目の前に切實な裸體その物の如く顫えてゐるかの女の姿ば

かりを見ると、渠は自分の男性的持論の有する實質と實感とがその場におびき出されないではゐなかつた。

『さうかい、さうかい、可哀さうに！そんなに寂しがつてゐたのかい』と、俄かに云つてやりたいやうな氣になつて、渠はかの女を自分の膝の上に引き寄せた。

雨戸のそとには緋鯉の池水が流れてゐる。そのまた塀ぞとには川が流れてる。遠くまた近く、その流れの音が單調に聽えてゐて、まだよく慣れない宿にはさツと雨が降つて來たのかと驚かれた。

六

三月八日はあさから無事に仕事に向ふことができた。女どもは赤ン坊をつれてどこかへ出て行つたと思つてると、やがてまたなま椎茸を買つて歸つて來た。

それを燒きながら、皆がその火鉢のそばへ集つたところで、女中のお高が赤ン坊に、

『おだるさんは』と聽くと、赤ン坊はあアと大きな口を明けて見せた。

『行つて來た、な。』渠は斯う云つて、その子を膝に抱き上げた。

『あれを一番おもしろがりました、わ』と、澄子もにこ〳〵してゐる。

『あれだけが昔、なかつたのだが、——何點だ？』

『十點ですよ――而も割り合にほかのよりやア簡單で。』

『よウし、おれもあとでやつて來てやる！』

『………』かの女の顏には直ぐ暗い影が現はれたが、無論、渠とあの空氣銃店のかみさんとの昔の關係を知つてる爲めではなかつた。

山崎が持つて來て呉れた〇〇新聞には、渠自身の修善寺通信が毎日載つてゐるが、例の鐘供養の記事は止んで、今度は耕次夫婦の消息が可なり多くの材料を提供し初めた。

『餘りくだらないことまで書くなよ』とは云ひながら、耕次は山崎の憎げがないのを取り柄にした。

一緒に湯に這入つて、渠のぶよ〳〵と肥えたからだが湯の中に半身を出してるのを見ると、その腹部がさか樽のやうにふくらんで、かのベクリンの有名な畫『浪のたはむれ』のパン神を思ひ出さずにはゐられなかつた。その畫のパンは太つたからだを臍のあたりまで出して、浪の上に浮んでるのだ。そして美しい人魚が泳いでるのにからかつてる。ちよッと、まア、そんな自然的滑稽が感じられた。

きのふもけふも湯場で出逢つた年の若い子持ち婦人は、その東京に於ける住まひのことを、『△△さんの御近處です』と、耕次等の知つてる婦人の名を出したのを考へて見ると、こちらの何者であるかをも既に知つてるらしかつた。

かかる婦人が來てゐると云ふことを知らして、望みなら話し相手にして見ろと澄子に注意してやる

つもりで、室に歸つて來ると、かの女は今長い手紙を讀み終つたところであるらしく、惡落ち付きに落ち付いてそれを半ば卷き返したゐた。

『…………』渠はかの女のそばに落ちてる封筒をいきなり、腰をかがめて、ひツくり返して見たが、興味もなかつたので直ぐほうり投げてしまつた。そして湯のあツたかみを椽がはの藤椅子に出てさましながら、默つて卷きたばこを吹かし初めた。また例の鼻ぼくろしわくちや哲學者の來狀だが、あんな飄輕な顏をして、かの死んだ大○楠○子や今の○塚○子などに亭主の明き巣ねらひをして失敗した手を、今やこの新らしがつた舊い女に向けてるのであるから、まだ亭主の權利ある耕次自身さへ知らぬふりをしてゐれば、無論、向ふはこの女に初めての成功をかち得るにきまつてた。いや、さう思ふほど耕次はかの女を安ツぽい女と見くびつてゐた。何とかここに皮肉を云はないでは氣がすまぬやうになつたので、『おれは今から豫言ができるが、ね』と、うわべはおだやかな口調でだが、渠はかの女に、『お前は前の中野に棄てられると、中野が前から不評判な放蕩者だとけなしてゐたと云ふおれと一緒になつた。『今度おれに棄てられると、お前はまたおれに復讐できるつもりでおれのいつも馬鹿にしてゐるあのしわくちやぢぢイをえらぶにきまつてるよ。戀の落伍者同士――舊い男と舊い女とだ、いい取り組、さ。』

『…………』

『けれども、云つて置くが、ね、おれの向ふへあのぢぢイを立たすんぢア、思想から云つても、人物から云つても、お前の進歩ぢやアないぜ。』

『………』かの女は一言も返事をしなかつた。そして耕次はかの女がその圖星を射當てられたので何も云ひ返しができないのだとおもへた。

けれども、女中がおしめの洗濯か何かから歸つて來ると、

『お高』と、澄子は險ある聲を出して、次ぎの間からちやぶ臺を持つて來させた。そして直ぐ、隅の方で手紙を書き初めた。

『………』きツとその返事をだらうが、その態度がこちらにはかの女の強情とも受け取れ、また愚鈍とも取れた。返事を書くなら書くで、所天のゐない時にいくらでも書ける。書くのがいけないと渠も云つてゐるのではない。然るに、今皮肉や、かの女に取つてはいや味や、を云はれた直ぐその日の前で、わざ／＼書き初めてわざ／＼渠の心持ちを一層惡くしないでもいいではないか？

かの女はさきに渠の關係あつたお鳥が一度西大久保へ來たのを、いつも、

『あんな無智な女』とけなしてゐるが、お鳥も矢ツ張りこれと同じやうなことをやつた。これは然し、澄子に比べては、まだ年齢が殆ど十もしただ。して見ると、殆ど十も年うへの女がそれだけ年したの女に劣りまさりのない考へしか持たないのこそ、却つて恥づべきではないか？

『強情は直ちに愚鈍を意味することがあるから、ね』と、渠はお鳥に注意したことを思ひ出してゐた。そして、この二人の女は兩方とも芝居を見に行くと、面白くなるに從つて段々口を明けて行くたちなのを。『おれの女房や色をんなにやアどこか拔けてるやつしか來ないのか知らん？』

渠と澄子との間には再び無言の氣まづさが横たはつた。

渠は山崎をさそひ出して空氣銃に行き、空氣銃に飽くとまた玉突きにまはつた。が、こちらが何に對してもあら手の勢ひで興味がさきへ〳〵と湧いてくにも拘らず、山崎の方は不思議にも活氣がなかつた。その相手よりは確かに二十點ばかりつよい腕を持つてながら、そしてその通りに玉が當つてゐながら、

『どうも當らない、當らない』とくどき通しであつた。何か知ら、氣になることがあるらしかつた。宿屋の拂ひのことを心配してゐたやうでもあるから、そのことか知らん？それとも、來べき人があると云つて東京へ電話などをかけてたが、それか知らん？

兎に角、その翌日になつても、そのまた翌日も、○○新聞なる山崎の通信に渠と耕次夫婦との交渉が面白さうに記事の一部になつてるだけのことで――耕次と山崎とは出逢ふたんびにどツちからか同じやうに口を切り、

『どうだ、少しやア書けるかい』と云ふと、他の一方がまたきまりの如く、

『どうも書けない』と答へた。

三月十一日には、午後になつて、△△新聞の編輯長をしてゐる柳田が伊東から山崎を尋ねてやつて來た。もツとも、山崎の〇〇紙上の通信を見て、耕次も來てゐることを知つてのことであつた。一泊して歸京すると云ふので、耕次等は先づ裏の假り橋を渡つて渠を空氣銃に案內した。渠も一時は夢中になつて面白がつたが、なか〳〵うまく行かなかつた。

『しろうとにやアとても』などと冷かされて口惜しがり、やツと一つまりが達磨の口へ這入つたのをおほ喜びして、渠は切り上げた。そしてそこを出る時にふり返り見て笑ひながら、

『大きな子供だ――かかアが見たらどう云ふだらう?』

『なアに、おれのやつなどア獨りで來てやつてるよ』と、耕次はつけ加へた。女にだツて、何か知ら殊にこんなところへ來てゐると、獅子の手まりは必要だと云ふことを考へたのだ。

『新らしい女は違ふか、な』と、柳田は歩きながら云つた。

『……………』耕次は然しこの語が冗談にもそんな風にもじつて行かれるのを不贊成であつた。自分達が參加した運動の自然主義と云ふことが一般に放蕩とか肉慾主義とか云ふことに誤解せられるやうになつたのも、新聞記者どもの淺薄な考へから冗談半分に出たことだと憤つてた。そして自分は自分の妻をも正直にはまだ新らしい女と呼ばれる資格のない女だと思つてる。

三人はまたぶら付いて、とう／＼藝者屋へのぼつた。ここも耕次のふる巢で、昔買つたことのある藝者が或旅館の番頭の妾として、今、おかみになつてるのだが、他の男と共に逃げたとかでゐなかつた。ここで山崎の得意な磯節や浪花節が出て來た藝者どもの賞讃を博した。その夜、耕次は自分の室で柳田と遲くまで碁を打ちつづけた。

『あのお蔦と云ふ女は何か』と、客は突然に云ひ出した、『いやアに金齒などはめて？』

『宿の女中、さ――軍人の未亡人だと稱してるさうだが、そこはほんとかどうかとほかの女中は云つてるよ。』

『山崎は熱心だ、な？』

『うん！さうかい？』耕次はそれで初めて山崎の原稿を書けないで苦しんでる理由が分つた。

七

二三日來、殊にうすら寒くて曇りがちであつた天氣が、十二日の朝から雪になり、午後には地上に白くつもりかけた。こんな時節に雪が降ることは數年來にないことだと云はれた。が、それがやむと直ぐ、山々の白色も消えてしまつた。

京都へまはつた友人の伊勢からよこしたハガキが耕次の留守宅からまはされて來た。これに據ると

こちらではけふ來るか、あす來るかと待つてるのに、友人は呑氣にも京都から奈良見物にまはり、それからまた伊勢の大神宮へ行つてるのだ。

こちらでは仕事は思ふやうに進まぬし、山崎の室へは求愛事件を知つてからはさう度々訪問するのも氣の毒だし、早く友人でも來て吳れないと、折角溫泉へ來たことが耕次には無意義になりさうであつた。

女中のお高の脚氣だけはずん〳〵よくなつて來て、毎日のやうに主人と共に椎茸を喰つてる爲めだらう、年の若いかの女はのぼせて一二度鼻血を出した。

『これから椎茸は少しひかへましようよ』と、澄子も驚いて云つた。『なんぼおいしいからツて、さうのぼせるものぢやア――』

『のぼせるなら首ツたけのぼせる、さ、ね。』耕次は然し別な方へ持つて行つて、『煮え切れない生活が一番面白くない！』

『…………』かの女はまた默つてしまつた。

渠とかの女との間には脊中合せのやうな日がつづくばかりであつた。

富士の見えるところがあるさうだから案內して吳れろと云ふかの女の乞ひにまかせてその公園やまをちよツとした休み茶屋の備へがある高みまで登つた。そしてかの女の望み通り白い富士のあたまを

一方にのぞんだけれども、渠との間には感情の齟齬を來たす原因がまた一つ加はつただけのことであつた。

『あなたは』と、かの女もビールを飲んだ機嫌で少しうち解けて、訴へるやうに、『こんなにいいところがあるのを前から御存じでありながら、あたしが云ひ出すまでは案內もして下さいませんのです、ね。』

『…………』渠はかの女がまた例の淺薄な風景感傷心を起してると見たので、ろくな返事も與へなかつた。『知つてるから、詰らないの、さ！』

『自然主義者がさう自然を馬鹿になすツちやア――』かの女は餘ほどの警句をでも云つたつもりらしかつた。成るべくこだわりのない笑ひを見せようとしてゐる。

『自然主義は天然主義ぢやアない！風景感傷主義ぢやアない！』斯うぶツきら棒に答へて、渠はここにも一種の公憤を感じた。自然と云ふ語を人間ばなれのした天然や運命へ持つて行くのは、渠に取つては、自然主義を肉慾主義と受け取られたと同樣、受け取るもの等の大曲解、大誤解であつた。

のぼり下りの途すがら二人は、一緒にと云ふよりも、寧ろ別々にたんぽぽを摘んだ。そして一つのハンケチに丸めて歸つて來て、椎茸の代りに煮て喰つた。その味は一つの同じにが味だが、かの女にはそれがずツと若い娘時代の、然し感情としては舊式な、思ひ出を樂しまうとした遊戲心の破滅であ

つたらうし、渠にはまた實際に自然法爾の人生味その物であつた。
二里ばかり奥にある瀧へは渠はかの女に同伴しなかつたので、かの女は別な組と共に行つて來た。
その日の晩であつた——渠が山崎の室へ行くと、澄子も珍らしく一緒にやつて來た。
すると、山崎はまだ酒を飲んでゐて、お蔦さんを相手に頻りに何かぷり〳〵怒つてゐた。
『僕ア歸るツ』て、かばんの取り方づけを仕かけたかと思ふと、またもとの席へあぐらをかいて、
『人を馬鹿にして』などと怒鳴りながら、かの女に猪口を投げつけた。
『では、どうしたらいいんです、ね』と訴へるやうに云つて、かの女はちやぶ臺の向ふへ坐わつて見たり、火鉢のそばへ來て見たりしてゐた。そして持て餘してしまつた結果、『ちやア、わたしはこれで失禮致します』と、その室を出てしまつた。おこつたやうだが、また十分の思はせ振りもあると見えた。
『何ごとか知らないが、僕も失敬する』と云つて、耕次もそこを起つた。多分燒き持ち喧嘩のつのつたのだらうと思ひ取れたので、見てゐるのも餘りに馬鹿々々しくなつたのだ。
お蔦さんはまだ廊下に樣子を伺つてたのだが、渠が出て來たのを見ると、相談するやうに、
『どうしたと云ふんでしよう、ね、あんなにおこつて?』
『なアに、君さへゐてやればいいんだから』と云つて、渠は冷かすつもりでかの女の肩をちよツと輕

く叩いた。

『………』口に金歯の光つた顏が俄かに眞ツ赤になつたのが見えた。

渠は自分について澄子も出て來るものと思つてたが、意外にもさうではなかつた。

『馬鹿！』と、あたまの天邊からかの女に對する無言の叫びがあがつた。痴話喧嘩ぢやアないか？そんなところで一かど取り爲しがほに山崎の爲めに酒をついでやりなどしてゐるかの女の馬鹿げさ加減が思ひやられた。ゐ殘つてればゐ殘つてるだけが向ふの邪魔ではないか？それ位のことが分らないのか？おのれだけは尊敬されてるなどと思つてちやア間違ひだぞ！こちらと一緒になるまでの多くの失體のうちの、その一つをでも思ひ出して見ろ――

或待合で宴會があつた。そのうちの男が一人、初めからかの女に野心があつたので、醉つたふりをしてかの女に介抱して貰つた。かの女も自分で親切に介抱してやつてると思つてゐた。――

そのうちに一人へり、二人へり、つひに殘つたのはその男とかの女と切りになつた。そして男は本音を出してくどき初めた、

『どうせ、もう電車もなく、ここのものも皆寢てしまつたから』ツて。驚いたかの女はすきを見てはだしで逃げ出さうとしたが、勝手が分らないので、どこを辿つてもそとへは出られなかつた。最後に女中を呼び起して出して貰ひ、お堀ばたを途中から俥をやとつて歸宅したと云ふ。

男はその翌日からかの女に成功したとふれ歩いた。かの女はこれを侮辱の言だと怒つて、自分の戀ひ人を仲に立てて友人等の前でその男に取り消しをさせたのを、かの女の自滿ばなしとして耕次も一度聽かせられた。が、これが何で自滿にならう？關係もしないで關係した如く吹聽するやうな安ッぽい男を親切らしく介抱してゐたのがかの女の思慮の足りなかつたところではないか？その前にまた男どもと一緒に待合ひなどへ這入り込むだのも既に間違ひだのに――いや、女として一升酒を飲んだのが既に！

こんなことまでがごた〳〵と思ひ出されて、不愉快な机に獨り暫らく向つてても、かの女は歸つて來なかつた。

隣室を占領した五六名づれの老人組のうちで、その一名がまた、『かかるとてしもぬばアたまアの』と義太夫の一句をうなるのが聽える。こいつはこの句しか知らないかの如く、一つことを毎日、毎晩のやうにうるさかつた。もう、寢どこへ這入つたらしいが、無駄ばなしのあひま〳〵にそれをまたくり返した。

『なんしにあんなところにぐづ付いてたんだ』と、渠は澄子が歸つて來た時に叱り付けた。『子どもが泣いてるぢやアないか？』斯うは子供になすり付けたものの、かの女がそばにゐないとこちらの仕事に張り合ひがなかつた。多くの反感を起させる女ではあるが、それがそばにゐないと、習慣上、矢ッ

張り、物足りなかつた。

『山崎さんも――氣の毒に――旅に來てひとりぼツちで寂しいんです、わ。』

『生憎、ね、お前などが邪魔しないでも、ちやんとお蔦さんがついてるんだ――そんなことも氣がつかないでぐづ〳〵と！お前の昔、ひツかかつた牛込の待ち合ひとア違ふから、ね！』

『およしなさい、人ぎきが惡い！』かの女も大きく怒鳴つたけれども、直ぐ半ば口のうちになつて、『あたしを何か取り返しのつかない失敗でもしたもののやうに――』

『かかるとてしも』がまた突然うすぼんやりと聽えた。隣室のはこれを寢ごとにまで云つてるらしい。

その翌日も山崎は何となく昂奮の狀態であつたが、午後三時頃になつて、耕次を、

『肉でも喰ひに行かう』とさそひ出した。ゆふべのざまを暗に詫びるつもりかと耕次が思つてゐると、さうではなく、『あのお蔦に別の男があるかどうか、君も判斷して見てくれ』と云ふのであつた。途々の話だが、『あいつも、ゆふべ君に肩を叩かれたので、もう、君が感づいてるものと覺悟してるが、實は、僕はあいつが沼津にをる時から知つてるので、今度ここへ追ひかけて來てん。然し、あいつが番頭の目かけになつてると云ふうわさもあるから、そこをよく突きとめて見たいのだ。肉屋のおかみや藝者を獨りふたり呼んで、それとなく聽いて見たらその眞相が分りはせんかと思ふのだが――』

こんなことを云ふまでには餘ほど切實な思ひを重ねたものだらうとは、耕次にも分つてゐた。そ

つもりで藁は山崎に從つて行つたが、肉屋では二人の興をさますやうなことがあつたので、ろくにその目的も達しられなかつた。出て來た藝者に、

『おい、お前は金歯のお蔦を知つてるか』と山崎が聽いたことは聽いたが、

『あの、軍人の未亡人とかでしよう』などと云ふ。誰れも知つてることばかりしか知れなかつた。けれども、山崎はかの女にどんなうわさがあらうとかまはぬ決心らしく、若しくはまたそんなうわさを信じないほど熱心であるらしく、

『僕等のいよ〳〵結婚する時は、君達夫婦に仲う人になつて貰ふよ』などと云つてゐた。

『ぢやア、君とお蔦さんとの爲めに祝さう。』耕次は斯う云つて盃を擧げた。

『では、あなたがたは〇〇のお客さん』と、お燗を持つた藝者がこちらの宿の名を云つた。

山崎はにこ〳〵してゐた。

八

三月十五日は、午前一時頃からまた雪が降つたのを、耕次はまだ机に向つて起きてたので、よく知つてた。それが降りやんだのは夜が明けると同時であつた。

伊勢から一先づ東京へ歸つた友人が、この日、電報をよこした。そして十六日には、耕次は友人を

迎へに大仁驛まで出た。高等馬車と稱せられて、がた馬車よりは少しましのを借り切つて歸る途々、この友人なる山田は云つた、

『二等切符で來てよかつた。一等は三島からの支線にはない。』

『無論、さ』と、耕次はわざと當り前のやうに云つた、『それに殖民地ぢやアあるまいし、一等に乘つて威張る奴アただ乘りの鐵道官吏の家族か田舍ものしかないのだ。』

『さうか、なア』と答へて、山田は素直にその田舍もの的な關西旅行の話をしたに據ると、京都でもとの樺太事務官と從來經營中の新聞に關する打ち合せをした時、樺太一の料理屋のおかみにつかまり、それと一緒にとう／＼伊勢まゐりまでさせられたのだ。が、自分のおツ母さんのやうな女と夫婦の旅をしてゐるやうに思はれて、至るところで渠の所謂『馬鹿くさい』目に逢つたさうだ。『半分割り前を出せとも云へんで、なア。』

『そりやア、さうだらう。』

その夜、山田の室ときまつたところで、耕次は渠に山崎を紹介し、さきに耕次等の知つた東京生れだと云ふ藝者と今一名とを招いた。が、東京生れが三味線を出して、

『爪びきでも初めましようか』と云つた時は、皆でそれをとめた。土地の習慣上、藝者が宿で撥は持てないときまつてるのを、わざ／＼爪びきで破るでもなかつた。

『不便なところぢや、なア』と山田は到着の日から失望した。『そんなことと知つてれば、東京から藝者でもひとりつれて來るんぢやつたが――』

『まア、そんな方の野心はよして、成るべく靜養しろよ』と、耕次は忠告した。

山田が約束通り買つて來た寫眞機械が二人の樂しみの一つになるのであつた。十七日には、山崎が歸京することになつたので、その出發を二人で寫したけれども、耕次の試みたのはシヤタがまだ明かなかつたので取れてゐず、山田のはまた餘り時間を長引かせたので過度に光線が感應してゐた。空氣銃の店や、川の景色や、しだれ櫻――もう、滿開であつた――などをも取つて見たが、手がよくきまらないので、一つの家が二つにも三つにもなり、一本の木が二本にも三本にもなつてゐた。すべて土地の寫眞屋でげんさうさせたのだが、新米の寫眞師二名のうゐ陣はすべて失敗であつた。

山田の健康は東京で入院してゐた時よりも少しはよくなつてゐるらしい――かほ色にも多少の元氣が出た。が、玉突きをやつても、碁を戰はせても、直ぐ疲れてしまう。折角の溫泉にさへもおツくうがつて、日に一度か二度しか這入らうとはしない。澄子や赤ン坊の寫眞を取つて見たり、自分等で一緒に寫眞屋へ出て行つて寫させたりしても、直ぐ飽きが來て、自室に引ツ込んでしまう。

山田のこの狀態が耕次には一種の敗殘者のやうに見えた。耕次が樺太の事業に失敗して北海道に放浪した時には、山田の同地に於ける活動はなか／＼盛んなものであつて、こちらが却つて渠をばかり

ちらやましかつた。が、今日では、二人の狀態があべこべになつてゐた。山田はたださへ殖民地的な不規律生活に慣れたのが樺太へ渡つてから一層不規律、放縱になり、その結果、醫者の云ふところでは慢性の胃腸病と神經衰弱とにかかつた。

ただそればかりではない――到着後二三日してから、山田が女を欲しいと云ふので、耕次は例の藝者屋へつれて行き、かの東京生れのを呼んでそれに友人をまかせて來た。そして翌朝、友人の歸つて來てのうち明け話によると、渠には半ば腎虛の狀態もあるのであつた。

『しツかりしろよ、まだ〳〵そんな年でもないのに』と、耕次はからかひ半分に山田の注意を促した。

それにしても、坐談好きの友人は敷きツ放した床の上に横になつたり、起き上つたりして、毎日のやうに、また毎晩のやうに、無駄ばなしをしてゐないでは氣がめいつてしまうのであつた。耕次はそれを思ひやつて、同時にまた友人の數年間に於けることを聽きたさに、殆ど友人の室に入りびたりになつた。そして友人のうたた寢する間を、自分もそこで一緒に眠つた。

初めのうちは、そこへ澄子も來て相手になつたけれども、山田からの話と云へば、藝者のことでなければその本妻と妾とのいきさつの露骨な告白であつた。

『つとめをしてをつた者には珍らしいほどのうち氣な女であるところへ持つて來て、本妻の方は君も知つてる通りの、どちらかと云や熱烈な亂暴ものだろぢやないか』と、耕次に取つては既に東京の病

院で一二度聽かせられたところの、山田の本妻が妾のところへ怒鳴り込みの一段も、また、澄子の御馳走になるかの如く語り出された。『丁度雪はどん／＼降つてたし、これほど安心な夜もなかつた。ところが、誰れか僕の子分の細君からおだてられたり、場所を教へられたりしたんぢやろが、夜なかの二時頃に裏の雨戸を叩く者があるかと思ふと、僕の女房の聲ぢや。戸じまりはしてあるし、樺太では降り込んだ雪が戸に氷り付いて自然の戸じまりにもなつてる筈ぢやから、こちらでは默つて、目かけにも返事をさせなかつた。すると、向ふはます／＼夢中で戸をがた／＼させてたその勢ひで、突然、戸が明いたぢやないか？こりやたまらぬと思つてぢやろが、一緒に寢てをつた目かけが先づ別室へ飛び出すが早いか、直ぐさまそのたぶさをつかまへられて疊の上へどすん！僕も斯うなつては默つてをられぬので女房を投ぐりに飛び出したが、餘ほど自分もあわててをつたと見え、女の腰卷きを自分の帶と取り違へてをつた。女房を一つ投ぐつたことは投ぐつたけれども、そのざまは何ですと云はれて、こちらもぎやふん、さ。』この話は前に聽いたのと少し違つてるが、それだけまた事がらが別に面白くなつてゐる。山田のドようずな話は或程度までまゆ毛につばをつけて聽いて置かねばと、耕次にも私かに思はれた。

『案外ぐだらない男です、わ。』と云ひ出してから、澄子は渠の室へ來ないやうになつた。が、結局、それが耕次には小面倒でなかつた。もと／＼二友人は二人ツ切り求入らずで二三週間をここにくつろ

ぐつもりであつたのだ。二人の間には世間的な氣取りも隱し立てもなかつた。その間をかの女はいろんな理窟や感情でぶち毀わさうとあせつてるのが見えた。が、もう、仕事をして呉れろと直接に頼むだり、間接に諷したりすることは斷念してゐたらしい。耕次自身は、

『こんな時の貯金だ』と明言して、東京に於けるのを引き出しさへすればいいときめてしまつて、いよいよ自分の仕事が手につかなくなつたのを全くかの女の邪魔の爲めに歸してゐた。そして山田の室へ餘り行くなと云はれると、わざとにもます〳〵行きたくなづた。或時、かの女は例のけんある聲で斯う云つた、

『あんな話ばかり仕合つて何が面白いのです？』

『面白いか面白くないかは、傍觀者のお前にやア分らない』と答へて、渠はかの女を一層怒らせないでは置かなかつた。『おれは、ね、ずツと年したの山田から教訓談を聽かうとはしてゐないんだ！あいつとおれとは、お前とあの鼻ほくろとのやうな行き當りばつたりの間がらぢやアない。こちらが北海道で困つた時にやアころげ込んでも行つたし、向ふが今度女を欲しいと云やア紹介もしてやつた。』

『ぢやア、向ふで一緒に寢とまりまでしてゐたらいいでしよう？』

『そんなことアお前の干渉する範圍ぢやアない！』

九

澄子の發言や無言が孰れにしてもうるさくなると、隣室の『かかるとしても』までをまた聽きたくもなかつた。

無理に机に坐わつて見ることもあるが、どうしても心が落ち付かなかつた。滯在費の半分だけでも飜譯の方で出したいと思つても、澄子に對する頑固な感情が許さなかつた。そして山田と共に空氣銃に行つたり。湯で知り合ひになつた老人のところへ一緒に碁を打ちに出かけたり。殆ど一晩置きにやる素人義太夫を聽いたり。こんなことが却つて大切な日課のやうになつた。寫眞機は持つて來た者が先づ興味を失つたので、耕次も乘り氣になれなかつた。そして夜おそくまで山田の室に話し込んで、引き上げる時に今一度必らず耕次は湯に這入つた。が、湯番頭は十一時になると湯場を引き上げてしまひ、夜まはりは同じ時刻からまわり出して、廣い温泉宿の大きな建物各々の戸締りをして歩く。渠はそれが爲めに他の建物に締め込まれたり、自分の屬する建物から締め出されたりしたことが幾度もある。すべて廊下づたひになつてるので、その都度、いろんな方面から帳場へまわつて行つて、夜番の人にかけ合つた。

これを澄子は知つて、氣味がいいと云はぬばかりにした。

ところが、もツと意外の事件があつた。新來の客に就いてだが、その客が十二時頃に湯場へ下りる戸が明いてるのを見て、これ幸ひと下りて行つて、ゆツくり一と浴びしてゐるうちに、自分の室へ歸れなくなつてしまつた。餘ほど呑氣ものでもあつたと見え、餘儀なくまだはだかになつて湯につかつたり出たりして、ただ獨りで時間の經過を待つた。

おほ湯と小湯とがあつて、おほ湯の方は番頭が夜の十一時から十二時の間に湯を替へて新らしくすると、それから六七時間たたねば人の這入れるほどの加減にはならぬ。朝の六時にはまだなかなか熱くて、いい加減とは云へない。が、小湯は水を僅かさせばいつにても這入れないことはない。呑氣な客が這入り直したのはこれにだらうが、そこに半ば居眠りをしてゐた。

やツと夜が明けた、な、と思はれる頃、番頭が湯の加減を見にやつて來たが、自分よりさきに來てゐた者があるのを發見したので、變な顏をして挨拶もしなかつた。番頭にはこの時、この客が湯場で夜を明かしたとは夢にも氣が付かなかつたのだ。

晩の湯場で或客から聽き得たこの新聞を耕次は面白がつて山田に報告してゐた時、もう、九時近くであつたが、澄子の手紙をお高が置いて行つた。

『………』また何か不平の訴へかとたかをくくつて默讀し初めた。すると、斯う書いてあつた、

『あなたは今夜から山田さんのお部屋でとまることになすつたらいいでしよう。わたし達には少しも

御遠慮には及びません。』

今一度これを口のうちに繰り返して見ながら、渠は自分のからだ中にひイやりした感じが俄かに行き渡つたのをおぼえた。水をあびせかけられるとはこんな氣持ちだらうかと、私かに思へたが、その冷やかな感じが見る／＼自分の胸に熱く煮えくり返つて來て、かの女に對する自分の侮蔑の寂しみと緊張した。これをにが笑ひに押さへながら、山田の方に眼を轉じて、

『こんなことを云つて來たぞ。』

『……』山田もそれと察してか、にや／＼笑ひをして、受け取つた、手紙を默讀した。それから、それを耕次に返して、張り合ひのない聲で『まア、行つてやり給へ。それも一種の燒き餠、さ。』

『無論、さう、さ。然し僕は、こんなことを云へるとあいつの思つてるのがます／＼癪にさわるんだ。』

『然し、僕らの腰巻きさわぎよりやまだましぢやろ。』

『君にやア――それでも――かけ換へがあるからまだしもいいんだが、僕にやア換はりがないだけ一層あいつが鼻について來た。』

『まア、さう云ふてやるな――可哀さうぢやないか？細君も君ばかりを思ふとるのぢや。』

『なアに、そんな生むすめ的ぢやアないんだ。』若しあるまじき事でもして呉れれば却つて一番手ッ取り早い離婚が成立するのにと、耕次には私かに考へられた。

この手紙のことから渠とかの女との間がまた〳〵氣まづさを加へたのみならず、渠と山田との間も亦うまく行かなくなつた。山田は渠と語り合ふにもかの女にかげながら氣がねするやうになつた。そしてこの地にとどまる興味をさへ感じなくなつてしまつたやうすだ。

かうなると、耕次もここに滯在する必要がなくなつた。澄子がもツとゐたさうにして、渠の總領息子をも繼母の義理として一度呼んでやらうと云つたけれども、渠は山田と相談して豫定よりも早く歸京することにした。最初の日からは二十一日目、山田が來てから十一日目にだ。

いよ〳〵あす歸京ときまつた前日の午後、耕次はこツそりと獨りで珍らしく宿を出た。實は、空氣銃に最後の訪問を向けて、そこのかみさんに初めて名乘つて見たのだ、

『たび〳〵友達と一緒に遊ばせて貰つたが、あすは歸ることになつた。どうだ、おれをおぼえてたか？』

『矢ツ張り、さうでしたか、ね？』年したのかみさんはさすが顏を赤め加減にして、じツとこちらを見詰めながら早くも目をしよぼつかせて、『わたしも、お顏と云ひ、お聲と云ひ、よく似てはゐられるがと思つてました。矢ツ張り、ね――まア、おかはりもなく結構で――』

『かはつたのは、もう、女ぐるひをぱツたりしなくなつたことだけ、さ。』

『それも結構でしよう。』

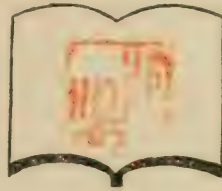
『亭主は達者?』
『へえ。』もう、恥かしみもかの女の顔に消えてゐた。
『相變らず山行きか?』
『へえ。』
『ふえたのは達磨さんだけだが、お前もよくこの商賣に飽きないものだ、ね。』
『もう、やめたいと思つてますのですけれど――』
『然し、やつてるから、斯うしてまた逢へるのだが――』今度また別れたら、いつまた逢へるだらうと思ふと、逢ふまでは全く忘れてゐた者のことだけれども、耕次には私かに名殘りが惜まれて、たばこの煙の中からかの女の昔の若い顔をそれとなく探り出して見ながら、暫らく無駄ばなしをつづけてゐた。
『當りました――反れました』は、考へて見ると、空氣銃のかみさんの呼び聲ばかりではなかつた。耕次には一時當つたと思へた女房も、實は、反れてたのであつた。

――(大正七年四月)――

泡鳴全集第五卷　終

大正十年三月十五日印刷
大正十年三月二十日發行

泡鳴全集第五巻

（非賣品）

著作者　岩野美衞

發行者　中塚榮次郎
國民圖書株式會社代表者
東京市麴町區內幸町一丁目六番地

印刷者　井波修次郎
東京市神田區三崎町二丁目三番地

發行所
東京市麴町區內幸町一丁目六番地
國民圖書株式會社
電話新橋一一二七番
振替東京五二二九八番

印刷所　國民圖書株式會社印刷所

（製本　佃製本所）